



現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法—コーパス研究の日本語教育への応用—

李, 楓

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6560号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006560>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法
—コーパス研究の日本語教育への応用—

平成 28 年 01 月

神戸大学大学院国際文化科学研究科

李 楓

博士論文

現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法
—コーパス研究の日本語教育への応用—

審査委員：柏木治美 教授
石川慎一郎 教授
前田忠彦 准教授

平成 28 年 01 月
神戸大学大学院国際文化学研究科
李 楓

(目次)

序章.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 本論文のねらいと構成.....	2
1.3 本章の構成.....	5
1.4 漢語サ変動詞研究の重要性.....	6
1.5 まとめ.....	14
本論.....	15
第Ⅰ部 研究の枠組み.....	15
第2章 先行研究.....	15
2.1 先行研究.....	15
2.2 コーパスとコーパス日本語学.....	68
第3章 リサーチデザイン.....	93
3.1 研究の目的.....	93
3.2 使用するデータ.....	93
3.3 研究対象とする漢語サ変動詞.....	97
3.4 使用する統計手法.....	98
第Ⅱ部 漢語サ変動詞の諸相.....	105
第4章 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定.....	105
4.1 本章の目的と構成.....	106
4.2 リサーチクエスチョン.....	106
4.3 使用するデータ.....	107
4.4 調査対象とする漢語サ変動詞の定義.....	109
4.5 研究手法.....	112
4.6 結果と考察.....	113
4.7 まとめ.....	130
第5章 漢語サ変動詞の活用上の選好性.....	132
5.1 本章の目的と構成.....	133
5.2 リサーチクエスチョン.....	133
5.3 研究手法.....	133

5.4	結果と考察	138
5.5	まとめ	154
第6章	漢語サ変動詞の内部構成性	156
6.1	本章の目的と構成	156
6.2	リサーチクエスチョン	157
6.3	内部構成分類枠組みの検討	157
6.4	研究手法	162
6.5	結果と考察	164
6.6	まとめ	176
第7章	漢語サ変動詞の自他性	178
7.1	本章の目的と構成	178
7.2	リサーチクエスチョン	179
7.3	研究手順	180
7.4	結果と考察	189
7.5	まとめ	212
第8章	漢語サ変動詞の語彙的排他性	214
8.1	本章の目的と構成	214
8.2	リサーチクエスチョン	215
8.3	研究手順	215
8.4	結果と考察	219
8.5	まとめ	227
第Ⅲ部	日本語教育における漢語サ変動詞	229
第9章	中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識	229
9.1	本章の目的と構成	229
9.2	リサーチクエスチョン	229
9.3	研究手順	230
9.4	結果と考察	241
9.5	まとめ	275
第10章	中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用	277
10.1	本章の目的と構成	277

10.2	リサーチクエスチョン.....	278
10.3	使用するデータ.....	278
10.4	研究手順.....	282
10.5	結果と考察.....	285
10.6	まとめ.....	293
第 11 章	コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発.....	295
11.1	本章の目的と構成.....	295
11.2	リサーチクエスチョン.....	296
11.3	研究方法.....	297
11.4	結果と考察.....	324
11.5	まとめ.....	337
終章	339
12.1	本研究の独自性.....	339
12.2	本研究のねらいと成果.....	340
12.3	本研究の課題と今後の方向性.....	344
12.4	おわりに.....	348
参考文献	349
添付資料	356
謝辞	386

(本文)

序章

1.1 はじめに

中国をはじめ、世界の中で日本語教育が広まるにつれ、日本語の語彙指導についても関心が高まっている。日本語の語彙には、和語、漢語、外来語など、様々な語種が存在するが、数のうえでとくに多数を占めるのは漢語であり、その多くが漢語サ変動詞の形を取るとされている。従来、漢語サ変動詞について、多くの研究がなされているが、その大部分は主観・内省に基づく理論的な研究であって、実際の言語データをふまえた実証的研究は必ずしも十分ではない。そこで本研究では、世界の日本語学習者の大部分を占める中国人日本語学習者を対象に、日本語漢語サ変動詞の多様な振る舞いを体系的に指導するシステムの確立を目指す。

漢語サ変動詞の用法に関する議論は盛んに行われてきたわけであるが、ほとんどの場合、純粋に文法的関心から研究が進められてきた。したがって、各々の漢語サ変動詞が持つ一般性や汎用性は考慮されず、結果として、最も典型的な漢語サ変動詞にはどのようなものがあるかといった、教育上、基本的な問題も必ずしも解明されていない。つまり、これまでの漢語サ変動詞研究で多くの知見が得られているが、そこには一定の方法論的偏りがあり、実際の言語データをふまえ、漢語サ変動詞の持つ豊かな諸相を記述し尽くしたと言いきれない。

このように、従来の日本語研究において、漢語サ変動詞の典型性をはじめ、その詳細が必ずしも解明されていないことから、日本語学習者が使用する日本語の辞書や日本語教材においても、漢語サ変動詞の扱いは十分なものとはなっていない。たとえば、辞書について言えば、基本的な漢語サ変動詞についても、単独の語としては認定されておらず、漢語名詞の項目内で「する」が添え書きされるだけであったり、用例の一部として記載されたりするのみである。ゆえに、漢語サ変動詞そのものの用法についての詳しい説明は存在しない。また、教科書においても状況は同等であり、本文や用例の説明の中で漢語サ変動詞が出現することはあるものの、それらを取り出して体系的に記述することはほとんどなされていない。結果として、学習者は漢語サ変動詞の運用に少なからず問題を抱えている。

なおこの点に関して、中国人日本語学習者は、日本語の漢語の多くを理解できることから、漢語サ変動詞の指導は必ずしも必要ではないという主張も成り立つ。しかし、仮に漢語部分が共有されていたとしても、日本語漢語サ変動詞の振る舞いのすべてを、中国人学

習者が母語の知識だけで完全に理解することは不可能である。

以上をふまえると、多様な用法を持つ漢語サ変動詞について、十分なデータをふまえ、その詳細な語義、用法、機能を特定したうえで、それらの情報を体系的に集約し、中国人日本語学習者への漢語サ変動詞教授法を考案していくことが今後必要になってくると思われる。ただし、漢語はそもそも造語力が高く、日本語における漢語サ変動詞はきわめて膨大な数を占めている。これらすべてを漏らさずに教授することは不可能である。つまり、ここで重要になるのが「典型性」という概念である。すなわち、日本語教育に与えられた時間や資源が有限であることをふまえ、数多い漢語サ変動詞の中から、とくに典型的に使用されるものを選び、その典型的な用法を指導することは、日本語教育の目指す現実的な目標の一つとなりうる。

1.2 本論文のねらいと構成

上記をふまえ、本論文のねらいを、(1) 現代日本語における漢語サ変動詞の中で最も一般的で汎用性が高いものを特定し、(2) 特定された漢語サ変動詞の言語的特性を多様な観点から調査したうえで、(3) 中国人学習者の漢語サ変動詞に対する知識や意識、またその学習上の問題点を明らかにし、(4) 当該学習者に対する漢語サ変動詞の教授法を考案すること、の4点とする。

なお、漢語サ変動詞に関わる特性は多面的であるが、本研究では、とくに先行研究で手薄であった典型性・活用上の選好性・内部構成性・自他性・語彙的排他性に注目する。これらの課題を解決すべく、本論文は以下のような構成となっている。大きな枠組みとしては、序章、本論、終章の3つのセクションからなる。本論はさらに第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部に分けられる。

まず序章において、本論文の前提となる立場を明らかにする。漢語サ変動詞を研究する意義と重要性について概観した後、本論文の全体構成について簡潔に述べる。

続いて本論の第Ⅰ部には、2章「先行研究」と3章「リサーチデザイン」の2章が含まれる。

2章「先行研究」においては、漢語サ変動詞そのものに関する従来の研究に加え、本論文が立脚するコーパス研究手法について、これまでの研究の系譜を整理し、現在の研究の状況を要約する。

3章「リサーチデザイン」においては、以上の前提をふまえ、本論文で明らかにしよう

とすること、リサーチデザイン、研究対象、使用データ、統計手法などについて概要を体系的に説明する。

第Ⅱ部において、漢語サ変動詞の諸相を主として計量的な観点から概観する。ここには、4章「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」、5章「漢語サ変動詞の活用上の選好性」、6章「漢語サ変動詞の内部構成性」、7章「漢語サ変動詞の自他性」、8章「漢語サ変動詞の語彙的排他性」の5章が含まれる。

4章では「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」を目指す。すでに述べたように、既存の辞書や日本語教科書では、個々の漢語サ変動詞の重要性に関する情報が体系的に示されていない。たとえば、「存在する」と「議論する」の2語があった場合に、いずれを優先的に学ぶべきかの判断はつけにくい。そこで本章では、広く外国人日本語学習者に適用しうる重要漢語サ変動詞のリストの作成を目指す。具体的には、大規模なコーパスデータを参照しながら、無数に存在する漢語サ変動詞の中で、一般性・汎用性が高い語彙項目の特定を行う。特定された語を教育的重要語の候補として位置づける。

5章では「漢語サ変動詞の活用上の選好性」の特定を目指す。中国語などと異なり、日本語の動詞は前後の文脈関係などによって多様な活用変化が起きる。たとえば、「表示する（る）」、「表示さ（れ）」、「表示し（て）」などである。重要漢語サ変動詞の各々についてどのような活用形を選好するかを知ることは、学習上重要な意味があると考えられる。そこで本章では、コーパスデータに基づき、重要漢語サ変動詞ごとに活用形別出現頻度を調査し、漢語サ変動詞を活用上の選好性によって体系的に整理・分析する。

6章では「漢語サ変動詞の内部構成性」の解明を目指す。日本語の漢語は、それを構成する文字間の意味関係が語によって異なることが知られている。たとえば、「存在（する）」であれば、二文字の関係は同等であるが、一方、「議論（する）」であれば、前者文字と後者文字は対象語と動詞の関係である。このように、漢語はそれぞれ内部構成文字間の結合パターンが異なる。この点をふまえれば、漢語サ変動詞の漢語部にも、何らかの構成上の典型性が隠れている可能性が否定できない。この点が明らかになれば、学習者には有用な情報となろう。そこで本章では、重要漢語サ変動詞の各々について、漢語部の構成要素間の結合パターンを計量的に概観することで、漢語サ変動詞全般に見られる典型的な内部構成モデルを特定する。

7章では「漢語サ変動詞の自他性」の解明を目指す。一般に日本語の動詞は、自動詞専用型、他動詞専用型、自他両用型の3種に区分される。これは漢語サ変動詞についても同

様である。しかしながら、各々の漢語サ変動詞の自他性について、既存の辞書や教科書の記述は必ずしも一致していない。また、「拡大する」のように、辞書に示された自他両用動詞であっても、「～を拡大する」といった他動詞用法と、「～が拡大する」といった自動詞用法のいずれがより典型的であるかは明らかではない。さらには、自他の議論を拡張し、受身（「～が拡大される」）や使役（「～を拡大させる」）といった形態がどの程度の典型性を持つかという点についても既存の研究ではほとんど触れられていない。学習者が漢語サ変動詞を自然な形で運用するためには、動詞の基本属性である自他についても正確な理解が求められるところである。そこで本章では、まず重要漢語サ変動詞の各々について、辞書における自他記述を確認する。ついでに、コーパスデータに基づき、各語の自他特性を計量的に把握する。さらに、受身形と使役形の使用をあわせて考察することにより、漢語サ変動詞の自他特性をより正確に記述する。

8章では「漢語サ変動詞の語彙的排他性」の考察を目指す。たとえば、「存在する」と「議論する」はともに一般的な漢語サ変動詞である。このとき、前者は「存在をする」という形で使用されないが、後者は「議論をする」という形でも使用される。この場合、他の類義表現を持つものと、そうした表現を持たないものを比較すれば、後者のほうがより語彙的に排他しているという議論が成り立つ。つまりは、「漢語+を+する」という類義表現形の頻度と漢語サ変動詞の頻度を比較することで、この問題を計量的に検討することができる。このような表現形の使い分けは、学習者にとって重要なことであるが、これまでに扱った他の側面と同様、先行研究ではほとんど問題にされていない。そこで本章では、重要漢語サ変動詞の各々について、「～する」に加え、「～をする」の使用状況もあわせてコーパス調査で明らかにしたうえで、漢語サ変動詞の語彙的排他性の強さを検討する。さらにこういった語彙的排他性の強さに影響を与えうる要因についても考察する。

以上、第Ⅱ部では、漢語サ変動詞の諸特性を言語学的に解明することを目指す。第Ⅲ部において、日本語教育の観点から、学習者の側面に注目して調査を行う。ここには、9章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識」、10章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用」、11章「コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発」の3章が含まれる。

9章では「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識」の解明を目指す。学習者にとって望ましい漢語サ変動詞の指導・学習システムを考案するうえで、はじめに考慮すべきは、学習者が実際にどのような苦手意識を持っているかを正確に把握することである。そこで本章では、漢語サ変動詞の基礎知識の理解度、漢語サ変動詞の応用知識の理解度、および

漢語サ変動詞の指導に対する意識の3つの観点から、学習者の漢語サ変動詞そのもの、および漢語サ変動詞指導に対する意識を調査する。

10章では「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用」実態の解明を目指す。学習者にとって望ましい漢語サ変動詞指導・学習システムを考案するうえで、学習者の漢語サ変動詞使用はどの程度できているか、どういった問題を抱えているかを正確に把握することが不可欠である。学習者の漢語サ変動詞使用実態を立体的に解明することは、彼らにふさわしい指導・学習案の開発に役に立つと考えられる。そこで本章では、既存の学習者コーパスや筆者が独自に収集した中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用データに基づき、学習者の漢語サ変動詞使用量、種類数、および内容の一致度を母語話者と比較しながら考察する。また、どのような漢語サ変動詞の誤用が生じているかについて質的検討を行う。

以上で得られた知見を総合し、11章では、「コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発」を試みる。具体的には、本論文で明らかになった漢語サ変動詞に関わる知見を学習者にもわかりやすい形式で提示するよう、数値型学習シートと実例型学習シートの2種類の学習シートを作成し、学習実験を行う。さらに実験前後にテストを設け、学習前後のテストの正答率を比較することで学習効果を検証する。最後に、学習者の感想をあわせて分析することで、試行開発した学習シートの利点や改善点、および学習方法を検討する。

最後に、終章において、本論文で行った調査を章ごとに整理し、教育的示唆と課題を示す。

1.3 本章の構成

以下、序章の概要について紹介する。

まず、本節に先行する1.1と1.2においては、漢語サ変動詞を対象とする本研究の意義と基本的な方向性、そのねらい、論文の構成などについて概観した。以下の1.4においては、様々な日本語語彙の中で、とくに漢語サ変動詞を取り上げて研究することの意義と重要性に着目し、(1)言語学、(2)日本語教育、及び(3)日本語学習者、の3つの観点から論じる。まず、(1)言語学的観点に関しては、詳細な記述は先行研究を概観する次章で行うこととし、ここでは、言語学的成果が反映されたと考えられる国語辞書を数冊取り上げ、そこに見られる漢語サ変動詞に関する記述を検討する。次に、(2)日本語教育については、日本語教育の現場で幅広く使用されている日本語教科書、および学習者の日本語能力を檢定する指針となる日本語能力試験問題を取り上げ、そこに見られる漢語サ変動詞の記述を

検討する。さらに、(3) 日本語学習者については、本研究が対象とする中国人学習者の作文を取り上げ、漢語サ変動詞指導にまつわる誤用を質的に検証し、どのような問題が生じているかを確認する。最後に、1.5 においては、本章のまとめを行い、漢語サ変動詞を研究する重要性を確認したうえで、第 2 章以降の研究への橋渡しを行う。

1.4 漢語サ変動詞研究の重要性

すでに触れたように、漢語サ変動詞は日本語研究において必ずしも十分に記述されておらず、また、日本語教育においても適切に扱われていない。この点にこそ、漢語サ変動詞を研究する意義と重要性があるわけだが、このことを確認するために、以下では、代表的な国語辞書、日本語教科書と日本語能力試験の問題、日本語学習者による作文の 3 種類を取り上げ、漢語サ変動詞の諸問題について簡単に見ておこう。

1.4.1 国語辞書における漢語サ変動詞

日本語研究、とくに日本語語彙に関する研究の成果は、多くの場合、辞書記述として集約されている。しかしながら、辞書において、漢語サ変動詞の記述は甚だ不十分である。森田 (1994) は、『例解国語辞典 (時枝誠記編, 中教出版, 絶版)』の収録語彙を調査したうえで、『勉強』『心配』などは体言扱いで、とくにサ変動詞化するとの表示はない (p. 4) と指摘している。森田 (1994) の研究は今から 10 年以上前のものであるが、管見の限り、その後も状況は大きく変化していない。現在の国語辞書における漢語サ変動詞の位置づけを概観するために、ここでは、『広辞苑 (第 6 版)』、『大辞林 (第 3 版)』、『大辞泉 (第 2 版)』の 3 種類を取り上げ、漢語サ変動詞の記述の実態を見てみよう。

ここでは、調査サンプルとして、「練習する」と「一致する」を取り上げる。3 種の国語辞書でこの 2 語の出現を確認したが、いずれも漢語サ変動詞形では立項されていなかった。そこで、それぞれの漢語部である「練習」と「一致」の項目の記述を示す。なお、当該語を含む複合語の記述は除いている。

表 1 3 種類の辞書における漢語サ変動詞の扱い

	練習	一致
広	学問・技芸などを繰り返し学	①二つ以上のものが、くいちがいなく一つになるこ

辞苑	ひみがくこと。習練。「一問題」「一試合」(p. 2993)	と。合一。「意見が一する」「言行一」「一点」②心を同じくすること。合同すること。③一般普通の常識。傾城禁短気「気遣ひいたすも一なれば」(p. 177)
大辞林	(名) スル 技能・芸事などが上達するように同じことを繰り返しなろうこと。「ピアノを一する」「一用の器具一きょく③「練習曲」(p. 2709)	(名) スル ①いくつかのものの間に違いがなく、ぴったり合うこと。「指紋が一する」②いくつかのものの間に食い違いや矛盾が見られないこと。「言行一」「意見が一する」③心を一つに合わせること。「一団結」④一般の常識。普通の道理。当然。「気遣ひいたすも一なれば／浮・禁短気」(p. 157)
大辞泉	〔名〕 スル 技能・学問などが上達するように繰り返して習うこと。「英文タイプを一する」「バッティング一」「一問題」(p. 3868)	〔名〕 スル ①二つ以上のものがぴったり一つになること。くいちがいなく同じであること。合致。「意見の一をとる」「指紋が一する」「満場一」②ごく普通の道理。「気遣ひいたすも一なれば」<浮・禁短気・四>(p. 233)

上記より明らかになったことは3点にまとめられる。

1 点目として、漢語サ変動詞の存在について、全く触れていない辞書が存在することである。『広辞苑』における「練習」がそれに相当する。同辞書においては、当該項目の解説の中でも、また、用例の中でも、「練習する」という漢語サ変動詞について一切言及していない。これは森田(1994)の指摘とも重なる。

2 点目は、漢語サ変動詞の用例を示している場合でも、その数がきわめて限定されているということである。『広辞苑』の「一致」は1例、『大辞林』の「練習」は1例、「一致」は2例、『大辞泉』の「練習」は1例、「一致」は1例に限られている。このような限られた用例では、当該漢語サ変動詞の用法を理解することはほとんど不可能であると言わざるをえない。

3 点目は、すでに述べたように、全体的に数が少ないにもかかわらず、辞書間で用例に食い違いが存在することである。たとえば、「練習する」について言うと、『大辞林』が「ピアノを練習する」という用例を掲載している。一方、『大辞泉』は「英文タイプを練習する」という用例を示している。このように、辞書間の用例が大きく異なる現状では、学習者は辞書を通して、「練習する」の一般的な使い方を学ぶことは困難であろう。

以上のように、代表的な国語辞典において、漢語サ変動詞は「漢語＋する」というサ変動詞形で立項されることがなく、その独立用法が記載されておらず、また、用例についても十分に示されていないことが明らかになった。

1.4.2 日本語教育に見る漢語サ変動詞

前節で明らかになったように、漢語サ変動詞は日本語学において必ずしも独立した語彙項目として位置づけられていない。同じく、日本語教育においても、漢語サ変動詞は独立して扱われていない。ここでは、日本語教科書と日本語能力試験を対象に確認してみよう。

まず、日本語教科書について見てみよう。サンプルとして、中国で広く使用されている日本語教科書『総合日語（修訂版）』（北京大学出版社）と『新編日語』（上海外語教育出版社）の2種類を取り上げて確認する。以下はそれぞれの教科書における漢語サ変動詞に関する文法説明と、各章の章末単語リストにおける漢語サ変動詞の一例である。いずれも日本語訳は筆者による。

まず、『総合日語』における漢語サ変動詞に関連する記述を引用しておく。

动词的活用类型

日语的动词根据形态及活用方式的不同，首先可以分为规则变化动词和不规则变化动词，前者又分为两类：Ⅰ类动词（旧称“五段活用动词”），和Ⅱ类动词（旧称“一段活用动词”），不规则变化动词为Ⅲ类动词（旧称“カ行变格活用动词＝カ变动词”，“サ行变格活用动词＝サ变动词”）。Ⅲ类动词（Ⅲ類動詞）包括「来る」和「する」两个词。「する」可以单独使用，也可以接在一些音读的汉字词后面使用。たとえば，「電話する」「打 電話」，「勉強する」「学习」，「運動する」「运动，锻炼」，「運転する」「驾驶，开车」。

(p. 127)

練習（れんしゅう）＜名・他Ⅲ＞练习	紹介（しょうかい）＜名・他Ⅲ＞介绍
婚約（こんやく）＜名・自Ⅲ＞婚约； 订婚	総合（そうごう）＜名・他Ⅲ＞综合
読解（どっかい）＜名・他Ⅲ＞阅读理 解	研究（けんきゅう）＜名・他Ⅲ＞研究
	創立（そうりつ）＜名・他Ⅲ＞创立；创建 设立

(pp. 44-63)

(日本語訳)

動詞の活用類型

日本語の動詞は、形態と活用の違いにより、規則変化動詞と不規則変化動詞に大別される。前者については、Ⅰ類動詞(旧称は「五段活用動詞」とⅡ類動詞(旧称は「一段活用動詞」の2種類に分けられ、後者の不規則変化動詞はⅢ類動詞とも呼ばれる(旧称については、「サ行変格活用動詞＝サ行動詞」、「カ行変格活用動詞＝カ変動詞」)。Ⅲ類動詞には「来る」と「する」の2語が含まれる。「する」は単独でも使用でき、特定の音読みの漢語後について使用することもできる。たとえば、「電話する」、「勉強する」、「運動する」、「運転する」などである。

まず、文法解説について見てみよう。『総合日語』においては、サ行変格活用動詞(サ行動詞)が旧称として紹介されているものの、漢語サ変動詞という呼称は紹介されておらず、Ⅲ類動詞の一部と見なされている。文法解説内には、「電話する」をはじめ、「勉強する」、「運動する」、「運転する」といった4つの語例のみが示されている。また、単語リストにおいても、漢語サ変動詞について、漢語、読み、品詞と動詞タイプ、中国語訳の情報が示されており、動詞タイプにおいては「自」、もしくは「他」という情報のみが示されている。このように、文法解説欄においても、また単語リストにおいても、個々の漢語サ変動詞の典型性や、その独自の用法についての記述は一切存在しない。

次に、『新編日語』における漢語サ変動詞の関連記述を引用する。

サ変動詞和カ変動詞的基本形和连用形

サ変動詞「する」和カ変動詞「くる」均由两个假名构成。头一个假名既是词干又是词尾的一部分，但是「練習する」这类サ変動詞的「する」则是词尾。サ変動詞的连用形是「し」。カ変動詞只有一个动词「くる」，它的连用形是「き」。(p. 99)

種類	词例	词干	词尾	基本形	连用形
サ変	する	(す)	する	する	し
	練習する	練習	する	練習する	し

※ 上表の一行目は順に種類、語例、語幹、語尾、基本形、連用形を表す。

ろうどく（朗読）（名・他サ）⑩ 朗読 べんきょう（勉強）（名・他サ）③ 学習
うんどう（運動）（名・自サ）⑩ 運動 ほうそう（放送）（名・他サ）⑩ 广播

(pp. 92-94)

(日本語訳)

サ変動詞とカ変動詞の基本形と連用形

サ変動詞「する」とカ変動詞「くる」はともに2つの仮名から構成される。前の仮名は語幹でもあり、語尾の一部でもあるが、「練習する」のようなサ変動詞については、語尾が「する」となる。サ変動詞の連用形は「し」、カ変動詞は動詞「くる」のみであり、その連用形は「き」である。

まず、文法解説欄を見ると、『新編日語』は「サ変動詞」という品詞単位を認めており、「する」と漢語サ変動詞の活用についても具体的に記述しているが、文法解説欄に限って言えば、具体的に示されている漢語サ変動詞は「練習する」という1例のみである。また、単語リストについては、読み・漢語・動詞タイプ・アクセント位置、中国語訳の情報が記載されているが、『総合日語』の場合と同様、個々の漢語サ変動詞の典型性やその独自の用法については一切触れられていない。

次に、日本語能力試験について見てみよう。ここでは、サンプルとして、『日本語能力試験 JLPT 公式問題集 N1』（国際交流基金）に見られる漢語サ変動詞に関する出題を取り上げて確認する。日本語能力試験（N1）には、文字・語彙、文法、読解の3つの大問が含まれる。文字・語彙の部分のねらいとして、漢字読み（漢字で書かれた語の読み方を問う）、文脈規定（文脈によって意味的に規定される語が何であるかを問う）、言い換え類義（出題される語や表現と意味的に近い語や表現を問う）、用法（出題語が文の中でどのように使われるのかを問う）、文の文法（文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるか、統語的に正しく、かつ、意味が通る文を組み立てることができるのかを問う）、文章の文法（文章の流れに合った文かどうかを判断することができるかを問う）の7点が挙げられている。

漢語サ変動詞に関する問いには、以下のパターンが見られる。

- (1) 子どものおもちゃは、安全性を考慮して選ぶようにしている。

- 1 こうろ 2 こうりょ 3 こうろう 4 こうりょう

(2) この鍋は重宝している。

- 1 以前より値上がりしている。
- 2 形が気に入っている。
- 3 評価が高まっている。
- 4 便利で役に立っている。

(3) 連携

- 1 学校は地域と連携して生徒の安全を守っている。
- 2 複数の社員で一台のプリンターを連携して使っている。
- 3 最近の株価は、為替レートと連携して上下している。
- 4 登山のときには、必ず地図を連携してください。

(pp. 4-6)

上記から分かるように、日本語能力試験において、漢語サ変動詞に関わる出題としては、(1) 語の読み方を問うもの、(2) 漢語サ変動詞の漢語部にふさわしい漢語を選ぶもの、(3) 漢語サ変動詞の文中での活用形を問うもの、などが挙げられる。これらの設問によって、学習者が漢語サ変動詞について最低限の理解を持っているかどうかを確認できるが、一方、漢語サ変動詞の典型性やその独自の特性について、学習者が理解しているかどうかはわからない。

以上、日本語教科書と日本語能力試験を概観したが、いずれの場合も漢語サ変動詞の扱いについては必ずしも十分ではないことが確認された。つまり、現状では、学習者は漢語サ変動詞を適切な形で指導されておらず、加えて、その理解も要求されていない。この点を改善するための方向性を提案することが今後必要となる。

1.4.3 学習者の使用に見る漢語サ変動詞

漢字・漢語を共有することから、とくに中国人日本語学習者については、日本語漢語サ変動詞の指導は不要であると思われる場合がある。しかしながら、日本語学習者の作文コーパスを調べたところ、中国人日本語学習者による漢語サ変動詞使用においても、多くの問題が存在することがわかる。ここでは、例として、東京工業大学によって開発された日本語学習者作文コーパス「なたね」(コーパスの詳細は2章)の用例を見てみよう。

「なたね」の誤用タグは学習者の作文中の誤用箇所を細かく特定したうえで、そのタイプを詳細に分類したものであるが、必ずしも漢語サ変動詞に特化したものではないため、ここでは、「なたね」のタグ分類を直接使用せず、筆者が用例を質的に判断したうえで、語彙的誤りと統語的誤りの2種類に区分して用例を示す。なお、以下の用例に示された修訂内容は、筆者によるものではなく、コーパスの構築に関わった日本語教師によるものである。

まず、語彙的誤りと思われるものについて引用する。

- (1) 茶庭などの鑑賞、そして主人とお客さんとの心の交流の本質があります。日本の茶道を完璧にする（→完成する）人が、安土桃山時代の千利休です。
- (2) ……8月14日発表された大西洋憲章には、第二次世界大戦において世界平和を回収する（→修復する）ための指導原則として、民主的政治体制の確立と侵略国の非軍事化が示されていた。
- (3) そして、インターネット安全に関する法規を建立すること。完全な安全法規を建立（→確立する）ために政府も責任を負うべきである。
- (4) しかし、佳美さんは楽観的にすべてを受け入れる。イジメられても両親に心配しないために忍耐する（→我慢する）。偉い人と思う。とくに、自殺したかった華奈さんに言った言葉すごく感動した。
- (5) ……たしかに、違う文字の中で転換する（→変換する）のは難しく、読者の混乱を招くおそれがあるのですが、……
- (6) しかし、そのあと、仮名が出てきました。西洋の文化を習いながら、片仮名で表示する（→表記する）外来語がどんどん多くなっている。

上記のように、中国人日本語学習者による漢語サ変動詞の誤用には、誤用箇所の漢語が全体の文脈に適合しない「語彙的誤り」が少なからず存在している。

ただし、以上のような誤りは、どちらかという、漢語サ変動詞そのものの使用に関わる本質的な問題ではない。むしろ、以下で示すような統語的誤りのほうが、本研究の観点から考えれば、より重要なものである。

- (7) でも、学校というものは、勉強の（→勉強する）ところです。それに、漢字を勉

- 強しなくても、ただ少し負担が減るでしょう。
- (8) カタカナで示す語彙も重要だと思います。同音異義語を区別（→区別する）ためにそうしたらいいではないでしょうか。
 - (9) 子供のとき、中国で日本の男尊女卑の社会と聞いたが、具体的に何かよくわかりません。成長（→成長する）についてだんだん深く了解できた。
 - (10) 食べたら、新しい一年の中にラッキーであることを表す。美味しいし、面白いし、みんな競争みたい（→競争する）ように、できるだけ多く食べる。私の国の人々にとって餃子は一番伝統的な食べ物である。
 - (11) だから、日本語はひらがな、漢字、ローマ字の3種類の文字が構成する（→構成される）はずだと思う。それと変わると、いいと思う。今のローマ字はただ発音の表記である。
 - (12) 当時、弦楽器は楽隊の基礎になりました。木管楽器の役割を発揮する（→発揮させる）は重点でした。十八世紀の後、楽器の作り方が改良しました。
 - (13) 10年後の私も結婚する（→結婚している）だろう、結婚相手に特別な要求ない。
 - (14) お茶は私たちの日常生活によく出てくる話題です。中国人の友達の家を訪問する（→訪問した）時、『お茶をどうぞ』という言葉がよく聞こえます。
 - (15) ……私はもし日本国民が認めれば、女性天皇を認めるように皇室典範を改正する（→改正した）ほうがいいと思う。

これらの誤用例は、中国人日本語学習者が漢語サ変動詞の統語的特性を十分に理解できていないことを示していると考えられる。誤用のタイプを質的に分類すれば、(7)の「勉強のところ」、(8)の「区別ため」、(9)「成長について」は母語干渉による誤り、(10)の「競争みたい」はモダリティに関する誤り、(11)の「構成する」、(12)の「発揮する」はヴォイスに関する誤り、(13)の「結婚する」はアスペクトに関する誤り、(14)の「訪問する」、(15)の「改正する」はテンスに関する誤りである。このように、学習者の漢語サ変動詞使用には、多くの問題があることが明らかになった。なお、ここで示した誤用の主要要因については、本論文の各章において詳細に扱っていくものとする。

すでに述べたように、漢字・漢語を共有する中国人日本語学習者にとっては、漢語サ変動詞の習得はそれほど困難ではないという見方もあるが、これらの実例が示しているように、中国人日本語学習者は、語彙レベルにおいても、統語レベルにおいても漢語サ変動詞

に関する問題を抱えている。こういった問題点を精査したうえで、適切な指導を与えていくことが重要であろう。その前提として、日本語漢語サ変動詞の典型例と独自用法の特定が必要であることは言うまでもない。

1.5 まとめ

本章では、研究の方向性、研究の枠組み、及び中国人日本語学習者に対する漢語サ変動詞指導の必要性について論じてきた。

次の章からは本論に進んでいく。本論においては、まず先行研究を概観し、コーパス及びコーパス日本語学の系譜を紹介する。次に、コーパス分析の手法を用い、漢語サ変動詞の中でとくに典型的であり、学習上重要であると思われるものを特定する。さらに、その活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性などを明らかにする。なお、中国人日本語学習者に対する調査、および学習実験を行うことにより、漢語サ変動詞指導のための学習シートを考案する。最後に、本論文のまとめを行い、今後の課題を示す。

本論

第 I 部 研究の枠組み

第 2 章 先行研究

序章では、漢語サ変動詞を研究する重要性について述べた。第 I 部のはじめとして、本章では、研究対象である漢語サ変動詞、及び研究手法であるコーパス言語学について、それぞれの研究の系譜と概要を概観しておく。

まず、漢語サ変動詞については、(1) 活用上の選好性、(2) 内部構成性、(3) 自他性、(4) 語彙的排他性、(5) 学習者の意識や使用状況、の 5 つの観点を立て、それぞれに関わる先行研究を順に見ていく。また、コーパス言語学については、研究が進んでいる英語の情報もふまえつつ、コーパスの定義やコーパス言語学の概要についてまとめ、その後、日本語コーパスとコーパス日本語学、および主要な日本語コーパスについて概観する。

2.1 先行研究

すでに述べたように、漢語サ変動詞については、従来、言語学的研究においても、日本語学的研究においても、様々な観点から論じられている。以下では、本研究の関心もふまえつつ、漢語サ変動詞の活用性、漢語部の内部構成性、漢語サ変動詞の自他性、漢語サ変動詞の語彙的排他性、および学習者の漢語サ変動詞意識や使用状況に関する従来の研究をそれぞれ概観しておく。

2.1.1 漢語サ変動詞の活用性に関する先行研究

すでに述べたように、漢語サ変動詞はこれまで様々な観点から論じられてきたが、一方、活用性に注目した研究は数が限られている。管見の限り、国立国語研究所（1964）による動詞と形容詞の活用形に関する計量的分析と、本研究とは焦点が異なるが、サ変動詞を対象に活用の問題を扱った田野村（2001）と田野村（2009）が見られる。以下、それぞれについて見てみよう。

国立国語研究所（1964）では、現代雑誌九十種資料を標本に 3 分の 1 を取り出して、動詞と形容詞の活用形別使用度数を調べたところ、動詞については連用形が最も多く、終止・連体形がそれに次ぐが、形容詞については終止・連体形が大半を占め、連用形はそれを下回ることが明らかにされた。

田野村（2001）では、『朝日新聞』6 年分（1987-1992）の電子テキストを用い、そこに見

られるサ変動詞の形態のゆれを調査した。氏によれば、現代語のサ変動詞は活用形のゆれの観点から、(1) サ変（サ行変格活用）としてのみ活用するもの（「する」、「実行する」、「びっくりする」、「ジャンプする」など）、(2) サ変とサ五（サ行五段活用）のあいだでゆれているもの（「愛する」、「属する」、「達する」、「反する」など）、(3) サ変とサ上一（サ行上一段活用）のあいだでゆれているもの（「論ずる」、「応ずる」、「重んずる」、「察する」など）、(4) サ変とサ下一（サ行下一段活用）のあいだでゆれているもの（「進ずる」と「魅する」の2語）という4グループに分類できるものの、(1) については、2文字以上の漢語、外来語、和語に後続する「する」の場合、形態のゆれがあまり観察されないから、議論の焦点は(2)、(3)、(4)の3グループにおかれている。

(2) に属する複合サ変動詞は「属する」類と称され、活用形の「～しない」と「～さない」、否定形の「～せず」と「～さず」、「～せぬ」と「～さぬ」、仮定形の「～すれば」と「～せば」、推量・勧誘形の「～しよう」と「～そう」、命令形の「～せよ」、「～しろ」と「～せ」、禁止形の「～するな」と「～すな」などが含まれるとされている。この分類は、サ変になるか、またはサ五になるかは、前の一字漢字の発音に依存しており、例外もあるが、漢字が促音・撥音・長音を含む場合はサ変のままになり、それ以外の場合はサ五に変化する傾向が強いと指摘されている。また、(3) に属する複合サ変動詞は「信ずる」類と呼ばれており、この分類に対する調査の結果、全体的に上一段化がかなり進行しているが、動詞によって程度の差があること、また、話し言葉でも使用される語ではサ上一の比率が高く、書き言葉で使用されることの多い語ではサ変にとどまる率が相対的に高いと指摘されている。なお、(4) の分類については、該当する「進ずる」と「魅する」の2語について、具体的な事例を示している程度であった。

田野村（2001）では、サ変動詞の活用形に注目し、いくつかの興味深い知見を得たわけであるが、田野村（2009）はさらに範囲を拡張し、大規模な電子資料である国会会議録のデータと、氏が試作した巨大 Web コーパスを用い、一字漢字複合サ変動詞に限って活用のゆれにおける通時的変化の様相について考察した。「属する」類と呼ばれたサ変動詞の五段活用化の進行程度に基づいて下位分類の精密化も行われた。

国会会議録データについては、1940年代から10年ごとに区分したうえで、過去60年間における「属する」類と「信ずる」類サ変動詞の活用のゆれの時間的推移を観察した。「属する」類については、「～しない」と「～さない」を取り上げて調査した結果、(1) 時間とともに語の五段化の率が高まっていること、(2) 1拍語の五段化は非常に早い段階で完了

したのに対し、2拍語は今もなお五段化の途上にあり、また語によって大きな遅速の差が見られ、とくに2拍語で特殊拍を含むものは、五段化が全般に遅れていること、の2点を確認された。また「信ずる」類に関しては、個々の動詞による遅速の差はあるにせよ、一斉にしかも徐々に加速しつつ、一段活用に向けた変化を続けていることが確認された。

さらにデータ量が約14倍あるWebコーパスに基づいた分析により、「属する」類の動詞については、(1)五段化の比率は、促音・撥音を含む場合よりも、長母音を含む場合のほうが高くなっていること、(2)五段化の進行程度に基づいて、「属する」類をさらに1拍語、特殊拍を含まない2拍語、長母音を含む2拍語、促音または撥音を含む2拍語、という4下位分類にすることが可能である、という結論が導かれた。

以上のように、氏はサ変動詞の活用のゆれについて、複数のコーパスに基づいて総合的な考察を行った。いずれの研究も、内省だけでは調査できないサ変動詞の活用的振る舞いを観察したものであり、コーパスの可能性を示したきわめて価値のある研究であると言える。ただし、田野村(2001)は、漢語サ変動詞について、「(形態のゆれの面においては)とくに指摘すべきことはない」と述べているが、本研究の関心をふまえれば、漢語についても、活用上のパタンの特定を検討する必要があると考えられる。

2.1.2 漢語サ変動詞の内部構成性に関する先行研究

漢語サ変動詞に関して考えなければならない側面の一つとして、語構成の研究は歴史が古く、分析の観点が多岐にわたる。以下、2.1.2.1では、まず広義の語構成の概念・定義に関わる記述を概観し、本論文で扱おうとする問題の枠組みを明示する。その後、2.1.2.2において、漢語サ変動詞の漢語部の内部構成に注目した研究と漢語サ変動詞全体としての構成分類に注目した研究を概観する。

2.1.2.1 語構成(内部構成)の定義

語構成については、従来、様々な理論的研究が行われている。中では、とくに見逃せないのは、斎賀(1957)と斎藤(2004)の見識であると考えられる。

斎賀(1957)は『国語学辞典』の記述を引用しながら、「語構成」について以下のように述べている。

普通この術語(「語構成」、注釈は筆者)は、互いに関連しながら、しかも、やや異

なる二つの事実をさして用いられている。一つは発生的な見地からする新語形成を論ずる造語的事実であり、もう一つは、ある言語単位を構成するものとしての部分要素の結合の型を論ずる語構造論的事実である。(中略)しかし、このような既存の単語の構造に関しての、言語主体の主観に生きている分析意識に基づいてはじめて、新たな語の形成は可能であるという点において、両者は深く関連しあっている。(p. 218)

上記のように、語構成については、造語といった語形成論の観点と語構成要素の結合型といった語構成論的観点から議論することが可能であるとされる。この二つの観点は、互いに関連しながら、やや異なっている。既存の日本語漢語サ変動詞の語幹部漢語に注目して、その構成要素間の結合関係を探ろうとする本研究の目的に照らし合わせると、後者の観点がとくに重要であろう。

また、「語構成」はどのような過程であるかについて、斎藤(2004)は、以下のような基本図式を提示して説明している。

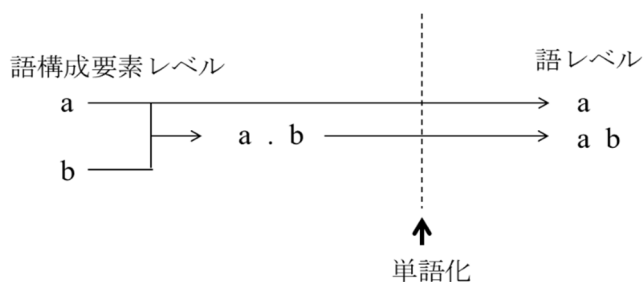


図1 語構成の基本図式

氏によれば、 a という語と b という語とが結合し、 ab という語ができるとすれば、「 $a+b \rightarrow ab$ 」が「語構成の常識的モデル」として認められるが、実際には、この過程において、 a と b が単純に構成するわけではなく、 a と b が結合して ab になる際には、「単語化」という質的転換作用が働いている。結合してできた語 ab は「質的統一体」となる。単語化という働きによって、語 a , b は、語構成要素レベルの「 $a \cdot b$ 」に転じ、単語化の作用を直接受ける存在となる。また、単純語、合成語に関わらず、すべての語はこうした過程を経て成立すると捉えることが可能になるという (pp. 3-6)。

斎藤(2004)の語構成モデルで示したように、語構成は構成要素の単純な結合ではなく、「単語化」(「語構成要素が語になるために必要不可欠な質的転換作用」)(p. 7)の過程を伴

い、「質的統一体」である新語ができる。新たに構成された語には、もとの構成要素になかった性質を持つようになる場合が多い。語構成分析に際して、このことには十分に留意しなければならない。

さて、語構成要素については、山下（1995）で以下のように示されている。自立形式と結合形式の2種類に分けられ、結合形式についてはさらに単独で語となりうる語基と、独立して語となることができず、語基と組み合わせてはじめて語を構成できる接辞とに分けられるという。構成された語は単純語と合成語（複合語と派生語）とに分けられるとされる。

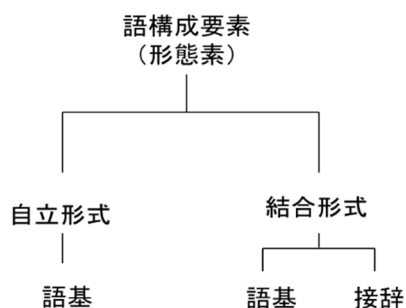


図2 語構成要素の下位分類

しかしながら、『語構成』という時の『語』の概念は確定しにくい。それがきちんと定義出来る方が語構成論にとって望ましいのは無論ながら、それが定まらなければ研究に手が着けられないわけではない。そういう『語』の定義は、むしろ、実際には語構成研究の中において明らかにしていくべきものに思われる。」（水谷，1987，p.15）。斎藤（2004）でも指摘したように、語構成を議論する際、単純語か、合成語かは問題にはならず、両者は本質的には同質である（p.16）。これらをふまえ、本研究においても、漢語サ変動詞は単純語か合成語かという問題には拘らず、語幹部漢語の語構成的特徴を明らかにすることに焦点を当てることにする。

語構成要素間の関係を考えるにあたっては様々なアプローチがありうるが、語を構成する要素の「意味的側面」と「機能的側面」からのアプローチが一般的である。語には「語彙的側面」と「文法的側面」とが存在するのと同様に、語のように自由に振る舞うことが困難であるが、語になることを前提としてそれに従属する語構成要素にも、「意味的側面」と「機能的側面」が存在するとされる。「意味的側面」の実質は語構成要素の意味、「機能

的側面」については、語構成要素の分類カテゴリーと結合相手に対する指定の2種類の文法的・機能的特徴と想定できる。語構成要素が語になるいわゆる「単語化」のプロセスにおいて、この二つの側面は下図に示すように働く。すなわち、この過程において、語構成要素の「意味的側面」は語の「語彙的側面」、また語構成要素の「機能的側面」は語の「文法的側面」へと質的転換するようになるという。(pp. 8-11)

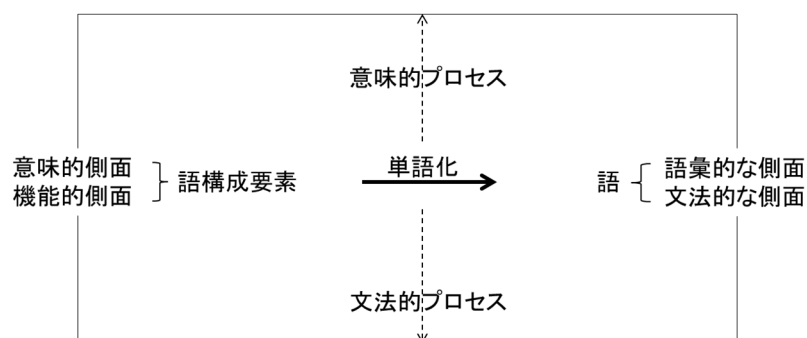


図3 単語化における2側面の在り方

氏によると、語構成要素の「意味的側面」は語構成要素の意味で、いくつかの語の「語彙的意味」に共通する部分から抽出しうる抽象的なものである。語構成要素の「機能的側面」については、語構成要素の分類は品詞的分類とは完全に一致するわけではなく、両者の間に依存関係があるものとなないものがある。また、語の「語彙的側面」の實質は語の語彙的意味である。語の「文法的側面」は、語の文法的な分類カテゴリー (=品詞)、語の構文的職能、主語や目的語等共起成分に対する制限、の3種類の文法的特徴をともに含むという。(pp. 14-16)

以上をふまれば、語構成を検討するに際して、語構成要素の「意味的側面」と「機能的側面」を総合的に考察することが必要となる。それにあたり、「意味的側面」については、各語構成要素が持つ意味を語の意味に基づいて確認したうえで、語構成要素間の意味的結合関係を確認すること、また、「機能的側面」については、語構成要素間の品詞的結合関係、また、結合相手との指定関係を明確にしたうえで、語構成要素間の品詞的結合パターンを特定することが必要であると考えられる。本論文が対象とする漢語サ変動詞の語構成的特徴を検討する際にも、こういった2側面をともに考慮に入れて考察する必要があると考えられる。

以上、語構成の定義、語構成モデル、語構成要素の分類、語構成要素の2側面について、

理論的な立場からの論考を整理してきた。次節においては、これらの理論的成果をふまえた語構成分類に関する研究を概観する。

2.1.2.2 漢語の語構成分類

前節では、語構成について、どのような理論的記述がなされていたかを概観した。すでに概観したように、語構成論において、語と語構成要素のいずれにおいても、意味的側面と機能的側面がある。この点をふまえ、漢語の語構成分類に関わる先行研究についても、語構成要素の意味的結合関係に重きを置くものと、品詞性や統語など語構成要素間の文法的・機能的結合関係に着目したものとに分けて考察する。くわえて、意味と機能を支える基である形態的特徴を基準としたものも概観する。以下では、(1) 形態上の特徴を基準に構成要素間の結合パターンを記述するもの、(2) 意味的結合関係を基準に構成要素間の結合パターンを記述するもの、(3) 品詞的關係を重視し、それを基準として分類するもの、(4) 統語的關係を基準としたもの、の4観点を設定し、それぞれに関する研究を整理する。ただし、2つ以上の観点から行われたものも見受けられるため、一つの研究を二つ以上の分類で紹介する場合もある。

2.1.2.2.1 形態的特徴を基準としたもの

山田(1940)は、漢語を「一字の漢語」、「二字の漢語」、「三字の漢語」、「四字以上の漢語」の4種類に分類したうえで分析を行っている。朱(2011b)は蘭学資料に出現している四字漢語を、構成要素の字数により、「2+2型」「3+1型」「1+3型」「1+1+1+1型」の4種類に分類して議論している。類似した研究は、ほかに小林(2004)(漢語サ変動詞の節に)も存在するが、この観点からの漢語語構成分類研究はそれほど多くない。この分類における研究は、どちらかと言うと、漢語の形態上最も顕在する特徴に重きを置いたものである。

2.1.2.2.2 品詞的結合関係を基準としたもの

品詞性は、ほとんどの語構成分析において基本的な分類基準として採られており、一般性の高いものである(水谷, 1987, p. 145)。これまで、語構成要素の分類基準については、暗黙のうちに品詞の存在が前提とされているように思われる(斎藤, 2004, p. 19)。品詞的結合関係には、漢語自体の品詞性と、その構成要素間の品詞的結合関係との2種類が研究の着目点であると言える。

山田（1940）と佐藤（1979）は漢語自体の品詞性と構成要素間の品詞性ととも注目したものである。山田（1940）は、漢語を名詞、動詞、形容語の3種類に分けたうえで、それぞれの内部構成について検討し、漢語は「上なる観念が従にしてしたなる観念が主なる意にてつくれるもの」、「その二字が元来類似の意義なるを合して一つ意を確立せしめたるものを以てするもの」に分類できるとしている。佐藤（1979）は山田（1940）を踏襲し、漢語を名詞、動作語、形容語の3種類に大別したうえで、助動詞、接尾辞などの用語を使いながら、14類のパターンを示している。これらの研究では、内部構成の品詞的性質よりも、漢語そのものの品詞分類に研究上の重点が置かれている。これは比較的早い時期の語構成論の特徴の一つであるが、こうした研究の数は必ずしも多くない。この類の研究に関しては、語構成要素と語という質的に異なる言語単位を混同したため、分析の妥当性が問われている。こうした研究に比べ、漢語の語構成要素間の品詞的結合関係に着目した研究が圧倒的に多かった。ここでは、代表的な研究としては、野村（1998a）（1999）、朱（2011a）（2011b）を取り上げて概観する。

野村（1998a）は、漢語を構成する漢字を、「事物類（N）」、「動態類（V）」、「様相類（A）」、「副言類（M）」に分類している。野村（1999）がこの分類法に従って、基本3000語（国立国語研究所（1984）をもとに抽出された）を品詞別に計量している。朱（2011a）は、三字漢語の語構成要素（語基と称され）については、「名詞性語基（N）」「動詞性語基（V）」「形容詞性語基（A）」「接辞性語基（S）」の4種類に分類して検討すべきであるとしている。「2+2型」の四字漢語を対象とした朱（2011b）においては、漢語の構成要素（語基と称され）は品詞性により、「名詞性語基（N）」、「動詞性語基（V）」、「形容詞性語基（A）」の3種類に振り分けられている。

2氏の研究では、品詞分類の名づけが若干異なるものの、これらを通じて、漢語語構成要素の品詞的分類のおおよその枠組みが確認できる。従来、語構成要素の分類基準については、暗黙のうちに品詞の存在が前提とされるように思われることから、語構成要素固有の分類を考えるにあたって、やはり研究の行き届いている品詞分類を一つのたたき台として出発するのが妥当である。加えて、以上で概観してきたように、品詞的結合関係に注目した漢語語構成分類の研究には、漢語の品詞的結合関係を優位に考えるものと、漢語の語構成要素の品詞的に焦点を当てたものとの2種類があったわけであるが、後者は全体の圧倒的な量を占める。これらをふまえると、漢語の語構成分類を行うことに際して、語構成要素間の品詞的結合関係を考察するのが必要不可欠な一環として位置づけられると考えら

れる。

2.1.2.2.3 意味的結合関係を基準としたもの

意味的結合関係は、語構成要素間に内在する意味的な結合関係で、結合相手の性質を互いに指定するものである。語構成要素間の意味的結合関係を基準に行われた漢語語構成分類研究は、量的にきわめて多く、構成要素間の品詞的結合関係に関わる研究とも比肩される。ここでは、代表的な例として、斎賀（1957）、野村（1987）（1988b）、森田（1994）、石井（2001）、朱（2011a）（2011b）、張（2013）を取り上げて紹介する。

斎賀（1957）は、語構成の問題を正面から取り上げたものの一つとして注目に値する（朱，2011b）。氏は、語の結合力、結合様式、結合の意味的關係などを含めた語構成論を展開したあと、二字漢語の語構成について、(1)「並立関係」、(イ)同義語・類義語による一義形成（例、階級、学校、結果、思想など）、(ロ)類義語・対義語の並列対照、（例、公私、黒白、山河、東西、夫妻など）、(2)「主述関係」（例、地震、日没、市立、事変など）、(3)「補足関係」（例、水防、水浴、足温など）、(4)「修飾関係」（例、英語、海軍、家族、税金など）、(5)「補助関係」（例、椅子、様子、女子、当然など）、(6)「客体関係」（例、愛国、講和、殺人、専門など）の6種の意味的結合関係を示している（pp. 242-244）。また、以上の6分類のそれぞれに属する漢語の特徴について、(1)「並立関係」においては「同義語・類義語による一義形成」類の漢語の数が非常に多いのは、中国語の造語法の影響を受けたためであること、(2)「主述関係」と「補足関係」はともに語数がきわめて少ないこと、(3)「補足関係」は、日本語の語句に漢字を結んでそれを音読することによって成立した日本製の漢語であるのに対し、「客体関係」は本来漢語に存する造語法であること、(4)最も種類が多く、かつ修飾のしかたも複雑なのは「修飾関係」であること、が述べられている。このように、漢語の語構成的特徴を構成要素間の意味的關係から捉えるものでありながら、各意味的結合関係における漢語の造語的特徴についても言及している点では、氏の研究は漢語の語構成研究に大きな進展をもたらしたものであると言える。

斎賀（1957）で示された意味的結合関係に基づく語構成の分類は、後に野村雅昭氏の研究によってさらに精度を深めたとと言える。氏による一連の研究には、二字漢語、三字漢語、四字漢語、複合漢語一般など、幅広い漢語が含まれるが、以下では、野村（1987）と野村（1988b）を取り上げて、その分類をより詳細に見てみる。

野村（1987）は複合漢語全般を対象に、字音形態素の分類、漢語語基の分類、及び複合

漢語を構成する要素間にある意味的結合関係パターンといった複数の観点から考察している。同論において、複合漢語は構成する要素間の意味的結合関係により、「補足関係」、「修飾関係 1」、「修飾関係 2」、「並列関係」、「対立関係」の 5 分類に分類され、それぞれにおける下位分類として、(1) 補足関係には、①「N」＋「A」（胃—弱，性—善，民—主，栄養—豊富，素行—不良），②「V」＋「A」（就職—難，当選—確実，実現—可能），③「N」＋「V」（地—震，日—没，動脈—硬化，海外—公演），④「V」＋「N」（読—書，殺—人，有—意義，要—注意），(2) 修飾関係 1 には、①「A」＋「V」（博—学，多—用，静—観，急—停車），②「V」＋「V」（競—泳，歓—談，乱—反射，徐行—運転），③「M」＋「V」（必—要，予—感，最—優先，一—時—停止，一—斉—調査），(3) 修飾関係 2 には、①「A」＋「N」（幼—児，難—題，軽—金属，重要—案件），②「V」＋「N」（製—品，造—花，分—校，看護—婦，勤勞—意欲），③「N」＋「N」（人—体，牛—乳，茶—道，野球—選手），(4) 並列関係には、①「N」＝「N」（学—校，道—路，内憂—外患，美辞—麗句），②「A」＝「A」（温—暖，善—良，不眠—不休，自由—自在），③「V」＝「V」（増—加，破—壊，断—絶，善戦—健闘，比較—対照），(5) 対立関係には、①「N」↔「N」（前—後，上—下，竜頭—蛇尾，寸善—尺魔），②「A」↔「A」（大—小，長—短，西高—東低，大—同—小異），③「V」↔「V」（取—捨，勝—負，男尊—女卑，優勝—劣敗），のようなものがあるとしている。なお、上記の「N」、「V」、「A」、「M」といったコードはそれぞれ叙述の対象となる物や事を表す「事物類 (N)」，事物の動作・作用を表す「動態類 (V)」，事物や精神の性質・状態を表す「様相類 (A)」，動作や状態の程度・内容を限定・修飾する「副用類 (M)」を表すという。(pp. 130-144)

野村 (1988b) は、『新選国語辞典 (第 6 版)』(小学館, 1987) の「ア」から「コン」までの約 8500 語の二字漢語を、語構成パターンによって分類して調査を行い、語数の多い 10 語構成パターンには以下のようなものと述べている。

(1) 連体修飾

- a N+N (30.4%) 牛乳, 国旗
- b A+N (15.6%) 幼児, 悲劇
- c V+N (8.6%) 製品, 造花

(2) 並列構造

- a V・V (10.9%) 破壊, 援助

b N・N (6.3%) 家屋, 状況

c A・A (3.8%) 温暖, 巨大

(3) 連用修飾

a A+V (4.2%) 静観, 新任

b V+V (3.8%) 競泳, 歓談

(4) 補足構造

a V+N (8.6%) 読書, 登山

b N+V (2.9%) 地震, 肉食

このように、野村氏による詳細な分析・検討により、漢語の語構成分類がかなりの程度まで正確に確立された。

森田 (1994) は二字漢語熟語を、その2文字が表す意味成分相互の関係から、(1)「主述の関係」(例: 日没, 年少), (2)「修飾の関係」(例: 校歌, 美人, 進路, 最古, 再会), (3)「並列の関係」(例: 父母, 強弱, 飲食), (4)「補足の関係」(例: 読書, 登山, 脱水), (5)「認定の関係」(例: 知的, 不便, 有害)の5種類に分けている。そのうち、「する」を伴ってサ変動詞化するものは、(1)修飾関係のうち、副詞的成分と動詞的成分の熟合したもの(例, 徐行, 予習, 激動)と、(3)並列関係のうち、動詞的成分同士が並んだもの(例, 飲食, 往復, 増加, 表現), それに、(4)補足関係の4種であるとされている。氏によれば、例外もあるものの、これらは意味的に後に立つほうの成分が動詞的である熟語に限られるという点において共通する。

石井 (2001) は、新聞データから、「派閥からの離脱→派閥離脱, 停戦に合意した→停戦合意」のように、新聞の文脈から短縮によって形成された臨時的一語(四字漢語)を取り上げて、野村 (1975) の分類法を受け継ぎ、語構成パターンを5類12種としたうえで、下位分類を93種まで細分している。石井の分類は、語構造を主に動詞のアスペクトおよびヴォイスに関わる範疇的な意味を手掛かりとしたという性格が強い。氏の研究は、とくに四字漢語の語構成を考えるときの貴重なデータであり、掲出された臨時一語の形成に関わる統語構造の実例も、語構成要素間の構文的関係を見るうえでいい参考になると考えられる。しかしながら、複合動詞の構成要素間関係を分類することと複合動詞そのものを分類することとの関係に関する原理的な考察が見られない。

朱 (2011a) と朱 (2011b) については、前者は三字漢語を、後者は四字漢語を対象とし

ているものである。前者では、蘭学資料をもとに、三字漢語を構成する二字漢語語基の内
部品詞性と品詞的結合関係を検討することで、「N+N 修飾関係」、「A+N 連体修飾関係」、
「V+V 並列関係」、「V+N 述客関係」に属する二字語基が、三字漢語の構成要素の 8 割以上
を占めることが明らかにされている。後者は、同じ資料に基づき、「2+2 型」四字漢語を取
り上げて、語基の品詞性と造語力、及び結合関係と出自状況など、種々の側面から分析を
行っている。同研究はまた、意味的結合パターンから「2+2 型」四字漢語を以下の 5 種類に
分類されるとしている。

(1) 主述関係 (42.2%)

N+V 液質+調和, 球子+集合, 生機+発動, 体温+減却など

N+A 感動+過敏, 脂肪+過多, 性力+強健など

(2) 連体修飾関係 (25.7%)

N+N 環状+軟骨, 歳輪+視差, 生機+活動など

V+N 牽引+神経, 降下+時刻, 証治+方法など

A+N 過剰+運動, 同等+速力, 不好+導体など

(3) 並列関係 (19.8%)

V+V 栄養+長育, 揮発+衝動, 挙動+運転など

N+N 営為+感触, 感覚+触知, 形状+容貌など

A+A 柔軟+厚实, 柔軟+松疏, 醇厚+活発など

V+A 中和+平全, 膨張+希薄

(4) 客述関係 (9.0%)

N+V 引力+発明, 食物+消化, 生命+保続など

(5) 連用修飾関係 (3.3%)

A+V 活発+迸射, 頑硬+結腫, 醇厚+熟成など

N+V 子宮+分娩, 実性+失血, 定時+発歇など

ほかにも、張 (2013) のように、特殊な一部の漢語サ変動詞に着目したものがある。張
(2013) では、「離陸する」「着陸する」のような離脱や帰着を表す漢語動詞の語構成的研
究であり、この種の漢語動詞の意味的特徴を記述している。

このように、語構成要素間の意味的結合関係に注目した語構成分類研究においては、二

字漢語，三字漢語，四字漢語，複合漢語全般，臨時的一語，特殊性を持つ語群など，幅広い漢語が対象とされている。研究手法については，理論的分類のみならず，計量的にアプローチしたものが現れるようになった。しかしながら，研究の目的や対象となる漢語に異なりがあるため，先行研究間では分類にばらつきが存在し，同じ二字漢語を対象とした研究間においてもかなりの差が見られる。

本来，対象語に違いがある研究では，それぞれの分類範疇を比較することは適切ではない。しかしながら，語構成の理論的記述からもわかるように，語構成は対象語の形態的特徴，すなわち単純語か合成語かという区別を超えて論じることが可能なものである。この点をふまえれば，異なる形態的範疇に属する漢語でも，語構成分類の比較が一定の程度で成り立つと考えられる。したがって，ここでは，前述の野村(1987)，斎賀(1957)，朱(2011b)を取り出して比較することとする。三研究に掲載されている語構成分類間の対応関係を示すと以下のようなになる。ただし，ここで掲載している対応関係はおおよそのものであることに注意されたい。

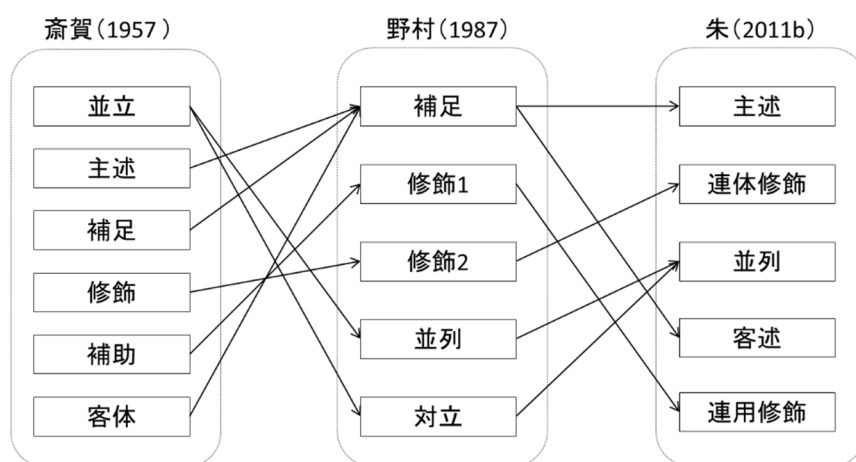


図4 3氏による漢語語構成分類間の対応関係

上図で示したように，氏らによる語構成分類の範疇も，各分類の含む内実もかなり異なっていることが明らかになった。これは，そもそも語構成分類というのは言語学者の内省によるものためであろうが，一体いくつの分類を設けるのが妥当なのかについて，より客観的で統一した判断基準の確立が語構成研究において求められると言えよう。

2.1.2.2.4 統語的關係に準じたもの

上記で概観してきたように、従来の漢語語構成研究は、形態論的、意味的、品詞的など、多様な観点から行われている。とくに意味的観点と品詞的観点は、漢語の語構成分類研究において広く注目されている。しかしながら、仁田（1980）は、これらの観点到終始するだけではやはり不十分であり、形態論や意味論よりも、統語論的の立場から語構成要素の内部構造の真の姿を見抜くことが必要であると主張し、「文構造に語構成を見、語構成に文構造を見る」（p. 329）という姿勢で、文成分、構文関係といった統語論的観点から漢語の語構成分類について検討している。氏は、「落馬スル」を例に取り上げ、「*馬カラ落馬スル」「*自転車から落馬スル」が言えないのは、「落馬スル」がすでに{落<動作>+馬<場所(離点)>}といった語構成のあり方、つまり、「馬カラ落ちル」といった構成のあり方と語義を有しているためであると述べている。同研究は、構成要素間の内的構造に注目し、格成分、状況成分、付加成分の3つの観点から漢語サ変動詞の語構成を考察している。

後に小林（2004）は、仁田（1980）を受け継ぎ、動詞的要素と名詞的要素で構成される「VN-N タイプ」の漢語サ変動詞（漢語動名詞と称され）は、その名詞的要素と関係づけられた項を取るか取らないかによって、(1) 項を取れないタイプ（飲酒、挙式、処刑など）、(2) 項を取れるタイプ（投票、登山、入院など）、(3) 項を取らなければならないタイプ（開封、観戦、除名など）、の3種に分類できるとしている（pp. 93-97）（この2つの研究はいずれも漢語サ変動詞を対象としているものであるため、ここでは概説するにとどまり、詳細は次の漢語サ変動詞の語構成分類の節で述べる）。

2 氏の研究は、従来、語彙論や意味論の観点到重点を置く語構成分類研究に、新たな分類可能性を提示している。文構造に語構成を見、語構成に文構造を見るという統語的知見も、語構成分類において非常に参考になるものである。

以上、漢語の語構成分類に関する従来の研究のうち、代表的なものをいくつか取り上げて概観してきた。漢語語構成分類研究は、形態・意味・品詞・統語といった複数の観点から行われているが、数のうえでかなりの量を占めるのは、語構成要素間の意味的・品詞的結合関係に重点を置いた研究である。漢語語構成の分類は多様な観点から行うことが可能であるが、中でも意味的ならびに品詞的結合関係はとくに重視すべき観点である。ただし、すでに述べたように、分類範疇数の決定は、依然として大きな問題として残る。分析者の内省は重要であることは言うまでもないが、あわせて何らかの客観的な判定基準が望まれると言えよう。

2.1.2.3 漢語サ変動詞の語構成分類

前節では、漢語の語構成分類研究を概観した。本節では、本研究の目的に応じ、漢語サ変動詞を対象とした語構成分類の研究に注目しよう。多くの研究者は漢語サ変動詞の語構成的特徴は、漢語の語構成的特徴に還元されると考えているため、漢語サ変動詞を対象とした語構成分類研究はそれほど多くない。以下では、この分野において、数少ない研究実例とされる仁田（1980）、日向（1985）、野村（1999）、小林（2004）を取り上げて、それぞれについて概観する。

仁田（1980）では、漢語サ変動詞の語構成について、以下のように述べている。

動詞の中には、とくに漢語のサ変動詞に多いのであるが、一語としての動詞の内的構造に、したがって語義の中に、いわゆる主 - 述、客 - 述などといった文構造の一部をすでに含んで、語として成立しているものがある。こういった動詞にあっては、動詞の語構成に文構造を見ることになり、また、当の動詞の語構成の在り方を、その動詞を含んで成り立っているところの文の内的構造およびその文の意味解釈に見ることになる。つまり、文の構造といったものを考えることが、語の語構成を考察することになり、語の構成の在り方を考察することが、文の内的構造の在り方およびその文の意味解釈を理解することになる。この種の動詞の考察にあっては、語構成に文構成を見、文構造に語構成を見ることになる。語構成への考察は、文構造からの考察、あるいは文構造への類推といった視点を手にすることによって、より客観的なものになる。

(pp. 328-329)

氏によれば、漢語サ変動詞の構成要素間の関係構造の中に含まれている格成分としては、格成分、状況成分、付加成分の3種類があるとされる。このうち、格成分は対象格、場所格、主格、不透明格、異格の5種類に、状況成分は時の成分と所の成分の2種類に、付加成分は方法、原因、期間、頻度、程度量、様態の6種類に分類される。なお、仁田氏はあくまでも漢語サ変動詞という単位で議論をしているが、以下では、紙幅の都合上、漢語部分のみを取り出して記載することとする。

まず、格成分の下位分類について、以下のようにまとめられる。

(1) 対象格（＜動作＞＋＜対象＞といった語構成を有するもの）：廃業、講話、捺印、改

心，投票，切腹，投石，読書，禁酒など

(2) 場所格

(2-1) 場所（着点）格（こういった構成要素を，自らの内部構造の中に，したがって自らの語義の一部に含んで，一つの動詞として成立しているもの）：潜水，入浴，着席，乗船，来日など

(2-2) 場所（離点）格（こういった構成要素を，自らの内部構造の中に，したがって自らの語義の一部に含んで，一つの動詞として成立しているもの）：退場，離陸，出獄，下車など

(2-3) 場所（空間）格（こういった構成要素を含んで，一つの動詞として成立しているもの）：越境，越冬，越年など

(3) 主格（いわゆる主格にあたる構成要素を，自らの内部構造に，したがって自らの語義の一部に含んで，一つの動詞として成立しているもの）：停電，断水，出火など

(4) 不透明格（統語論的な結合価と意味論的な結合価が明確でない，あるいは，含んでいる構成要素をより限定された形で表現したい場合には，動詞の内部に含んでいるはずの構成要素を，容易に，文の成分として取ることになるもの）：加盟，返品，開講，発車，停車，閉店など

(5) 異格（中核をなす動作概念からは要求されないところの格成分が，その中核部分がある種の語構成を取って一つの動詞の構成素であるような動詞になることによって，格成分が新たに要求されるようになるもの）：分担，同居，両立，共有，依存，付記，独立，併用など

続いて，状況成分についてであるが，動作や現象の成立そのものの外側にあつて，それが成立している外的背景を表すものであるとされる。この点について，状況成分は，動詞の表す動作や現象を成立させるために参与している項といった内的要素である格成分とは対照的である。状況成分の下位分類として，以下の2種類があるとされる。

(6) 時の成分（こういった構成要素を，自らの内的構造の中に，したがって自らの語義の一部に含んで，一つの動詞として成立しているもの）：現存，夜勤など

(7) 所の成分（こういった構成要素を，自らの内的構造の中に，したがって自らの語義の一部に含んで，一つの動詞として成立しているもの）：外泊，在宅，籠城など

また、付加成分は、動作や現象の成立の在り方を様々な観点から意味的に限定するものであるとされる。当該成分は独立して使用されるものではなく、他の要素と組み合わせさせてその機能を果たす。付加成分の意味機能には、方法、原因、期間、頻度、程度量、様態といった6種類が含まれているとされる。

- (8) 方法（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：郵送，図示，銃殺など
- (9) 原因（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：水死，病死，餓死，凍死，戦死など
- (10) 期間（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：永住，常設，続行など
- (11) 頻度（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：多発，且参，連勝，再婚など
- (12) 程度量（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：全壊，完訳，大破，一新など
- (13) 様態（こういった構成要素を、自らの内的構造の中に、したがって自らの語義の一部に含んで、一つの動詞として成立しているもの）：専売，即売，大勝，独断，快走，密談など

このように、仁田（1980）は語構成、語義といった語のレベルでの事象が、統語・文形成・文の意味解釈といった構文レベルでの事象に深く関与していることを主張し、統語的観点から、漢語サ変動詞の語構成要素間の内的構造を考察している。氏の分類をまとめて図示すると、以下のようになる。

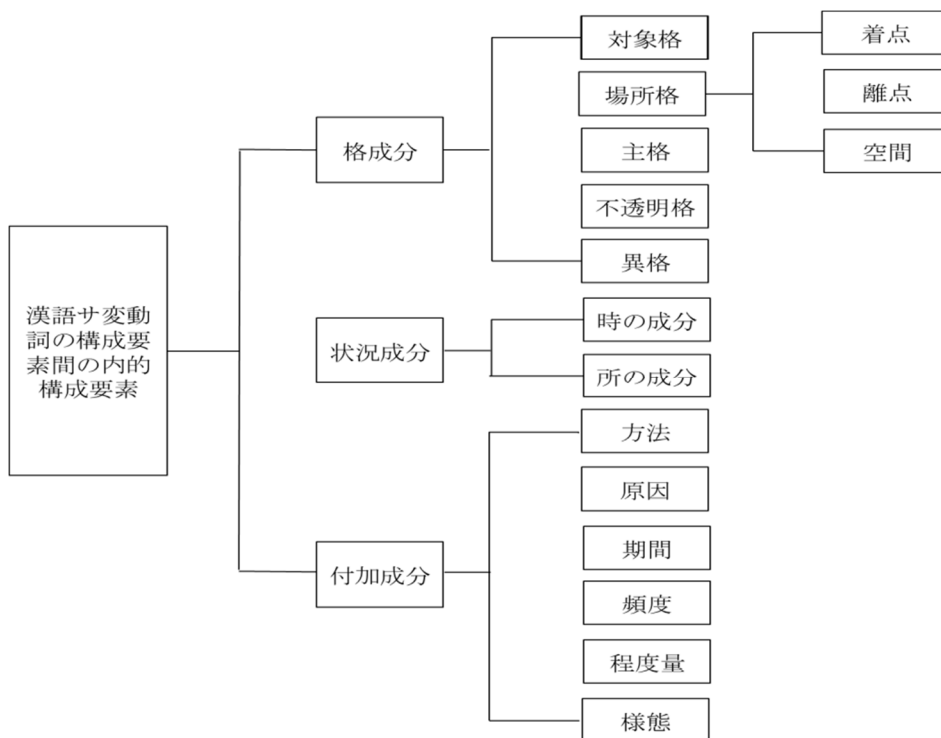


図5 仁田（1980）に基づく漢語サ変動詞の内部構成分類

上記のように、仁田（1980）は、語構成を文構造の中で見べきだという姿勢で、漢語サ変動詞の内部構造を統語的に分類している。

仁田（1980）とは異なり、日向（1985）は、漢語サ変動詞を構成する漢字の意味的カテゴリーに注目し、個別的な漢字が複合して形成される漢語が以下の（1）から（4）の4種類に分けられるとしている。

(1) 並立関係

(1-1) 同意の漢字の結合（稼働，添加，繁茂，崇拜）

(1-2) 反意の漢字の結合（屈伸，開閉，出没，売買）

(2) 修飾関係

(2-1) 形容語や、副詞性の漢字が添加している場合（安眠，静座，大破，激変，再建，直送）

(2-2) 修飾部に形容語，副詞性以外の漢字が位置した場合（玉砕，山積，寸評，林立，点在，鯨飲，群棲，列举，誤認，傾聴，凍死，競売，黙認，乱入，改築）

(3) 客体関係

- (3-1) 客体部が「を」格を伴う場合（読書，注水，開店，作図，編曲，得点）
- (3-2) 客体部が「に（へ）」格を伴う場合（帰国，登山，入学，遅刻，来社，入院）
- (3-3) 客体部が「から（より）」格を伴う場合（落馬，離陸，退院，脱線，離籍）
- (4) 実質関係（強化，鈍化，酸化，退化）

このうち，とくに（2）修飾関係と（3）客体関係に属する漢語サ変動詞について、『岩波国語辞典（第2版）』に採録された一定の基準を満たす漢語サ変動詞に限り考察している。その結果，漢語サ変動詞を構成する個々の漢字の間に（1）客体関係が存在する場合，客体部，すなわち，目的語に相当する客字となる条件は，客字をとる漢字の意味的性質（授受，変化，操作など）と，客字としての必要度と重要性，さらに，漢字一字で語の概念を表し得るか否か，といった点にあることが示された。また，漢語サ変動詞を構成する個々の漢字の間に（2）修飾関係が存在する場合，修飾字として働く漢字の意味範疇は客字を取る漢字と大きく異なっており，感情・思考・知覚・陳述といった意味的カテゴリーに至るまで，幅広い範囲に及んでおり，とくに動詞性の漢字が修飾字として働くものは数において修飾関係のサ変動詞の中に占める位置は大きいこと，の2点が明らかにされた。同研究は，修飾関係と客体関係で漢語サ変動詞を構成する漢字を，意味的カテゴリーによる分類をすることにより，漢字の造語の実態を明らかにした。

しかしながら，氏の分析はあくまでも特定の特徴を有する一部の漢字漢語に限られたもので，漢語サ変動詞の語構成分類の全貌は調査の対象とならなかった。この研究に比べて，後の野村（1999）は，漢語サ変動詞全般を対象として語構成分析の精緻化を促したものであると言えよう。野村（1999）では，漢語サ変動詞について，以下のように述べられている。

サ変動詞とよばれる語には種々のものがあるが，普通には名詞とサ行変格活用の動詞「する」が結合して一語の動詞となったものとして意識されていると思われる。しかし，名詞ならば，どのような語でも「する」と結合できるわけではない。（中略）サ変動詞の成分となる名詞は，動作的な意味を有するものにかぎられるというものである。

同研究において，国立国語研究所が刊行した「分類語彙表」（中洋（1996）による増補版）

に収録されているものに加え、「現代漢語データベース」における字音2単位語基(二字漢語)を主成分とするサ変動詞を対象に、語基の品詞性および構造を分析している。氏は漢語を構成する個々の文字タイプと、文字間の基本的な結合タイプをそれぞれ以下の5種類に下位分類したうえで、それらを組み合わせ、全体で22種類からなる内部構造パターンを提唱している。文字タイプの下位分類は以下のとおりである。

- (1) 事物類 (M) : …叙述の対象となる物や事を表す。
例: 鉄, 国, 水, 士, 道, 心, 品
- (2) 動態類 (V) : …事物の動作・作用を表す。
例: 見, 増, 置, 感, 立, 発
- (3) 様相類 (A) : …事物や精神の性質・状態を表す。
例: 新, 軽, 大, 高, 逆
- (4) 副用類 (M) : …動作や状態の程度・内容を限定・修飾する。
例: 特, 再, 絶, 予, 必
- (5) 接辞 (s) : …語基について形式的な意味を添える。
例: 不, 御, 的, 性, 化, 風

結合タイプの下位分類は、補足関係(+), 修飾関係(>), 並立関係(・), 対立関係(-), 反復関係(=)の5種類である。これらを組み合わせた漢語サ変動詞の22種は以下のよう
に整理される。

- (1) N+V……気絶, 骨折, 人選, 文通, 墓参, 洋行
- (2) V+N……握手, 開花, 帰宅, 就職, 脱帽, 募金
- (3) A+N……多言, 多作, 貧血, 無視, 無心, 無理
- (4) N>V……音読, 兄事, 山積, 水泳, 冬眠, 目測
- (5) V>V……愛用, 滑降, 誤診, 試食, 凍死, 立食
- (6) A>V……安眠, 快勝, 軽視, 激怒, 多発, 冷遇
- (7) M>V……一掃, 共感, 再演, 専売, 必着, 予防
- (8) V・V……引退, 救助, 思考, 睡眠, 跳躍, 模倣
- (9) V-V……開閉, 屈伸, 呼吸, 出没, 断続, 明滅

- (10) V=V……云々， 転々
- (11) N>N……金策， 原因， 手術， 他界， 病氣， 礼装
- (12) V>N……起因， 残業， 湿布， 乗務， 炊事， 慢心
- (13) A>N……紅葉， 新作， 粗食， 大病， 漫談， 凡打
- (14) N・N……影響， 葛藤， 形容， 伯仲， 矛盾， 網羅
- (15) N-N……左右， 始末， 上下， 先後， 前後
- (16) A=A……清々
- (17) sV……殺到， 所期， 所有， 否認， 不参， 不足
- (18) sA……不精
- (19) Ns……液化， 酸化， 電化， 美化， 風化， 緑化
- (20) Vs……欠如， 消化， 分化， 崩御， 黙殺， 冷却
- (21) As……悪化， 強化， 激化， 深化， 軟化， 忙殺
- (22) その他……運休， 軍縮， 操短， 中退， 定昇， 配転

上述のように，野村（1999）は，従前の漢語サ変動詞の語構成に見られなかった詳細の分類を明示的に示している。後に，野村氏の研究以降の空白を埋めることを目指し，小林（2004）は，二字漢語，三字漢語，四字漢語など，様々なレベルの漢語サ変動詞（漢語動名詞と称され）について考察を行っている。とくに，二字漢語サ変動詞については，以下の4種類に分類できるとしている。

- (1) VN-N タイプ 2 字漢語動名詞（動詞的要素と名詞的要素で構成される）
例：読書，投票，観戦，開封，…
- (2) VN-VN タイプ 2 字漢語動名詞（動詞的要素と動詞的要素で構成される）
例：使用，毆殺，摘出，採用，…
- (3) ADJ-VN タイプ 2 字漢語動名詞（付加詞的要素と動詞的要素で構成される）
例：銃殺，病死，完訳，密売，…
- (4) 構成要素が抽出できない 2 字漢語動名詞
例：挨拶，支配，勉強，料理，…

上記の分類をした後，「動名詞内部の名詞的要素と関係づけられた項を取るかどうか」（p.

94) という観点から、(1)「VN-N」タイプの漢語サ変動詞に対象を絞り、以下の3分類をしている。

(1-1) 項を取れないタイプ (動名詞内部の名詞的要素と関係づけられた項を取ることができない) : 飲酒, 挙式, 処刑など

(1-2) 項を取れるタイプ (動名詞内部の名詞的要素と関係づけられ項を取る使い方も、取らない使い方もできる) : 投票, 登山, 入院など

(1-3) 項を取らなければならないタイプ (動名詞内部の名詞的要素と関係づけられた項を取らなければならない) : 開封, 観戦, 除名など

また、①語全体の品詞を決め、②語の意味の中心をなす要素である「主要部」(p. 114) はどのような構成要素であるか、また、構成要素の意味的結合関係はどうなっているかによって、(2)「VN-VN」タイプの漢語サ変動詞を、以下の3種類に分類している。

(2-1) 両側主要部タイプ : 使用, 委託, 祈願, 救助, 競争, 開閉, 乗降, 増減, 売買など

(2-2) 右側主要部タイプ : 毆殺, 急行, 飼育, 刺殺, 注入, 摘出, 流出, 凍死, 倒壊など

(2-3) 左側主要部タイプ : 採用, 教育, 購読, 募集, 出撃, 争奪, 追撃など

さらに、上記の(3)「ADJ-VN」タイプの漢語サ変動詞の下位分類として、仁田(1980)を認め、以下の5種類あるとしている。

(3-1) 方法 : 郵送, 図示, 銃殺, 空輸, 口述など

(3-2) 原因 : 水死, 病死, 戦死など

(3-3) 期間 : 永住, 常設, 常備, 常用, 続行など

(3-4) 頻度 : 多発, 日参, 連勝, 再婚, 散発など

(3-5) 程度量 : 全開, 完訳, 大破, 一新, 半壊など

(3-6) 様態 : 密売, 快勝, 力走, 直立, 敢行など

このように、小林（2004）は、それまでの漢語サ変動詞の語構成分類研究に見られた語形、品詞および意味的結合関係など、多様な観点を網羅的に参照したものであると言える。

以上で概観してきたように、漢語サ変動詞を対象を絞った語構成分類に関する研究は量的には限られている。しかしながら、語構成要素の内部統語構造、語構成要素の意味的カテゴリーによる分類、語構成要素間の品詞的結合関係など、多様な観点からの考察が窺え、多くの知見も得られた。とくに、考察の観点において一定程度で共通していると思われる日向（1985）、野村（1999）、小林（2004）のそれぞれの分類を整理して比較してみると、おおよそ以下のような対応関係が存在することが確認される。ただし、下表に示している対応関係は大まかなもので、必ずしもこのように明示的に述べられているわけではないことに注意されたい。

表 1 先行研究における漢語サ変動詞の内部構成

日 向 (1985)	並立関係	修飾関係	客体関係	実質関係	
野 村 (1999)	V・V, V-V, V=V, N・N, N-N, A=A	A+N, N>V, V>V, A>V, M>V, N>N, V>N, A>N	V+N, N+V	sV, sA, Ns, Vs, As	その他
小 林 (2004)	VN-VN	ADJ-VN	VN-N	構成要素が抽出できないもの	

以上で、日向（1985）、野村（1999）、小林（2004）の3つの枠組みにおける漢語サ変動詞の語構成分類について概観して気が付くことは、3氏はそれぞれ類似した方向性を持ちながらも、細かい点では異なりが多いことである。たとえば、内部構成パタンの数は、日向（1985）では4種類、野村（1999）では（基本タイプに限ると）5種類、小林（2004）では主として3種類である。また、構成要素間の結合関係パターンに注目すると、日向（1985）が提唱した客体関係と実質関係は野村（1999）では採用されておらず、一方、野村（1999）は新たに補足関係、対立関係、反復関係を加えている。これに対し、小林（2004）はもっぱら統語的關係性に分類の焦点を当てており、結合関係パターンについては明確に論じられていない。

3氏の分類はそれぞれに理由のあるものであると考えられるが、教育的観点から漢語サ変動詞の内部構成のパターンを示そうとする場合、これらの先行モデルの統合と精選が必要

になるだろう。

以上で概観してきたように、漢語、とくに漢語サ変動詞の語構成研究は、語の認定、造語的特徴、語構成要素の特性、語構成分類の枠組みなど、様々な問題と深く関係を持っており、今後大いに発展させなければならないと考えられる。一方、課題も少なからず残されている。たとえば、従来の分類法のほとんどは、語（品詞）に依存すること、また、どこまで細かく分類することが、言語学的に、あるいは言語教育学的にふさわしいかということなども考えるべきである。なお、従来の語構成分類研究のほとんどが理論的記述、もしくは一部の例を挙げて構成パターンを説明したものであり、多様な日本語データベースをふまえた、一般的、あるいは汎用的な漢語サ変動詞に注目し、その語構成的特徴を究明するものはそれほど多くはない。こうした課題に対して、近年では、大規模な言語コーパスが公開され、また、精密な統計分析ツールも一般に使用可能となっている。これらを活用すれば、漢語サ変動詞の語構成研究についてもさらに精度の高い計量的アプローチを用いることが可能になってくるだろう。

2.1.3 漢語サ変動詞の自他性に関する先行研究

日本語動詞の自他をめぐって、従来様々な研究がなされてきた。しかしながら、日本語は英語のように、目的語を取るか取らないかではっきり自他認定を行うことができない。森田(1994)では、これは日本語の固有の複雑さに起因するものであると述べられている。

日本語動詞の多くは、実際には自他の間に「それほど明確な線が引けるものではない。他の対象に対しての働きかけが他動詞で、その主体自体の働きが自動詞だと一応は説明するが、形式上ヲ格の目的語を取るか取らぬかの差を両者の差として言い換えただけの話であって、右の違い（働きかけか、自体の働きか、筆者）は決定的なものではない。(中略) 表現意識に多少の差はあるものの、他動詞・自動詞が持つそれぞれの意味的特徴なるもの——他への働き掛けと、そのもの自体の行いや現象——は稀薄となり、両者は意味的に歩み寄る。元来、日本語は自ら積極的にそうするという能動的立場よりは、成行きとしておのずとそうなるという受動的立場で表すほうが自然な言語である。(p. 47)

こういった固有の複雑さに加え、一部の他動詞は実際の運用中で、前後の文脈により、

目的語が省略されたりして、自他の弁別にさらに支障を与える。このため、おびただしいと言えるほどの自他研究においては、最も中心となっているのは、自他認定や区別の問題であった。本研究は漢語サ変動詞の自他性に焦点をおくが、それに先立ち、日本語動詞の自他に関する基礎概念や自他認定をめぐった研究をおおまかに捉えておく必要があると考える。そこで、以下ではまず、日本語動詞の自他研究の系譜を概観し、その後、漢語サ変動詞に絞って、先行研究を紹介する。

2.1.3.1 動詞の自他について

自他は日本語の文法的概念の一つである。伝統的な自他研究は直接目的語ないし「ヲ」格目的語を取るかどうかという統語的な基準、あるいは、形態的な基準を取る傾向がある。それにより、直接目的語の現れ方や日本語の接辞による形態的な派生関係など、日本語の自他の特性はかなりの程度にまで解明されてきた。これまでの研究において、とりわけ注目すべきは須賀・早津（1995）である。氏らは、自他の概念、通時的な自他研究、自動詞と他動詞の区別、動詞の自他と格助詞、動詞の自他の対応、動詞の自他とヴォイス、動詞の自他とアスペクト、自動詞文とヲ格名詞、自他の分類と受身（受動）、再帰性、他動性、自他対応のあるものかないものなど、様々な観点からの日本語自他研究の系譜を紹介している。本研究において、主として須賀・早津（1995）を参考に、自他に関する研究を概観する。ただし、本研究の関心をふまえ、以下では、(1) 自他の定義、(2) 自他の認定、(3) 自他の分類、(4) 自他とヴォイス、という4つの観点から一部を抜粋して紹介する。

2.1.3.1.1 自他の定義

自他の問題を扱う際に、まず対面しなければならないのは、自他定義の問題である。一体、自他、あるいは自動詞と他動詞とは何であろうか。以下では、須賀・早津（1995）及び辞書などの参考書の記述を概観しておこう。

須賀・早津（1995）によれば、「自他」は、もともと「自分と他人」のことであり、文法用語として用いられることにより、「自動詞と他動詞」あるいは「自称と他称」を意味するものとして使われるようになった。「動詞の自他」といえば、「自動詞 (transitive verb) と他動詞 (intransitive verb)」のことになるが、「自動詞と他動詞」の分類は自明のことではない。それと関連する言語的現象で考えなければならない問題もある。ゆえに、それらを考察の対象として取り上げる場合に、一般的な理解における自動詞と他動詞だけでなく、自動詞

と他動詞に関わる動詞の性質まで見る必要があるとされている。

自動詞と他動詞について、辞書や参考書においてはそれぞれ別の項目として定義を設けている。以下ではまず『日本語教育辞典』（日本語教育学会）における自他定義を見てみよう。

【自動詞】

他動詞に対するもの。自動詞・他動詞の区別は、もともと英文法でよくいわれていたもので、直接目的語 (direct object) をとる動詞が他動詞、他が自動詞とされている。この区別を日本語に持ち込むと、「～を」をとるものが他動詞、他が自動詞ということになる。ただし「道を歩く」の「道を」などは、直接目的語とは考えられないので、「歩く」は自動詞とされている。

(中略) 日本語教育では、「戸が開いている」、「戸が開けてある」という文で、「いる」は自動詞（「開いて<開く」）に付く、「ある」は他動詞（「開けて<開ける」）に付く、という説明の便宜などのために、この区別を認めるべきだとしている。

【他動詞】

自動詞に対するもの。英文法では直接目的語 (direct object) をとるものを他動詞といていたのを、日本語に持ち込んで「～を」をとるものを他動詞と呼ぶことにしたものである。ただし「道を歩く」の「道を」などは、直接目的語とは考えられないので、「歩く」は自動詞とされている。(pp. 123-124)

また、国語辞典『大辞林』（第4版）において、自動詞と他動詞はそれぞれ以下のように記載されている。

【自動詞】

その表す動作・作用が他に及ばず、主語自身の動きを表す動詞。「戸を開ける」の「開ける」を他動詞と呼ぶのに対して、「戸が開く」の「開く」の類。西欧語では目的語をとらない・とるなど、自他の別がはっきりと表されるが、日本語では必ずしも明確でない。⇔他動詞

【他動詞】

その表す動作・作用が他に及ぶ意味をもつ動詞。その対象となる事物を、多く助詞「を」で表す。「戸を開ける」「本を読む」の「開ける」「読む」の類。⇔自動詞

〔英語などでは目的語をとり、主語・目的語を転換して受身表現にすることができるなど、他動詞とはっきり認定することができる。しかし、日本語では、目的語の表示が必ずしも明らかでなく、また、目的語をとらない「泣く」が「子供に泣かれる」のように受身に使われたりして、自動詞と他動詞の区別を明確にしにくい面がある〕

以上をふまえれば、日本語の自他について、別に立項されているようであるが、実際には連動的で相互影響するものであること、また個別な概念ではなく、多くの言語現象と関わる複雑性をもつことがわかる。

2.1.3.1.2 自他の認定

前節の自他定義でもあったように、日本語の動詞は英語のようにはっきり自他認定できない。この点について、森田（1994）においても議論がある。

現在、動詞に関する研究はかなり進み、日本語動詞の自他についての実態もほぼつかめてきたのであるが、研究が進めれば進むほど、自他弁別の原理や基準が、さらには、それによってもたらされる日本文法研究へのメリット等があいまいになっていくというジレンマに陥っている。だいたい動詞の自他といっても、日本語の場合、それほど明確な線が引けるものではない。他の対象に対しての働き掛けが他動詞で、その主体自体の働きが自動詞だと一応は説明するが、形式上ヲ格の目的語を取るか取らぬかの差を両者の差として言い換えただけの話であって、右の違いは決定的なものではない。(中略) 今日、その動詞が自動詞か他動詞かを弁別する一つの目安として、ヲ格の目的語を取り得るか否かが判定基準となっている。ヲ格の文節が目的語か否かの認定に問題は残るが、客観的な判定基準として現在のところより妥当なものが見当たらない以上、この方法に従うしかない。(中略) 日本語動詞の自他は、動詞の意義性によるものではない。格助詞「を」を取るか否かといった形式面の特徴によっているのである。(中略) 格助詞によって結び付けられる名詞と動詞の関係を意味的に眺めた場合、日本語が区別する格助詞の使い分けは、必ずしもそれによって結び付けられる二つの

語の意味関係を正確に反映しているとはかぎらない。にもかかわらず、目的格としての「を」を取るから他動詞だ、「に」を取るから自動詞だと区別すること自体、至って便宜的な措置だということがわかるであろう。(pp. 147-150)

日本語の自他認定について古くから多くの議論が行われてきたが、動詞の下位カテゴリーとしての自動詞・他動詞は、日本語において文法上の価値ある分類として、必ずしも広く認められているわけではない。山田学説をはじめ、自他の認定に関して否定的な立場を取ったものもあり、時枝学説のように自他の分別に容認あるいは肯定とも否定とも判断できかねる折衷的な認識を持ったものもある。また、松下、金田一、三上らの学説のように、自他の設定に肯定的な態度を持ったものもある。自他弁別の主な根拠は、(1) 意味形態論に対応する自他動詞の存在、(2) 受身との対応、(3) 「を」格の有無、の3点であることは、現在でも主なものとして認められている(野村, 1982, pp. 137-140)。近年の自他認定に関する研究の中では、とくに寺村(1982)と森田(1994)が詳細であるため、以下それぞれについて詳しく紹介する。

寺村(1982)は、次節でも述べるように、ヴォイスとの関わりをもって動詞の自他を議論している。氏は、「羊ガ殺サレタ」に対して「誰カガ羊ヲ殺シタ」のように、「Y ガ X に～サレル」を転じて「X ガ Y ヲ～スル」という形にできるような受身を「直接受身」、そうでない「(私ガ) 父ニ死ナレタ」のようなのを「間接受身(迷惑受身)」と区別し、それを「自動詞・他動詞の弁別の決め手」にし、『直接受身』の構文を作り得る動詞を『他動詞』であるとしている(p. 89)。

氏は、動詞を、それが表す動作・作用の「対象」に対する関係の仕方、および付く助詞の違いによって、(1) 「X ガ Y ヲ～スル」となる『働きかけ』の動詞(殺す、見る、愛するなど)、(2) 「X ガ Y ニ～スル」となる『対面』の動詞(会う、相談するなど)、(3) 「X ガ Y ト～スル」となる「相互動作」(戦う、結婚するなど)のように3分類できるとし、このうち、(1)の「働きかけ」で直接受身になりうる動詞はすべて他動詞(「部屋ヲ出ル」「階段ヲ降リル」のように、「～ヲ～スル」という形はとっているが、直接受身にならないため他動詞ではない)であると論じている。また、「ニ」をとる動詞(場所格ではなく、空間に存在する個体の「相手」であり、「へ」で置き換えることができないものに限った場合)の中でも、「かみつく」「しがみつく」のように「～ツク」という補助動詞のついたもの、および「恋する」「惚れる」「甘える」などを述語とするものも、直接受身の表現を作る事

ができるため、他動詞と認めるべきだとしている。「働きかけ」の動詞と比べると、その違いは単に動きの対象を「ヲ」ではなく、「ニ」で表すところだけだと論じている (pp. 87-121)。寺村氏のこういった自他認定方法は「今のところ日本語の文法を説明するのに最も有力なもの」(p. 304) であると評価されている。

森田 (1994) は形態、文型、意味、および文法の 4 つの観点から自他の問題を論じたものである。

形態上、氏は「を」格を取るから他動詞という形式上の特徴は自他弁別の決め手とはならないことを指摘している。氏によれば、「を」格を要求する動詞が他動詞と認められるには、以下のいずれかの意味関係をとる必要があるという。

- (1) 原因・指向 (「父の死を悲しむ」, 「合格を喜ぶ」など)
- (2) 内容 (「将来を話しあう」, 「結婚を約束する」など)
- (3) 理解行為の対象 (「本を読む」, 「相手の目を見る」など)
- (4) 動作・作用の対象 (「虫を殺す」, 「木を植える」など)
- (5) 行為の相手 (「友人を誘う」, 「父をくどく」など)
- (6) 付加・加工 (「砂を交ぜる」, 「水を加える」など)
- (7) 行為を向ける箇所 (「傷口を覆う」, 「顔を隠す」など)
- (8) 容れ物 (「家を空ける」, 「袋を満たす」など)
- (9) 行為実現の道具 (「弓を射る」, 「鋸をひく」など)
- (10) 行為実現の資材 (「矢を射る」, 「釘を打つ」など)
- (11) 消費の対象 (「油を食うエンジン」, 「年を取る」など)
- (12) 目標 (「一位を争う」, 「優勝をねらう」など)
- (13) 結果 (「仏像を彫る」, 「火を燃す」など)

一方、ヲ格を取るものであっても、以下のような意味関係を表す場合には他動詞として認められないとされている。

- (1) 基準の対象を示す (平均点を下回る／人力を超越する)
 - (2) 他動性を帯びる自動詞の対象や目標を示す
- ア 心情を表す動詞を伴って (身もだえして身の不運を泣き…)

- イ 習慣的な行為を表す動詞を伴って（雑木林や平らな耕地の多い武蔵野へ来る冬，浅々とした感じのよい都会の霜，そういうものを見慣れている君に，この山の上の霜をお目にかきたい）
- ウ 意志的な行為を表す動詞を伴って（規約改正を急ぐ）
- (3) 自動性の動作・作用の行われる時間や距離の幅・長さを示す
 - ア 時間の経過をある状態で過ごすことを表す（三田から春日町までの，あの長丁場を，彼はどんないらいらした心持ちで乗ったことだろう。）
 - イ 動作の経過する時間を表す（その砂丘の上に，ひよろひよろした赤松が簇がって生えている。余り年を経た松ではない。）
 - ウ 動作進行の時期を表す（今をときめくスター。）
 - エ 行為の継続する期間・距離を表す（海外で一年間を送る）
- (4) 動作・作用の実現する場面を示す
 - ア 心理活動の反復の場面を表す（思いが脳中を去來する）
 - イ 動作の行われる環境を表す（雨の繁吹く中を駆けつける）
 - ウ 移動動作の経過する場所を表す（道を行く人）
- (5) 動作の経由点を表す（門を出る）
- (6) 動作の起点を表す（自分は慌てて落ちて居る帽子を冠り，衣服の塵を払って汽車を下りた）
- (7) 動作の方向を表す（僕はちょっとびっくりし，僕らの後ろをふり返った）
- (8) 移動動作・作用の起点を表す（角を曲がる）
- (9) 移動動作・作用の位置を表す（集団のトップを走る）

また，文型上，他動詞のヲ格に立つ目的語を主語にすれば，それを受ける動詞は自動詞になると言い，具体的な文型表現として，(1) A ガ B ヲ他動詞／B ガ自動詞（自動車が土埃を立てる／土埃が立つ），(2) A ガ B ヲ他動詞／A (ニ) ハ B ガ自動詞（私は星を見る／私は星が見える），(3) A ガ B ヲ他動詞／B ガ A ニ自動詞（警官が泥棒をつかまえる／泥棒が警官につかまる），(4) A ガ B ヲ他動詞／A ガ B ニ自動詞（私は大学を受ける／私は大学に受かる），(5) A ガ B ヲ他動詞／A ガ自動詞（月が庭を照らす／月が照る），(6) 非対応グループ（雪が積もる／荷物が積む），の6種類が考えられるとしている。

さらに，意味的には，自他両文型が示す文義の対応は，非対応グループを除き，いずれ

も他動行為の結果、自動状態が生ずるという因果関係を示すものであるが、行為や作用の実現とそれがもたらす結果との間には、自他動詞の場合、必ずしも同時性・連動性を持つとは限らないと指摘しており、動詞が表す現象にはおおよそ、(1) その発現に向けて行為・作用が開始する段階（課長、お先に帰ります）、(2) それが継続する段階（一週間田舎に帰る）、(3) 終了する段階（家に帰ってから食事をする）、(4) その結果、主体や対象などの上に状態変化が成立する段階、という四つの段階が考えられるとしている。

最後に、文法的観点から、「A が C を自動詞せる = A が C を他動詞」、あるいは「A が C を他動詞せる = A が C を他動詞」であるように、使役の助動詞「せる／させる」を伴うことによって、自動詞を他動化させたりすることもでき、同様に、受け身の助動詞「れる／られる」を伴うことによって、他動詞の自動化相当の働きをさせることも可能であると論じている。

このように、寺村（1982）と森田（1994）などの研究により、日本語の自他認定は統語論のおよび語彙的観点から議論され、非常に有益な手掛かりが与えられていると言える。

2.1.3.1.3 自他の分類

前節まででは、自他の定義や自他の認定について、先行研究を概観した。これらの研究と相まって、自他の分類に関しても多くの議論が行われてきた。以下では、自他分類に関するものの中では、とくに見逃せない研究として、寺村（1982）、大槻（1897）、影山（1996）を紹介する。

寺村（1982）は、春庭氏、三上氏らの研究を受け継ぎ、形態の存立という観点から自他の分類を行っている。氏は同じく自動詞、他動詞といっても、形態的対立（コワレルーコワス、アクーアケルのような）の中で存立しているもの（「相対自動詞」と「相対他動詞」）と、形態的に対立する相手をもたない自動詞（「絶対自動詞」：死ヌ、アルクなど）、他動詞（「絶対他動詞」：コロス、ツクルなど）があること、さらに、一つの形が、自動詞としても他動詞としても使えるもの（「両用動詞」：ヒラク、ドジルなど）があるとしている。

大槻（1897）は、自他を使役と受身とあわせて考えると混乱しやすいと指摘しており、「動詞の動作の、独り自らす性質なるもの」を「自動」、「動詞の動作の、他の事物を処分する性質なるもの」、かつ「処分する事物」に「を」を必要とするものを「他動」としている。また、自動詞は「～に」「～と」「～へ」「～より」「～から」「～まで」などで示される「動作の係るべき標準」を必要とする「有対自動」とそれを必要としない「無対自動」

とに分類し、他動詞を「目的」のほかに「標準」を必要とする「複対他動」と、そうでない「単対他動」とに分類している。

氏らのように、形態や係る助詞という形態上の特徴による分類が自他分類の主流であったと言える。一方、統語構造・項構造・語彙概念構造という意味と文構造的側面に注目して自他を捉えようとする流派も存在する。影山氏はその代表であると言える。

影山（1996）はまず、動詞は単純に自動詞と他動詞のみに区別されるべきでなく、いわゆる自動詞が単一のものではなく、非対格性の仮説（「非対格動詞の主語が統語構造において目的語相当として規定される」（p. 20））に基づき、さらに非能格自動詞と非対格自動詞（または能格動詞）に分類できることを主張している。非能格自動詞は意図を持たず受動的に事象に係る対象を主語に取る自動詞、非対格自動詞は意図的に動作を行う動作主を主語に取る自動詞のことであるという。また、他動詞についても、動詞の意味構造の在り方に基づいて、さらに状態変化他動詞と働きかけ他動詞に区別されるとしている。氏は語彙概念構造の概念をふまえ、日本語の動詞を状態変化他動詞（たとえば、「曲げる」、「壊す」など）、働きかけ他動詞（たとえば、「押す」、「蹴る」など）、非能格自動詞（たとえば、「歩く」、「笑う」など）、非対格自動詞（たとえば、「できる」、「つく」など）の4種類に分類できるとしている。（pp. 55-70）なお、氏は三上（1972）の分類との関係性について、「我々の用語では、能動詞は他動詞と非能格自動詞に、所動詞は非対格自動詞に各々対応する。」（p. 59）と述べている。氏らの分類をまとめると、以下のようになる。

表2 3氏による自他分類

寺村（1982）		大槻（1897）		影山（1996）	
自動詞	形態的対立	自動詞	係る助詞	自動詞	意図
絶対自動詞	×	有対自動詞	○	非能格自動詞	×
相対自動詞	△	無対自動詞	×	非対格自動詞	○
他動詞		他動詞	対象基準	他動詞	意味構造
相対他動詞	△	複対他動詞	○	状態変化他動詞	×
絶対他動詞	×	単対他動詞	×	働きかけ他動詞	○
両用動詞	○				

ここでは一部のみ抜粋して紹介しているが、観点はそれぞれ異なるものであると言える。

このように、日本語動詞の自他の分類について、様々な観点から議論が行われたことが確認される。

2.1.3.1.4 自他とヴォイス（態）

動詞の自他分類はヴォイスのカテゴリーに属するものか否かについて多くの論述がなされているため、ここでは、独立したセクションを設けることにする。

従来、自他とヴォイスの関係に関する研究が少なからず存在する。議論の焦点は何かと
 言うと、自他对立をヴォイスとのかかわりの中で論じるべきか、ヴォイスと独立して扱う
 べきかという問題である。この問題への扱い方によって、これまでの研究を二分できる。
 大槻（1897）、野田（1991）、早津（2000）らなど、ヴォイスと動詞の自他とは関係性が薄
 くて、両者が別扱いすべき問題だとした論点もあるが、青木（1977）、寺村（1982）、村木
 （1989）、佐藤（2005）、角田（2009）など、多くの学者は、自他はヴォイスと深く関わる
 概念であり、ヴォイスは自他を論じるうえで欠かせないものであると主張している。寺村
 （1982）は自動詞と他動詞の対立を（同一の語根からわかれた）語彙的の「態」としてお
 り（p. 211）、村木（1989）は自動詞と他動詞の対立をヴォイスの「派生関係」の下位分類
 としている（p. 171）。佐藤（2005）はヴォイスの典型的な意味特徴は「述語の形態的対立」
 ということから、動詞の自他の対応はヴォイスの原型と言うべきだと論じている。氏らの
 研究では、自動詞と他動詞の対立はヴォイスの一部であり、動詞の語彙的な派生であると
 考えられている。

寺村（1982）は、ヴォイス（態）を「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と
 規定し、自他の形態上の対立は「語彙的態」でありながら、「他動詞に対立する自動詞のう
 ち、ある種のものを受動態に接し、他方で、他動詞のある種のものを使役態に接するので
 ある」（p. 211）とし、動詞の自他の区別に「直接受身」を作り得るか否かが決め手だとし
 ている。以下の「働きかけ」の動詞、および「ニ」をとる「対面」の動詞の一部が直接受
 身文になりうるため、他動詞として考えればよいという。

表3 「働きかけ」類の他動詞（寺村，1982）

「働きかけ」の種類	「客体」の種 類	動作主のとり助詞			動詞
		ニ	カ	ニ ヨ ッ	

			ラ	テ	
(1) 物理的・心理的働きかけ	受け手	○	×	△	殺ス, 育テル…
(2) 感情・感覚の働き	目当て	○	○	×	愛スル, 嫌ウ…
(3) 創造	作品	×	×	○	建テル, 作ル…

上記において、(1) のように、動作主 X が、客体 Y に対して、物理的・心理的に働きかけ、それによって Y が直接何らかの影響を受ける、そういう関係の仕方を表すものである。Y の役割は客体の下位類として「受け手」と呼ばれている。この場合、受動構文では、「ニ」をとる。(2) のように、客体に働きかけてそれに何らかの影響を与えたり、変化を生じさせたりするのでなく、客体を目指しての感情の動きや感覚の働きを表すものであるという。こう言った場合の Y は、「受け手」と区別して「目当て」とされている。この種の動詞を述語とする場合、原則として直接受動になるが、受動構文では、「ニ」も「カラ」もとる点では(1)と異なる。(3) のように、その動作の結果、これまで存在しなかったものが出現する動詞であり、その生み出される客体は「作品」と呼ばれている。こういった動詞を述語とする文は受動文を作ることができるが、動作主 X は、「ニ」も「カラ」もとれなく、「ニヨッテ」をとる。(pp. 212-239)

また、「対面」の動詞の分類に関しては、下表にまとめているように、各分類の動詞が述語となる文が受身文になる場合にとるこの種の動詞も、ほとんど直接受身文になるため、他動詞として認められる。ただし、動作主の取る助詞が「～ニ」以外に、動詞によって、「～カラ」「～ニヨッテ」をとる場合もある。

表4 「対面」類の他動詞 (寺村, 1982)

「対面」の種類	「客 体」の 種類	動作主の取る助詞			動詞
		ニ	カラ	ニヨッテ	
(1) 物理的影響	受け手	○	×	△	かみつく, とびかかる…
(2) 態度	受け手	○	×	△	賛成する, そむく…
(3) 感情	相手	○	×	△	恋する, 惚れる…
(4) 相互	相手	○	×	×	会う, 当たる…

(5) 事件・事態・関係	相手	○	×	△	勝つ, 面する…
--------------	----	---	---	---	----------

また, 氏によれば, 他動詞のほうから自動詞のほうを見ると, 背後その延長線上に自発, 可能, 受身の形が見え, 同様に, 自動詞の側に立って他動詞を見ると, その向こうに使役の形が見える。他動詞に対立する自動詞がないとき, 表現的には受身がその役をすることがあり, 逆に自動詞に対する他動詞がないとき, 使役がその役を代行することがあると述べている。(p. 318) この文章を図にすると, 各態と自他の間に以下のような位置関係が見えてくると考えられる。

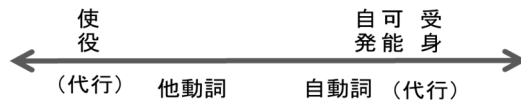


図6 自他とヴォイス(態)の関係

寺村(1982)のほか, 仁田(2010)も自他とヴォイス(態)について詳細に論じたものである。氏の研究では, 「他者への働きかけ」といった意味的特徴を, 当該動詞が直接受身になるかどうかにかかわるものとされ, 「殴る」(太郎が次郎ニ殴ラレテイル)のような他者への働きかけを有している類を「第1種他動詞」, 「ガ・ニ」を取る「かみつく」(私ハ犬ニカミツカレタ)の類は「第2類他動詞」と呼ばれている。ただし, 「浴びる」「かぶる」などの再帰動詞(動作主の働きかけが, 他の存在ではなく, 常に動作主自身に及ぶことによって, 動作が終結するもの)の類(*毎朝シャワーハ彼ニヨッテ浴ビラレル)は, フ格をとりながら, まともな受動を作ることができないのは, それには典型的な他動詞が有する<他者への働きかけ>といった意味的特徴を持たないためであるとされている。よって, 再帰動詞は他動詞と自動詞の間に位置し, 典型的な他動詞からはずれ, 自動詞に近づいているものであるとされている(pp. 119-125)

自他をヴォイスとのかかわりのなかで論じたもののもう1種類は, 使役に関する研究である。とくに, 「自動詞+せる」の使役形を他動詞と比較したものが中心となっていると言える。青木(1977)は, 動詞の自他との関わりという観点から, 使役の基本的な性格について論じている。氏によれば, 「自動詞+せる」は「他動詞」と意味的にきわめて近いものであるが, 「表現性」が異なり, 使役は客体のもつ意志・主体性あるいは動作実現能力によ

ってその動きが実現するようになるのに対して、他動詞は客体の意志・主体性を「没却」したものであると述べている。氏の研究は、「自動詞の使役表現と他動詞表現の大枠での共通性と、形態の違いに反映している表現内容の差異が、かなり明らかになってきた」(須賀・早津, 1995, p. 220) と評価を受けている。

もちろん、ここで触れられていないものも多くある。たとえば、形態上の基準から自他対応の問題を扱ったものとして宮島 (1972), 西尾 (1982), 早津 (1989) などがあり、語彙的ヴォイスという観点から自他の交替を考察した影山 (1996), 影山 (2000) などである。本研究ではすべての自他研究を網羅的に紹介することを行わないままにとどめておく。

2.1.3.2 漢語サ変動詞の自他について

前節では、日本語動詞の自他の定義・認定・分類に注目して先行研究を概観してきた。本節では、本研究の対象となる漢語サ変動詞に注目して、その自他に関する先行研究を紹介する。漢語サ変動詞の自他をめぐって、従来様々な研究がなされてきた。しかしながら、その多くは自他の間に明確な線が引けるものではないため、他の対象に対しての働きかけで「ヲ」格がつくのが他動詞で、その主体自体の働きを表し、「ガ」格がつくのが自動詞だと説明されるのが一般的である (森田, 1994)。とくに、漢語サ変動詞は常に「漢語+する」の形で出現するため、和語動詞と比べて自他判断がより困難であるとしばしば指摘されている (小林, 2004 ; 張, 2010 など)。また、従来の日本語文法においては、行為・作用の対象や目的を表す語が「ヲ」格に立つ場合は他動詞、それ以外の場合は自動詞と見なしてきたが、漢語サ変動詞自体は自他同形であるため、その自他判定については未だに明確な結論が見出されていない状況である (影山, 1996, p. 202)。この点については、漢語が理解語彙であって、個人の理解の仕方に揺れが生じやすいため (江口, 1989) であるという考え方もあったが、いずれにせよ、漢語サ変動詞の自他に関しては、検討の余地がなお残されていると考えられる。

これまで、漢語サ変動詞の自他性をめぐって様々な観点から研究が行われてきた。自他の認定や分類を記述したもの (影山, 1996 ; 小林, 2004 ; 庵ら, 2001 ; 楊, 2009 など)、語彙形態の観点から自他を判定したもの (森田, 1994 ; 張, 2010a ; 張, 2010b ; 張, 2010 など)、歴史的観点から自他認定に存する問題を検討したもの (永澤, 2007 など)、統語的・構文的観点から自他を論じたもの (影山, 1993 ; 山田ら, 2009 ; 山田, 2012 ; 木山ら, 2011 ; 森, 2012 など)、および学習者の自他に関する意識や誤用を調査したもの (張, 2010 ; 庵,

2010 など) などがある。以下では、それぞれについて、該当する先行研究を概説する。

まず、漢語サ変動詞の自他研究の基底として、自他認定・自他分類に関するものを見てみよう。影山(1996)は漢語の自他性を研究する上で指針を与えたものだと考えられる。長く立論できなかった状態にあった漢語サ変動詞の自他分類は、氏の研究によってはじめて根拠が明らかになった。影山(1996)によれば、漢語サ変動詞は(1)自動詞専用とされているもの、(2)他動詞専用とされているもの、(3)自他両用とされているもの、の3種類に分類されるという。

これらの動詞(漢語サ変動詞を指す、筆者)が自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、恣意的に決まっているのではなく、意味的な要素によって定められる。その一つは、(中略)、実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているかという基準である。たとえば、水が蒸発するという事態は自然に起こるのが典型的であるから、「蒸発する」は自動詞として機能し、他方、「主張を正当化する」という場合は、その行為を行う動作主が必要であるから、「正当化する」はもっぱら他動詞として使われる。(p. 202)

また、自他両用の漢語サ変動詞については、他動詞用法を基にして、そこから反使役化(使役主を変化対象と同定することで自動詞化を行う)によって自動詞用法が派生されると述べられている。

小林(2004)が影山(1996)の理論を受け継いで発展させた。氏は、「自他両用の漢語動名詞が均一に扱」(p. 186)われているが、実際には「実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているかという基準」を自他両用の漢語動名詞内部の分類にも使うことができると主張し、自他両用の漢語動名詞について、自動詞用法を基本とするもの(自動詞用法が典型と認識され、他動詞用法は自動詞用法から派生されるもの)と他動詞用法を基本とするもの(他動詞用法が典型と認識され、自動詞用法は他動詞用法から派生されるもの)に分類できるとして、漢語サ変動詞を(1)自動詞用法だけをもつ漢語動名詞、(2)自動詞用法を基本とする自他両用の漢語動名詞、(3)他動詞用法を基本とする自他両用の漢語動名詞、(4)他動詞用法だけをもつ漢語動名詞に分類している。なお、この4分類は、連続的なスケールをなすものであるとしている。

庵・高梨・中西・山田(2001)では、漢語サ変動詞を自他対応関係によって、(1)「する

一させる」型（自動詞型）：「開通」、「回転」、「乾燥」のように、自動詞用法が「する」で、他動詞用法の場合には使役形の「させる」を使うことになるもの、(2)「される—する」型（他動詞型）：「延期」、「開始」、「開発」のように、他動詞用法が「する」で、自動詞用法の場合には受身形「される」を使うことになるもの、(3)「する—する」（自他同形型）：「解決」、「開店」、「拡大」のように、自動詞用法の場合も他動詞用法の場合も「する」になるもの、の3種類に分けている（pp. 546-550）。

このように、先行研究では漢語サ変動詞の自他分類に関して、異なる基準をもっているように見えるが、実際には同じ分類の仕方となる。これらをふまえると、漢語サ変動詞は自他の観点から、自動詞専用のもの、他動詞専用のもの、自他両用（中では、自動詞用法を基本とするものと他動詞用法を基本とするものがある）のものに分けられるという3分類法が大体定着していると考えられる。

次に、漢語サ変動詞の自他認定をめぐって、国語辞典の記述を比較・調査したのも見られる。楊（2009）は国語辞書によって、漢語サ変動詞の自他判定にばらつきがあることを指摘している。辞書間において、(1) 自他分類が一致している動詞はほとんど「Yが～する（自動詞非対格構文）⇒XがY～する（他動詞対格構文）」のような対応関係を持つものであり、(2) 自他分類がゆれている動詞は「Xが～する（自動詞非能格構文）⇒XがYを～する（他動詞対格構文）」のような対応関係をなす動詞である傾向が見られること、さらに(2)の動詞は「典型的な非能格構文 VS 対格構文タイプ」、「動作主体＝変化主体タイプ」、「再帰目的語をとるタイプ」、及び「同族目的語をとるタイプ」の4タイプに分類されることを明らかにしている。

また森田（1994）、張（2010a）（2010b）、張（2010）など、漢語サ変動詞の自他性を漢語部の語構成との関わりから議論したものもある。

森田（1994）は、漢語をその位置する文脈や文型、あるいは表す語彙的意味のあり方から自動詞・他動詞と弁別することは、必ずしも平易で明解な事柄ではないと指摘している。それは、漢語は歴史が浅く、造語時は意味・文法面で白紙の状態にあり、使用する側に不確かで戸惑いが短時間のうちに用法面で生ずるゆれを大きくしていること、漢語自体が形式と語彙的意味のみを持ち、日本語としての文法性を持っていないこと、およびその語彙的意味が必ずしも品詞性に反映しないことなどが考えられるという。氏によれば、二字漢字を語構造の観点から、「主述の関係」（日没、年少）、「修飾の関係」（校歌、美人）、「並列の関係」（父母、強弱）、「補足の関係」（読書、登山）、「認定の関係」（知的、不便）の5種

類に分類でき、修飾の関係のうち副詞的成分と動詞的成分の熟合したもの（再会、徐行など）と、並列の関係のうち動詞的成分同士が並んだもの（飲食、往復など）、また補足の関係のものは「する」を伴ってサ変動詞化しうる。このうち、補足の関係の漢語については、ヲ格（読書、貯金など）、ニ格（乗車、登山など）、およびガ格（立春、落雷など）の3種類の格関係のものが含まれているが、ヲ格関係にある語がすでに他動詞的成分とその目的語とを含めていることから、語全体の自他性に大きな影響を与えているが、修飾の関係と並列の関係の漢語については、ヲ格をとるかどうかはまずその語義によって決まってくるが、ゆれの生ずる可能性も大きいことを論じている。（pp. 255-268）

張（2010a）と張（2010b）はともに「VN型」漢語動詞に限った調査である。前者は、「VNする」漢語動詞を「V」の自他性によって分類したうえで、それぞれの分類における「VNする」動詞の自他性、および「VNする」が他動詞性を持つ要因について考察した結果、「VN型」漢語動詞の自他はと「V」項自体の自他との間で複雑な様相を示すことを確認できた。後者は、漢語部「VN」における「N」の意味の限定化について考察し、「N」の意味が一つに限定される場合に「VN」は自動詞として使われ、そうでない場合には他動詞として使われることを明らかにした。

なお、張（2010）は、「A-V型」漢語動詞の自他と語構成との関係を検証したことにより、動詞性要素「V」の自他及び形容詞性要素「A」と動詞性要素「V」との意味関係によって漢語動詞の自他を予測することが可能であることを示している。

影山（1996）など自他分類の記述的研究を除き、先行研究を以下のように整理する。

表5 漢語サ変動詞の自他に関する研究

	対象	内容	結論
森田(1994)	「する」を伴ってサ変動詞化しうる二字漢字熟語	語構成パターン、格関係、及び語の自他	語構成パターンのほか、格関係も語の自他性に影響を及ぼしている
張(2010a)	「VNする」漢語	漢語の自他と「V」の自他	「V」の自他性と漢語の自他性と複雑の様相を示している
張(2010b)	「VNする」漢語	漢語の自他と「N」の	「N」の意味的限定化は自

		意味の限定化	他性に影響を与えている
張 (2010)	「A-V 型」漢語動詞	漢語の自他と語構成 要素間の意味関係	語構成要素間の意味関係 によって語の自他予測が可能

自他分類, 自他認定, 語構成との関わりに関する研究以外に, 意味的観点から漢語の自他性を考察するものも存在する。小林 (2004) は, 北條 (1973) から自他両用の二字漢語動名詞を採取して, 国立国語研究所 (1964) に基づいて, 意味分布の調査を行っている。結果として, 自他両用漢語動名詞のうち, 「抽象的關係」に属するものが最も多く, 「人間活動 - 精神及び行為」に属するものが少なかったことを確認できた。その後, 同データをもとに自他対応の和語動詞の意味分布を調べた西尾 (1988) と比較することにより, 自他両用の漢語動名詞は, 自他対応の和語動詞と意味的分布において平行していることを明らかにした。

さらに, 歴史的観点から漢語の自他性を扱っているものもある。永澤 (2007) は太陽コーパスを用いて, 現代日常的に使われている漢語動詞のうち二字漢語を語幹とする 130 語を対象として通時的調査を行った。その結果, 多くの自他両用動詞が現代に至って自動詞専用化, あるいは他動詞専用動詞化した傾向が見られること, また, 自動詞専用動詞への変化が他動詞専用動詞への変化より圧倒的に優勢であることが示された。

なお, 統語的・構文的観点からの研究として, 影山 (1993), 山田ら (2009), 山田 (2012), 小林 (2004), 木山・玉岡 (2011), 森 (2012) などが見られる。

影山 (1993) では, 項構造の違いは統語構造に反映されるとし, 「ヲ」格は他動詞的な動名詞と非能格動名詞に付くが, 非対格動名詞には付かないこと, および動名詞のヲ格標示の可能性は, 動名詞自体の項構造によって左右され, 他動詞的な動名詞と同じく, 外項を持つ非能格動名詞はヲ格標示を許すが, 非対格動名詞はヲ格標示を許さないと述べている。
(pp. 52-53)

山田ら (2009) と山田 (2012) は, 調査対象を自他両用漢語動詞にした点において共通する。山田ら (2009) は, 他動性を有しながら, あえて「一させる」の形で他動詞文を形成する「サセル動詞」を対象にし, サセルの形で使われる要因, 及びサセル形の働きについて考察を行っている。その結果, 「一させる」は, 自動詞より (自動詞用法を基本とする) の自他同形の漢語動詞が (1) 他動詞として用いられる場合, (2) 無生物主語の他動詞文の場合, (3) 修飾関係をはっきり示す場合, (4) 動作に意志性を持たせる場合, (5) ラ格が

はっきり示されていない場合、の5つの場合で用いられることを明らかにした。山田(2012)は、自他両用の漢語動詞の「する」と「させる」の使い分けについて調査したことを通して、自他両用の漢語動詞が用いられる再帰構文(動作主の働きかけが、ほかの存在ではなく、常に動作主自身に及ぶことによって、動作を終結する構文)の他動性が低いことを検証した。また、母語話者に再帰構文と非再帰構文を提示して自然さを判断してもらうことで、再帰構文の他動性が低いことを数字的にも立証できたという。

小林(2004)は「VN-N」タイプの漢語動名詞を、「動名詞内部の名詞的要素と関係づけられた項を取るかどうか」(p.94)という観点から、(1)項を取れないタイプ(飲酒:「*昨夜、太郎はビールを飲酒しなかった。」「昨夜、太郎は飲酒しなかった。」、挙式:「*太郎と花子は、丘の上の教会で自分たちの結婚式を挙式した。」「太郎と花子は、丘の上の教会で挙式した。」、(2)項を取れるタイプ(投票:「どうか私にみなさんの清き一票を投票してください。」「どうか私に投票してください。」、登山:「富士山に登山する。」「私の趣味は、登山することです。」、(3)項を取らなければならないタイプ(開封:「太郎が花子の手紙を開封した。」「*太郎が開封した。」、観戦:「昨日、日本と韓国の試合を観戦した。」「*昨日、観戦した。」、の3種類に分類している。そのあと、名詞的要素は統語的に現れる項によって特定されるか否かについて分析し、VN-Nタイプの漢語動名詞は(1)名詞的要素が項名詞と<所属関係(全体・部分)>に基づいて特定されるもの(手紙を開封した、母親を看病する)、(2)<包摂関係(具体・抽象)>(美術館が開館した、大学に入学する)に基づいて特定されるもの、(3)二種類の関係に基づく特定がともに可能なもの(タバコを増税する、タバコ税を増税する)、という3種類に分類されることを示している。最後に、この2つの観点を統合することにより、VN-Nタイプの漢語動名詞を、(1)項を取れないタイプ(飲酒)、(2)A-Dタイプ(投票)、(3)B-Cタイプ(除名)、(4)B-Dタイプ(観戦)、(5)B-Eタイプ(増税)の5つに分類できるとしている(pp.96-113)。

木山・玉岡(2011)は「一化する」形の自他両用漢語サ変動詞について、新聞コーパスの用例に基づき調査を行った。そのうえで、多変量解析を通じて自動詞用法と他動詞用法、使役形接辞「一させる」用法と受身形接辞「一される」用法の計量的調査・比較を行った。そのあと、自他体系のありかたをその前項の語彙的性質との関連性、および肯定的変化を表すか否定的変化を表すかに影響を与える要因について考察した。その結果、自他両用の「一化する」の多くは、自動詞優勢または他動詞優勢のいずれかに傾いていること、前項語彙には抽象的關係を表すものが圧倒的に多いこと、自動詞優先語群は文中で肯定的変化

を表すか否定的変化を表すかが、他動詞形優勢語群に比べて定まりやすいことなどが明らかになった。

森 (2012) は、漢語サ変動詞において「スル」と「サセル」が相互に置換可能となる文法現象について、コーパスに基づき分析・記述を行ったものである。同研究において、先行研究で「自動詞専用とされている漢語サ変動詞」、「他動詞専用とされている漢語サ変動詞」「自他両方とされている漢語サ変動詞」の3種類のそれぞれについて、先行研究で取り上げられた例を、コーパスに基づいて調査を行った。結果として、まず、先行研究で「自動詞専用」とされている漢語サ変動詞について分析したところ、(1)「発生」のように、内省による判断から外れている例、また、「安心」「感心」「努力」などのように、ないはずと思われる他動詞用法が少なからず存在する例があること、(2)自動詞専用とされている漢語サ変動詞でも、「サセル」として使われやすいもの（「安心」「死亡」）と使われにくいもの（「居住」「努力」）があることが明らかになった。こうした「ないはずの他動詞用法」が存在する条件については、変化主体が有情者主語（動作主体）、もしくは非有情物主語（原因主体）のコントロールの下にあると述べている。また、他動詞専用とされている漢語サ変動詞については、「使役主が他者に働きかけて動きを実現する」という典型的な使役文ではないが、「をVNさせ」（「を殺害させ」「を表示させ」など）で使用されるものもあると指摘されている。さらに、自他両用とされている漢語サ変動詞については、「増幅」という特殊例を取りあげ、自動詞用法に占める「をVNさせ」の割合が高いのは、「他動詞用法を基本としながら、究極的に自動詞らしい」もののためであると指摘している。

このように、自動詞専用の漢語サ変動詞の他動詞用法転化の条件は、変化主体が有情者主語、もしくは非有情物主語のコントロール下にあること、他動詞専用とされている漢語サ変動詞の中でも、介在性の他動詞表現により「スル」での表現が可能になるものが存在していること、自他両用とされている漢語サ変動詞については、自動詞を基本とする場合は、たとえ他動詞用法があっても、他動詞の穴を埋める「サセル」を使用し、他動詞を基本とする場合はそうした動機づけが消極的になることが明らかにされた。

教育の観点からの漢語サ変動詞の自他調査として、学習者の誤用を調査した張 (2008)、学習者の習得を考察した庵 (2010) などが見られる。

張 (2008) は、中国人日本語学習者を対象に、二格をとる漢語動詞の使用について意味役割別に調査したうえで、誤用の要因についても考察した。二格をヲ格に間違えた割合が大きいものとして、「態度の向かう対象」（～に干渉する、～に反対するなど）などが見ら

れることが確認された。

庵 (2010) は、中国語話者の日本語学習者にアンケートを実施することにより、彼らの非対格自動詞の習得状況を調査し、誤用を母語と対照しながら分析した。その結果、学習者の回答に「される」が相対的に高い割合で見られるものとそれがほとんど見られないものが存在すること、また「される」の使用に影響を与えるのは、実態の成立に「外的な力」が感じられるかどうかということが示された。

以上のように、漢語サ変動詞の自他に関わる研究は、大きく日本語学的と日本語教育学的の二つの観点から捉えられる。また、研究方法から言うと、その多くは個別の例をふまえた内省による自他認定の検証や言語データを用いた計量調査に基づいた自他判定・分類、および学習者の誤用を分析するものである。しかしながら、個別の例を対象とした内省的調査がほとんどであり、大規模なデータを用いた計量調査をふまえ、漢語サ変動詞の自他特性の記述を精緻化する研究はほとんど行われていない。

2.1.4 漢語サ変動詞の語彙的排他性に関する先行研究

漢語サ変動詞について、村木 (2004) が指摘したとおり、「する」が付くことで、語全体の品詞性が動詞であることが容易に判断できる。しかしながら、「研究する」「調査する」などのように、漢語サ変動詞は、語としての資格をもつが、その結合はゆるやかである (野村, 1998a)。このように、同じく漢語サ変動詞でありながら、ほとんど「～する」の形で使えるものとそうでないものが存在する。先行研究においては、この点に関する質的研究が多く見られる。たとえば、影山 (1980)、田野村 (1988)、影山 (1993)、Uchida & Nakayama (1993)、平尾 (1995)、松岡 (2004)、小林 (2004)、黄 (2005) などである。結論は多岐にわたるが、議論の観点は共通に「～する」と「～をする」の交替要件にある。以下ではそれぞれについて紹介する。

影山 (1980) では、漢語系名詞 (VN) と動詞「する」の結合関係に注目した議論がなされている。氏はまず、漢語動詞「VN する」が実際に 1 語を形成し、単一の動詞として機能することを以下の 3 つの理由をもって主張している。(1) 単に VN の格助詞が省略されたという見方もあるが、格助詞の省略は口語体に限られるが、漢語動詞は文章語で普通に起こる、(2) 助詞の省略は名詞の後にポーズを残すが、漢語動詞は一息に発音される、(3) 一般に動詞に適用するとされる規則が漢語動詞「VN する」にも適用する (たとえば、①「原子力発電所の設置が〔検討されている〕 v」。②「海王星はドイツ人のガレが、冥王星

はアメリカ人のトンボーが〔発見した〕 v_0 。〕)。

同研究では、「S 編入分析」(Sino-Japanese と「する」の頭文字 S) を採用し、漢語系名詞「VN」と動詞「する」の結合関係を分析し、S 編入が成り立つために以下の2点が必要であると論じられている。

(1) 通常の名詞に対する VN の特性 (VN の語彙的特性に関する規定)

S 編入は一般の名詞には適用せず、VN に限定されることである。VN と一般の名詞は形態と機能で区別され、一般名詞は形態的にも機能的にも名詞 (N) であるのに対し、VN は形態的には名詞であるが、機能的には動詞と同価である (たとえば、運動→運動する、空手→*空手する)。

(2) VN と「する」の文法的関係 (VN の文法的機能に関する規定)

S 編入が適用できるのは、他動詞「する」の直接目的語 VN (を_{する}) 及び自動詞「する」の主語 VN (が_{する}) に限られる。他動詞主語 (「VN が X を_{する}」)、間接目的語 (「X が VN に Y を_{する}」)、あるいは斜格目的語 (「VN と / で / へ / から_{する}」) には適用しない。このうち、他動詞目的語「VN を_{する}」の場合が大半を占める。

その後、氏は S 編入の規則で VN 文の文構造を解釈している。氏は「勉強」を例に「VN する」と「(～の) VN を_{する}」を S 編入で扱われることを説明している。

(1) 太郎が英語を勉強する。

(2) 太郎が英語の勉強をする。

氏によれば、(1) と (2) は共通の基底構造に還元されるものである。その構造に対して、「格助詞配置規則」(Case Marking) と「同一名詞句消去規則」(Equi NP Deletion) が適用すると、(1) と (2) が派生されるという。

この構造は一見問題があるように思われるが、以下の2つの方法によって自動的に矯正されると指摘されている。

a. S 編入が適用：太郎が<英語を>_{NP}「<勉強>_N「する」_V>_{V₀}。

これにより、「勉強」が編入を受け、上記の例文 (1) が実現される。一つの動詞が編入できる名詞は一つに限られるため、「英語の勉強」が全体で編入を受けることができない

いとされている。

b. S 編入が適用せず：太郎が<英語の勉強を>NPする。

この場合、「英語を勉強」_{NP}の「英語を」に助詞「の」が付与され、「英語をの勉強」という連鎖になり、そして「を」の消去によって「英語の勉強」に変換され、上記の例文(2)が実現される。「英語を」が「英語の」になったのは、名詞句内で主名詞(「勉強」)に先行する要素(「英語」)には助詞「の」が付与されるという日本語に独立に存在する規則が働いたためであると解釈されている。(pp. 135-163)

上記のように、影山(1980)は、「VNする」と「VNをする」は共通の基底構造に還元され、知的には同じ意味を表すものであり、「VNする」がS編入が適用した結果であることを議論している。

田野村(1988)は、「～する」形(複合サ変動詞と称されている)と「～をする」形(単純サ変動詞と称されている)の両方が表現としては成り立つが、日本語としての自然さに違いが存在する場合を検討している。氏によれば、「～をする」形が成立するためには、(1)当該語が「する」(＝「行う」)と言うに足る動作・行為を表していること、(2)動詞概念部それ自体が「行う」ことを表していないこと(例、a.計画を実行する。b.?計画の実行をする。)、(3)動作対象に対する別の動作・行為の表現が後続する同一の文脈に存在していないこと(意味的勢力)(例、a.?シャツの洗濯をして干した。b.シャツの洗濯をして外出した。)、の3つの条件が必要であるという。さらに(1)については、細かく(1-1)意図的な事柄を表していること(意図性)(例、a.警察は毒物を検出した。b.?警察は毒物の検出をした。)、(1-2)し始め、し終わるような性質の事柄を表していること(アスペクト性)(例、a.九時に受付を開始する。b.?九時に受付の開始をする。)、(1-3)純粋な心理的事柄を表していないこと(物理性)(例、a.優勝の祈願をする。b.?優勝の期待をする。)の3点が導かれるとされている。逆に、「～する」形が成立する場合、動詞概念部が動作・行為を表すことは必須でないとされている。

影山(1993)は、「～をする」形が成立するには、漢語名詞部分が意図的に動作を行う動作主を主語に取るような非能格名詞(例、a.家族をそろって食事をする。b.離婚をする。)であることが要求されるとしている。意図を持たず、受動的に事象に係る対象を主語にとる非対格性を持つ名詞(例、a.*持っていたピストルが暴発をした。b.*老人が会談で転倒をした。)の場合、「～をする」形は成立せず、「～する」形が使用されると論じている。

Uchida & Nakayama (1993) では、当該動詞が行為・達成動詞である場合に、「～をする」形が成立するという。行為・達成動詞とは、漢語名詞に「～ている」が結びついた場合、動作の継続が含意されるような動詞であり、「研究する」などがその例である。一方、当該動詞が到達・状態動詞である場合には、「～をする」形は成り立たず、「～する」形が使用されるという。到達・状態動詞とは、漢語名詞に「～ている」が加わる場合、結果の状態を含意するような動詞であり、「開始する」などがその例である。

平尾 (1995) は、漢語名詞が内包する意志性の程度は「～をする」形が可能かどうかと正比例となり、「～をする」形が成立するには、「～しよう」「～したい」などと共起できる程度の意志性を持った漢語名詞が必要であるとしている(例, a.勉強しよう。→勉強をする。b.選択しよう。→選択をする。c.?類似しよう→*類似をする。))。

松岡 (2004) は、従来の研究で提唱されていた意志性や時間幅などの概念では説明がつかない場合があることを指摘しながら、「～する」形と「～をする」形の交替条件を改めて検討している。氏は「～をする」名詞形が成立するには、「事象への関与が高い」ことが必要であるとし、以下の2つの場合を説明している。一つ目は、主語が意志的に行い、その事象に持続性がある場合である(「責任をもって～をする」という表現と共起しうる。例, a.勉強をした。b.練習をする。)。二つ目は、主語が意志性や主体性を持たないが、事象の結果が主語に返ってくる(「再帰性」を持つ)ような場合である(「自分が～したのは自分の…からだ」という表現と共起しうる。例, a.怪我をした。b.失敗をした。))。

小林 (2004) では、Uchida & Nakayama (1993) を反論し、アスペクト特性では「～をする」形で使えないVNを特定できないと指摘している。氏は語彙概念構造の観点から、外項を持たない動名詞(a.*ビールを飲酒した。→*飲酒をした。b.*全力を尽力した。→*尽力をした。)は「～をする」形で使えないと論じている。

黄 (2005) は、「～する」と「～をする」の使い分けに注目し、従来の研究で得られた結論を例で検討しながら、漢語の性質と構文の2点から論を改めた。氏によれば、「～をする」形が成立するためには、(1)漢語部が一つの事象として存在しなければならない(a.注射をしてもらった。b.援助をする。)。この条件さえ満たせば、漢語部が顕在的な事象か、感情・心理という内面的・抽象的な事柄かを問わず(c.心配をしている。d.遠慮をしてもらいたい。)、また、継続動作か完了動詞か(e.会釈をする。f.解散をしる。)、あるいは動作主体の意志的制御がきくか否か(g.負傷をした。)に関わらず、「～をする」形が可能となると主張されている。また、文脈から言えば、まず、(2-1)漢語部の名詞的性質が

優勢される、事象への処理に焦点がおかれている (h.*持参をした。) 場合に「～をする」を使うべきであるとされている。また、(2-2) 動作主体が人間である場合 (i.妊娠をした。) は「～をする」を用いることが可能であるとされている。さらに、(2-3) 漢語部が連体修飾節を従える場合 (j.気持ちのいいほどの成功をした。) には「～をする」形を取るべきだとされている。最後に、(2-4) 文中ですでに目的格 (k.*空気を呼吸をしている。) または空間の移動・経過を表す「を」が含まれる (l.*遠いところを旅行をした。) 場合は「～する」形で表現すべきだとされている。

以下に、これらの主要先行研究の内容を一覧にまとめる。

表6 先行研究にみる「～をする」形の成立条件

先行研究	「～をする」形の成立条件
影山 (1980)	S 編入が適用しない場合
田野村 (1988)	(1) 動作・行為性 (a.意図性, b.アスペクト性, c.物理性), (2) 主語非動作性, (3) 文脈統一性
影山 (1993)	名詞非能格性 (意図性・能動性を持つ動作主を主語にとる)
Uchida& Nakayama (1993)	行為・達成動詞=動作の継続性
平尾 (1995)	意志性 (「しよう」, 「したい」と共起しうる)
松岡 (2004)	事象への強関与性 (意志性は問わず)
小林 (2004)	外項を持つ
黄 (2005)	(1) VN が事象, (2) 動作主が人間, (3) VN が連体修飾節を従える, (4) 目的格, または空間・経過を表す「を」が文中に含まれていない

以上の理論的研究に加え、若干ではあるが、量的研究も存在する。その一例は、田辺・中條・船戸 (2012) である。同研究は、中條ら (2010) で選定された漢語動名詞上位語についてコロケーションを調査した。その結果、名詞形 (選挙をする) や、他の漢語名詞との結合形 (選挙活動) で使用される名詞用法中心語と、主として動詞形 (実施する) で使用され、名詞形 (? 実施をする) や漢語名詞結合形 (? 実施活動) などではほとんど使用

されない動詞用法中心語の2種類が存在することが明らかにされた。この研究は、漢語の用法分析にコーパスを使用した興味深い取り組みであるが、本研究が問題とする漢語サ変動詞形と「～をする」形の差異に絞ったものではない。

このように、「～をする」形との関係から漢語サ変動詞の語彙的排他性について、先行研究では動作性・意志性など、非常に有用な知見が得られた。しかしながら、量的アプローチに基づく研究の余地はまだ多く残されていると言える。

2.1.5 学習者の漢語サ変動詞の意識や使用に関する先行研究

中国語と日本語は漢字漢語を共有しているため、中国人日本語学習者が日本語を勉強するには利点があると思われる。一方、実際の運用上の違いにより、中国人日本語学習者は漢語の使用に大きな問題を抱えていることもしばしば指摘されている(中川, 2005; 河住, 2005)。従来の研究の多くは、漢語サ変動詞を含む漢語語彙を対象としたものであるため、以下では、まず中国人日本語学習者の日本語漢語語彙習得に関する研究を概観する。その後、漢語サ変動詞に限ったものを紹介する。なお、中国人日本語学習者と中国語を母語とする日本語学習者との2種類の言い方が存在するが、本研究では、それらを区別せずに中国人学習者を対象とした研究と見なすものとする。

2.1.5.1 中国人学習者を対象とした日本語漢語語彙習得に関する研究

中国人日本語学習者を対象とした日本語漢語語彙習得に関する研究はおおよそ、個別の語を取り上げて詳しく検討したもの(鈴木, 1994; 劉, 1997 など)と、誤用を大まかに捉えたもの(内田, 1992; 五十嵐, 1996; 三喜田, 2000; 河住, 2005; 李, 2012 など)の2種類に分けられる。

鈴木(1994)は胡振平(1986)『日語病句剖分二百例』(上海訳文出版社)に掲載された中国人学習者による誤用例「×日本語を身につけるために、毎日努力に勉強しています」と訂正された文章「○努力して勉強しています」について詳細な解説を行っている。氏は、「努力して勉強する」が正しいという指導だけでは理解しにくく、「努力する」と「勉強する」の文法的関係、すなわち、サ変動詞が形容詞(形容動詞)的に機能することが日本語によくあるという文法知識までわかりやすく指導しなければならないと指摘している。同類の研究として、劉(1997)もある。同研究では、学習者の誤用から「進出」、「処分」、「対処」の3語を取り出して、辞書記述から構成された漢字の意味・用法にかけて詳しく論じ

ている。

内田（1992）は、学習者の母語言語体系との異なりによる転移現象が誤用の生じる原因であると主張し、文法・構文に関する音声やテンスなどでの誤り、および中国人日本語学習者による漢語サ変動詞の誤用（了解する→理解する）について例を示しながら解説している。

五十嵐（1996）は、日本語を専攻する学習者のスピーチ原稿における誤用を母語干渉の観点から分析している。母語干渉を内容別に見ると、中国語の語彙の借用による誤用（字形・意味・用法の借用）が約5割で最も多く、次に助詞の誤用（約3割）が多いことが明らかにされた。また、指導方法として学習者に日中言語間の違いを気づかせ、訂正する機会を多く与えることが重要だと指摘されている。

三喜田（2000）は日本語と中国語の構成要素の違いによる誤りを研究したものである。氏は長期をわたって集めた中国人の誤用データに基づき、語形の相違の観点から誤用を分析した。中国人日本語学習者の誤用は大きく構成要素の数の異なりに起因する誤り、構成要素そのものの微妙な異なりによる誤り、そして構成要素の配列順序の異なりによる誤りの3種類に分けられ、これらの構成要素の差異に気を付ければ、誤用を防ぐことが可能であると述べている。

河住（2005）は「中国人学習者を対象とした漢字教育の中で、日本語と中国語の間にある漢字語彙の意味・用法のズレは、重要な指導項目の一つである」と述べ、中国人学習者に向けた漢字教育のための基礎研究を行った。氏は、(1) 品詞の選択に問題を含むもの（選択した語彙は正しいが文法的用法が正しくないもの）、(2) 文法に関する問題を含むもの（誤用とは言いきれないが、文体的に違和感を与えるもの）、(3) 意味に関わる問題を含むもの（選択した語彙が正しくないもの）、(4) 語彙使用に問題を含むもの（日本語にない中国語語彙をそのまま使用したもの）、という4分類の誤用分析の枠組みを作成した後、学習者の各種の誤用について、例を示しながら分析した。結果として、それらの誤用は中国語の漢語語彙の認識をそのまま日本語に用いたことによる問題で、この問題に対処するには日本語の漢語語彙との異なりについての指導が必要であると指摘している。

李（2012）は、日中二字の漢語サ変動詞に焦点を絞った中国人学習者の誤用調査である。同研究は侯（2002）を参考に、誤用を(1) 品詞性および自他動詞に関する誤用、(2) 意味用法に関する誤用、(3) 活用語尾と共起性に関する誤用、(4) 助詞に関する誤用、の4種に設定したうえで、学習者による作文における誤用例を抽出して種類別にその誤用の要因

を検討した。その結果、母語干渉が大きな問題であり、辞書などの記述を不適切に参照したことによる誤用もあることが明らかになった。日中比較をしながら説明すること、および辞書などの不十分なところを学習者に明示することが必要であると述べている。

このように、中国人日本語学習者の日本語漢語語彙に関する誤用分析は数多く見られる。Corder (1967) にも述べたように、誤用を見ることは言語教師に対しても、研究者にとっても、また学習者自身に対しても意義がある。誤用を明らかにすることにより、教師は教育の目標を確認しながら教授することが可能になり、研究者は習得過程と指導方略や手順を明らかにするための証拠を見出すことができるようになり、学習者は自ら訂正したり確認したりする助けを得ることとなる。ただし、第二言語習得研究において、誤用のみを分析することは、学習者の第二言語習得の全体像を見ることができないとの指摘があった（小柳, 2004）。特に、学習者の誤りに焦点を当てるだけでなく、学習者が第二言語を習得する過程を客観的、かつ、全面的に捉えることが必要である中間言語研究の理論・研究の発展に伴い、中国人学習者の日本語漢語（漢語サ変動詞を含む）習得に関する研究も中間言語研究の道に至ってきた。中間言語研究は、学習者が言語転移という母語からの影響を受けながらも、次第に目標言語に近づいていく可変的な言語習得過程に注目する研究であり、学習者が日本語漢語をいかに習得しているかのみならず、どのように理解・認識しているかにも注目している。中間言語の習得過程において、いかなる問題が起きうるか、また、いかなる改善方法が考えられるかに焦点が置かれ、多くの研究が行われてきた。

馮 (1993) と馮 (1994) は漢語のみに注目したものではないが、漢語を項目の1つとして、中国人と日本人の受動態と使役形の使用を調査した。同研究では、「マーカー選択課題」と「日本語自然さ評定の課題」の形で学習者の習得状況を調査した結果、受動文、使役文のマーカーとなる助詞などの選択課題では、学習期間が長くなるほどエラーが少なくなるが、日本語の自然さについては、学習期間が長くなってもエラーがかなり発生していることが明らかにされた。

陳 (2003a) は中国語母語話者が同義語・類義語・異義語・欠落語の4タイプの漢語の習熟度を調査したものである。多選択肢の質問紙調査法により、中国人学習者にとって、異義語が最も難しく、同義語は易しいこと、また異義語はとくに習ったかどうか習熟度に大きく関わる項目であること、さらに類義語と異義語については習熟度が高くなるほど習得しにくい項目であることが確認された。

加藤 (2005) は、中国人学習者と他言語学習者の漢語習得過程の違いについて、正誤判

断テストを通して検討した。中国人学習者の場合、同義語・類義語・異義語・欠落語の 4 タイプのうち、レベルがあがるにつれ、異義語については母語による負の転移が減少する傾向が見られる一方、類義語については習得にくい状況が続き、いわゆる化石化という傾向が見受け取れたことを指摘している。

小森・玉岡・近藤（2008）では、中国人日本語学習者の同形類義語と同形異義語の認知処理が習得度と関わるかについて検討した。文の正誤判断課題を用いた調査により、いずれについても学習者の反応時間が長く、誤答率が高い結果が得られた。つまり、学習者の類義語・異義語の認知処理の過程において、習熟度がほぼ効かない状況が確認された。

李（2009）は中国人学習者の漢語理解度に関する量的研究である。氏は漢語を知っていることは漢語を使えることとは同等ではないため、受容知識と産出知識の違いを意識しながら学習者の習得を促進することが重要であると指摘している。同研究では、学習者の漢語理解・自信度に焦点を当てて、質問紙の形で漢語の正誤判断テストと自信度に関する自己評価実験を行うことにより、かれらの漢語理解と自信度との関係を検討し、漢語に対する自信度は漢語の理解の正確さとは関係がないことを確認された。

以上、中国人日本語学習者の漢語習得に関する研究を概観してきた。これまでの研究では、日中言語の差異、および母語の影響に気を付けないといけないことが示された。ただし、陳（2003b）でも述べたように、中国人学習者の日本語漢語習得研究はまだ母語の影響を確認する段階にあり、日中同形語の分類の実用性および難易度の検証、正用と誤用両方を見る実態研究、そして単語ではなくて、文レベルでの習得研究などがまだ物足りなく、早急に対処すべき状況にある。

2.1.5.2 中国人日本語学習者を対象とした漢語サ変動詞に関する研究

前節では、中国人学習者を対象とした漢語語彙全般に関わる研究について概観してきた。漢語サ変動詞に限った研究はそれほど多く行われていないため、以下では、それぞれについて見てみよう。

まず、自他の観点から中国人日本語学習者の漢語サ変動詞習得状況を調査したものとして、庵（2008）と庵（2010）がある。庵（2008）は、中日同形同義の二字漢語動名詞を対象に自他判定に関するアンケートにより、中国人学習者の漢語自他の習得状況を考察した。考察は自動詞の場合、他動詞の場合、自他両用動詞の場合、受身形の場合、使役形の場合の 5 つに分けて行われている。学習者の使用（正答か誤答か）を学習者のレベル（初級、

中級、上級、超級)とあわせて調査した結果、受身形がよく習得されているのに対し、使役の習得率が低く、特に他動詞に相当する使役形は全く習得されていないことが明らかにされた。また、非対格自動詞の場合に受身の誤用が多く見られることも確認された。

庵(2010)は日中同形同義の非対格自動詞(「一致する」,「退化する」など、意志形や命令形を取れないもの)を対象を絞って、中国人学習者の習得状況および誤用の生じる場合について考察した。その結果、学習者は「される」を回答している割合が相対的に高いが、これはすべて母語の負の転移とは限らず、学習者が「外的な力」の影響を受けるかどうかを判断する根拠としている可能性があると指摘している。また、和語とサ変動詞の違いによらず、受身形の習得率が高い一方、使役形ではゆれが見られ、習得率は和語がサ変動詞より高く、自動詞が他動詞より高いことが示された。

望月(2009)は中国人上級日本語学習者を対象に漢語サ変動詞のヴォイスに関する誤用を調査し、対応する中国語との対照という観点から母語干渉の要因とパターンを提示した。同研究は上級日本語学習者作文コーパスに基づくものであり、漢語と和語動詞の自他誤用分析がともになされているが、本研究の関心をふまえ、ここでは漢語動詞の調査のみを扱うこととする。漢語動詞に関する誤用については、受動形式の誤用と使役形式の誤用の2種類があるが、前者(受動の脱落による誤用)はすべて脱落による誤用である一方、後者(使役形式の誤用に脱落による誤用、例えば、*他動詞用法+する→自動詞用法+させる)には、脱落による誤用(*Vする→Vされる)と付加による誤用(*Vさせる→Vする)の2種類が見られ、付加による誤用のほうがより多いことが明らかにされた。使役の誤用については、中国語では使役構文が基本文型として多く使われていることに起因することが考えられるとされている。また、受身の誤用については、主題と述語間の形態的統語論的な制約が中国語ではそれほど厳しくないためだと論じられている。

張(2008)は二格構文の観点から、中国人学習者の漢語動詞の使用実態を意味役割別に検討した。その結果、<態度の向かう対象>(～に干渉する,～に反対する)の意味役割において学習者の誤用が最も多い、ほかは順に<移動の帰着点>(～に移民する,～に加入する),<変化の結果>(～に分裂する,～に変色する),<成就判断の基準>(～に失敗する,～に合格する),<一方的行為の対象>(～に自首する,～に投資する),<存在の場所>(～に分布する,～に隠居する)の意味役割において誤用が見られることが明らかになった。

言語対照の観点から日本語の漢語を扱ったものとして、日中二字漢語の動詞性のズレを

考察した五味・今村・石黒（2006）などが見られる。五味・今村・石黒（2006）は、中日同形二字漢語の品詞のズレ、とくに動詞性を持つ漢語の中日差異に焦点を当て、中国人日本語学習者の誤用分析を行った。結果として、学習者が日本語サ変動詞をナ形容詞または名詞として使う傾向があり、こうした傾向は、「変化」に関わる語彙を中心に見られることなどが明らかにされた。これらの研究をまとめると、下表になる。

表7 中国人日本語学習者による漢語サ変動詞の使用調査

	調査対象	調査内容	調査結果
庵(2008)	中日同形同義の二字漢語動詞	学習者の自他習得状況	受身形がよく習得されている一方、使役形、とくに他動詞に相当する使役形は習得率が低い
庵(2010)	中日同形同義の非対格自動詞	学習者の習得及び誤用の生じる場合	受身形の習得率が高いが、使役形は和語がサ変動詞より、自動詞が他動詞より習得率が高い
張(2008)	二格をとる漢語動詞	学習者の誤用パターンを意味的役割から検討	誤用は<態度の向かう対象> (干渉する) の意味役割において最も多く、ほかに<移動の帰着点> (移民する), <変化の結果> (分裂する) などのパターンも見られる
望月(2009)	漢語サ変動詞	学習者のヴォイスに関する誤用調査と要因分析	誤用には受動形と使役形の2種類があり、前者はすべて脱落による一方、後者は脱落によるものと付加によるものに分かれるが、いずれも誤用要因を母語干渉で解釈しうる
五味他(2006)	中日同形二字漢語動詞	品詞のズレと学習者の誤用分析	学習者がサ変動詞をナ形容詞または名詞として使う傾向があり、とくに変化に関わる語彙にこういった誤用が多く見られる

上表で示したように、学習者の漢語サ変動詞使用に関する研究はほとんど自他と二格かヲ格の使用、および母語干渉の要因分析に偏っており、対象語も研究者の主観によるごく一部の漢語サ変動詞に限られる傾向が強い。こういった現状をふまえると、中国人日本語の漢語サ変動詞に関する意識や習得状況の全貌を見ることがまず不可能であると考えられ

る。

2.1.6 まとめ

以上のように、日本語の漢語や漢語サ変動詞に関する研究は、様々な観点から盛んに行われている。しかしながら、研究する余地もまだ残されている。たとえば、日本語教育の観点から考えた場合、多種多彩な漢語サ変動詞の中では、どのようなものが多く使用されているか、どのようなものから指導を行うと効果的かについては、必ずしも十分に扱われているとは言えない。とくに、漢字漢語を共有する中国人学習者を対象とした日本語教育の観点から見れば、日本語漢語語彙の指導はどのように行うべきかについても明確にされていない。また、膨大な量の研究の中では、大まかに議論を進めたり、個別の問題を取り出して扱ったりしたものが大半であり、典型性の立場を取り、多観点にわたって議論を行うものが望ましいと考えられる。

2.2 コーパスとコーパス日本語学

2.1 では、漢語サ変動詞の活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性、および学習者の意識と使用の5つの観点から先行研究を概観してきた。本節においては、以下の方向性を目指して論を進めていく。

まず、本研究が調査の元データとするコーパスに着目し、コーパスの定義や特徴、またコーパス言語学について概観する。その後、日本語コーパスとコーパス日本語学に焦点を絞り、主要な現代日本語コーパスを紹介し、コーパス日本語学の系譜を概観する。

この方向性に従い、まず2.2.1においては、コーパスの定義、要件、及びコーパス言語学に用いたコーパスの特性について概観する。2.2.2においては、いくつかの代表的な日本語コーパスを取り上げて詳細に紹介する。2.2.3においては、コーパス日本語学がどのような系譜をたどり、現在どのような状況にあるかを述べる。

2.2.1 コーパスとコーパス言語学

近年、大規模な日本語コーパスが整備されるようになったため、ある言語現象に対する量的・質的な解釈をともに行うことが可能になっている。一方、『『コーパス』という概念の理解は必ずしも十分に広まっているとは言えない』（後藤，2003）。よって、ここでは、まず、コーパスの定義について概観する。そのうえで、コーパスを用いた言語研究、つま

りコーパス言語学に関する各種の知見を簡潔に整理する。

2.2.1.1 コーパスについて

コーパスという語は、英語の **corpus** に由来し、さらにラテン語の **corpus** 「体」に発する。もともと「からだ」を意味し、後に「資料の総体」という意味として使われるようになった。言語分析で用いられる「コーパス」の意味での使用は 20 世紀中旬からである（後藤, 2003）。コーパスとは何か、どのような特徴を持つかについて、従来様々な見解が示されているが、以下では、近年のものの中から、一部を取り上げて紹介する。

対象言語の特定の側面の実態を偏りなく反映する設計に基づいて収集された、実際の用例の集合で、電子的な手段での検索が可能であり、規模が大きく、公開されているもの。
前川(2011)

言語研究に役立つようにとの意図をもって、事前にコーパスの構成をデザインした上で集められた電子テキストの集合。
(後藤, 2003, p. 8)

随机采样的基础上收集人们实际使用的, 有代表性的真实语言材料而创建起来的。(実際に使用される, 代表性の有する真の言語資料をもとに, 無作為にサンプリングして作成されたものである (中国語の日本語訳は筆者による。以下同様)

(何・彭, 2011)

语言学中的语料库 (**corpus**) 指的是大量文本的集合, 库中的文本(称为语料)通常经过整理, 具有即定的格式与标记, 它是计算机存储的数字化语料库。语料库是语料库语言学研究的基础资源, 也是经验主义语言研究方法的主要资源, 它可以应用于词典编纂, 语言教学, 传统语言研究, 自然语言处理中基于统计或实例的研究等方面。(言語学におけるコーパスは, 大量なテキストの集合のことである。コーパスにおけるテキストは特定の処理によって, 既定の形やタグを持つようになる, コンピュータによって保存されるデジタル化したデータである。コーパスはコーパス言語学研究の基礎資料であり, 経験主義言語研究の主要な資料でもある。辞書編纂, 言語教育, 伝統的言語研究, および自然言語処理における統計や実例に基づくような研究に応用することが可能である。)

(樊, 2013)

このように、コーパスの定義をめぐって、多くの観点が立てられている。各定義間では、重点が置かれたところに若干差が見られるものの、方向性は概して一致する。これらの定義を整理すると、現在一般的に考えられているコーパスの概念がおおよそ明らかになると考えられる。すなわち、何らかの言語研究上の目的をもち、一定の代表性をもつ実際の言語資料をもとに、偏りなくサンプリングして集めたデータを、電子化することにより公開し、一定の範囲での検索が可能となるテキストの集合である、ということになる。

こうして収集して作成されたコーパスは、前川（2013）によれば、「代表性」（対象言語の全体を歪みなく反映すること）、「均衡性」（カバーできる変種が多いこと）、「規模」（サンプリングが偏りなく、かつ、大規模であること）、「真正性」（サンプルは実際に話されたり書かれたりしたものであること）、「電子化」（電子化し、かつ、検索手法・検索環境と適合すること）、「公開」（著作権保護するとともに公開すること）、「アノテーション」（適切なアノテーションが施されたこと）、の7つの要件を持つ（pp. 13-19）。本来、コーパスの定義は、その構築方針、使用目的、構築された時代などによって、可変的なものだと思うが、上記の前川他（2011）の定義は、一定の通時的妥当性を持っており、ひらたく言えば、(1) 言語分析や言語研究を主たる目的として、(2) 書き言葉や話し言葉などの実際の言語を、(3) 大規模に、(4) 網羅的・代表的に集積し、(5) コンピュータによって電子化したうえで、(6) 各種の言語情報アノテーションを付与し、(7) 検索などコンピュータによって処理することが可能、の7つの特徴をあわせ持つものがコーパスであると言ってよいだろう。

コーパスは、当初、言語研究のためだけに構築されたわけであるが、近年では、狭い意味での言語学の領域を超えて、幅広い研究領域で利用されるようになってきた。また、国立国語研究所コーパス開発センター（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/guidance.html）が調査したコーパスの利用領域にあるように、学術目的での利用だけでなく、産業界でも利用されている。

表8 コーパスの利用領域

分野	利用目的
言語研究	言語学，日本語学，国語学など個別言語の研究 複数言語のコーパスの比較による対照言語学

情報処理	音声自動認識のための言語モデル，音響モデルの構築 自然言語処理のための言語モデルの構築 音声素片の編集に基づく音声合成
言語教育	外国人のための日本語教材開発 日本人のための教材開発
言語政策	常用漢字表を検討するための基礎資料 公用文表記法の見直しの基礎資料
辞書編纂	用例の検索 語の共起関係の把握
心理学	言語に関する実験の設計，刺激の統制

上記で示したように，コーパスが役割を果たす領域は言語研究の領域から，情報処理，言語教育，言語政策，辞書編纂，心理学など，様々な領域にまたがっている。しかしながら，こうした多様な応用を考える場合であっても，核となるコーパスの定義はすでに述べた前川（2013）の7観点に集約できると言えるだろう。

2.2.1.2 コーパス言語学

前節で述べたように，本来，コーパスの応用範囲はきわめて広く，様々な関連研究と融合する可能性を持つが，その中核になるのは狭義の言語学の枠内にあるコーパス利用，すなわち，コーパス言語学である。ここでは，コーパス言語学のありようを簡潔に概観する。

コーパス言語学とは何か，この問題について，多くの学者が定義を行っている。たとえば，コーパスに基づいて言語を分析・研究する科学であり，主としてコーパスによって提供された真の言語データをもとに，詳細な言語事実についてマクロ的な分析を行うことにより，言語使用上の規則を見出すことを目指すもの（语料库语言学是在语料库的基础上对语言进行分析和研究的科学，语料库语言学主要是指在语料库所提供的真实的语言数据的基础上，对详尽的语言事实进行宏观分析，从而探索语言使用的规律。它为语言研究提供了全新的学术视角和研究方法（日本語は筆者による）（汪，2013），のような定義が見当たる。コーパス言語学は平易のように見えるが，実際には微妙な点を含む。すなわち，議論の前提とする言語理論・言語仮説はあえて持たず，コーパスを虚心坦懐に観察することで，そこから浮かび上がってきた傾向を掬い取り，独自のモデルを提唱することを重視する立場

と、既存の理論や事前の仮説の妥当性を検証するためのコーパス利用を重視する立場が存在する。前者はコーパスを独立した言語学の分野とみなし、コーパスを研究の中核に位置づけるコーパス駆動型研究であり、後者はコーパスを汎用的な分析技術とみなし、コーパスを仮説検証の手段として使用するコーパス検証型研究である。

こういったコーパスの位置づけやアプローチの違いにより、コーパス言語学は2つの方向性に分かれているが、いずれの立場をとるかによって、コーパス言語学の定義は本質的に変化してくる。ただ、両者は決して相互排他的なものではない。実際の言語研究においては、コーパス駆動型・コーパス検証型のアプローチはしばしば循環的に融合され、一体的に融合する形でコーパス言語学の実践を成立させる（石川，2012，pp. 31-32）。また、最近では、後者の立場が主流を占めるようになってきている。というのも、後者の立場は、別の言い方にすれば、「手法としてのコーパス」とも呼べるもので、コーパスそのものやコーパス研究に典型的な手法を応用したあらゆる研究がその範疇に含まれるためである。つまりは、コーパス言語学は、電子化された大規模な言語テキストの集成体であるコーパスに基づき、コンピュータを駆使して、主として実証的観点から言語の諸特性を観察・調査・記述・分析する研究実践の総称だと言える。後藤（2003）でも論じられているように、コーパス言語学は、言語学の一分野というよりは方法論であり、言語に対する新しい見方をもたらすアプローチとして適用されている。コーパスを利用して貴重な言語学的や教育的知見を得ることを目指す本研究も、むしろ、このように、コーパスをアプローチとするコーパス言語学的研究として位置づけられるのであろう。

日本でのコーパス言語学研究は無論、中国においても、特に十数年前から、英語を含め、コーパスを用いた言語研究が急増してきた。曹・王（2013）では、中国で最もよく知られている研究論文ネットワーク「知網（中国期刊全文数据库：CNKI）」を手掛かりとし、2001年から2010年にかけて中国で行われたコーパス言語学研究について量的に概観した結果、この10年間、中国におけるコーパス言語学の研究は数においてほぼ年を追って増えており、量的分析をアプローチに体系的・計画的なデータ収集を主たる目的とした実証的研究のほうが、体系的に収集されたデータを基礎としない非実証的研究を上回っている特徴を見せており、また、この方向性は2007年から2010年にかけて特に顕著に現れ、今後とも継続すると予測されている。一方、コーパス日本語学に限った場合、2011年まで中国で行われた日本語研究は、理論的知識を対象とするものから言語研究を目的としたものまで多岐にわたるが、コーパスを用いた研究については、下図に示されているように、量的には

非常に少ない状況にあると指摘されている（曹，2012）。

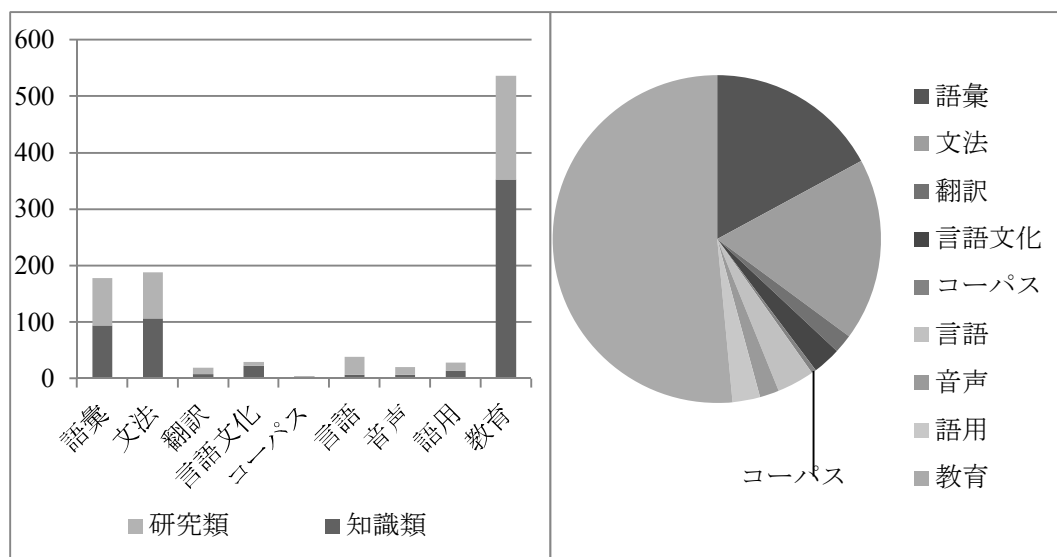


図7 中国における日本語研究（2011年）

日本語コーパスの発端は英語よりも相当に遅いからだろうが、この現状から、コーパスを用いた日本語研究は、まだ十分に発展しておらず、コーパスの基盤の整えとともに、コーパス日本語学の発展を促すことがコーパス日本語学発展上の課題の一つとなろう。

2.2.2 主要な日本語コーパス

コーパス言語学が急速に進展するとともに、とくに近年になって、日本語コーパスの開発・利用も活発になっている。数多くの日本語コーパスが構築・公開されているが、ここでは、代表的なものを取りあげてより詳細に紹介する。コーパスには様々な種類が存在し、基準によって分類も多様であるため、まず、データの産出対象に基づき、母語話者コーパスと日本語学習者コーパスに分けて概観する。また、古代、近代の言語データを集めたコーパスも存在するが、本研究では、現代日本語のコーパスに限って議論を行う。さらに、データの性質に基づき、書き言葉と話し言葉の2種類が存在するが、本研究の立場から、書き言葉のみを紹介する。

2.2.2.1 母語話者コーパス

日本語母語話者の産出を収録した書き言葉として、ここでは、「現代日本語書き言葉均衡

コーパス (BCCWJ)」、現在開発中のものとして「超大規模コーパス (仮称)」を取り上げて紹介する。

2.2.2.1.1 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : BCCWJ) とは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所のコーパス整備計画 KOTONOHA 計画の一部として、2006 年 4 月から構築が開始されたもので、2011 年に一般公開された (http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)。同コーパスの公開は、日本におけるコーパス言語学の大きな進歩であると思われる (山崎, 2011)。「代表性を有する大規模日本語書き言葉均衡コーパスの構築」を目指し、「現代日本語の縮図となる」、「汎用的な目的に供する」、「公開可能」という 3 理念のもとで設計された BCCWJ は、綿密な調査に基づいた設計をもち、母集団に対する統計的な代表性を有する標本となるよう、必要なサンプリングが実施されている点に最大の特徴があり、日本語を構成する多様なレジスターをそれぞれ代表する個々のサブコーパスの集合体として、書き言葉の多様な実態を一定の範囲で均衡的に反映しているものであると言える。

BCCWJ は、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって 1 億 430 万語のデータを収集しており、各ジャンルについて無作為サンプリングが行われている。すべてのサンプルは長短という 2 つの言語単位を用いて形態素解析されており、さらに文書構造に関するタグや精密な書誌情報も提供されている。また、書き言葉の社会的機能や影響に注目し、「生産実態」と「流通実態」を区分する斬新なアプローチが採用されており、書き言葉の生産実態を代表する「出版 (生産実態) サブコーパス」、書き言葉の流通実態を反映する「図書館 (流通実態) サブコーパス」に加え、「特定目的サブコーパス」の 3 つのサブコーパスにわかっている。各サブコーパスにはそれぞれ多様な媒体を含めている。媒体ごとのサンプル数と語数を合わせて示すと、下表のとおりになる (前川, 2008)。

表 9 BCCWJ の媒体ごとのサンプル数と語数

サブコーパス	媒体	対象期間	母集団	サンプル数 (個)	語数 (万語)

出版サブコーパス	書籍	2001年～2005年	約485億文字	10117	2855	
	雑誌	2001年～2005年	約105億文字	1996	444	
	新聞	2001年～2005年	約64億文字	1478	137	
図書館サブコーパス	書籍	1986年～2005年	約479億文字	10551	3038	
	白書	1976年～2005年	1006冊	1500	488	
	教科書	2005年～2007年	145冊	412	93	
	広報紙	2008年	100自治体	354	376	
	ベストセラー	1976年～2005年	951冊	1390	374	
	特定目的サブコーパス	Yahoo! 知恵袋	2004年～2005年	約321万質問	91445	1026
	Yahoo! ブログ	2008年～2009年	約346万記事	52680	1019	
	韻文	1980年～2005年	130冊	252	25	
	法律	1976年～2005年	718法律	346	108	
	国会会議録	1976年～2005年	32925会議	159	510	
合計				172675	10493	

上記のように、BCCWJでは、一定の時間幅をもったサンプルの収録がなされている。この時間幅はコーパスとしての利点とも言えるが、一方で、時系列調査などを行ううえで問題ともなりうる。たとえば、出版サブコーパスでは、2001年から2005年までの5年間の幅であるが、図書館サブコーパスでは、1986年から2005年にかけての20年間に広がっている。特定目的サブコーパスにおさめられた種々のジャンル間にも相違があり、白書は1976年から2005年までの30年間をカバーしているのに対して、広報紙は2008年1年間のみである。以下、各サブコーパスについて、丸山他（2011a, 2011b）に基づいて概説する。

まず、出版（生産実態）サブコーパスについては、書き言葉の〈出版・生産〉という側面に着目し、出版目録から得た情報に基づいて母集団を設定し、そこからランダムに選ば

れたサンプルを収録した約 3500 万語分のデータである。書き言葉を生産する書き手の立場を重視したもので、売れ行きや知名度を問わず出版された書籍（雑誌，新聞）をほぼ同等に扱っている。収録資料の刊行年代は 2001 年から 2005 年である。流通実態の反映とされる他のコーパスに比べて、語彙やコロケーションなどの点でより大きな多様性が確保される。次に、図書館サブコーパスについては、書き手と読み手の間で、社会的に流通している実態を図書館の所蔵から捉えたサブコーパスである。単に出版されただけでなく、ある程度広い範囲で流通したことが確認されたテキストに限って収集を行ったもので、広い意味で社会の需要を反映している書き言葉と言える。書き言葉が世の中に流通している状態を公立図書館の所蔵状況によって近似的に把握し、ジャンルと発行年によって層化したうえでサンプリングした約 3000 万語分のデータである。公立図書館の場合、多くの読者が想定される図書に限って購入することから、極端に専門的な書籍や成人向け書籍が排除され、より一般的な用語用字を調べるのに適したデータとなっている。また、資料年代にある程度の時間幅があり、短期間であるが通時的な観察が可能になるとされる。分量的にも内容的にも BCCWJ の中核をなすのがこの 2 つのコーパスであるが、特定目的サブコーパスは、上記の 2 つだけでは観察できない言語事象の調査のために付随的・付加的に用意されたコーパスである。そこでは、書き言葉の研究を行う上で必要と思われる資料が主として収録されている。対象期間はかなりばらついているが、白書，教科書，広報紙，ベストセラー，韻文，法律，国会会議録，Yahoo!知恵袋，Yahoo!ブログを含め、あわせて約 3500 万語分のデータを収めている。3 つのサブコーパスを図示すると、以下のようになる。



図 8 BCCWJ の概念図 (http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/basic-design.html より)

すでに述べたように、BCCWJ では、すべてのサンプルは長・短の 2 種類の言語単位を用いて形態素解析され、固定長と可変長の 2 種類のサンプリング方法が使用され、あわせて

17万2675個のサンプルが抽出されている。固定長サンプルは、およそ1000字の長さを基準にしたもので、可変長サンプルは、文章のまとまりをもとに長さを決めたサンプルで、上限は1万字である。ただ、固定長サンプルと可変長サンプルを取得する際に、1回のサンプリングで当たった同一箇所から固定長と可変長の2つのサンプルを取得しているため、サンプルの重なりという問題が存在する。固定長・可変長という2種類のサンプルのうち、より重要と考えられているのは可変長サンプルである。すべてのテキストタイプについて、可変長サンプルが収集されている。これに対して、固定長サンプルは出版サブコーパスの全体、図書館サブコーパスと特定目的サブコーパスの白書にのみ存在する。とくに母集団の定義と代表性を保証するサンプリングが施されているのは、書籍・雑誌・新聞データである。

BCCWJ全体の中で、書籍はきわめて重要な位置を占めており、出版サブコーパス、図書館サブコーパス、特定目的サブコーパスのすべてに書籍データが含まれている。このうち、量的にとくに重要なのは、出版サブコーパス、図書館サブコーパスに含まれる書籍データである。前者は国立国会図書館の蔵書目録を現実母集団として、日本十進分類法（Nippon Decimal Classification : NDC）及び発行年によって層別に抽出したもので、後者は東京都立中央図書館の作成した「ISBN 総合目録」に基づき、1986年から2005年までの20年間に発行された書籍を母集団としてランダムサンプリングの結果である。「収集目的が異なるが、2種類の書籍データはともに、NDCと発行年をもとにそのまま表していることが期待される」（大石、2012）。日本十進分類法（NDC）（新訂9版）とは、アメリカのデューイが創案した書籍の内容を分類する十進方式（decimal system）を日本に適合するように再構成したもので、「0. 総記」（図書館、図書、百科事典、一般論文集、逐次刊行物、団体、ジャーナリズム、叢書）、「1. 哲学」（哲学、心理学、倫理学、宗教）、「2. 歴史」（歴史、伝記、地理）、「3. 社会科学」（政治、法律、経済、統計、社会、教育、風俗習慣、国防）、「4. 自然科学」（数学、理学、医学）、「5. 技術」（工学、工業、家政学）、「6. 産業」（農林水産業、商業、運輸、通信）、「7. 芸術」（美術、音楽、演劇、スポーツ、諸芸、娯楽）、「8. 言語」、「9. 文学」、の10分類に大別されている（日本図書館協会分類委員会、1995）。BCCWJでは、実際の分布をふまえて10種類の書籍データの構成比が決定されている。丸山・柏野（2011）と大石（2012）に基づくと、下表のとおりである。

表10 書籍データのサンプル構成比（NDC別；%）

層	出版・書籍	図書館・書籍
0.総記	3.3	2.3
1.哲学	5.5	4.9
2.歴史	8.6	10.2
3.社会科学	25.0	19.6
4.自然科学	10.2	6.1
5.技術・工学	9.2	6.2
6.産業	4.4	3.4
7.芸術・美術	6.5	8.0
8.言語	1.8	2.0
9.文学	21.1	33.0
n.記録なし	4.4	4.4

出版・書籍において社会科学が最も比率が高いのに対し、図書館・書籍においては文学が最も多い。これは、出版サブコーパスと図書館サブコーパスの2種類の作成方針によるもので、互いは異なる目的の反映となっていることが示される。

BCCWJの公開形式については、オンライン版とDVD版の2種類がある。なお、「中納言」で提供されているデータをDVD版にしたBCCWJ-DVDも入手・利用可能である。さらに、BCCWJから作られた副次的データベースとして、辞書引的に使えるオンラインコーパスツールであるNINJAL-LWP for BCCWJも利用可能となっている。このうち、一般のユーザーが最も多く利用するのはオンライン検索であろう。オンライン検索ツールとしては、「少納言」と「中納言」の2種類が存在する。前者が文字列検索のみに対応するものであるのに対し、後者では、形態素解析されたデータに対する文字列検索、品詞による検索、長単位検索が可能となる。タグ付きのデータ全文をダウンロードすることも可能となっている。以下、「少納言」と「中納言」の検索インターフェイスについて見てみよう。



図9 「少納言」と「中納言」の検索画面

「少納言」については、言語学やコーパスに対する前提的知識を持っていなくても簡単に検索できる利点がある。しかしながら、品詞分析や形態素解析が行われていないため、検索上の制限があるという問題も存在する。一方、「中納言」については、こういった制限がなく、より詳細な検索ができる。中納言の利点をまとめて言うと、(1) 短単位検索、長単位検索、文字列検索の3種類の検索が可能であり、(2) 検索結果として、前後文脈、形態論情報、コーパス情報及び出典情報が詳細に表示されており、(3) 共起条件を指定することにより、共起検索もでき、(4) 検索対象については、レジスターの種類・期間を指定することができる。検索結果の表示は、リソースの都合上、最大500件に制限されているが、(5) 検索結果をタブ区切りテキスト形式(CSV形式)で全例のダウンロードすることができる、ということになる。なお、「中納言」では、自動形態素解析済みの短単位データを分析することが可能になる。形態素解析処理は形態素解析器に MeCab、解析用辞書に UniDic を使用している。解析後のサンプルとして、コアデータと非コアデータの2種類がある。コアデータは、日本語研究での利用及び形態素解析システムなどの学習用データを目指して、自動解析結果に人手による修正を加えて作成されたもので、人手で修正により解析精度が99%を超えている。BCCWJのデータのおよそ1%がコアデータである。解析精度は媒体によって若干差があるが、品詞も含めた見出し語の認定のレベルでは98%以上である。コアデータに限れば99%に達している。

以上のように、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)は、(1) 対象は出版物として刊行された現代日本語の書き言葉である、(2) 規模が1億語(短単位)である(空白や記号を除く)、(3) 対象データから無作為にサンプルを抽出している、(4) 抽出したサンプル

ルには形態素解析（テキストを語に区切って品詞に分類すること）を施し、他の情報とともに XML 文書に整形している、(5) 一般公開されたどなたでも利用できるものであり、BCCWJ の構築は、現代日本語書き言葉の研究史上きわめて重要なもので、その公開ではじめて厳密な意味での実証的・客観的な日本語研究が可能になったと言える。また、BCCWJ による日本語コーパスの共有化は、日本語母語話者以外の外国人研究者や、現実の日本語資料に接する機会が少ない在外の日本語研究者にとっても有益な資料を提供していると言える。さらに、言語現象の分析・記述精密化と新規の研究領域の開拓という 2 つの面においても、BCCWJ は今後の日本語研究に大きな恩恵をもたらすものであると言える。

2.2.2.1.2 超大規模コーパス（開発中）

すでに述べたように、BCCWJ は、約 1 億語のサイズのデータを収集した、現代日本語研究に大きな貢献を果たしたコーパスであるが、実際に BCCWJ を検索してわかることは、それでもなおウェブ上の言語データに比べるとはるかに少なく、実際の日本語の多様な振る舞いを完全に再現するには必ずしも十分とは言えない。こうしたことを解消するためには、コーパスのサイズを抜本的に拡張することが必要となる。そこで、国立国語研究所は、BCCWJ プロジェクトの完成後、2011 年から新たに大規模なウェブコーパスとして、超大規模コーパス（仮称）の構築を開始している。情報は http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/ulc/ で公開されている。

同プロジェクトで目標とされているのは 100 億語を超えるまさに超大規模なコーパスであり、こうしたコーパスの完成ができれば、きわめて稀な言語現象の言語学的研究、機械翻訳や音声認識の精度向上、国語辞書の用例自動収集、日本語使用実態の定量的把握などが可能になると期待される。開発予定期間は、2016 年度までの 5 年間である。開発中の超大規模コーパスの構築理念を図示するものが以下のとおりである。

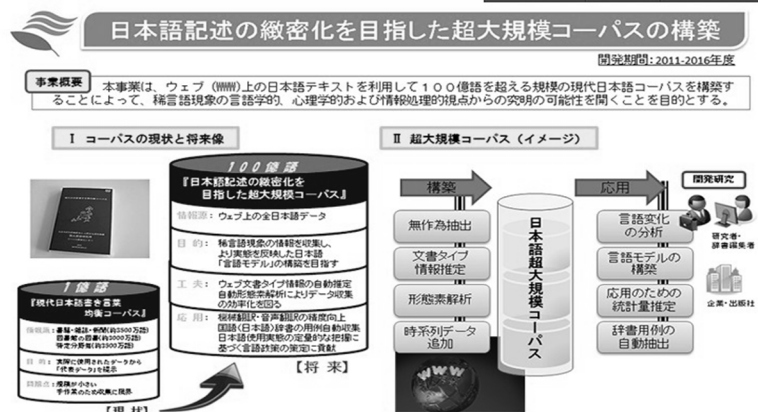


図 10 超大規模コーパスの構築理念 (http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/ulc/より)

超大規模コーパスのサンプルを得るにあたっては、ウェブクロウラの運用、文書タイプ情報の自動推定や自動形態素解析など、情報分野の技術を駆使してデータ収集の効率化を図るとともに、サンプリング技術の研究を行うことが必要となる。具体的には以下の5つの課題が提起されている。

- (1) レジスター分析：ウェブ上のデータには、発信者情報など書誌情報が欠落する場合もあるため、BCCWJのサンプルとウェブからのサンプルを定量的に比較し、適切な情報推定を行うこと。
- (2) 未知語処理と形態論情報付与：ウェブ上のテキストには、形態素解析用辞書に登録されていない語（未知語）が多く存在したり、新しい語が次々に生み出されたりすることが予想されるため、特有の表現を適切に抽出する未知語抽出技術や形態素解析技術を開発すること。
- (3) コーパスコンコーダの整備と利用教育：コーパス研究においては、コンコーダを用いて、文字列検索、品詞情報や係り受け構造などの情報を用いて必要な用例の抽出、頻度情報の獲得などの作業は一般ユーザに対しては容易なことではないため、一般向けのコンコーダ利用教育を行うとともに、BCCWJ 1億語ベースで係り受け情報まで検索可能なコーパス検索環境を構築し、そして100億語ベースで文字列検索可能なコーパス検索環境を構築すること。
- (4) 係り受け並列構造解析器／述語項構造解析器：構築したウェブコーパスをもとに、係り受け並列構造解析・述語項構造解析に必要な知識獲得を行い、係り受け並列構

造解析器／述語項構造解析器の性能向上手法について研究すること。

- (5) アノテーションの重ね合わせ技術：BCCWJ には形態論情報・文節情報・係り受け構造情報、モダリティ情報など、多様なレベルのアノテーションが施されているが、現状、これらを統合的に利用することができていないため、これらの情報を統合するためのアノテーション重ね合わせ技術を調査・研究すること。

2.2.2.2 学習者コーパス

学習者コーパス (learner corpus) は、ある言語の学習者の書き言葉ないし話し言葉を記録したコーパスであり、「第2言語学習者が産出した文章・発話データを大量に収集し、必要な情報を付加し、様々な検索が可能な形で電子化したもの」(宇佐美, 2006)である。Selinker (1972) は、第2言語学習者が産出した言語を「中間言語 (interlanguage)」と呼び、それには、開放性、動態性、及び体系性の3つの特徴があるという。また、こういった中間言語の形成に影響を与えうる要因として、母語の転移、言語規則の過剰帰納、訓練転移、コミュニケーション及び第二言語習得の運用を挙げており、これらの要因は第二言語習得の過程の中でもともに働くため、構築された言語体系が互いに異なり、しかも、変わりつつあるものであるとしている (Selinker, 1972)。学習者の産出言語を収集した学習者コーパスに基づいた中間言語研究 (Contrastive Inter-language Analysis : CIA) において、様々な手法を運用することが可能である。典型的な量的研究としては質問紙調査、実験研究、典型的な質的研究としては個別分析などが考えられる。これらの手法を総合的に運用することにより、学習者の第二言語習得の特徴を全面的に捉えることが可能になる。母語話者コーパスとは異なるある種の特殊なコーパスとして、学習者コーパスは (1) 学習者によって過剰・過小使用される言語特徴、(2) 母語転移、(3) コミュニケーション上の回避方略、(4) 母語話者的・非母語話者的言語使用特性、(5) 特定母語話者が苦手とする言語領域、の5種類の研究に用いられることが可能である (Leech, 1998) とされる。

さて、日本語学習者の産出を集めたデータとしての学習者コーパスは、2000年代に入ってから、急速に構築されてきている。国立国語研究所を中心に、海外学習者の作文を収集した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」をはじめ、日本語学習者作文コーパス (JC コーパス)、日本語学習者の作文コーパス「なたね」、KY コーパス、日本語学習者会話データベースなど、多くの日本語学習者コーパスが公開され、利用されるようになった。以下では、本研究の関心をふまえ、学習者の作文データを収集

したコーパスを取り上げて紹介を行う。

2.2.2.2.1 日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース

国立国語研究所で作成された「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（オンライン版）」（略称は「作文対訳DB」, http://jpforlife.jp/contents_db）は、日本語学習者によって執筆された日本語作文のデータベースである。収集作業は1999年より開始され、その一部が先行公開されていたが、2009年に現在のシステムとして公開された（前川, 2013, pp. 124-125）。

当該学習者コーパスには、テーマを統制した上で書かれた（1）日本語学習者による日本語作文（300～800字程度）、（2）作文執筆学習者本人による母語訳（または最も楽に文章が書ける言語への翻訳）、同じテーマで書かれた（3）日本語母語話者による日本語作文、という3種類のデータが含まれる。また、学習者の作文に対する日本語教師による（4）添削（一部のみで、約300編）、及び（5）作文執筆者・添削者の言語的履歴に関する情報、（6）形態素情報も付されている。各部分間の関係は以下のように図示できる。これは、宇佐美（2006）で示されたモデル図を、筆者が部分的に修正したものである。

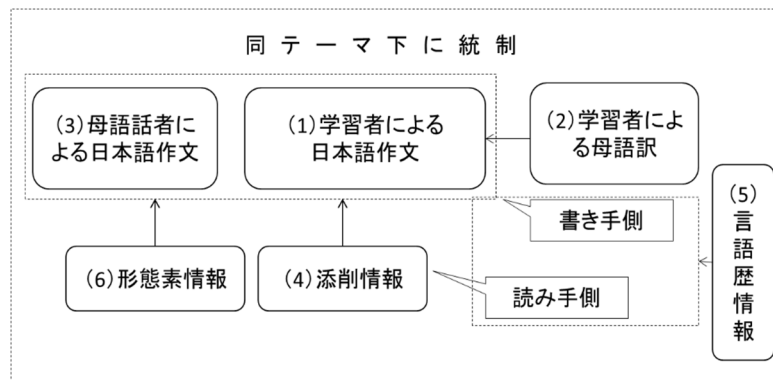


図 11 コーパスの構成像

上図で示すように、同データベースの中心には、（1）が位置する。（2）は（1）に対応するデータで、（1）に対して、書き手本人が注釈を施したものであると考えられる。また、（4）は（1）に対する読み手側の主観的反応・評価であるのに対し、（6）は（1）と（3）といった言語データそのものに対する分析であると言える。（5）は書き手と読み手の両側を含む参加者の言語履歴情報を示すものである。

非母語話者による (1) と母語話者による (3) は、いずれも限られた時間内で書かれたものであるため、十分に推敲されている、完成度の高い日本語文章とは言えない。加えて、母語で書かれた (2) は、母語で書いたとは言え、最初から学習者が自分の母語で書いた文章ではなく、(1) を母語に翻訳したものであるため、もとの日本語作文の影響を受けたと見られるところがある。よって、同コーパスを利用しようとする際には、(1) の作文データを、十分な推敲を経ていない日本語話者の日本語文章を基準に考えること、(1) と (2) の両方を含む対訳資料と言っても、(2) の母語訳がその言語の文章としてどの程度自然であるかを、第三者的な視点からチェックする必要がある、両者を単純に比較することはできないことに留意しなければならない (井上, 2006)。

従来の書き言葉の研究は、ほとんど完成度の高い文章を主な研究対象としてきたものの、完成度をとわない日常的な言語活動の産出としての書き言葉を分析することも重要であると考えられる。対訳作文 DB は、こうした日常的な言語産出を対象としたコーパスである。また、学習者コーパスは、学習者が書く文章の特徴を量的に観察するうえではきわめて重要な役割を果たしているが、単にデータを参照に学習者の書いたデータの文面的特徴を分析するにとどまらず、学習者の意図と使った表現を合わせて分析することが、教育的にはもっと重要であると考えられる。さらに、誤用や不自然な表現を含む文章に対する母語話者による添削や評価を電子化して活用することも不可欠であるとされる。こうした理念のもと、同コーパスが構築されるようになったのである。学習者による日本語作文に加えて、書き手による母語訳を同時に収集するとともに、母語話者教師による添削や評価を XML タグ形式で添付しているところも、当該コーパスの独自な点であると言える。

データの検索・抽出については、(1) 「作文そのものに関する条件」、(2) 「作文執筆者に関する条件」、(3) 「添削時期」、及び (4) 「作文添削者に関する条件」という 4 つの条件のもとで行うことができる。(1) 作文そのものに関する条件によるデータ抽出においては、作文収集国、対訳に使用した言語、作文のテーマ、執筆時の辞書・参考書類の使用の有無、作文執筆時間という 5 つの検索条件の設定ができるようになっている。作文収集国については、オーストラリアー、ベルギー、ブラジル、中国、ドイツ、オランダ、フィンランド、フランス、ハンガリー、インドネシア、インド、日本、カンボジア、韓国、モンゴル、マレーシア、ポーランド、シンガポール、スロベニア、タイ、アメリカ、ベトナム、スリランカの 23 カ国であった。そのため、対訳に使用した言語についても、ベンガル語、ドイツ語、ギリシャ語、英語、スペイン語、エストニア語、フィンランド語、フランス語、ヒン

ディー語、ハンガリー語、インドネシア語、イタリア語、日本語、カンボジア語、韓国語、ラテン語、モンゴル語、マラティ語、マレー語、オランダ語、オリアー語、ポーランド語、ポルトガル語、ロシア語、シンハラ語、スロペニア語、スウェーデン語、タミル語、タイ語、トルコ語、ベトナム語、中国語など、多数存在する。作文のテーマについては、主として「あなたの国の行事について」、「たばこについてのあなたの意見」、「ワープロソフトについてのあなたの意見」、「外国からの援助について」、「あなたの国の料理について」、「外国語の学習について」、「あなたの国の歴史の大きな事件」、「学校の教育について」、「大学受験についてのあなたの意見」、「仕事についてのあなたの意見」という10個が設定されている。執筆時の参考書類などの有無も区別されている。作文執筆時間については、10分から最大150分までの指定が可能である。(2) 作文執筆者に関しては、対訳使用言語、データの収集国、執筆者の番号、学習者の母語、日本語学習期間、母語・作文執筆言語以外に使用可能な言語などの情報を絞って検索を行うことが可能である。(3) 添削データ収集時期によるデータ抽出においては、添削時期の設定を通して、異なる時期で添削された作文を抽出することが可能となっている。(4) 作文添削者に関わる条件によるデータ抽出においては、学習者の作文添削者の日本語教育歴や母語の指定ができるようになっている。

2.2.2.2.2 日本語学習者作文コーパス (JC コーパス)

日本語学習者による日本語作文をアノテーション済みコーパスとして公開されたものである (<http://sakubun.jp.org/>)。本コーパスには、(1)「外国語が上手になる方法」(192名分)、(2)「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」(112名分)という2つのテーマをもとに、初級から中級の日本語学習者による作文304名分、あわせて113554語のデータが含まれている。そのうち、(2)は東京外国語大学の伊集院郁子氏によって収集された日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベースである。日本語作文のほか、学習者自身による母語訳データも付されている。

学習者の母語別及び日本語レベル別の内訳については、下表の通りである。

表11 母語別及び日本語レベル別学習者数

	初級	中級	上級	合計
中国語	20	99	41	160

韓国語	11	50	83	144
合計	31	149	124	304

母語別及び日本語レベル別における学習者の作文データのサイズ（語数）については、以下のとおりである。

表 12 母語別及び日本語レベル別学習者の作文データサイズ

	初級	中級	上級	合計
中国語	5636	38355	15560	59551
韓国語	3480	18548	32077	54105
合計	9116	56903	47637	113656

作文データとともに、学習者の日本語能力を測定するため、文法テスト、文字語彙テストを実施し、検索サイト上で検索オプションとして利用できるようになっている。また、データを一括してダウンロードすることも可能である。

2.2.2.2.3 日本語学習者言語コーパス

東京外国語大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」において構築され、<http://cblle.tufs.ac.jp/lc/ja/>で公開されている。構築目的は、海外の教育機関でデータ収集を行い、日本語の学習者コーパスを構築することにある。活動は主として、

(1) E-ラーニングを活用した作文データ収集によるコーパス構築、(2) 作文データ収集及びオンライン誤用辞書の開発、との2部に分けて実施された。

(1) のデータは、台湾淡江大学で収集した。収集は7期に分けて実施した。下表に示すとおりに、収集は年に2時期、各時期においては2週間に1回という形で行った。データは「茶筌」を用いて形態素解析後に「品詞検索ページ」に公開されている。機能別タスクの内容については、「自己紹介」、「特徴を述べる」、「予定を述べる」、「禁止・指示をする」、「経験を述べる」、「許可を求める」、「助言する」、「希望を述べる」の8種類が含まれる。

表 13 データの収集

	機能タスク (種)	日記タスク (回)	人数	データ
第 1 期 (2008 年 2 月から 6 月)	8	8	22	約 52800 字
第 2 期 (2008 年 9 月から 12 月)	9	8	10	約 12000 字
第 3 期 (2009 年 2 月から 6 月)	8	8	24	約 72000 字
第 4 期 (2009 年 9 月から 12 月)	0	8	8	約 13000 字
第 5 期 (2010 年 2 月から 6 月)	8	8	26	約 74000 字
第 6 期 (2010 年 9 月から 12 月)	0	8	14	約 22000 字
第 7 期 (2011 年 2 月から 6 月)	8	8	24	約 87000 字

この品詞検索エンジンは、台湾淡江大学で収集した中級レベルの日本語学習者による作文データ（総語数約 200000 語）と、日本語母語話者の大学生による作文データ（総語数約 60000 語）という 2 種類のデータについて品詞検索が行えるようになっている。

(2) のデータは、英国リーズ大学 (113 人, 145 作文, 122980 字), ウクライナキエフ国立大学 (59 人, 169 作文, 35585 字), 台湾銘傳大学 (29 人, 81 作文, 35178 字) で収集した。全 380 の作文データの中から抽出した 10498 の誤用を統語的・意味的範疇に基づいて分類し、誤用の原因と正用に関する情報を付したデータは「オンライン日本語誤用辞典」の形式で公開されている。

ほかに、上級学習者 121 人による 587 作文 469600 字の作文データベースもテキスト形式で公開されている。

2.2.2.2.4 日本語学習者の作文コーパス「なたね」

学習者作文コーパス「なたね」(<http://hinoki.ryu.titech.ac.jp/natane/>) は、日本語学習者から収集した作文に対して日本語教師による添削を行った誤用タグを付与した学習者作文コーパスである。主として母語が中国語、マターティー語、ベトナム語、韓国語、スペイン語、マレー語、スロベニア語、ハンガリー語、タイ語である学習者を対象としたものである。学習者数は 192 人で、中では、下記で示しているように、中国語母語話者が 115 人で、最も多数を占める。

表 14 母語別学習者数

母語	男性	女性	性別未入力	計
中国語	50	43	22	115
マラーティー語	6	23	7	36
ベトナム語	6		7	13
韓国語	6	1	4	11
スペイン語	2			2
マレー語	1			1
スロベニア語	1			1
ハンガリー語	1			1
タイ語			1	1
母語未入力	1		10	11
計	74	67	51	192

収録された作文は、東京工業大学、中国・西安交通大学において収集したもの、および、「インド・プネー市学習者コーパス」に収録されたものを中心にしたものである。母語別作文数に関しては、以下のとおりである。

表 15 母語別作文数

母語	男性	女性	性別未入力	計
中国語	62	64	26	152
マラーティー語	6	23	7	36
ベトナム語	18		9	27
韓国語	24	3	7	34
スペイン語	2			2
マレー語	8			8
スロベニア語	7			7
ハンガリー語	1			1
タイ語			1	1

母語未入力	5		12	17
計	133	90	62	285

誤用など、様々なタグ情報が付与されているため、詳細な検索が可能となっている。収集した作文数は 285 件で、合計 205520 文字(句読点やその他の補助記号も含む)である。そのうち、誤用は 6776 件、付与した誤用タグは 9024 件である。誤用タグの中では、誤用の対象に関するものは 3887 件、誤用の内容に関するものは 3667 件、誤用の要因・背景に関するものは 1470 件であった。誤用対象には、各品詞、及び接頭辞、接尾辞、句読点、その他、誤用の内容には、脱落、付加、誤形成、混同、位置、接続（段落接続、文間接続、文内接続）、統語的呼応、語の共起（コロケーション）、指示語、正書法からの逸脱、送り仮名、活用（未然形、連用形、終止形、連体形、已然形／仮定形、命令形）、文法範疇（ヴォイス、ポラリティ、テンス、アスペクト、モダリティ）、文字種（漢字、ひらがな、カタカナ）、音（濁音、半濁音、長音、拗音、促音、撥音）、その他などの項目が含まれている。また、誤用の要因・背景として、類似（意味、字形、音）、母語干渉（中国語、韓国語、ベトナム語、その他）、レジスタ（話し言葉と書き言葉、その他）、待遇表現、文体の不統一、その他の 6 種類にまとめられている。

検索については、「作文一覧」、「全文検索」、「誤用検索」の 3 種類が可能である。作文一覧の画面において、作文 ID、原文、字数、(学習者の)性別、国籍、母語などの情報が掲載されている。また、全文検索の場合に、検索文字列、学習者情報（母語）の情報で絞る検索が可能であり、誤用検索の場合には、さらに、検索範囲として、「誤用箇所と訂正例の両方」、「誤用箇所のみ」、「訂正例のみ」の 3 つの選択肢が設定されており、検索条件として、(検索対象となる文字列とは)「完全一致」、「部分一致」、「前方一致」、「後方一致」の 4 つの選択肢が設定されているため、検索条件をさらに絞ることが可能になる。さらに、検索結果のダウンロードも可能である。

2.2.2.2.5 華東政法大学作文コーパス

華東政法大学作文コーパス (www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/corpus/zhengfa.html) は中国の華東政法大学に在学している日本語専門学習者 2 年生 26 人を対象に、かれらの作文を収集したものである。作文の収集は 2006 年 9 月から 2007 年 6 月にかけて行われ、「夏休みの思い出」、「クラスメート」、「アルバイトについて」、「英語を大学の必修科目に

すべきか」など、15種のテーマをめぐって、合計285件の作文が集められた。データの収集時期の詳細は下表のとおりである。

表 16 データの収集

収集時期	作文のタイトル
2年生の 1学期	1. 「夏休みの思い出」 (2006年9月) 2. 「クラスメート」 (2006年9月) 3. 「アルバイトについて」 (2006年10月) 4. 「英語を大学の必修科目にすべきか」 (2006年10月) 5. 「私の好きな○○」 (2006年10月) 6. 「インターネットと私の生活」 (2006年11月) 7. 「○○への手紙」 (2007年11月) 8. 「心を打たれたこと」 (2007年12月) 9. 「寓話：親子とろば」 (2006年12月)
2年生の 2学期	10. 「現代若者のファッション」 (2007年3月) 11. 「子供の時の夢」 (2007年3月) 12. 「私の育った町」 (2007年4月) 13. 「私の友人」 (2007年4月) 14. 「学習到達度調査について」 (2007年5月) 15. 「読書の方法」 (2007年6月)

以上のように、日本語コーパスの整備が非常に速いスピードで進んでいることに加え、ウェブでのアクセスが可能になったことにより、コーパスをウェブ検索という形式で利用できるようになってきている。このことはコーパスに基づく日本語研究に大きな恩恵をもたらしている。次節においては、これらのコーパスを用いた日本語研究について概観する。

2.2.3 コーパス日本語学

すでに述べたように、現代では、コーパスを用いた言語研究が世界的に活発に行われている。コーパス日本語学も飛躍的に発展しており、文法論、意味論、語用論など、幅広い分野において成果が多く挙げられている。コーパス言語学の節でも紹介したように、当初、

言語研究のためだけに構築されたコーパスは、近年では、狭い意味での言語学の領域を超えて、情報処理、言語教育、言語政策、辞書編纂、心理学など、様々な領域にまたがって、幅広い研究領域で利用されるようになってきた。以下では、こうした現状に至る過程を4つの時期に分けて概観する。

一般に、コーパス研究では、語彙の計量的な調査が中心的な分析手法となる。日本語研究において、こうした調査手法が用いられるようになったのは戦前に遡る。国立国語研究所を中心に各種の計量的な言語調査が行われ、現在のコーパス研究の素地が築かれた。

その後、1970年代から80年代になると、電子計算機（コンピュータ）の普及に伴い、従前に比べ、より大規模な電子テキストのデータを解析し、計量的に分析することが広く行われるようになった。現代的な意味における「コーパス」とは言えないものの、今で言うコーパスに似た資料が使われるようになったのである。

その後、1990年代に入ると、コンピュータの普及に加え、インターネットが活用できるようになり、様々なテキストデータを電子媒体の形で入手することが可能になった。このため、それまでの時代に比べ、さらに大規模なデータを収集し分析することが可能になったのである。しかしながら、こうしたテキストデータは、データの均衡性や代表性に配慮したものとは言い難く、厳密な科学的研究と呼ぶには十分ではなかった。

2000年代に入ると、国立国語研究所を中心として、均衡性や代表性に配慮したテキスト資料の整備計画が開始される。これが、2006年に始まった現代日本語書き言葉均衡コーパスのプロジェクトである。5年間の作業を経て、2011年に現代日本語書き言葉均衡コーパスが公開されたことは、「コーパス日本語学」という新しい研究分野の誕生を可能にした。

この前後から、国立国語研究所によるコーパス日本語学の研究だけでなく、個人研究者による研究活動も急速に増えてきた。国立国語研究所の調査によると、2011年から現在にかけて、BCCWJを用いたコーパス日本語学の研究数は490点に達し、年間100本を超えるスピードで増えてきている。そのうち、とくに、毎年国立国語研究所が主催しているコーパス日本語学ワークショップでは、現代日本語書き言葉均衡コーパスなどを用いたコーパス日本語学の研究が数多く発表されている。

現代日本語書き言葉均衡コーパスの公開により、コーパス日本語学はますます発展しているわけであるが、われわれはその限界についても、認識しておく必要があるだろう。一つは、現状において、使用できるコーパスの種類や量は制約的だということである。現代日本語書き言葉均衡コーパスは1億語をもち、相対的に見れば大きなコーパスであると言

えるが、とくに低頻度の言語現象を観察する場合など、現代日本語書き言葉均衡コーパスでは不十分な事例も少なくない。また、調査結果の妥当性を確認するため、他のコーパスと総合参照しようとしても、そういったコーパスは存在しない。さらに、書き言葉のデータについては、十分な蓄積がなされているものの、話し言葉のデータについてはきわめて困難である。こうしたことから、前川他（2013）は、特に大規模な均衡コーパスが構築された現在、日本語コーパスの開発及びコーパス日本語学の研究が向かっていく先を探ることが必要となり、大規模なウェブコーパスの開発及び構築したコーパスを効果的に利用するための研究、新たな話し言葉コーパスの開発、既存のコーパスのメンテナンス、コーパス日本語学ならではの研究手法の開発などは今後の課題であると述べている（pp. 129-130）。

もう一つは、われわれは言語について、コーパスがあればすべての情報が明らかになると考えがちであるが、実際にはこうしたことはほとんど妥当性をもたないということである。そもそもコーパスは母集団に対する限られた標本に過ぎず、そこに示されている情報は一定の限界をもっているからである。この点に関して、汪（2013）は「コーパスはわれわれに大量の例証や言語事実を提供しているが、言語現象の成因を解釈したり、言語表象を超えた社会的・文化的情報を推測したりすることができないという局限性も存在する」

（語料庫の局限性在于，它能够为我们提供例证，语言事实等，却无法对其进行解释，推理或者提供相关的文化和社会背景信息）と述べている。この観点をふまえれば、コーパスだけに頼るのではなく、コーパスをうまく使用しつつ、コーパス以外のデータをあわせて見ていくことが重要になるだろう。丸山他（2007）はコーパス日本語学の今後について、コーパスの利用が日本語研究に対して全面的に有利に働くわけではないということをつねに意識するとともに、コーパス日本語学という枠を固定的に排他的に捉え、他の研究法に無関心、あるいは、批判的な態度をとらないようにするのが賢明であるとしている。

以上の点に留意するならば、コーパス日本語学にはまだ大きな可能性があり、今後、日本語学について、さらに日本語教育学について、有益な知見を多く明らかにすることを期待できるだろう。

第3章 リサーチデザイン

3.1 研究の目的

すでに述べたように、漢語サ変動詞は種類も多く、用法も多彩である。にもかかわらず、言語学的にも、既存の日本語教育においても適切に扱われているとは言いがたい状況である。このことをふまえ、本論文においては、中国人日本語学習者を対象とする日本語漢語サ変動詞の教授指針を得るべく、漢語サ変動詞の様々な問題を多角的に議論していく。

まず第Ⅰ部の冒頭として、2章では、漢語サ変動詞に関わる先行研究を概観した。次に、3章では、本論文の枠組み、使用データ、研究手法などを大まかに述べる。第Ⅱ部では、まず4章において、現代日本語書き言葉均衡コーパス（コーパスの詳細は2章）に基づき、現代日本語における漢語サ変動詞の出現状況を計量的に考察し、とくに典型的な漢語サ変動詞にはどのようなものがあるかを統計手法を用いて特定する。5章からでは、特定された漢語サ変動詞の各々について、活用上の選好性（5章）、内部構成性（6章）、自他性（7章）、および語彙的排他性（8章）の考察を行い、典型性を有する漢語サ変動詞の多様な特徴を探り、教育的な重要漢語サ変動詞リストの精緻化を図る。以上をふまえ、教育的示唆を得るため、第Ⅲ部では、9章では中国人日本語学習者の漢語サ変動詞意識と理解度を調べ、10章では学習者の漢語サ変動詞の使用状況を確認する。11章では、得られた知見をふまえ、中国人日本語学習者に必要な漢語サ変動詞学習シートを試行開発し、教育実験でその有効性を検証し、修正点を明らかにする。最後に終章で本論文のまとめを行い、漢語サ変動詞指導・学習案について提言し、教育的示唆と課題を述べる。

3.2 使用するデータ

すでに述べたように、漢語サ変動詞については、内省や直感に基づく研究が多く、日本語教育の観点から、実証的データをふまえた研究は未だ十分に行われていない。こういった現状把握をふまえ、本論文においては、(1) 現代日本語コーパス、(2) 日本語学習者コーパス、(3) 中国人日本語学習者による質問用紙調査のデータ、の3種類を基礎調査資料とする。

まず、(1) 現代日本語コーパスについては、本論の第Ⅰ部、重要漢語サ変動詞の特定、および10章、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用実態を見るために用いる。

重要漢語サ変動詞の特定に際して、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を利用する。日本語のコーパスについては、小規模なものを含めれば、使用可能なものは複数存

在するが、信頼性の高いデータを対象にすることで、より妥当な重要漢語サ変動詞の抽出を可能にするため、現時点において、規模においても、また、内容の信頼性についても、最も重要な位置を占める BCCWJ を用いることとする。2 章ですでに紹介したように、当該コーパスは、これまでの他のコーパスとは異なり、雑誌、新聞など、ある特定のジャンルの言語データベースではなく、雑誌、新聞、書籍、ブログ、白書、教科書、知恵袋、法律、国会記録、韻文など、幅広いデータを含んでおり、現代日本語に対する代表性をもつ標本と見なし得るものである。

なお、BCCWJ を使用する場合、そこに含まれる多様なジャンルのうち、何を使用するかを検討する必要がある。というのも、外国人日本語学習者、とくに中国人日本語学習者を対象とした漢語サ変動詞の指導モデルを探ろうとする場合、BCCWJ に包含するすべてのジャンルを分析に入れることは、必ずしも適切とは言えないからである。たとえば、特殊な文体を含む法律や韻文、また、内容が特定の分野に限られた教科書などは、日本人にとっては重要であっても、普遍性が低く、外国人学習者にとっての重要性は相対的に限定される。一方、書籍、雑誌、新聞、ブログ、白書、知恵袋などは、より幅広い読者を持つことから、外国人学習者にとっても重要性がより高いと考えられる。よって、本論文においては、BCCWJ に包含されるジャンルの中から、一般性と教育的重要性を考慮し、書籍、雑誌、新聞、ブログ、白書、知恵袋の 6 変種を使用する。ただし、書籍の扱いについては留意しなければならない点がある。それは、BCCWJ に包含されるジャンルのうち、書籍は圧倒的にデータ量が多いことである。そこで、分量バランスの偏りを改善するため、本論文では、書籍について、日本十進分類法 (NDC) による 10 ジャンルのそれぞれを独立した変種と見なす立場を取る。これにより、比較的サイズの揃ったデータを総合的に比較し、いずれのジャンルにおいても共通して見られる漢語サ変動詞の一般的特性の検討が可能となる。なお、BCCWJ に含まれる書籍データは、出版サブコーパス、図書館サブコーパス、特定目的コーパスの 3 種類にまたがっている。本研究においては、均衡抽出法によらない特殊目的サブコーパス内のベストセラー書籍は対象外とする。また、言語の産出実態を反映した出版サブコーパスと流通実態を反映した図書館サブコーパスの 2 種類については、これらを区別せず、まとめて一つの書籍ジャンルとして扱う。これにより、本論文で頻度調査に使用するデータは、書籍の 10 種、その他の 5 種、あわせて 15 種となる。なお、BCCWJ の検索には「中納言」を利用する。

次に、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用の特徴を明らかにするため、母語話者の

データと比較しながら分析を行う。学習者の作文データと性質がもっとも類似していることから、特定目的・ブログを用いる。そこで、ブログに含まれる「ビジネスと経済」、「コンピュータとインターネット」、「生活と文化」、「エンターテインメント」、「家庭と住まい」、「政治」、「健康と医学」、「学校と教育」、「科学」、「出会い」、「地域」、「特集」、「芸術と人文」、「Yahoo!サービス」、「趣味とスポーツ」の計 15 種 10194143 語が対象となる。なお、学習者と母語話者の作文データのテーマは完全に統一されていないため、調査結果に若干影響を与えると予想されるが、現状では、テーマが完全に統一され、かつ内容が高度に統制された同質の作文は量がきわめて少ないため、信頼度あるいは代表性が低まると考え、一定の問題があることを認識したうえで、データ量を確保することにより、結果の妥当性を高めるアプローチをとることとした。

また (2) 日本語学習者コーパスについては、既存の日本語学習者コーパスと、筆者が独自収集した漢語サ変動詞に関する作文データをあわせて利用する。

既存の学習者作文コーパスについては、サイズが限定されるものも含まれるが、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用を確認するため、幅広く中国人日本語学習者による作文データを収集して分析に用いる。以下で紹介する既存の学習者作文データに加え、筆者が独自収集した漢語サ変動詞を用いた作文データを利用する。各学習者コーパスの詳細は 2 章を参照されたいが、大まかに紹介すると、(1) 国立国語研究所で作成された「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース (オンライン版)」は、10 個のテーマに統制し、21 か国で収集した学習者作文に加え、同テーマについて母語話者が書いた作文を収録したものである。作文そのもの、執筆者情報、添削情報などの検索ができる。本論文においては、中国語を母語とする日本語学習者による日本語作文、また、同テーマのもとで、中国人日本語学習者と日本語母語話者による作文に限って調査・分析を行う。(2) 東京工業大学によって開発された、誤用タグ付きの日本語学習者作文コーパス「なたね」は、中国人母語話者の作文データを最も多く含んでおり、誤用の区分による詳細な検索が可能であることが特徴である。(3) 筑波大学で作成された「日本語学習者作文コーパス (Japanese Learner's Written Composition Corpus : JC コーパス)」は、初級から中上級までの中国人および韓国人日本語学習者による作文 304 名分、あわせて約 11 万語のデータを収録している。そのうち、中国人日本語学習者は初級学習者 20 名、中級学習者 99 名、上級学習者 41 名であった。形態素単位と文字列単位の検索、及び誤用と正用の検索が可能となる。また、誤用のタイプや学習者の日本語学歴に関する検索条件も設けられている。

(4) 東京外国語大学で開発された「日本語学習者言語コーパス」は、A summary and opinion essay about news on Japan, An opinion essay on fast food and “fast“ culture, Youth Slang, My Strengths and Weaknesses, Stories of My Failures, Reasons for Studying Japanese などのテーマをめぐって書かせた作文データである。品詞タグも付与されている。中国人日本語学習者のデータは台湾で収集されたタスクデータで、総語数約 200000 語である。(5) 「華東政法大学作文コーパス」は、華東政法大学外語学院日語専攻の 2 年生 26 人を対象に、「夏休みの思い出」、「クラスメート」、「アルバイトについて」、「英語を大学の必修科目にすべきか」など、計 15 種の作文データである。

既存の学習者コーパス以外に、筆者が独自に収集した漢語サ変動詞を用いた文章も利用する。中国の 2 か所の大学に在学している日本語専攻の学習者に思いついた漢語サ変動詞を使って書かせた作文 51 件である。中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用に用いる作文データの詳細は 10 章で述べるが、ここで以下の表を示すことにとどめる。

表 1 使用する日本語学習者コーパス

	全作文数	中国人日本語学習者による作文数	中国人日本語学習者による作文のテーマ (数)
作文対訳コーパス	1565	24	<ul style="list-style-type: none"> ・あなたの国の行事について (20) ・たばこについてのあなたの意見 (1) ・学校教育について (1) ・ワープロソフトについてのあなたの意見 (2)
「あなたね」	285	152	不明 (152)
日本語学習者作文コーパス	304	160	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語が上手になる方法について (103) ・インターネット時代に新聞や雑誌は必要か (57)
日本語学習者言語コーパス	1756	84	<ul style="list-style-type: none"> ・ A summary and opinion essay about news on Japan (1)

			<ul style="list-style-type: none"> • An opinion essay on fast food and “fast“ culture (1) • Youth Slang (1) • My Strengths and Weaknesses (28) • Stories of My Failures (25) • Reasons for Studying Japanese (28)
華東政法 大学作文 コーパス	285	285	<ul style="list-style-type: none"> • 夏休みの思い出 • クラスメート • アルバイトについて • 英語を大学の必修科目にすべきか (等, 計 15 種)
独自収集 したデー タ	51	51	特定なし

最後に、(3) 中国人日本語学習者による質問用紙調査のデータについては、中国人日本語学習者を対象に行った質問用紙調査のデータを使用する。同データでは、中国人日本語学習者の日本語漢語サ変動詞に関する基礎知識理解度、応用知識理解度、及び受けた指導の実態と今後の指導に対する希望を問うアンケート、テスト、学習シートの3種類が含まれるため、学習者の理解度・意識から学習シートの効果にかけて立体的な調査が可能となる。質問用紙の詳細は9章と11章で述べ、また全体を巻末に添付する。

3.3 研究対象とする漢語サ変動詞

漢語サ変動詞を広義で捉えれば、以下で示しているように、1文字のもの、2文字のもの、3文字以上のものなど、幅広い語が対象に含まれる。

- (1) 愛する, 抗する
- (2) 努力する, 感謝する
- (3) 再確認する, 一安心する
- (4) 四捨五入する, 右往左往する

本論文においては、研究対象とする漢語サ変動詞を上記の(2)と(3)を構成する二字漢語の部分に規定する。これは、以下の4点の理由による。

1点目として、種類や使用頻度の点において、二字漢語は日本語漢語語彙の中で圧倒的に多数を占めるからである。2点目は、たとえば、「一する」、「一ずる」、「一じる」など、様々な後続要素を持ちうる一字漢語(例、「抗する」「案ずる」「論じる」など)に比べ、二字漢語は「一する」とのみ結合し、形態的な安定性がより高いためである。このことは、計量的な調査において有利である。3点目は、3文字以上の漢語と比べれば、「ひとまとまり性」(湯本, 1977)が強く、計量的に調査しやすいためである。4点目としては、中日の対照性が高いからである。中国語においては、漢語は基本的に二字で構成されており、中国人学習者が日本語の漢語を学習する場合も、二字漢語の正しい習得がとくに必要となる。以上の理由から、二字漢語を対象として分析を行うことが適切であると考えられる。

3.4 使用する統計手法

言語の十全な理解のためには統計的なアプローチが有効であり必須でもある。本節では、本研究において使用する主成分分析、コレスポンデンス分析、クラスター分析、重回帰分析、t検定・F検定と分散分析について、それぞれ紹介しておく。なお、統計分析ツールには様々なものがあるが、本論文では、石川・前田・山崎(2010)でも紹介されている **Seagull-Stat** を使う。よって、**Seagull-Stat** (Excel2010版)を用いた各統計手法の解析過程についても言及する。

3.4.1 主成分分析

本研究では、4章において、各変種の日本語における漢語サ変動詞の頻度を合成する目的で、主成分分析を使用する。

一般に、異なる数値を合成する場合、平均が広く使用される。ただし、平均には、(1) 個々の変数の単位の差を考慮していない、(2) 個々の変数の分散を考慮していない、という2つの問題がある。たとえば、(1)については、10点満点のテストの点と、100点満点のテストの点の平均に意味はない。また、(2)について言うと、平均点が30点の場合の「80点」と平均点が80点の場合の「80点」を同列に扱うことも適切とは言えない。すなわち、平均という手法はすべての変数をバランスよく代表するという点では大きな問題が

残る。

これに対し、主成分分析 (principal component analysis : PCA) は、手元に多量のデータがあり、それらを1つにまとめて総合的な評価を行おうとする際に、個々の変数が持つ元の情報をできるだけ保存しながら、それらを効率よく合成し・圧縮し、少数の成分にまとめる統計手法の1つである。変数が数多くある場合、主成分分析を使うことで、変数の分散と個々のデータ間の相関関係も加味しながら、全体のデータの情報を効率よく代表する値を取り出すことができる。ほかに、取り出された成分を切り口として、変数やケースの関係を概観することも可能となる。

最初に取り出される第1主成分で圧縮しきれない情報は第2主成分に集められ、そして、第2主成分でも圧縮しきれない情報は第3主成分以降にまとめられてゆく。第1主成分は元の情報を最も多く含んでいるが、第2主成分、第3主成分となるにつれて包含する元の情報量は減ってくる。理論的には、主成分の数は最大変数の数と同じだけ求められる。しかし、主成分分析は変数の圧縮が目的であるため、多くの場合、第1主成分を中心として、第2主成分、もしくは第3主成分までで結果の解釈を行う。

平均をとる場合、各変数にかけられる重みが一律になるのに対し、主成分分析では、個々の変数にはそれぞれ独自の重みがかけられる。変数にかけられた重み (係数) を微妙に加減することで、データの全体が1個の値の中によりよく代表されるよう調整を行う。

Seagull-Stat で主成分分析を実行すると、出力結果として、相関係数行列、主成分ごとの固有値・寄与率表、固有ベクトル表、主成分負荷量、及びそれに基づいて変数を散布図にプロットする負荷量散布図、主成分得点、及びそれに基づいてケースを散布図にプロットするスコア散布図が得られる。

このうち、固有値・寄与率表では、解析により得られた固有値 (eigenvalue)、寄与率 (contribution)、累積寄与率 (cumulative contribution) の3種類の値が表示される。固有値は、合成変数として作られた主成分の分散であり、当該主成分のデータ説明力を表す値である。この値が大きいほど、元データの情報を多く含んでおり、相関行列を用いた分析は、通例、固有値 1.0 以上のものを有効な主成分として採用する。寄与率は、固有値の総分散に対する比率を百分率で示した値である。累積寄与率は、その成分までの寄与率の総和である。累積寄与率と固有値を併用することで、分析対象とする主成分の数を決めるのが普通である。

固有ベクトルは、個々の変数にかかる重みのことで、主成分負荷量はそれを調整した値

で、0～±1の範囲を取る。これら2つの統計量は相互に比例の関係にあり、同じことを別の基準で示しているだけなので、通例は主成分負荷量表のみを見ておけば良い。

負荷量散布図は主成分負荷量を基準として変数の関係を横軸・縦軸の2次象限の散布図上に布置したものである。

主成分得点は、個々のケースがそれぞれの主成分によって特徴づけられる度合いを示す得点（スコア）であり、それをグラフ化したスコア散布図もともに表示される。スコア散布図を見る際には、負荷量散布図の分析結果と比較しながら解釈していく必要がある。

(pp.193-217)

3.4.2 コレスポネンス分析

本研究では、5章において、活用上の選好性によって漢語サ変動詞を分類する目的で、コレスポネンス分析を使用する。

コレスポネンス分析（correspondence analysis）とは、頻度表における行・列の関係を組み替え、頻度表に含まれる情報を少数の成分（次元）にまとめることで、行・列を整理する解析法であり、対応分析とも呼ばれている。行と列を区別せずに分析を行うことができ、また、行と列の入れ替えを行っても分析結果が変わらないため、コレスポネンス分析は幅広く使用されている。

コレスポネンス分析において、列の方向と行の方向に入れるデータはそれぞれ第1アイテムと第2アイテムと呼び、各アイテムは複数のカテゴリを持ち、コレスポネンス分析は、そこに含まれる情報を少数の成分に圧縮し、それらの関係を散布図上に布置することで、データを視覚化する。

コレスポネンス分析の結果として、まず固有値・寄与率・累積寄与率の表が表示され、その次に各アイテムの得点表、そして次元散布図が出力される。

固有値と寄与率はともに、それぞれの次元が第1アイテムと第2アイテムの連関をどれくらい説明できるかを表す指標である。固有値を百分率に加工した値が寄与率である。累積寄与率はその次元までの寄与率の総和であり、その値がどの程度であれば分析がうまくいっているかを示す基準は存在しないが、第2次元までで80%程度の値が出ていればおおむね分析がうまくいっていると推定される。

アイテムの得点表には、個々のアイテムに与えられる重みやスコアが示されており、それにより、各データが横軸と縦軸でなす象限にプロットされる位置が決まる。それをグラ

フにしたものが散布図である。コレスポンデンス分析では、アイテムの合成と各アイテム別の2種類の散布図の出力が可能となる。散布図における軸を正負で区別するのが基本の解釈方法である。第1アイテムと第2アイテムをあわせて解釈することで、考察を深めることが可能である。これもコレスポンデンス分析の優れたところである。(pp. 245-264)

3.4.3 クラスタ分析

本研究では、7章自他性によって漢語サ変動詞をグループ化する際、また10章中国人日本語学習者の漢語サ変動詞に対する理解度や意識などを明らかにする際に、クラスタ分析を利用する。

クラスタ分析 (cluster analysis) とは、データが持つ情報を手掛かりにして、距離の近いデータ同士をまとめてクラスタ (群, 集落) を構成する統計手法である。データ間の距離を計算することは、非類似度の計算とも呼ぶ。

クラスタ分析は、方法や目的によっていくつかのタイプに区分できる。分析方法の違いによって階層的クラスタ分析と非階層的クラスタ分析、分析しようとするデータの種類の違いによってケースクラスタ分析と変数クラスタ分析とに分かれる。

階層的クラスタ分析は、散らばった個々のデータについて、最も類似したものを順番に仲間に入れながら次第に大きな階層構造を持つ集合を作っていく方法であり、普通、クラスタ分析と言えば、階層的クラスタ分析を指すことが多い。階層的クラスタ分析を行った結果として、樹形図が得られる。それに基づき、分析者が手元のデータをいくつかのクラスタに分類するかの判断を行う。一方、非階層的クラスタ分析は、手元のデータをいくつかのクラスタに分析するか、分析者が事前に決めておかなければならない。

階層的クラスタ分析では、(1) 個体データをそれぞれ1個のクラスタと考える、(2) 全クラスタ間で最も距離が近い2つのクラスタを新しいクラスタに融合する、(3) 新しいクラスタと残りのクラスタ間で距離を再計算する、(4) 上記の手順(2)と(3)を必要な回数だけ反復する、(5) 全クラスタが融合された時点で分析を終了する、という流れで、クラスタを形成していく。

また、ケースクラスタ分析と変数クラスタ分析についてであるが、前者はケースを手掛かりにして変数を分類することで、後者は変数を手掛かりにしてケースを分類することである。階層的クラスタ分析はケースクラスタと変数クラスタの両方に対応しているが、まず、自分の手元のデータにおいて、ケースと変数がそれぞれ何になっているか

を確認し、行おうとする分類はケースクラスター分析か変数クラスター分析かを見極めることが必要である。

クラスター分析を行う際、注意しなければならないのは、コーパスの尺度差の補正のことである。頻度データ間の距離、または非類似度計算において、前提となるのは、個々の頻度の尺度や単位が揃っているということである。分析に使用するコーパスのサイズは、多くの場合一定ではないため、粗頻度をそのまま使うと、正しい非類似度の計算ができなくなるので、何らかの補正が必要になる。補正方法として、粗頻度を100万語あたりの調整頻度に変換しておくことか、粗頻度を標準得点(z得点)に変換することが考えられるが、いずれの補正方法を選ぶかは分析目的による。Seagull-Statでは、非類似度表・要約表、樹形表、クラスター間平均表が出力される。とくに出力される樹形表によって直観的・視覚的な分析・解釈が可能となる。(pp.163-176)

3.4.4 重回帰分析

本研究では、8章において、統語的特性や語彙的特性などに関わる様々なパラメタのうち、漢語サ変動詞の動詞性の強さに関与するパラメタを特定する目的で重回帰分析を使用する。

そもそも回帰分析(regression analysis)とは、相関する関数間の関係を数学的な因果モデルで表現する統計分析の手法である。因果モデルであるため、変数は「原因」と「結果」に区別される。回帰分析を使うことで、原因となる変数を使って結果となる変数を説明したり、原因となる変数から結果となる変数を推定したりすることができる。よって、原因となる変数はまた「説明変数(explanatory variable)」と呼ばれ、結果となる変数は「目的」にあたる変数のため、「目的変数(criterion variable)」とも呼ばれる。説明変数と目的変数の関係を表す数式は回帰式と呼ばれる。

説明変数が1つだけの場合は単回帰分析(simple regression analysis)、それが2つ以上の場合は重回帰分析(multiple regression analysis)と呼ばれる。回帰分析の手法を使うことで、説明変数や目的変数の関係を記述的に概観する記述型分析も、説明変数で目的変数を予測する予測推定型分析も可能である。コーパス研究では、後者よりも、前者の記述型研究が多い。なお、重回帰分析では、説明変数の数が増えることから、分析の精度は自動的に上昇する。このため、異なる重回帰モデル間で精度の比較を行う場合は、通例、説明力の調整を行う。

重回帰分析において、説明変数の選択を行うかどうかは研究目的によって決まる。Seagull-Stat では、説明変数を選択する方法として、「全変数法」、「変数増減法」、「変数減増法」の3通りがある。「全変数法」は、手元の説明変数をすべて使って回帰モデルを作る手法で、「変数増減法」と「変数減増法」は、多数の説明変数候補の中から、選択する変数を事前に固定せず、変数を増やしたり減らしたりすることで、統計的に最適の変数を決定し、最も妥当性の高いモデルを作る手法である。

重回帰分析の結果において、相関係数行列、重回帰式、偏相関係数・偏 F 値表、分散分析表、決定係数、重相関係数、赤池の情報量基準、ベイズ情報量基準、回帰係数他、残差の検討表、及び散布図・折れ線グラフなどが出力される。

相関係数行列については、異常に高い相関係数（目安として.8 以上）が説明変数間で出ていないかどうかの確認が必要である。説明変数間に高い相関があるということは、モデルに導入した変数の情報が重複している多重共線性（multicollinearity、マルチコとも呼ばれる）という問題が生じていることを意味する。

偏相関係数・偏 F 値表は、導入した変数を検討するためのものである。そこでは、各々の説明変数が目的変数との偏相関係数と回帰式の係数の有意性の判定基準である F 値が表示される。 F 値が最も高いほうが第1説明変数である。

分散分析表においては、モデル中で自由に値を決められるデータの個数を表す自由度、元のデータが持っている情報の総和(全体)と回帰式で実際に説明できている情報(回帰)、説明し残した情報(残差)を表示する偏差平方和、回帰式と残差のそれぞれが持つ情報を表す不偏分散、回帰式と残差の情報量の比率を表す分散比 (F 値)、及び確率値 (p 値) が表示される。

決定係数、重相関係数、赤池の情報量基準、ベイズ情報量基準などは、回帰モデルが目的変数をどの程度説明しているかを評価する基準値である。重相関係数は回帰式によって得られた予測値と、実際に観測された目的変数との相関の強さを示す値で、決定係数は重相関係数の2乗値のことである。一般には、この2つの値を見ておけばよい。赤池の情報量基準とベイズ情報量基準は、ともに値が低ければ低いほどモデルの妥当性が高いということになる。

回帰係数他において、標準偏回帰係数、偏相関係数、標準誤差、 t 値、 p 値、偏 F 値、VIF が表示される。標準偏回帰係数は、モデルに投入された変数のそれぞれが目的変数に与えている影響を相互に比較する場合の指標である。偏相関係数は目的変数との相関を示す値

である。標準誤差は回帰係数の安定性の指標で、次の t 値の算出に用いられる。 t 値は個々の変数の有意性を判断する手掛かりで、回帰係数を標準誤差で割ることによって得られる。 p 値はモデルの有意性を確認するための値で、偏 F 値は事前に定めた変数導入の要件のことで、VIF は、多重共線性の診断基準となる指標である。

残差の検討表において、変数ごとに得られた回帰式による推定値と実際の観測値を比較してみることで、全体の中に著しいはずれ値があるかどうかを確認するためのものである。
(pp. 105-152)

3.4.5 t 検定・ F 検定と分散分析

本研究では、9 章において、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞意識を調査する際に、学習者の漢語サ変動詞理解の二面性についての自己評価を比較する目的で t 検定や F 検定を使用し、学年別意識比較を行う目的で分散分析を使用する。

t 検定は、2 つの平均値に本当に有意な差があるかどうかということを含意するために使われる。2 つの標本の平均値が見かけ上差があるように思えても、母集団においても差があると断言できないため、 t 検定による検証が必要になる。

ただし、 t 検定は 2 つの平均値間の比較しかできなく、3 つの標本以上の比較には、分散分析が必要になる。分散分析では、一元配置分散分析と二元配置分散分析などが含まれるが、一元配置分散分析と二元配置分散分析が最も多く使われる。一元配置分散分析の場合、一要因の分析のみ行われ、二要因の被験者間の分散分析は、二元配置分散分析を使う。また、二元配置分散分析には、被験者間の個体数が等しくても異なっても分析が可能である。さらに、2 つ以上の要因それぞれが影響を与えているかどうかのみならず、2 つの要因が共に作用した交互作用が有意かどうかを検証することも可能なため、非常に便利である。

第Ⅱ部 漢語サ変動詞の諸相

第4章 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定

以上、序章と第Ⅰ部（2章と3章）において、漢語サ変動詞の定義、漢語サ変動詞をめぐる研究、また、漢語サ変動詞に関するさまざまな研究アプローチについて概観してきた。第Ⅱ部からでは、漢語サ変動詞をめぐる様々な問題に焦点を当て、調査を進めていくこととしたい。まず、本章においては、高頻度、かつ、汎用的な漢語サ変動詞の特定を行う。

すでに述べたように、日本語漢語サ変動詞には、きわめて多様な語種が存在する。それらの中で、現代日本語において、高頻度に、かつ、汎用的に使用される語彙項目を特定することには、以下の2つの意義がある。

1 点目は、言語学的な意義である。すでに先行研究で触れたように、従来の国語学や日本語学の研究の多くは、言語理論の構築を主な目的としており、漢語サ変動詞をめぐる議論についても、個々の漢語サ変動詞の頻度に着目した研究はほとんどなされていなかった。すなわち、現代日本語において、きわめて広く、かつ、高頻度に使用されるものも、例外的にしか使用されないものも、基本的に同じ語彙項目と見なされ、それらを等しく説明する言語モデルの検討が行われてきたのである。このように、すべての漢語サ変動詞を網羅的に説明するモデルを検討することには言語学的意義が認められるが、一方で、幅広い漢語サ変動詞を対象にするがあまり、構築されたモデルが拡散し、漢語サ変動詞が持つ中核的な振る舞いのモデル化が必ずしも望ましい形で達成されていない可能性も残る。つまり、無数の漢語サ変動詞の中から、信頼できる言語データに基づいて典型的なものを抽出し、それらに限ったモデルを構築することで、漢語サ変動詞の特性をより明確に捉えることができると考えられるのである。本章において、コーパスに基づいて特定される高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、本論文における以後の分析の基礎データとなるものである。

2 点目は、日本語教育的な意義である。すでに序章で示したように、現在の日本語教育において、漢語サ変動詞は個々の動詞用例そのものとしては提示されているものの、漢語サ変動詞としてそれらを体系的に整理し、その特徴を示すことは行われていない。すなわち、日本語学習者が漢語サ変動詞を学習しようとしても、学習の基礎資料となるリストが存在しない状況となっている。本章で特定される高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、こうした学習者が学習を進めるうえでの足場となる教育的リストとしても有用なものとなろう。無数の漢語サ変動詞の中から、ジャンルを問わず、汎用的に、かつ、多く使用される漢語サ変動詞をその重要度の順番に従って学んでいくことにより、学習者は現代日本語の語彙

の中核をなす漢語サ変動詞を効率的に学習していくことが可能になる。

以上をふまえ、現代日本語における高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行おうとすると、前述のように、信頼できるコーパスデータから頻度情報を取得して、調査を進める必要が生じる。その際、留意すべきは、現代日本語と一口に言っても、そこには様々なジャンルが含まれることである。つまり、日本語を構成する各ジャンルにおける漢語サ変動詞の頻度を細かく調べたうえで、どのような状況においても共通して多用される漢語サ変動詞を特定する必要がある。実際、コーパス全体で高頻度であれば、汎用的であるという仮定は必ずしも成り立たない。というのも、特定のジャンルに限って例外的に高頻度に使用されている可能性が存在するためである。たとえば、全体で10ジャンルがあった場合、1ジャンルで100回出現し、他ジャンルではまったく出現しない語と、すべてのジャンルで10回ずつ出現する語があれば、後者のほうが重要性が高いことは自明であろう。

以上で述べたように、高頻度性と汎用性は必ずしも一致する概念ではない。では、これら2つをともに満たす漢語サ変動詞を信頼できる形で特定するにはどのような手法が必要になるのであろうか。本研究では、異なる変数から均衡的な代表値を取り出す主成分分析を利用することで、この問題に対処することとしたい。

4.1 本章の目的と構成

すでに述べたように、本章で行おうとするのは、言語学的・日本語教育的ニーズをふまえ、現代日本語において、幅広く、かつ、高頻度に使用される漢語サ変動詞を特定することである。

以下、4.2においては、この目的に沿い、リサーチクエスションを設定する。4.3では、使用データの紹介をする。4.4では、本論文が調査対象とする漢語サ変動詞について、詳細な定義、及びその理由について説明する。4.5では、リサーチクエスションに沿って、それぞれの手順を説明する。4.6では、上述のデータを用いて、漢語サ変動詞の頻度調査を実施する。そのうえで、頻度情報を手掛かりとして、主成分分析（詳細は3章）を利用して、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行う。

4.2 リサーチクエスション

前節でも述べたように、本章では、現代日本語を構成する様々なジャンルにおける頻度情報を合成したうえで高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を目指す。その際、あらかじめ

確認しておくべきことは、そもそも変種が異なれば、漢語サ変動詞の使用頻度に差が生じるのか否かという点である。この際、漢語サ変動詞の全体的使用量と個々の漢語サ変動詞の使用量の両方を調査する必要があるだろう。そこで、本章ではまず、様々な日本語変種において、漢語サ変動詞の頻度に差があるかどうか、差があるとすれば、具体的にどのような内容的違いが観察されるのかについて調査と確認を行う。そのうえで、多様な変種における漢語サ変動詞の頻度を合成することで、どのような重要漢語サ変動詞を抽出できるかを検討していく。よって、以下の3つのリサーチクエスチョンを設定する。

- RQ1 現代日本語の各変種において、漢語サ変動詞の全体的使用量に差はあるか。差がある場合、どのような違いが存在するか。
- RQ2 現代日本語の各変種において、高頻度に使用される具体的漢語サ変動詞には、どのような違いが見られるか。
- RQ3 各変種の頻度情報を統合することで、どのようなものが高頻度・汎用的漢語サ変動詞として抽出されるか。

4.3 使用するデータ

すでに 3.2 節で述べたように、本研究では、現代日本語コーパスとして、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を使用する。

BCCWJ は、書籍、雑誌、新聞、白書、知恵袋、ブログなど、13 種のジャンルの日本語を包含したものであるが、すでに述べたように、日本語教育の観点から考えた場合、すべてのジャンルを調査するのが必ずしも適切であるとは言えない。本論文では、これら 13 種のジャンルの中から、一定数の読者を持ち、日本語学習者にとっても重要であると考えられる書籍、雑誌、新聞、白書、知恵袋、ブログの 6 種に限り、頻度調査を行っていく。その際、書籍データについては、「出版・書籍」と「図書館・書籍」を統合し、かつ、ほかのジャンルとの量的バランスを改善するため、日本十進分類法 (NDC) による 10 ジャンルをそれぞれ独立した変種と見なす。これにより、本研究が調査対象とする変種の数 は 15 種となる。実際に、分析に使用した変種区別とそれぞれの語数比率についてまとめたものは、以下のとおりである。本研究で調査対象となるデータ量は、短単位で言うと 87847010 語に相当する。こうして決めた 15 変種それぞれのデータ量 (語数)、及び全データの語数の合計を示すと、以下のようになる。

表1 変種別語数

	変種	語数	比率
1	書籍・総記	1397210	1.59
2	書籍・哲学	2992430	3.41
3	書籍・歴史	5699198	6.49
4	書籍・社会科学	13230740	15.06
5	書籍・自然科学	4439248	5.05
6	書籍・技術・工学	3984033	4.54
7	書籍・産業	2185056	2.49
8	書籍・芸術	3879473	4.42
9	書籍・言語	940783	1.07
10	書籍・文学	17950282	20.43
11	雑誌	4444492	5.06
12	新聞	1370233	1.56
13	白書	4882812	5.56
14	知恵袋	10256877	11.68
15	ブログ	10194143	11.60
	合計	87847010	100.00

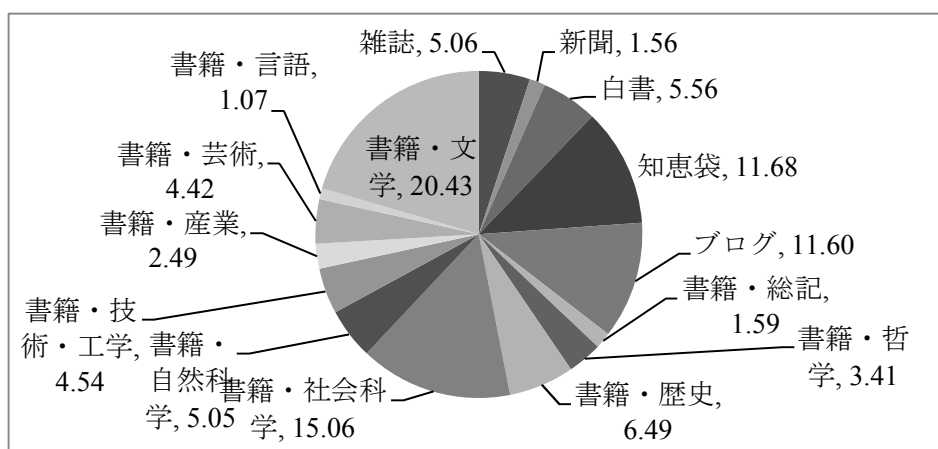


図1 変種別比率

以上の 15 変種は現代日本語に含まれるすべての変種を網羅したものとは言えないが、上記の 15 変種をそれぞれ調査・比較することにより、現代日本語の諸相を一定の範囲で反映した多様なデータを見ることができると考えられる。

4.4 調査対象とする漢語サ変動詞の定義

3 章で述べたように、本研究では、調査対象を 2 字漢語サ変動詞に限る。ただし、具体的に用例を検証していくと、多くの境界例が存在することに気が付く。そこで、統一した処理を行うために、本研究が対象とする漢語サ変動詞の決定ルールを以下のように定める。

「X」は語幹部漢語を示す。また、「X する」には「する」の活用形を含める。

- (1) 「X する」の形が存在する。
- (2) 「X する」が全体として何らかの動作もしくは変化を表す。
- (3) 「X」は原則として 2 文字とする。ただし、「X」が 3 文字以上の場合であっても、後項 2 文字だけで独立した語として成立し、かつ、動作・変化的意味を持つ場合は、「後項 2 文字+する」の形で対象に含める。

以上のルールにより、本研究で対象になるものと対象にならないものは、以下のようになる。

表 2 本研究が対象とする漢語サ変動詞の例

	対象となるもの	対象とならないもの
「X」が 2 文字	感謝する，一致する， 1 泊する，2 分する	艶々する，毎日する
「X」が 3 文字	お返事する（→返事する），再確認する （→確認する），一安心する（→安心する）	不自由する，土下座する
「X」が 4～文字	調査検討する（→検討する），悪戦苦闘する （→苦闘する），固定（録音・録画）する	右往左往する，意気投合する

まず、語幹部漢語「X」が2文字のものについては、たとえば、「感謝(する)」や「一致(する)」などが一般的であるが、これらはすべて対象に含める。また、「1泊(する)」や「2分(する)」など、数字を含むものについても、これらは漢数字の異表記と見なして、対象に含める。一方、「艶々(する)」は形容詞的に状態を描写したものであり、また「毎日(する)」は副詞的に「する」を修飾したものであって、上記のルール(2)に抵触するため、対象外となる。

次に、「X」が3文字のものについては、上記のルール(3)に基づいて対象に含むかどうかを決定する。たとえば、「再確認する」や「一安心する」は、冒頭の「再」や「一」をとって、「確認する」や「安心する」の形としても漢語サ変動詞として成り立つので、対象に加える。一方、「不自由する」と「土下座する」については、冒頭の「不」と「土」を除くと、「自由する*」「下座する*」となって、語として成立しないことから、対象より排除される。また、ルール(3)により、「(お)返事(する)」などの例も含まれる。

最後に、「X」が4文字以上の複合漢語についてであるが、たとえば、「調査検討する」や「悪戦苦闘する」などは、後項2文字だけでもそれぞれ「検討する」、「苦闘する」といった漢語サ変動詞として成り立つため、上記のルール(3)に基づき、対象に含める。また、「固定(録音・録画)する」の場合は、本来は、「固定する」「録音する」「録画する」という丸括弧を含む三つの漢語サ変動詞の短縮表記と考えられるが、本調査では、原則として括弧内を省略する立場をとり、つまりは、「固定する」の用例として扱う。一方、「右往左往する」、「意気投合する」については、後項2文字部だけで語として成立しなく、ルール(3)に抵触するため、対象外となる。

なお、「Xする」の「X」部分が3文字以上からなるものについては、上記のルール(3)により、「後項2文字+する」の形が成立すれば対象に含めるわけであるが、当該形が日本語として成立するかどうかの判断は時に主観的となりうる。そこで、当該形がコーパス内で2例以上出現していることを当該形の成立根拠とする。「不自由する」の例で言うと、「自由する」の形が仮にコーパス内で2例以上存在していれば、対象に含めることになる(2例以上とすることで、特殊な効果を狙った一回限りの例外的用例などが排除できる)。

こうした基準により、以下の例(1)～(5)のようなものは調査対象として認められ、(6)～(11)のようなものは排除されることとなった。

- (1) 武者の晴れ舞台であるいくさ場で逃げ出せば、死んだも同然だ。立ち往生しかけた与貞の馬へ、将門を乗せた驪竜が泡を嚙んで押しせまってくる。……
(書籍・文学 LBq9_00084)
- (2) ミスターXのパーティに持ってくる台所用品とリネンの種類について再確認してください。リネンはすべて前もって持ってきて、必ずコニーが洗い直すことが……
(書籍・文学 LBr9_00037)
- (3) ……母のためにはよかったようである。一安心していると、姉から電話がかかってきて、「やっぱり退院させたの……」
(書籍・文学 LBJ9_00035)
- (4) ……。任されて悪戦苦闘している生徒の心を支える言葉である。この言葉をかけることで、……
(書籍・社会科学 LBf3_00004)
- (5) ……についての了解を得なくても、その実演を固定（録音・録画）することができることとされています。
(書籍・総記 PB20_00089)
- (6) …大刀を右に横たえ、菊一文字の脇差をたばさみ、野袴の旅装のまま土下座し、御所を遥拝している像である。……
(書籍・歴史 LBo2_00063)
- (7) ……から谷中小学校までは道の両側に商家がならび普通の買物には不自由することがなかった。
(書籍・技術・工学 LBf5_00005)
- (8) ……その頃、伊達物産の清水さんと知り合い、意気投合して、いいものを作るということならぜひ参加させてほしい……
(書籍・技術・工学 LBm5_00015)
- (9) ……すぐに頭に血が上る人のちょっとした言動に一喜一憂するのは、自分に自信がない証拠といえよう。
(書籍・哲学 LBt1_00015)
- (10) ……横江には、再出発の資金が必要だった。これまで、四苦八苦して、自分一人の才覚で生きのびようとしたが、結局、失敗に終わっている……
(書籍・文学 LBd9_00065)
- (11) ……小屋から帰ってくると真っ白になっているの・・本当は毎日したほうがいいの
でしょうが……
(ブログ OY14_14596)

以上で示したように、本論文が対象とする漢語サ変動詞は、語幹部漢語「X」が2文字のものから、3文字や4文字の複合漢語の一部まで、多岐にわたる。このように、幅広い定義を採用したのは、漢語サ変動詞は、独自に使われる場合だけでなく、複合漢語サ変動

詞の一部として使われる場合も多いことを考慮したためである。

4.5 研究手法

この節では、リサーチクエスチョン順に研究手法を具体的に述べる。

まず、RQ1「変種別漢語サ変動詞の全体的使用量」については、15 変種ごとに、中納言を用いて漢語サ変動詞の抽出を行う。その際、検索対象を「スル（語彙素読み）」に指定する。出力された結果をすべてダウンロードし、前述のルールと照合して、対象語の特定を行う。その後、変種ごとに出現しているすべての漢語サ変動詞の総頻度を調査したうえで、100 万語あたりの調整頻度に換算して比較を行う。このことにより、15 変種における漢語サ変動詞に差があるかどうかを確認する。

後述するように、言語変種により、漢語サ変動詞の出現量が異なる。ただし、漢語サ変動詞の使用量の多少をより厳密に確認するためには、同じ意味を持つ和語の頻度についても確認する必要がある。そこで、この点を検証するために、両言語変種を代表するテキストタイプをそれぞれ一つ選び、個々の漢語サ変動詞に対応する和語の頻度を加味した漢語サ変動詞選択率に算出して検証を行う。たとえば、漢語サ変動詞「調査する」の頻度が 10 回、対応する和語「調べる」の頻度が 20 回であったとすると、漢語サ変動詞選択率は 33.33% となる。一方、漢語サ変動詞「確認する」の頻度が 15 回、対応する和語「確かめる」の頻度が 15 回であったとすると、漢語サ変動詞選択率は 50% となる。単に頻度が多いのみならず、漢語サ変動詞選択率が多いことを確認することで、言語変種と漢語サ変動詞の選択の関係性をより多元的に確認することが可能になる。なお、それぞれの漢語サ変動詞に対応する和語は複数の国語辞典における定義文中で使用されている語を中心として選んだものである。

RQ2「日本語の各変種における高頻度漢語サ変動詞」については、15 変種ごとに高頻度に使用されている漢語サ変動詞を個別的にリストアップし、サンプルとしてそれぞれの上位 5 語を概観する。このことにより、15 変種それぞれにおける高頻度漢語サ変動詞の大まかな特徴を捉える。

次いで RQ3「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」については、すでに述べたように、頻度合成を行う漢語サ変動詞の候補として、まず、15 変種からそれぞれ高頻度上位 50 語、延べ 750 語を抽出する。実際には、同じ語が複数の変種で高頻度語となっていることから、これらの重複を除くと、750 語は 279 語となる。これらの語は、汎用的な漢語サ変動詞の

候補となりうるが、変種ごとの頻度を検証したところ、「出走する」と「共起する」の2語は、15変種中、1変種のみで上位50語に含まれていた。汎用的漢語サ変動詞を抽出するという本研究の目的に従い、この2語については、削除を行い、合計277種類を以下の分析の基礎資料とする。そのうえで、277語の漢語サ変動詞について、15変種から得られた頻度値を主成分分析にかけて頻度の合成を行う。得られた第1主成分を頻度合成値と見なす。なお、第1主成分得点に注目すると、277語の漢語サ変動詞は、主成分得点が正(+)となるものと負(-)となるものに分けられることとなる。正のものは、総合指標へのまとまりが強いもので、負となるものはまとまりが低く、変種間の差が相対的に大きいものを指す。繰り返して述べてきたように、変種を超えた高頻度・汎用的漢語サ変動詞を抽出するという観点から、ここでは、第1主成分得点が正になる語に限って選び出して、以後の分析の基礎データとする。

4.6 結果と考察

4.6.1 変種別漢語サ変動詞の全体的使用量

漢語サ変動詞の全体的使用量が変種によって差があるかどうかを見るため、変種別漢語サ変動詞の頻度を調べ、100万語あたりの調整頻度に換算すると、以下ようになる。

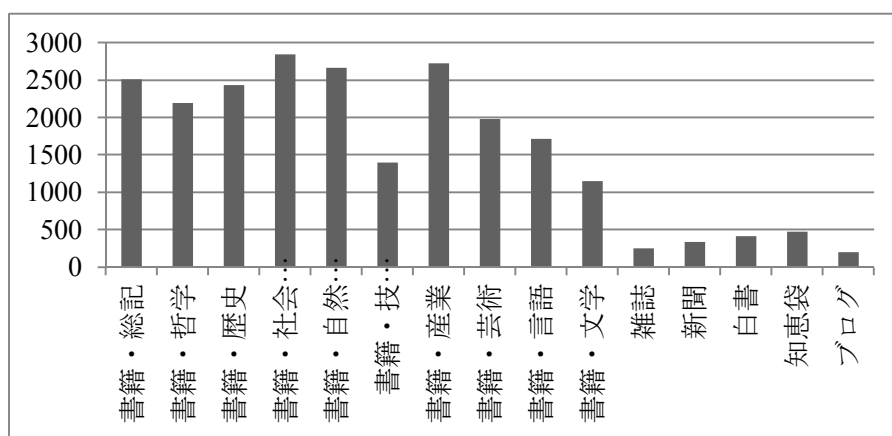


図2 変種別漢語サ変動詞の使用頻度 (100万語あたりの調整頻度)

上図からわかるように、漢語サ変動詞の使用頻度は変種間および内容種別間において、一定の異なりを見せている。以下各々について詳しく見ていこう。

まず、変種間の差について言うと、漢語サ変動詞の使用量は、書籍において多く、雑誌、

新聞、白書、知恵袋、ブログにおいて顕著に少ないことが明らかになった。次に書籍の内容種別について言うと、産業、社会科学、自然科学など、大半の分野において多く、文学において最も少ないという結果になった。これらをふまえると、比較的狭い読者層を前提として一定の専門性を持った情報を表出する言語変種では、漢語サ変動詞が多く使用されるのに対し、より広範な読者層を対象に一般的な話題を扱うことが多い言語変種では、漢語サ変動詞の使用量が限定的であるという傾向が明らかになった。

以上より、漢語サ変動詞の使用量は言語変種によって、また、内容種別によって大きく変化することが確認された。このことは、現代日本語を 15 変種に区分し、それぞれを独立した変種と見なし、漢語サ変動詞の出現頻度を調査することで、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行おうとする本研究のアプローチの妥当性を確認する結果となっていると言えよう。

上記で示したように、比較的専門性の高い言語変種において、漢語サ変動詞が多用され、一般性の高い言語変種において、漢語サ変動詞の使用が限定されるという傾向が明らかになった。日本語教育の観点から言うと、こうした傾向は、学習者に提示すべき情報として価値のあるものと思われるが、この点については検証が必要である。というのも、漢語サ変動詞は意味上、対応する和語をもっているためである。仮にある言語変種で「調査する」という漢語サ変動詞が多かったとしても、同時に「調べる」という和語も大量に使用されているとすれば、必ずしも「調査する」という漢語サ変動詞が当該言語変種において典型的に多用されているとは言えない。この場合はむしろ、「調査する」や「調べる」に関係する概念が多く出現していることになるだろう。一方、ある言語変種において、漢語サ変動詞である「調査する」が大量に出現しており、かつ、それに相応する「調べる」の出現量が少ないとすれば、その言語変種において、漢語サ変動詞としての「調査する」が顕著に多用されていることになる。

ここでは、一定の専門性を持つ言語変種の代表として「書籍・総記」を、また、広範な読者層を対象に一般的な情報を提供する言語変種の代表として「新聞」を選び、任意の 4 組の漢語と和語のペア（「確認する／確かめる」、「利用する／用いる」、「認定する／認める」、「勉強する／学ぶ」）を用い、両表現の総頻度に占める漢語サ変動詞の選択率（%）を比較した。結果は以下のようになる。

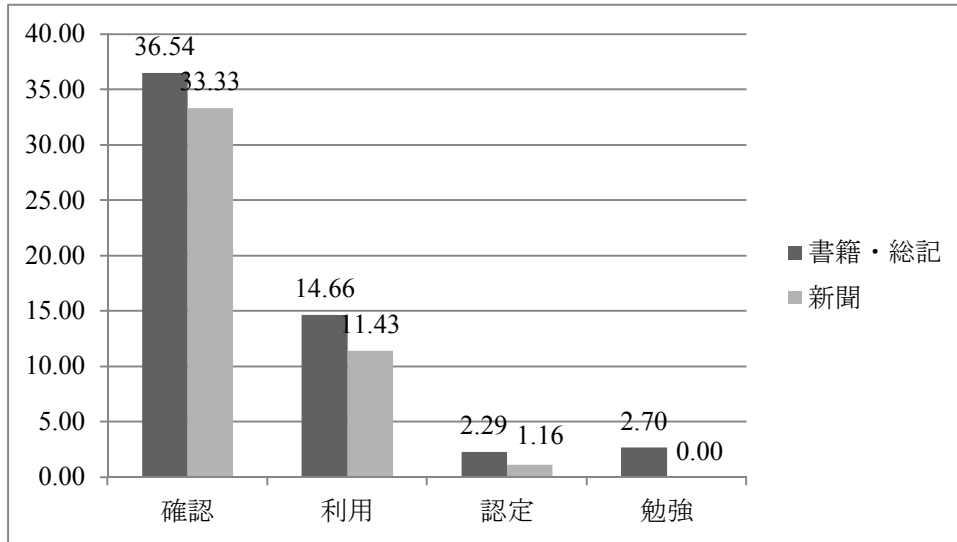


図3 漢語サ変動詞選択率 (%)

サンプルに用いた4組のサンプル語は、絶対的頻度には差があったが、すべての場合において、「書籍・総記」のほうが「新聞」より、漢語サ変動詞の選択率がより高いことが確認された。これにより、前半で得られた結論、すなわち、比較的専門性の高い言語変種において漢語サ変動詞が多用され、一般性の高い言語変種において漢語サ変動詞の使用が限定されるという傾向は、漢語サ変動詞選択率の点からも裏付けられた。

4.6.2 日本語の各変種における高頻度漢語サ変動詞

前節でも確認されたように、現代日本語における漢語サ変動詞の使用は、各変種間において差が存在している。このことから、各変種において、高頻度に出現している漢語サ変動詞の内容にも異なりがあると推定される。よって、本節において、15変種それぞれにおいて高頻度に出現している漢語サ変動詞の上位5語に限って確認を行う。各変種における高頻度上位5語は以下のとおりである。

表3 変種別高頻度漢語サ変動詞（上位5語・100万語あたりの調整頻度）

	書籍・総記	書籍・哲学	書籍・歴史	書籍・社会科学	書籍・自然科学
表示する	65	存在する 46	発見する 17	存在する 26	存在する 41
利用する	39	理解する 32	存在する 16	実施する 23	利用する 35

実行する	35	説明する	20	主張する	16	利用する	21	発生する	27
使用する	27	実現する	17	出土する	15	説明する	21	結合する	27
発生する	27	意味する	15	利用する	1	規定する	21	報告する	25
書籍・技術・工学		書籍・産業		書籍・芸術		書籍・言語		書籍・文学	
表示する	49	利用する	43	演奏する	19	存在する	39	説明する	12
使用する	47	提供する	39	表現する	18	説明する	34	結婚する	10
利用する	47	紹介する	28	紹介する	16	意味する	22	発見する	10
発生する	45	発生する	25	存在する	16	表現する	20	心配する	10
設定する	34	使用する	25	使用する	15	注意する	19	存在する	8
雑誌		新聞		ブログ		白書		知恵袋	
発売する	5	発見する	9	発売する	10	実施する	12	表示する	14
開催する	4	期待する	7	開催する	8	開催する	8	削除する	14
紹介する	4	予想する	7	紹介する	7	設置する	6	質問する	12
用意する	4	確認する	6	確認する	5	期待する	4	使用する	9
掲載する	3	注目する	6	期待する	5	決定する	3	購入する	8

以上、15 変種でそれぞれ上位 5 位に入っている語は、合計で 75 語となる。ただし、ここで注目すべきは、これら 75 語の中に、複数の変種に共通して上位語になっていること、少数の変種でのみ上位語となっている語が含まれていることである。高頻度・汎用的漢語サ変動詞に注目しようとする本研究の目的から言うと、単にいずれかの変種において上位に出現している語よりも、より多くの変種において共通して高頻度に出現している語の重要性が高いということになる。

上表で示された 75 語を異なり語数で整理すると、37 語となる。より多くの変種で同時に出現している語を特定するために、以下、これらの 37 語につき、上位出現が確認される変種の数を概観してみよう。

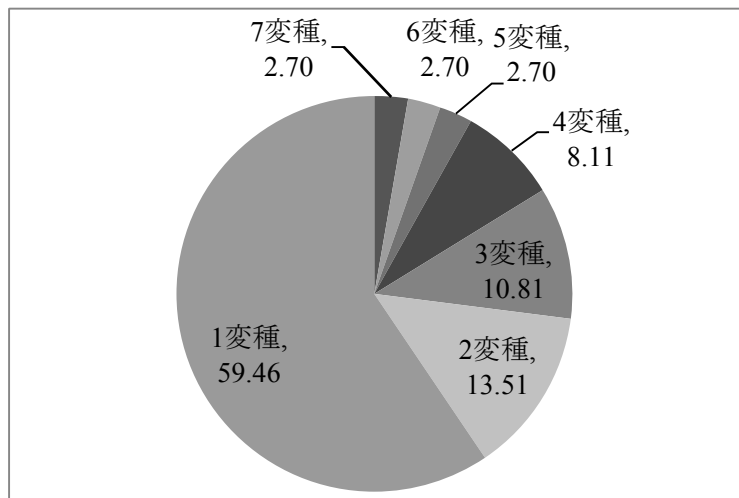


図4 高頻度漢語サ変動詞の変種数別比率

上図からは、これらの37語は重複の度合いにおいて、きわめて特徴的な分布を示していることがわかる。すでに前節の分析でも明らかになったように、高頻度漢語サ変動詞が、特定の変種に強く影響される語と、変種の影響を超えて現代日本語で幅広く汎用的に多用される語の2種類に分けられることが示唆されている。

もっとも、15変種のうち、共通して高頻度に出現している変種の数はいくつ以上であれば汎用語であり、いくつ以下であれば汎用語でないと決める基準は必ずしも明確ではない。ここでは、漢語サ変動詞の汎用性を計る一つの目安として、(1) 1変種にのみ出現しているもの(59.46%)、(2) 2~4変種で出現しているもの(32.43%)、(3) 5~7変種で出現しているもの(8.1%)、という3つのグループに分けることを提案したい。言うまでもなく、第1グループは、特定変種に緊密に関連するものであり、第2グループも変種の影響を比較的に強く受けていると言えるだろう。これに対して、第3グループは我々が重視する汎用的漢語サ変動詞により近い存在であると考えられる。以下では、これら3つのグループごとに実際のコーパス用例を紹介し、それぞれのグループに含まれる漢語サ変動詞の特性について検討していく。

まず、第1グループには、「実行する」、「理解する」、「実現する」、「主張する」、「出土する」、「規定する」、「結合する」、「報告する」、「設定する」、「提供する」、「演奏する」、「注意する」、「結婚する」、「心配する」、「用意する」、「掲載する」、「予想する」、「注目する」、「設置する」、「決定する」、「削除する」、「質問する」、「購入する」の22語が含まれる。以下では、変種ごとに一例を示す。

- (12) ……問題なく機能するかどうかチェックする必要があります。ほかの類似アプリケーションを実行してみて、問題点がないか確認してください。……
(書籍・総記 PB10_00092)
- (13) 夢の意味、つまりいまや機械がうまく機能するだろうという意味を本当に理解したとすると、それは、彼が新しい仕方で人生の道を歩み始めるだろう。
(書籍・哲学 LBq1_00002)
- (14) 印手式の伝統的甕とその最終型式であるナデ調整無文の平底甕が出土している。現状では印手式の行く末と消滅直前の姿を示す遺跡は……
(書籍・歴史 PB42_00156)
- (15) ……組合運動の歴史的発達の段階、あるいはまた個々の労働組合の発達段階を規定するといえよう。
(書籍・社会科学 PB33_00360)
- (16) ……これらの食細胞は微生物と結合した後、それらを細胞内にとり込んで分解する
(書籍・自然科学 PB34_00174)
- (17) ……、日常使っているパソコン用の電子メールアドレスを自由に設定して携帯電話に転送できます。
(書籍・技術・工学 LBo5_00006)
- (18) 一方で派遣スタッフには、望んでいる職場を提供しなければならない。両方の要求に応えることが派遣会社の重要な仕事になる。
(書籍・産業 PB46_00085)
- (19) 単に息を吸い込むだけではいけない。モーツァルトを演奏するというのは、息を吐くことだ！
(書籍・芸術 LBN7_00069)
- (20) この再確認をおこたると予約を取り消されることがありますので、注意しましょう。
(書籍・言語 LBa8_00006)
- (21) ついでに、桃代伯母様からうちの母にあんまり心配しないように伝えていただけるともっと嬉しいです。
(書籍・文学 PB39_00615)
- (22) 従って五月号に掲載された津島佑子氏の稿を連載一回目とし、順次連載回数を付し……
(雑誌 PM11_00735)
- (23) 二大政党制への動きが加速するかも注目される。長引くデフレ、北朝鮮との関係正常化や拉致問題、イラク復興支援など……
(新聞 PN4j_00005)
- (24) このほか、地方公共団体独自に外国人対応可能な案内所を設置している場合がある。
(白書 OW6X_00077)

(25) ……事前に質問しなかった落札者の落ち度というのも確かにありますが……

(知恵袋 OC14_00168)

これらの例はすべて特定の変種にのみ出現しているものである。この中には、「出土する」(「書籍・歴史」)や「規定する」(「書籍・社会科学」)や「演奏する」(「書籍・芸術」)のように、特定の変種と一般に結びついて連想される語が含まれている。一方で、「実行する」、「理解する」、「結合する」、「注目する」など、一般語と見なされるものも含まれている。上位5語というきわめて狭い範囲ではあるが、これまで一般的であると考えられてきた漢語サ変動詞が、実際には、特定の言語変種ないし内容変種と深く結びついて使用されていることは明らかになった。この点は従来ほとんど意識されておらず、今後日本語教育の分野において適当な注意を払うべき事柄であると言えるだろう。

続いて、第2グループに注目しよう。ここでは、2変種に共通して多用されているもの(「意味する」、「実施する」、「表現する」、「発売する」、「確認する」)、3変種に共通して多用されているもの(「表示する」、「開催する」、「発見する」、「期待する」)、および4変種に共通して多用されているもの(「紹介する」、「発生する」、「説明する」)の3種類が含まれる。以下では、2変種に出現する語の例として「発売する」、3変種に出現する語の例として「発見する」、4変種に出現する語の例として「紹介する」を取り上げて、実例を見ることにしよう。

(26) 雑誌連載をまとめた『YOUのこれからこれから』(宝島社)が発売されたばかり…
(雑誌 PM31_00289)

(27) 一日から数量限定で富山のご当地ラーメン「富山ブラック」の即席麺が発売された。
全国のサークルKとサンクスで販売されている。(ブログ OY11_09950)

(28) 千八百五十一年には金がニューサウスウェルズで発見されて、ゴールド・ラッシュ
が起りイギリスその他からの移住者が殺到した。(書籍・歴史 PB42_00168)

(29) 残念ながら良美さんの体内からはいっさい薬物は発見されていないそうです。
(書籍・文学 PB29_00332)

(30) 二機のフライトレコーダー(飛行記録装置)やヴォイスレコーダー(音声記録装置)
は発見されていない。(新聞 PN1e_00011)

(31) ドラマの撮影中ちょっと足を痛めたのがきっかけでスポーツマッサージを紹介され

て。それからあまりでしたね。 (雑誌 PM21_00081)

(32) 同店は市が作成した観光情報のホームページで紹介されたこともあり村岡裁判長は「大阪の観光資源として寄与し…… (ブログ OY03_11198)

(33) ここではこのm e t a 要素の指定方法を紹介します。 (書籍・技術・工学 PB15_00132)

(34) 汽船では新たに小型船舶を就航させたのでその関連記事を紹介する。下関市と北九州門司区間で連絡船を運航する関門汽船…… (書籍・産業 PB46_00003)

上記の例を観察すると、1 変種でのみ多用される漢語サ変動詞とは異なり、様々な変種において、意味が拡張的に使用されていることに気が付く。たとえば、(28) から (30) の「発見する」について言うと、(28) の「発見され」は「世の中に知られていなかったものを見つけ出すこと。初めて見つけること。」(『大辞林』第4版、三省堂) という原義による用法である。ところが、(29) 及び (30) における「発見され」は、「すでに存在すると知られているものを確認的に見つけ出した」という意味であり、原義が部分的に拡張されていることに気づく。また、4 変種に多用される「紹介する」(辞書義を載せる) について言うと、(31) と (32) は、「相手に新しい情報を伝える目的でそのことに言及する」という意味で使用されている。ところが、(33) と (34) においては、単なる「言及する」という意味を超えて、「具体的な説明を行う」という意味が含まれている。

以上の用例解釈から明らかなように、複数の変種で高頻度に使用される漢語サ変動詞は、語義的拡張を伴っている場合が多い。一般に、語の重要度を決めると考えられる頻度と汎用性という2つの概念について、とくに、汎用的と語義拡張の関係性が示唆されたことは興味深い事実であろう。

さらに、第3グループに含まれる、5 変種から 7 変種に共通して出現している「使用する」、「利用する」、「存在する」の3語について、实例を見てみよう。これらは全15変種中、3分の1から2分の1の変種において共通して高頻度に出現しているものであり、本研究の考える高頻度・汎用的漢語サ変動詞に最も近いものであると言えよう。

(35) もちろん仕様は公開されているので昔から他の OS でも使用されています。 (書籍・総記 PB20_00050)

(36) 仮に s e c t i o n ブロックが一つだけしかなかったり s e c t i o n 変数を使用

- しなかったとしてもこの name 変数を省略する… (書籍・技術・工学 PB55_00168)
- (37) 税関ではさらに麻薬の不法持込には麻薬犬を使用し水際での防止に力を注いでいます。 (書籍・産業 PB16_00025)
- (38) オリジナル選手限定コンセプト実在のプロ野球選手をいっさい使用しない。スタッフもすべてオリジナルオリジナル選手だけで構成する球団。 (書籍・芸術 PB37_00185)
- (39) 1.笑の略です。面白い事や楽しい事を表現するときに使用します。文字では感情を表現しにくいですから。2.レス = r e s p o n s e …… (知恵袋 OC02_00349)
- (40) とくにインターネットよりは高額だが安全で、帯域も広い I P - V A N を利用した J N X の活用が自動車産業の特徴といえる。 (書籍・総記 PB10_00063)
- (41) ……千八百五十三年に併合されてから流刑植民地として利用された。ここでは世界的に見ても含有量の多いニッケルとクロム…… (書籍・歴史 PB42_00168)
- (42) こうした場合には上場会社のセグメント情報を利用する、あるいは公開されている各業界別の指標を参考にすることも考えられる。 (書籍・社会科学 PB23_00723)
- (43) 現在、細胞移動方向を制御するために、基板表面に光リソグラフィーを利用して傾斜密度をつけてゼラチンを固定化することが試みられている。 (書籍・自然科学 PB14_00013)
- (44) 時代の流れとしては「独自ドメイン」はこれから多く利用されるものと思われませんがこのメリットとかかる費用とのバランスを考えて…… (書籍・技術・工学 PB15_00146)
- (45) 海上運賃の基本知識ですが現在もっとも利用されているのが…… (書籍・産業 PB16_00025)
- (46) ……同一の肉体としてとどまっておき生気づける力が存在しなくなっているわけでもありません。 (書籍・哲学 PB11_00076)
- (47) ……南内郭一帯で後期後半以降に内郭の外側から建物が存在しなくなることとの関係を示唆しているようである。 (書籍・歴史 PB52_00231)
- (48) この方法が有用性を発揮するのは製造原価明細表が存在せず売上原価の分解ができない場合です。 (書籍・社会科学 PB43_00708)
- (49) ハーシェル父子は彗星には生命が存在しないと示した。 (書籍・自然科学 PB14_00062)

(50) 『まごころ』あるいは『女人哀愁』や『旅役者』の上映プリントが長いあいだ存在しなかったためかもしれない。
(書籍・芸術 PB57_00017)

(51) 文の中で指示対象が同じ学生であったことを示すことに焦点が存在しており、談話
がその部分に進行するまでは、あえて不定冠詞を伴う名詞句……
(書籍・言語 PB58_00011)

(52) クリスマスを迎えるころにはこの世にはもうオナー・オブライエンは存在しなくなる。
彼女はオナー・ローガンになるんだ。その場が騒然となる……
(書籍・文学 PB59_00320)

すでに第2グループで見た、汎用性が高い語ほど、意味が拡張するという傾向は、ここでもより顕著な形で観察される。まず、5変種に多用されている漢語サ変動詞「使用する」を見てみると、(37)「麻薬犬」、(39)「笑顔の記号」のように、具体的ではっきりした物を対象とすることもできるが、さらに拡張して、(35)「仕様」、(36)「変数」のように抽象的な事物を対象物とすることもできる。また、(38)は、こうした意味拡張が顕著に生じた事例である。この場合、「使用する」は、「野球選手」を「使っている」というよりも、むしろ、「入れている」や「含めている」という意味で使われるようになっていく。また、「利用する」の場合も意味は段階的に拡張しており、それに伴って、動詞が取りうる目的語の幅も広がっている。たとえば、(40)の「地域」は実在物であるが、(43)の「ドメイン」は仮想物となっている。さらに、(41)の「情報」、(42)の「光リソグラフィー」（という技術）、(44)の「知識」では、抽象度がさらに上昇し、ある種の概念が対象とされている。さらに、7変種に共通して多用されている漢語サ変動詞「存在する」について見てみよう。はじめに、辞書で当該動詞の原義を確認したところ、「存在する」という動詞形の記載はなかったが、名詞系としての「存在」の意味は「人や事物があること、また、その人や事物」（『大辞林』第4版、三省堂）のように記載されていることが確認された。このことから考えると、「存在する」という動詞形の原義的意味は、「人や事物がある」であると考えられる。これをふまえて用例を確認すると、(53)から(59)に関しては、(53)「力」、(54)「建物」、(55)「明細表」、(56)「生命」、(57)「プリント」、(58)「焦点」、(59)「オブ・ライエン」のように、「存在する」の原義に近い意味から、意味が拡張して使われている例にかけて、実際の使用において非常に多様な意味拡張を見せることが確認された。

以上の用例を質的に検証することにより、複数の言語変種および内容変種において汎用

的に高頻度で使用されている漢語サ変動詞は、その多くが、何らかの意味的拡張を伴う可能性が示唆された。すなわち、複数の変種で汎用的に使用される漢語サ変動詞は、その多くが多義語となる。漢語サ変動詞の使用環境の汎用性を見ることで、語の多義性をある程度捉えられるということは、日本語教育の観点から見ても興味深い。というのも、日本語学習者の語彙学習における問題点の多くは語の多義性に関わるものだからである。

本節で行った概観は、われわれが目指す高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行ううえで有益な方法論の一つであるが、上位 5 語のみに着目して汎用性を判断した点において、一定の限界を持つ。また、頻度ランク情報のみを使用して、汎用性の強弱を判断した点においても問題が残る。高頻度・汎用的漢語サ変動詞をより信頼できる形で抽出していくためには、さらに幅広い語を対象とし、かつ、順位情報のみならず、頻度情報そのものも加味しながら、頻度と汎用性をバランスよく組み込んだ分析が必要になる。こうした観点から、次節においては、各変種における幅広い漢語サ変動詞の出現頻度を合成することで、より信頼できる形で、高頻度・汎用的の抽出を行いたい。

4.6.3 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定

前節では、15 変種の上位 5 語、合計 750 語 (37 種類) を集中的に分析した。分析により、多くの変種間に共通して使用されている漢語サ変動詞が存在することが明らかになり、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の抽出可能性がある程度確認された。本節では、前節の分析を拡張し、より幅広い漢語サ変動詞について、ランク情報のみならず、頻度情報を加味して語の選定を行うため、15 変種ごとに高頻度上位 50 語、合計 750 語を選び、そのうち、2 変種以上で共通して出現している 277 種類の変種別出現頻度に対して、異なる性質を持つデータを次元的に集約する場合に多く使用される主成分分析を適用したところ、以下の結果が得られた。

まず、「固有値・寄与率」についてであるが、分析により、10 個の主成分が得られたが、一般に固有値「1.0」以上の主成分が有効とされるということから、ここでは、固有値「1.0」以上の有効主成分は以下の 4 つであった。

表4 固有値・寄与率

成分	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4
固有値	5.75	1.99	1.56	1.23
寄与率 (%)	38.33	13.27	10.41	8.18
累積寄与率	38.33	51.6	62.02	70.19

上表より、主成分分析で得られた主成分のうち、第1主成分だけで全体のデータの情報の約4割を集約していることがわかった。第1主成分の寄与率は38.33%となり、決して高くないが、本研究においては、元のデータの分散の約4割を集約している第1主成分を、一定の妥当性のある頻度合成ができたものとみなして、以降の分析を進めることとする。続いて主成分負荷量に注目しよう。

表5 主成分負荷量

変数名	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4
書籍・総記	0.57	0.31	-0.57	-0.03
書籍・哲学	0.70	-0.52	0.10	0.14
書籍・歴史	0.75	-0.28	0.27	0.09
書籍・社会科学	0.82	-0.14	0.07	-0.34
書籍・自然科学	0.64	-0.18	-0.00	-0.21
書籍・技術・工学	0.74	0.25	-0.39	-0.28
書籍・産業	0.81	0.03	-0.07	-0.29
書籍・芸術	0.75	-0.10	-0.11	0.31
書籍・言語	0.56	-0.51	-0.10	-0.04
書籍・文学	0.58	-0.32	0.08	0.49
雑誌	0.53	0.54	0.20	0.23
新聞	0.37	0.36	0.56	0.16
ブログ	0.52	0.59	0.27	0.31
白書	0.33	0.33	0.48	-0.56
知恵袋	0.31	0.43	-0.56	0.21

主成分分析では、前の成分に直交するように次の主成分を取り出していく。すなわち、上表で示すように、取り出された4つの主成分は、それぞれ異なる性質を集約したものであると言える。各変数にかけられた主成分負荷量の正負に注目すると、第1主成分ではすべての係数の負荷量が正となっていることから、すべての変種における漢語サ変動詞の頻度を統合した「総合得点」になっていることが確認される。同様な分析を行うと、第2主成分は「ブログ」「雑誌」「知恵袋」などに高い正の係数がかかり、一方、「哲学」「言語」「文学」などに負の低い負荷量がかかっていることから、これは内容面において、「総合性」と「人文系分野」を峻別する主成分になっていると考えられる。次に、第3主成分負荷量に注目すると、第3主成分は「新聞」「白書」「ブログ」などに高い正の負荷量が、「書籍・総記」「知恵袋」「書籍・技術・工学」などに低い負荷量がかかっていることから、これらは、客観的情報を主観的に解釈・解説する言語変種と、客観的情報・事実を提示するタイプを分ける主成分であると考えられる。最後に、第4主成分は、「書籍・文学」「ブログ」「書籍・芸術」に正の負荷量がかかり、「白書」「書籍・社会科学」「書籍・産業」に低い負の負荷量がかかっている。このことから、第4主成分は主観的な思想や感情を伝達する文と、客観的事実を伝達する文を分ける成分であると考えられる。以上をまとめると、第1主成分で「総合性」が、第2主成分で「内容の総合性」が、第3主成分で「陳述の主観性」が、第4主成分で「内容の主観性」が集約できるようになる。本研究では、各変種を合成する総合性を取り出すことが目的であったが、われわれが考える総合性は、第1主成分にうまく取り出されていると考えられる。

では、ここで得られた「総合得点」としての第1主成分においては、どのような変種が重要であるのか。第1主成分の負荷量に注目すると、15変種の中では、「社会科学」(0.82)や「産業」(0.81)は相対的に大きな負荷量がかかっており、「ブログ」(0.52)など、書籍以外の変種においても一定の負荷量がかかっており、全体として日本語の多様な言語変種をバランスよく代表した指標値が取り出せたと考えられる。この点は、主成分負荷量を横軸・縦軸とする二次元象限上にデータを布置した負荷量散布図にもよく反映されている。

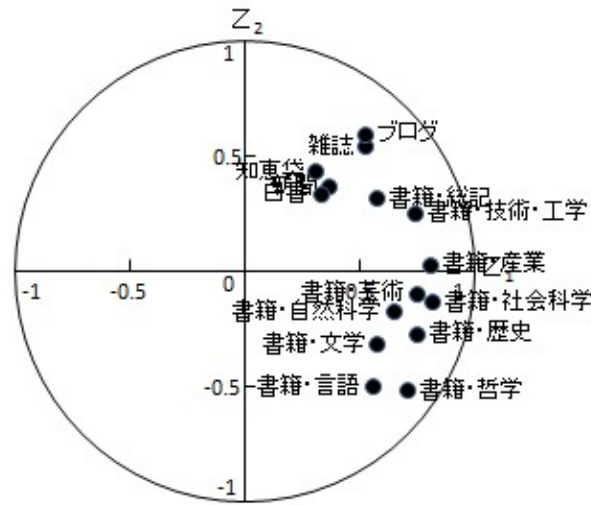


図5 負荷量散布図

以上で、全15変種の総合指標として、第1主成分が取り出せたわけである。それぞれの漢語サ変動詞が持つ第1主成分得点に注目することで、いわゆる総合性の高い漢語サ変動詞を抽出することができる。第1主成分得点に基づいて、全277種類の語を並べたところ、以下の結果を得た。

表6 277語の第1主成分得点における順位

順位	語	得点	順位	語	得点	順位	語	得点
1	存在する	12.46	94	低下する	-0.01	187	注文する	-1.35
2	利用する	11.82	95	安心する	-0.03	188	進化する	-1.35
3	紹介する	8.99	96	証明する	-0.07	189	分解する	-1.36
4	説明する	8.98	97	設立する	-0.07	190	挿入する	-1.36
5	使用する	8.71	98	記録する	-0.08	191	要請する	-1.38
6	確認する	8.33	99	整備する	-0.08	192	帰国する	-1.38
7	理解する	7.14	100	破壊する	-0.11	193	放出する	-1.38
8	表示する	6.14	101	出版する	-0.11	194	計画する	-1.40
9	発見する	5.95	102	固定する	-0.15	195	省略する	-1.42
10	発生する	5.73	103	解釈する	-0.19	196	圧倒する	-1.43

11	注目する	5.15	104	改善する	-0.19	197	実践する	-1.44
12	指摘する	4.99	105	出発する	-0.20	198	感心する	-1.44
13	期待する	4.91	106	建設する	-0.21	199	搭載する	-1.46
14	実施する	4.41	107	吸収する	-0.22	200	供給する	-1.46
15	用意する	4.34	108	逮捕する	-0.23	201	拡張する	-1.47
16	発表する	4.02	109	提案する	-0.25	202	意図する	-1.53
17	注意する	3.99	110	相談する	-0.25	203	緊張する	-1.53
18	開催する	3.83	111	満足する	-0.27	204	抑制する	-1.55
19	構成する	3.66	112	整理する	-0.28	205	動員する	-1.58
20	評価する	3.65	113	保護する	-0.30	206	診断する	-1.59
21	設定する	3.62	114	経験する	-0.34	207	連絡する	-1.59
22	変化する	3.49	115	派遣する	-0.34	208	測定する	-1.61
23	提供する	3.44	116	管理する	-0.35	209	更新する	-1.63
24	形成する	3.37	117	批判する	-0.35	210	承知する	-1.65
25	実現する	3.35	118	接続する	-0.41	211	変換する	-1.66
26	表現する	3.21	119	登録する	-0.42	212	保障する	-1.66
27	展開する	3.06	120	公開する	-0.42	213	認定する	-1.68
28	参加する	3.06	121	共通する	-0.43	214	再開する	-1.70
29	検討する	3.02	122	分析する	-0.43	215	計上する	-1.70
30	意味する	2.83	123	撮影する	-0.47	216	設計する	-1.70
31	対応する	2.82	124	納得する	-0.48	217	録音する	-1.71
32	主張する	2.80	125	計算する	-0.49	218	締結する	-1.72
33	要求する	2.79	126	記述する	-0.50	219	製作する	-1.74
34	完成する	2.65	127	向上する	-0.56	220	練習する	-1.74
35	判断する	2.64	128	影響する	-0.57	221	関与する	-1.74
36	成功する	2.61	129	指示する	-0.57	222	起動する	-1.75
37	設置する	2.61	130	位置する	-0.59	223	興奮する	-1.76
38	決定する	2.43	131	研究する	-0.61	224	発音する	-1.76
39	作成する	2.35	132	充実する	-0.61	225	検索する	-1.77

40	選択する	2.21	133	質問する	-0.62	226	伝達する	-1.77
41	開始する	2.18	134	演奏する	-0.63	227	出演する	-1.77
42	採用する	2.16	135	発行する	-0.64	228	信用する	-1.80
43	登場する	2.14	136	到着する	-0.67	229	除外する	-1.84
44	認識する	2.05	137	洗練する	-0.67	230	受信する	-1.85
45	予想する	1.98	138	活躍する	-0.68	231	実証する	-1.85
46	成立する	1.97	139	反対する	-0.69	232	改正する	-1.86
47	報告する	1.90	140	約束する	-0.69	233	殺害する	-1.90
48	導入する	1.87	141	放送する	-0.71	234	装着する	-1.93
49	発売する	1.84	142	努力する	-0.72	235	採取する	-1.95
50	意識する	1.81	143	削除する	-0.72	236	生成する	-1.95
51	移動する	1.73	144	引用する	-0.73	237	暗殺する	-1.95
52	指定する	1.71	145	機能する	-0.73	238	圧迫する	-1.98
53	強調する	1.70	146	生産する	-0.74	239	加速する	-1.99
54	発展する	1.55	147	失敗する	-0.78	240	誘導する	-2.00
55	増加する	1.52	148	協力する	-0.80	241	予約する	-2.03
56	開発する	1.47	149	出現する	-0.82	242	発現する	-2.03
57	否定する	1.40	150	定義する	-0.84	243	投与する	-2.04
58	提出する	1.37	151	行動する	-0.87	244	採択する	-2.06
59	反映する	1.33	152	構築する	-0.88	245	録画する	-2.07
60	規定する	1.24	153	促進する	-0.90	246	拘束する	-2.07
61	代表する	1.10	154	案内する	-0.95	247	分泌する	-2.08
62	掲載する	1.02	155	体験する	-0.97	248	加入する	-2.09
63	支配する	1.01	156	組織する	-0.99	249	作曲する	-2.11
64	結婚する	0.96	157	追加する	-1.01	250	告白する	-2.14
65	実行する	0.88	158	推測する	-1.01	251	凝縮する	-2.16
66	変更する	0.86	159	展示する	-1.02	252	離婚する	-2.16
67	拡大する	0.77	160	上昇する	-1.02	253	排出する	-2.16
68	解決する	0.77	161	結合する	-1.03	254	収納する	-2.17

69	解放する	0.76	162	任命する	-1.06	255	拉致する	-2.17
70	比較する	0.73	163	感謝する	-1.06	256	格納する	-2.18
71	集中する	0.73	164	通用する	-1.06	257	装備する	-2.18
72	購入する	0.68	165	該当する	-1.06	258	合意する	-2.19
73	発揮する	0.67	166	作用する	-1.08	259	出力する	-2.20
74	一致する	0.63	167	輸入する	-1.08	260	策定する	-2.20
75	無視する	0.62	168	終了する	-1.12	261	回答する	-2.22
76	維持する	0.53	169	収録する	-1.15	262	却下する	-2.22
77	適用する	0.51	170	反応する	-1.16	263	沸騰する	-2.24
78	確立する	0.51	171	検出する	-1.19	264	漁獲する	-2.31
79	記載する	0.50	172	示唆する	-1.21	265	苦笑する	-2.31
80	勉強する	0.47	173	入力する	-1.21	266	出品する	-2.32
81	分類する	0.45	174	報道する	-1.24	267	束縛する	-2.34
82	安定する	0.37	175	到達する	-1.26	268	増殖する	-2.34
83	観察する	0.36	176	施行する	-1.26	269	培養する	-2.37
84	保存する	0.30	177	苦勞する	-1.27	270	補正する	-2.38
85	心配する	0.28	178	創造する	-1.27	271	落札する	-2.38
86	重視する	0.26	179	予定する	-1.28	272	統御する	-2.41
87	考慮する	0.25	180	取得する	-1.29	273	検挙する	-2.47
88	販売する	0.22	181	推進する	-1.29	274	稼働する	-2.47
89	想像する	0.21	182	制定する	-1.31	275	絶命する	-2.48
90	活用する	0.14	183	交換する	-1.32	276	損壊する	-2.61
91	限定する	0.13	184	出土する	-1.32	277	入札する	-2.65
92	減少する	0.13	185	侵入する	-1.34			
93	区別する	0.11	186	電話する	-1.34			

これにより、277 種類の語を単なる出現頻度のみではなく、汎用性・総合性の高さを加味した形で整理することができたことになる。277 種類のうち、第 1 主成分得点が正 (+) になるものは 93 語である。主成分得点がプラスになる漢語サ変動詞は、15 変種における頻度が一つの主成分に集約しやすいもの、言い換えれば、変種間の出現頻度のばらつきが

相対的に小さいものと特定できる。変種に左右されにくい汎用的な漢語サ変動詞を特定するという我々の研究目的から言うと、これらの 93 語は、多様な漢語サ変動詞の中でも、最も重要なものであると考えられる。

従来の計量的日本語研究や日本語教育においては、大規模データベースへのアクセスのしやすさもあり、新聞に基づいた語彙調査が比較的が多かった。新聞の上位 5 語であった「発見する」、「期待する」、「予想する」、「確認する」、「注目する」は、いずれも全体順位の上位 5 語には含まれていない。すなわち、15 変種をバランスよく組み合わせることによって、新聞や雑誌といった単一変種だけで重要語を判定するよりも、さらに妥当性の高い処理が行われたと考えられる。

とくに注目すべきは、「理解する」、「判断する」、「意識する」、「心配する」など、精神的活動に関わる語、「結婚する」、「勉強する」といった個人生活に関わる語、さらには「販売する」、「購入する」、「発売する」といった経済生活に関連する語など、現代日本語の様々な環境を総合的に反映した汎用的な漢語サ変動詞の抽出が行われたと考えられる。

すでに述べたように、無数に存在する漢語サ変動詞のうち、高頻度、かつ、汎用的に使用される語のリストはこれまで十分に整備されてこなかった。上記のようなデータがあれば、日本語研究において、実際の典型的な用例に基づく漢語サ変動詞のシンプルな用法モデルの構築を行うことができるのみならず、日本語教育においても、貴重な資料として有効に活用することが可能であろう。従来の日本語教育においては、語彙指導に際して、個別の語を対象として、読解文中に現れた語を個別的・羅列的に指導するだけで、重要語を体系的に示すということはほとんど行われていない。漢語サ変動詞の指導についても、その傾向は変わらない。ゆえに、上記のリストを基礎データとして学習者に提示することで、学習者の漢語サ変動詞の習得と理解を促進することができると考えられる。

4.7 まとめ

本章においては、コーパスにおける頻度情報を基にして、高頻度、かつ、汎用的漢語サ変動詞の特定を行った。得られたリストは、日本語学においても、日本語教育においても、重要な基礎資料となるものである。以下では、本章の内容について、リサーチクエストionsごとにまとめる。

まず、RQ1「変種別漢語サ変動詞の使用頻度」においては、15 変種間において、漢語サ変動詞の使用頻度に差があるかについて調査を行った。その結果、漢語サ変動詞の使用頻度は言語変種及び内容変種によって、一定の程度で影響されていることが確認された。

また、RQ2「日本語の各変種における高頻度漢語サ変動詞」については、各変種において、高頻度で使用されている上位 5 語に限って概観した。その結果、漢語サ変動詞には、特定の言語変種と内容変種に強く影響されるものから、幅広く汎用的に多用されるものの 2 種類がある可能性が示唆された。加えて、汎用的に多用される漢語サ変動詞は、しばしば意味の拡張を伴っていることが確認された。

最後に、RQ3「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」については、変種ごとに高頻度上位 50 語の頻度情報を統計的に合成した。その結果、全 277 種の語を総合性という観点に基づいて並べ替えることができ、主成分負荷量において、正になる語、すなわち、汎用性が高い漢語サ変動詞として、93 語を特定することができた。こうして得られた漢語サ変動詞には、様々な内容的特性を持つものが含まれており、日本語学においても、また、日本語教育においても、有用な基礎資料としうるものであると確認された。

すでに述べたように、本章で得られた高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、以後の研究の出発点となるものである。以後の章においては、これらの語を基礎資料として、多角的観点から分析を進め、漢語サ変動詞の特徴についてさらに細かく調査していくこととしたい。5 章以後においては、特定された高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語を対象として、活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性など、多元的分析を加え、その諸特性を明らかにしていくこととする。

第5章 漢語サ変動詞の活用上の選好性

4章では、大規模なデータ量を持ち、かつ、現代日本語を構成する様々なジャンルを幅広く収録している BCCWJ に基づき、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行った。特定された漢語サ変動詞は、言語研究においても、日本語教育においても重要な資料となりうる。

ただし、漢語サ変動詞は、「する」を基本形としながら、実際の使用においては、「する」のみならず、「さ(れ)」、「す(れ)」、「し(て)」など、多様な活用形を持つ。「する」という基本形が、実際の運用において必ずしも典型的な形とは限らない。たとえば、以下の用例を見てみよう。

(1) 「存在する」

- 存在する
- 存在さ(れる)
- 存在せ(ず)
- 存在し(ない)
- 存在し(て)
- 存在す(れば)
- 存在し(よう, ろ)

(2) 「開催する」

- 開催する
- 開催さ(れる)
- 開催せ(ず)
- 開催し(ない)
- 開催し(て)
- 開催す(れば)
- 開催し(よう, ろ)

文法上、上記の2語はいずれの形態でもとりうるが、「存在する」の場合に、「存在しよう」はおそらく不自然であろうが、「開催しよう」であれば問題はない。一方、「存在しない」はごく普通であるが、「開催しない」は特定の状況でないと、ほとんど使用しないのであろう。こうして考えれば、それぞれの漢語サ変動詞は、語によって、特有の活用パターンを持つことが考えられる。ここで重要なことは2点ある。1点目は、漢語サ変動詞が全体としてどのような活用上の選好性を持つかということである。この場合、一般動詞である「する」との比較も重要であろう。2点目は、重要な漢語サ変動詞の各々がどのような活用上の選好性を持つかということである。

このように、漢語サ変動詞全体の持つ活用傾向と、個々の重要漢語サ変動詞がもつ特有の活用パターンを明らかにすることは、日本語教育の観点でも意味があると考えられ、また、

言語学的にも一定の意味を持つと考えられる。というのも、先行研究からもわかるように、従来の漢語サ変動詞研究において、活用問題はほぼ考慮に入れられておらず、「する」という基本形を代表に議論が行われてきたわけであるが、仮に様々な漢語サ変動詞が活用上の選好性を持つのであれば、その点を考慮することで、漢語サ変動詞の記述をより精緻化できるはずである。

5.1 本章の目的と構成

以上をふまえ、本章では、(1) 高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語を一つのかたまりとして捉えた場合にどのような活用パターンを示すか、(2) 漢語サ変動詞の活用パターンは、一般動詞「する」の活用パターンとどのように異なるか、(3) 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の各々はどのような典型的活用パターンを持つか、(4) 活用パターンに注目すると、個々の漢語サ変動詞はどのように分類されるか、の 4 点を明らかにすることを目指す。

5.1 節では研究の目的と構成を述べ、5.2 ではリサーチクエスチョンを示す。5.3 では研究の手法を詳しく紹介する。5.4 では研究の結果を示し、それをふまえて考察を行う。5.5 では本章のまとめを行う。

5.2 リサーチクエスチョン

前節の目的をふまえ、以下のリサーチクエスチョンを設定する。

- RQ1 高頻度・汎用的漢語サ変動詞は全体としてどのような活用上の選好性を持つか。
- RQ2 「する」と比較した場合に、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の活用上の選好性として、どのようなものがあるか。
- RQ3 個々の高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのような活用的選好性を持つか。
- RQ4 活用選好性によって、個々の高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのように分類されるか。

5.3 研究手法

5.3.1 活用形の分類枠組み

動詞の活用変化を議論する場合に、活用分類を明確にすることが重要である。一般に、現代日本語においては、語の活用形は 6 つに区分されることが多い。たとえば、『日本語教

育辞典』には、以下のような記述がある。

語の変化形としては、まず語が文中で一定のはたらきをするために形を変える活用形である。日本語の動詞・形容詞はテンス・肯否などにより語尾が変化し、活用する。このうち、辞書の見出しに挙がっている形をその語を代表する形と見て、基本形（辞書形）という。いわゆる学校文法では、現代語の動詞には未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・命令形の6つの活用形があるとする。しかし、日本語教育では未然形のうち助動詞『ナイ』に続く形をナイまで含めてナイ形、助動詞『ウ・ヨウ』に続く形をウ・ヨウまで含めてウ・ヨウ形（意志形／意向形）、連用形は後接するマスまで含めてマス形、終止形（形が同じ連体形も同様）は辞書形（基本形）というように呼ぶことが多い。また、『書いて、飲んで、立って』のような連用形の音便形を接続助詞『テ』まで含めてテ形と呼ぶ。仮定形もこの呼び方のほかに、後接する『バ・レバ』まで含めてバ・レバ形と呼ぶ場合もある」。(pp. 237-239)

また、『日本語文法大辞典』においても、同様な記述が見られる。

活用形について、活用する語の用法に際しての語形変化で示す種々の形。未然形・連用形・終止形・連体形・已然形（現代語では仮定形）・命令形の6種の活用形があるとの記載がある。(p. 151)

以上のように、動詞は基本形を中心として、未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・命令形の6種の活用形を取りうると考えられるが、『日本語教育辞典』に記載しているように、未然形の中でもナイ形、ウ・ヨウ形の下位分類があり、連用形の中でもマス形・テ形がある。このことをふまえれば、より細かい活用分類も可能であろう。

こうした細かい分類は、大規模コーパスのタグ付けにおいて広く試みられている。たとえば、本研究が基本資料として使用している現代日本語書き言葉均衡コーパスの分類を見よう。現代日本語書き言葉均衡コーパスには、活用について、「大分類」と「小分類」の2種類がある。漢語サ変動詞に関連するものに限り、それらの関係性を以下の図で示す。

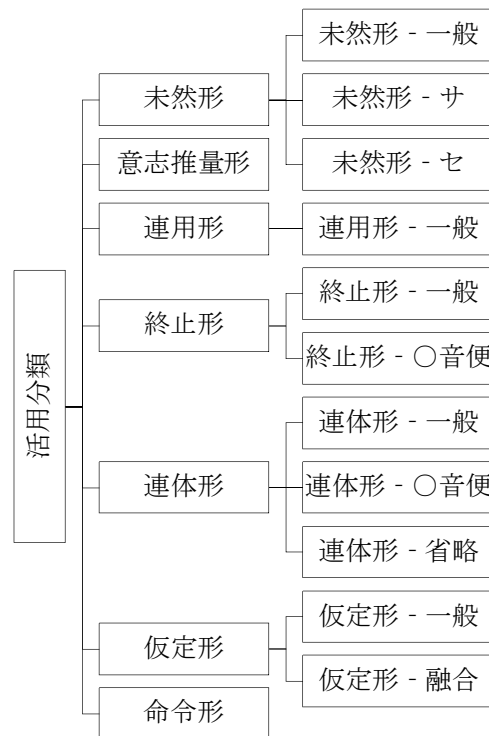


図1 漢語サ変動詞における活用分類

上記のように、日本語漢語サ変動詞がとりうる活用パターンは、基本6種類以外に、「意志推量形」が加わった7種13分類となる。なお、これらの活用分類以外に、大分類として、「ク語法」(例:「おそらく」)、「已然形」(例:「すれど」)も存在するが、すでに述べたように、漢語サ変動詞とは関係しないため、上図からは除外している。これらの細かな分類は必ずしも一般的なものではないため、以下では、それぞれの活用分類について、コーパスから取り出した漢語サ変動詞を含む用例とあわせて見てみよう。

(1) 未然形 - 一般 (「～し (ない)」など)

<C t r l + A l t + D>になっているにも関わらず機能しない，という事でしょうか？ (知恵袋 C02_02803)

(2) 未然形 - サ (「～さ (れる)」 「～さ (せる)」)

メール相談機能を，研修専門機関や教育機関あるいは職能団体に開設することが期待されており，国立保健医療科学院では，ITによる遠隔教育の一環と……

(書籍・自然科学 B44_00199)

(3) 未然形 - セ (「～せ (ざる)」 「～せ (られ)」 「～せ (ねば)」 など)

私は原稿を書くのに、一切ワープロやパソコンを使用せず、旧態然とした手書きを続けている。
(書籍・社会科学 PB53_00145)

(4) 意志推量形 (「～し (よう)」など)

さまざまな社会階層の人びとが、みずからを取り囲む社会関係を文書語を用いて記述しようとしていることが推察され、十四世紀を大きな画期として日本……

(書籍・社会科学 PB13_00203)

(5) 連用形 - 一般 (「～し (て)」 「～し (ます)」 など)

その事実を知った途端、僕はその女性に対して一気に幻滅しました。

(ブログ OY11_05367)

(6) 終止形 - 一般 (「～する」 「～すべき」 など)

……が熱帯のジャングルで、血のにじむような努力をしてゴムの木を伐採する。それで日当は二百円前後だ。

(書籍・社会科学 LBa3_00018)

(7) 終止形 - ○音便 (「～す (ん)」 など)

「お前らに、儂も小遣いを遣るわ。手え出せ、遠慮すんな」万造は笑いながら手招きするが、むつつり常はかぶりをふった。

(書籍・文学 LBb9_00022)

(8) 連体形 - 一般 (「～する (ような)」 「～する (の)」 など)

初期の報告は鎮痛剤を大量に使用している人の頭痛の頻度が高く痛みも強いことを「逆説的」だと述べた。

(書籍・自然科学 PB54_00067)

(9) 連体形 - ○音便 (「～す (んの)」 など)

聖：だから頭フル回転すんじやんだから～どっと疲れんだよね。

(ブログ OY04_04534)

(10) 連体形 - 省略 (「～す (んだ)」 など)

基本的に技術レベルの格差を前提とした技術移転である。アブラモビッツの強調すうるように、そのばあいの収束の基本的な理由は、……

(書籍・社会科学 LBr3_00084)

(11) 假定形 - 一般 (「～す (れば)」 など)

だったら、国を選択する項目がない？そこで J a p a n を選択すれば、都道府県がでてくるんじゃないかな。

(知恵袋 OC12_01989)

(12) 假定形 - 融合 (「～す (りゃ)」 など)

「だって、警告すりゃいいだけだろうが。肝臓の機能検査受けろって」事務長は

立ちあがった。 (書籍・文学 LBk9_00038)

(13) 命令形 (「～せ (よ)」など)

「いいや、余司令、立派な大勝利じゃ。さあ早く命令しなされ。わしらはなんでもやる。 (書籍・文学 PB39_00765)

以上で見たように、日本語の活用分類には、いくつかの分類があるが、本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパスに採用された分類に基づき、漢語サ変動詞に関わる活用形として7分類13種の枠組みを採用して、以下の調査を行うこととする。

5.3.2 研究手順

以下では、リサーチクエスチョンごとに、研究手法を具体的に述べる。

まず、RQ1「漢語サ変動詞全体の活用上の選好性」については、理論上無数に存在する漢語サ変動詞のすべてを調査の対象にできないため、便宜上、4章で特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語に限り、それらが全体としてとりうる活用形別使用頻度を調べる。

次に、RQ2「『する』と比較した場合の漢語サ変動詞の活用上の選好性」については、まず、「する」の活用形別比率を調査する。現代日本語書き言葉均衡コーパスの検索インターフェース「中納言」において、<語彙素>を「為る」として検索すると、独立した一般動詞「する」と漢語サ変動詞などが区別なく検出されるため、ここでは、<前方共起条件>を「助詞」にして検索を行った。これにより、本動詞「する」以外の用例が排除される。ただし、前方に助詞が共起しない本動詞「する」の用例は取りこぼされることになる(例：a. 観光はもうしたんですか？ b. する方がいいのか、しない方がいいのか？ c. 対象に対してある種の具体的な行動をとろうー、あるいはしないでおこうという決定をする心のはたらきです)が、ここでは、非該当用例の混入を避けることを優先して、このような処理手法をとった。その後、RQ1で特定された漢語サ変動詞の活用形別比率と比較し、漢語サ変動詞全体の活用上の特性を確認する。

また、RQ3「個々の漢語サ変動詞の活用的選好性」については、漢語サ変動詞93語のそれぞれについて、活用形別頻度を求め、個々の語について最も優先的な活用形を特定する。

最後に、RQ4「活用的選好性に基づく漢語サ変動詞の分類」については、漢語サ変動詞全体の活用の傾向性を探るために、93語の活用形別頻度表をコレスポネンス分析にかけて分析を行う。この分析にかける頻度表は、第1アイテムが活用形、第2アイテムが漢語

サ変動詞である。分析にあたり、第1アイテムには、13種類の活用パターンが認められるが、実際の使用において頻度がきわめて低いカテゴリーが全体の分布を歪めることを避けるため、低頻度の「終止形 - 撥音便」、「連体形 - 省略」、「連体形 - 撥音便」および「仮定形 - 融合」の4種を除く9分類をカテゴリーとする。第2アイテムにおいては、すでに述べた漢語サ変動詞93語をカテゴリーとする。

5.4 結果と考察

5.4.1 漢語サ変動詞の活用上の選好性

高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語をデータとして、大分類および小分類の活用形別頻度と比率を求めた。結果は以下のとおりである。

表1 大分類における漢語サ変動詞の活用形別頻度

活用形	頻度
未然形	91414
意志推量形	4034
連用形	184112
終止形	31390
連体形	65564
仮定形	2763
命令形	402

表2 小分類における漢語サ変動詞の活用形別頻度

活用形	頻度	活用形	頻度
未然形 - 一般	9721	連体形 - 一般	65555
未然形 - サ	80086	連体形 - 撥音便	9
未然形 - セ	1607	連体形 - 省略	7
意志推量形	4034	仮定形 - 一般	2763
連用形 - 一般	184112	仮定形 - 融合	7
終止形 - 一般	31369	命令形	402

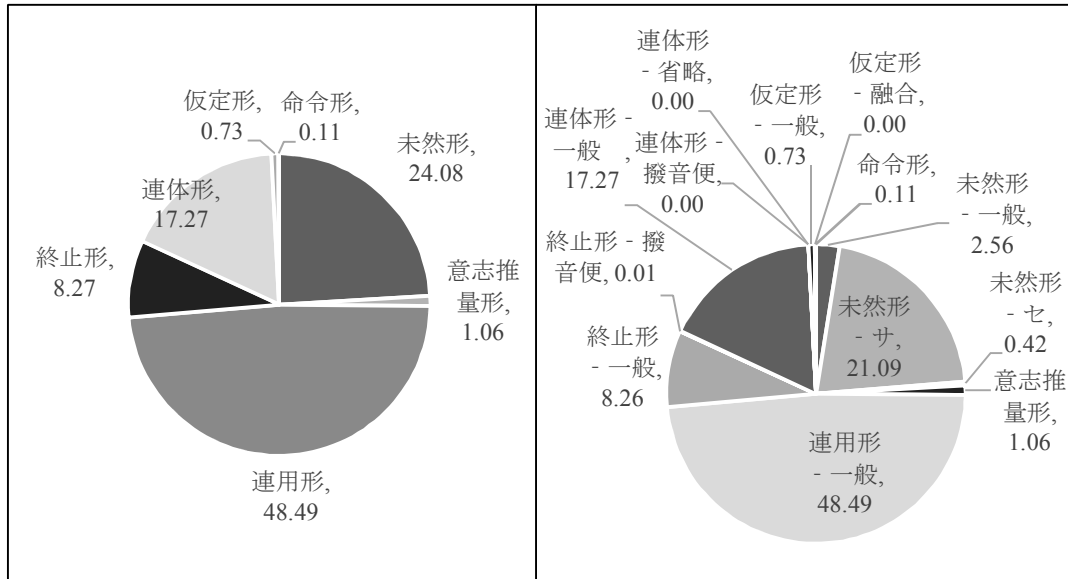


図2 漢語サ変動詞の活用形別比率 (大) 図3 漢語サ変動詞の活用形別比率 (小)

はじめに、大分類のほうに注目して観察を述べる。

1点目は、いわゆる基本形にあたる「終止形」の比率が全体の中で1割未満ということである。このことは、基本形、もしくは終止形は、漢語サ変動詞の振る舞いの中で必ずしも一般的ではないことが示された。2点目は、比率の多い活用形として、「連用形」、「未然形」、「連体形」が最も多く、全体の約9割を占めていることである。この2点は大分類の場合に見た漢語サ変動詞の活用上の特性である。

つづいて小分類について見てみよう。小分類のほうについて、以下の2点を述べる。

1点目は、大分類において比率が大きかった「未然形」について言うと、3つの小分類を含めているが、その大部分が「未然形-サ」だということである。2点目は、「連体形」について言うと、「連体形-一般」が大部分を占めていることである。

以上のように、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限って活用形別使用状況を大分類と小分類の2つの観点から見たわけである。従来中心として議論された基本形については、漢語サ変動詞にとって、必ずしも特徴的でなく、むしろ、実際の使用において、漢語サ変動詞の「連用形」や「未然形」の使用がほぼ標準的になっていることが明確にされた。この情報は、とくに日本語教育の観点から見た場合に非常に有益であろう。

5.4.2 「する」と比較した場合の漢語サ変動詞の活用上の選好性

以上で、高頻度・汎用的漢語サ変動詞全体の活用上の特徴を見てきたわけであるが、ここで留意すべきは、この特徴が漢語サ変動詞だけのものなのか、それとも「する」の一般的な特徴なのかということである。この点を確認するため、「する」の活用形の使用状況を調べて漢語サ変動詞と比較した。以下では、大分類と小分類に分け、活用形別比率を示す。比較するため、漢語サ変動詞の活用形別比率を改めて示す。

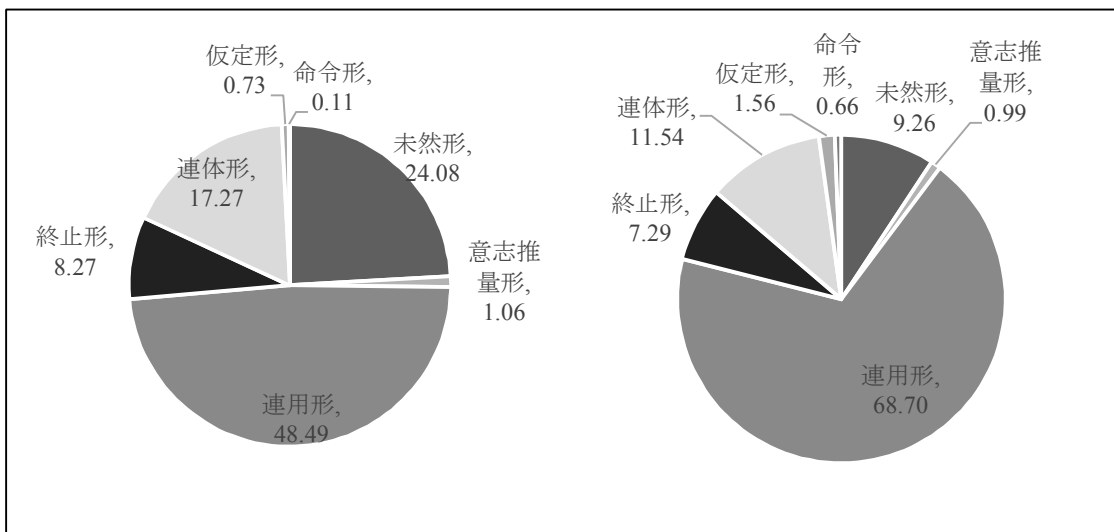


図4 漢語サ変動詞と「する」の活用形別比率（大分類）

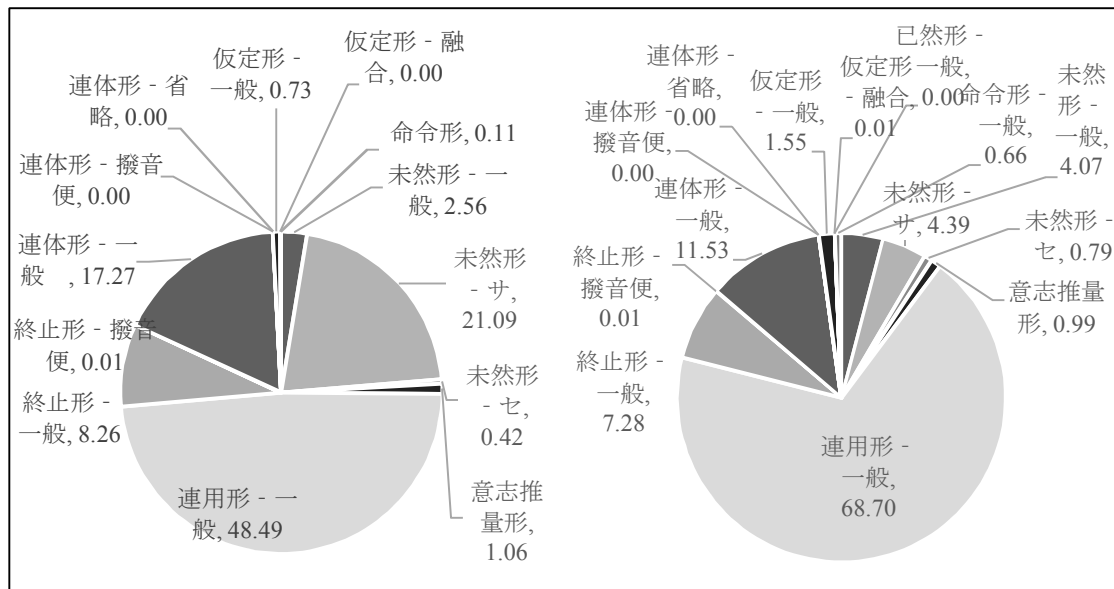


図5 漢語サ変動詞と「する」の活用形別比率（小分類）

上記から観察されることについて、3点を述べる。

1点目は、漢語サ変動詞の特徴であった基本形に相当する「終止形 - 一般」がきわめて少ない傾向は、「する」の場合でも見られることである。このことは、終止形が少ないということは、単に漢語サ変動詞の独自の特徴ではないことが言えるのであろう。2点目は、漢語サ変動詞の優先的活用形であった「連用形」、「未然形」、「連体形」という順序が、「する」の場合において、「連用形」、「連体形」、「未然形」の順番に変わったことである。つまり、「連用形」、「未然形」、「連体形」という活用形別使用順位が漢語サ変動詞の特徴性として示されている。3点目は、漢語サ変動詞は「未然形」を取りやすいという注目すべき傾向が「する」の場合において「連用形」に傾けたことである。この点は、未然形を取りやすいという特徴性を持つことが改めて裏付けられている。

次に小分類について見ていこう。小分類について、2点を述べる。

1点目は、漢語サ変動詞の場合、「未然形」のほとんどが「未然形 - サ」であったことが、「する」の場合に大きく変わって、「未然形 - 一般」とほぼ同等程度に出現していることである。この点から、「未然形」の中では、とくに「未然形 - サ」が漢語サ変動詞の特有用上の特徴であることが示唆された。2点目は、「連体形」について言うと、漢語サ変動詞の場合、「連体形 - 一般」が大部分であったことが、「する」においても同じ傾向が見られることである。

以上をまとめると、前節で観察した漢語サ変動詞の活用上の諸特性のうち、「する」と異なる、漢語サ変動詞の独自の特徴として、(1)「連用形」に次いで、「未然形」が多いこと、(2)「する」と比べると、「連用形」の比率が低く、「未然形」の比率が高いこと、(3)「未然形」の小分類については、「未然形 - サ」がきわめて多いこと、の3点が明らかになった。これらは細かな考察であるが、これまでの研究ではほとんど触れられていなかったため、漢語サ変動詞の活用上の特徴を考察するうえで有用な知見であると言えよう。

5.4.3 各漢語サ変動詞の活用上の選好性

前節までわかるように、漢語サ変動詞は活用的には独自の選好性を持っている。本節では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語について、活用形別頻度を調査したうえで、それぞれの語の選好する活用形を確認した。以下では、まず、各語の活用形別頻度を示しておく。なお、下表では、各漢語サ変動詞の「する」は除かれ、「未然形 - 一般」、「未然形 - サ」、

「未然形 - セ」, 「意志推量形」, 「連用形 - 一般」, 「終止形 - 一般」, 「終止形-撥音便」, 「連体形 - 一般」, 「連体形-撥音便」, 「連体形-省略」, 「仮定形 - 一般」, 「仮定形-融合」, 「命令形 - 一般」はそれぞれ「未然」, 「未サ」, 「未セ」, 「意推」, 「連用」, 「終止」, 「終便」, 「連体」, 「体便」, 「体略」, 「仮定」, 「仮融」, 「命令」に短縮して表示されている。

表3 各漢語サ変動詞の活用形別頻度

	未般	未サ	未セ	意推	連用	終止	終便	連体	体便	体略	仮定	仮融	命令
存在	1597	19	133	6	3789	1757	0	2409	0	1	35	0	0
利用	183	1766	34	201	6216	821	0	2471	0	1	195	0	4
紹介	24	1608	2	330	4658	742	0	835	0	0	12	0	5
説明	149	665	22	271	4841	1023	0	1297	2	0	101	1	33
使用	333	2218	66	39	4644	650	0	2454	0	0	69	0	5
確認	148	1187	38	128	4533	807	0	1220	0	0	33	0	11
理解	161	909	48	243	3630	406	0	1368	0	0	80	0	7
表示	123	4933	8	13	1063	416	0	751	0	0	10	1	1
発見	8	2173	9	19	1997	154	0	345	0	0	11	0	2
発生	202	374	15	2	4031	664	0	1514	0	0	42	0	0
注目	55	1870	10	15	1205	89	0	210	0	0	27	0	4
指摘	29	1569	14	10	2169	373	0	458	0	0	11	0	5
期待	143	1745	38	28	2550	216	0	555	0	0	5	0	1
実施	70	2257	9	36	4985	1253	0	1729	0	0	20	0	5
用意	91	1194	8	28	2637	237	0	414	0	0	41	0	16
発表	28	1465	6	21	2744	195	0	301	0	0	6	0	1
注意	458	319	15	133	2483	375	0	528	0	0	58	0	38
開催	3	2163	2	8	1042	176	0	243	0	0	4	0	0
構成	17	1741	6	11	590	139	0	1031	0	0	1	0	0
評価	84	1263	10	35	1316	310	0	836	0	0	17	0	4
設定	68	1184	16	26	2418	565	0	809	0	0	88	0	3
変化	148	571	41	14	2564	638	0	921	0	0	19	0	0

提供	63	604	10	47	1882	456	0	1693	0	0	22	0	3
形成	17	1586	6	25	1085	237	0	595	0	0	3	0	0
実現	203	790	37	130	1546	379	0	1282	0	0	70	0	5
表現	45	735	8	111	1506	349	0	986	0	1	57	0	3
展開	17	1119	5	38	1962	316	0	602	0	0	13	0	0
参加	197	391	40	77	4505	377	0	1226	0	1	24	0	7
検討	77	562	7	73	2127	543	0	870	0	0	15	0	7
意味	76	10	15	6	1789	1100	0	1302	0	1	0	0	0
対応	100	189	18	61	3472	394	0	1959	0	0	46	0	4
主張	33	239	9	20	2258	388	0	965	0	0	19	0	4
要求	51	1170	14	2	1071	263	0	622	0	0	9	0	0
完成	43	765	8	6	1557	160	0	213	0	0	26	0	1
判断	100	703	29	28	2184	413	0	965	0	0	81	0	4
成功	131	431	15	19	2614	333	0	388	0	0	92	0	3
設置	51	1719	7	18	1591	200	0	594	0	0	19	0	1
決定	53	1033	29	15	1731	325	0	776	0	0	17	0	1
作成	52	870	3	36	2776	446	0	1011	0	0	22	0	3
選択	75	403	18	30	3241	735	0	674	0	0	81	0	1
開始	13	1109	4	22	1831	369	0	356	0	1	12	0	5
採用	64	1107	23	17	1526	189	1	414	0	0	19	0	0
登場	97	169	8	5	2537	606	0	1263	0	0	3	0	0
認識	101	821	20	12	1294	124	0	415	0	0	10	0	1
予想	37	1538	4	2	757	38	0	96	0	0	3	0	1
成立	299	283	55	2	2067	449	0	589	0	0	23	0	0
報告	89	1023	18	17	1431	233	0	274	1	0	20	0	26
導入	25	1067	7	58	1287	182	0	553	1	0	29	0	1
発売	9	1109	0	0	340	80	0	69	0	0	3	0	0
意識	186	388	82	13	1902	105	0	323	0	0	16	0	1
移動	48	516	11	35	1767	329	0	620	0	0	20	0	2

指定	70	1143	10	14	1610	309	0	556	0	0	54	0	1
強調	28	562	6	17	1540	230	0	523	0	0	7	0	1
發展	40	709	7	3	1522	122	0	284	0	0	13	0	1
增加	42	363	10	5	5015	499	0	604	0	0	29	0	0
開發	15	1096	4	26	1254	84	0	242	1	0	5	0	2
否定	115	448	27	73	1076	146	0	732	0	1	16	0	4
提出	182	759	7	14	1376	163	0	562	0	0	40	0	7
反映	27	1152	11	2	1514	102	0	222	0	0	2	0	0
規定	11	1097	3	9	1011	134	0	1118	0	0	5	0	0
代表	3	761	2	0	356	67	0	978	0	0	0	0	0
掲載	17	1289	2	6	727	51	0	108	0	0	1	0	0
支配	5	494	10	64	881	128	0	657	0	0	2	0	2
結婚	226	187	17	139	4282	414	0	945	3	0	55	1	16
実行	74	478	15	65	1053	338	0	607	0	0	61	0	10
変更	119	668	33	69	1340	359	0	709	0	0	37	0	1
拡大	17	459	9	44	2046	270	0	516	0	0	24	0	1
解決	243	282	19	131	1031	343	0	864	1	0	27	0	4
解放	12	903	2	11	307	61	0	132	0	0	4	0	3
比較	17	112	3	8	2081	861	0	388	0	0	131	0	8
集中	35	299	9	32	1540	176	0	390	0	0	23	0	4
購入	70	195	14	236	3301	301	0	826	0	0	78	0	2
發揮	42	451	10	15	1060	268	0	615	0	0	15	0	2
一致	306	82	14	2	1126	222	0	343	0	0	11	0	0
無視	20	424	5	30	1905	165	2	403	0	0	37	3	7
維持	51	512	7	113	1141	166	0	1025	0	0	4	0	0
適用	96	1779	16	30	573	216	0	532	0	0	29	0	3
確立	28	574	6	36	999	161	0	477	0	0	7	0	3
記載	131	1394	9	6	1080	163	0	402	0	0	31	0	8
勉強	227	133	18	99	1746	175	0	422	0	0	59	1	48

分類	7	652	3	7	525	152	0	174	0	0	10	0	1
安定	86	254	24	0	1914	77	0	94	0	0	11	0	0
観察	19	368	1	16	1230	278	0	445	0	0	34	0	1
保存	28	602	11	35	1189	282	0	480	0	0	37	0	11
心配	424	265	46	1	1954	220	18	529	0	0	1	0	2
重視	41	453	14	8	1165	220	0	602	0	0	12	0	4
考慮	172	277	57	2	1654	260	0	340	0	0	83	0	3
販売	22	618	4	12	810	105	0	350	0	0	6	0	0
想像	24	305	7	13	1457	275	0	382	0	0	18	0	6
活用	36	346	2	77	1743	208	0	599	0	0	50	0	5
限定	41	804	37	15	467	83	0	154	0	0	17	0	1
減少	29	318	18	1	3259	314	0	394	0	0	9	0	0
区別	49	377	18	6	511	77	0	436	0	0	9	0	1

上表より、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の各々は活用形別頻度が異なっていることがわかる。このことから、個々の漢語サ変動詞は、選好する活用形が存在することが示されたと考えよう。以下では、各漢語サ変動詞について、選好する活用形の上位3種について確認してみよう。下表において、1, 2, 3はそれぞれ第1活用形, 第2活用形, 第3活用形を意味する。

表4 各漢語サ変動詞の選好する活用形（上位3種）

	1	2	3		1	2	3		1	2	3
存在する	連用	連体	終止	主張する	連用	連体	終止	支配する	連用	連体	未サ
利用する	連用	連体	未サ	要求する	未サ	連用	連体	結婚する	連用	連体	終止
紹介する	連用	未サ	連体	完成する	連用	未サ	連体	実行する	連用	連体	未サ
説明する	連用	連体	終止	判断する	連用	連体	未サ	変更する	連用	連体	未サ
使用する	連用	連体	未サ	成功する	連用	未サ	連体	拡大する	連用	連体	未サ
確認する	連用	連体	未サ	設置する	未サ	連用	連体	解決する	連用	連体	終止
理解する	連用	連体	未サ	決定する	連用	未サ	連体	解放する	未サ	連用	連体

表示する	未サ	連用	連体	作成する	連用	連体	未サ	比較する	連用	終止	連体
発見する	未サ	連用	連体	選択する	連用	終止	連体	集中する	連用	連体	未サ
発生する	連用	連体	未サ	開始する	連用	未サ	終止	購入する	連用	連体	終止
注目する	未サ	連用	連体	採用する	連用	未サ	連体	發揮する	連用	連体	未サ
指摘する	連用	未サ	連体	登場する	連用	連体	終止	一致する	連用	連体	未然
期待する	連用	未サ	連体	認識する	連用	未サ	連体	無視する	連用	未サ	連体
実施する	連用	未サ	連体	予想する	未サ	連用	連体	維持する	連用	連体	未サ
用意する	連用	未サ	連体	成立する	連用	連体	終止	適用する	未サ	連用	連体
発表する	連用	未サ	連体	報告する	連用	未サ	連体	確立する	連用	未サ	連体
注意する	連用	連体	未サ	導入する	連用	未サ	連体	記載する	未サ	連用	連体
開催する	未サ	連用	連体	発売する	未サ	連用	終止	勉強する	連用	連体	未然
構成する	未サ	連体	連用	意識する	連用	未サ	連体	分類する	未サ	連用	連体
評価する	連用	未サ	連体	移動する	連用	連体	未サ	安定する	連用	未サ	連体
設定する	連用	未サ	連体	指定する	連用	未サ	連体	観察する	連用	連体	未サ
変化する	連用	連体	未サ	強調する	連用	未サ	連体	保存する	連用	未サ	連体
提供する	連用	連体	未サ	発展する	連用	未サ	連体	心配する	連用	連体	未然
形成する	未サ	連用	連体	増加する	連用	連体	終止	重視する	連用	連体	未サ
実現する	連用	連体	未サ	開発する	連用	未サ	連体	考慮する	連用	連体	未サ
表現する	連用	連体	未サ	否定する	連用	連体	未サ	販売する	連用	未サ	連体
展開する	連用	未サ	連体	提出する	連用	未サ	連体	想像する	連用	連体	未サ
参加する	連用	連体	未サ	反映する	連用	未サ	連体	活用する	連用	連体	未サ
検討する	連用	連体	未サ	規定する	連体	未サ	連用	限定する	未サ	連用	連体
意味する	連用	連体	終止	代表する	連体	未サ	連用	減少する	連用	連体	未サ
対応する	連用	連体	終止	掲載する	未サ	連用	連体	区別する	連用	連体	未サ

上表より、高頻度・汎用的漢語サ変動詞のうち、ほんの一部は「終止形 - 一般」や「未然形 - 一般」を多く選好しているが、ほとんどの語は、「連用形 - 一般」、「連体形 - 一般」、「未然形 - サ」を選好していることが明らかにされた。この点をふまえれば、従来漢語サ変動詞の研究や教育において重視されていた終止形というよりも、連用形、連体形、未然形のほうがもっと注目すべきであろう。とくに「未然形 - サ」が特別に扱う必要があるこ

とが漢語サ変動詞の教育的示唆となろう。

5.4.4 活用的選好性に基づく各漢語サ変動詞の分類

前節では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はそれぞれ選好する活用形を持っていることが確認された。選好する活用形に基づき、これらの漢語サ変動詞を体系的に分類・整理することが可能であると考え、93語の活用形別頻度データを用い、コレスポネンス分析を実施した。ただし、すでに述べたように、13種の活用形小分類のうち、「終止形 - 撥音便」「連体形 - 省略」「連体形 - 撥音便」および「假定形 - 融合」の4種類は、きわめて頻度が低く、データ全体の分布に影響を与える可能性があるため、分析からは除外している。結果として、以下、まず以下の固有値・寄与率・累積寄与率表が得られた。

表5 固有値・寄与率・累積寄与率

	次元 1	次元 2	次元 3	次元 4	次元 5	次元 6	次元 7	次元 8
固有値	0.15	0.05	0.03	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00
寄与率 (%)	57.23	17.04	12.16	5.81	4.33	1.71	1.07	0.65
累積寄与率 (%)	57.23	74.27	86.43	92.24	96.57	98.28	99.35	100.00

上表のように、9種の活用形の頻度情報がコレスポネンス分析により、8次元に集約された。このうち、第1次元の寄与率は57.23%であり、第1次元だけでデータの第1アイテムと第2アイテムの連関の57.23%が説明されたことがわかる。また、第2次元までの累積寄与率が74.27%となっているため、第2次元までを見ることで、全データの連関の大半を解釈することができる。このため、以下では、第2次元までに注目して分析を行う。

つづいて次元1を横軸、次元2を縦軸とした次元散布図を見てみよう。下図では、「未然形 - 一般」、「未然形 - サ」、「未然形 - セ」、「意志推量形」、「連用形 - 一般」、「終止形 - 一般」、「連体形 - 一般」、「假定形 - 一般」、「命令形 - 一般」はそれぞれ「未然一般」、「未然 - サ」、「未然 - セ」、「意推」、「連用」、「終止」、「連体」、「假定」、「命令」に短縮して表示している。

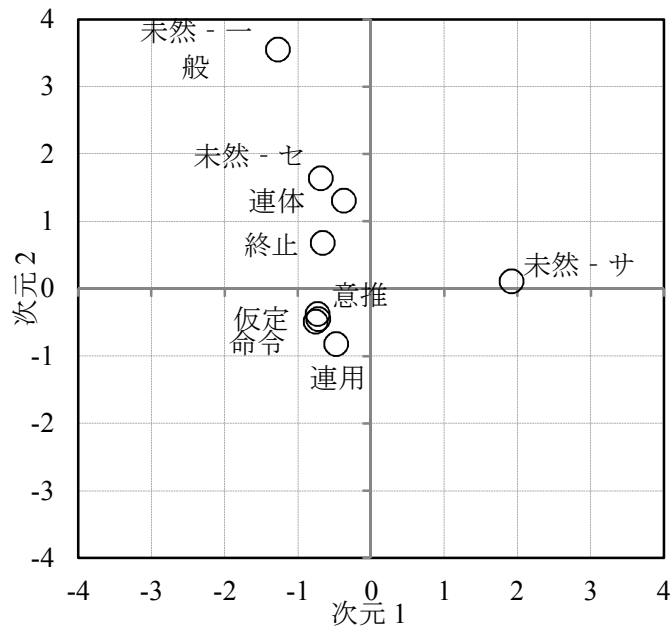


図6 次元散布図

上記から観察されることのうち、ここでは、3点に注目する。

まず、1点目として、9種の活用形は第1次元（横軸）の正負によって、「未然形 - サ」とそれ以外に区分されていることが確認された。このことから、93種の高頻度・汎用的漢語サ変動詞の活用パターンは、「未然形 - サ」とそれ以外に二分されていることがわかる。この点から、漢語サ変動詞の指導に際しては、「未然形 - サ」を取り出して指導することが重要であると考えられる。

次に2点目として、第2次元（縦軸）に注目すると、「未然形 - サ」が横軸に近いので、分類から除外されるが、残りの8種の活用形パターンのうち、縦軸に布置される位置により、(1)「未然形 - 一般」、(2)「未然形 - セ」「終止形 - 一般」「連体形 - 一般」、また(3)「意志推量形」「連用形 - 一般」「仮定形 - 一般」「命令形 - 一般」がそれぞれ一つのグループをなすことが確認された。このことは、「未然形 - サ」以外に、「未然形 - 一般」も漢語サ変動詞の活用に関する指導を行う際に十分考慮すべき活用形であることを示唆しているであろう。

3点目として、第1次元と第2次元をあわせて考えると、9種の基本活用形分類は、(I)「未然形 - サ」、(II)「未然形 - 一般」、(III)「未然形 - セ」、「連体形 - 一般」と「終止形 - 一般」、及び(IV)「連用形 - 一般」、「仮定形 - 一般」、「意志推量形」と「命令形 - 一般」、

の4つのグループに分かれていることが明らかになった。こうして考えると、「連体形 - 一般」と「終止形 - 一般」は振る舞いの的に近く、「未然形 - セ」もこの2つの活用形と似ている特徴を持つことがわかる。また、「意志推量形」、「連用形 - 一般」、「仮定形 - 一般」、「命令形 - 一般」は、いずれも特殊な意味を加えた活用形であることから、活用的振る舞いも似ていることが示唆された。

以上をふまえ、漢語サ変動詞の活用形に関する指導を行う場合に、すべての活用形を個別に・対等に指導するのではなく、4つのグループにまとめて指導するほうが効果的である。また、具体的な用例を提示する際にも、各グループに最も典型的な漢語サ変動詞の用例を提示することが望ましい。

よって、ここでは、4つのグループそれぞれに最も典型的な用例を特定するものとする。それに先立ち、コレスポネンス分析で得られた4つのグループそれぞれの核範囲のスコアを規定する。コレスポネンス分析では、各活用形の第1アイテムの縦軸と横軸における得点は以下のとおりである。

表6 第1アイテムの得点

第1アイテム	次元 1	次元 2
未然 - 一般	-1.28	3.56
未然 - サ	1.91	0.12
未然 - セ	-0.69	1.65
意推	-0.73	-0.37
連用	-0.48	-0.82
終止	-0.69	0.69
連体	-0.38	1.31
仮定	-0.73	-0.45
命令	-0.76	-0.49

グループ別に含まれる活用形の第1アイテムの横軸と縦軸上のスコアを平均した値を当該グループの核とする。グループ（Ⅰ）と（Ⅱ）はそれぞれ一つの活用形のみ含めているため、該当する活用形の第1アイテムの横軸と縦軸の値を直接グループの核の値とする。また、グループ（Ⅲ）と（Ⅳ）は2つ以上の活用形を含んでおり、それらについては、含

まれる活用形の第1アイテムの横軸と縦軸上の値の平均値を算出して、当該グループの核の値にする。こうして決めた4つのグループの核の値はそれぞれ、横軸と縦軸上のスコアが(1.91, 0.12), (-1.28, 3.56), (-0.58, 1.21), (-0.68, -0.53)となる。ただし、各グループに対応する典型的漢語サ変動詞を特定するため、これらの核の値より、横軸と縦軸それぞれ±0.5の範囲に絞る。こうして得られた各グループの範囲の値は下表のとおりである。そして次元散布図に示すと、下図のようになる。

表7 各グループの中核部分の範囲

グループ	範囲
I 未然形 - サ	横軸 (1.41~2.41) ; 縦軸 (-0.38~0.62)
II 未然形 - 一般	横軸 (-1.78~1.78) ; 縦軸 (3.06~4.06)
III 未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般	横軸 (-1.08~0.08) ; 縦軸 (0.71~1.71)
IV 意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般	横軸 (-1.18~-0.18) ; 縦軸 (-1.03~-0.13)

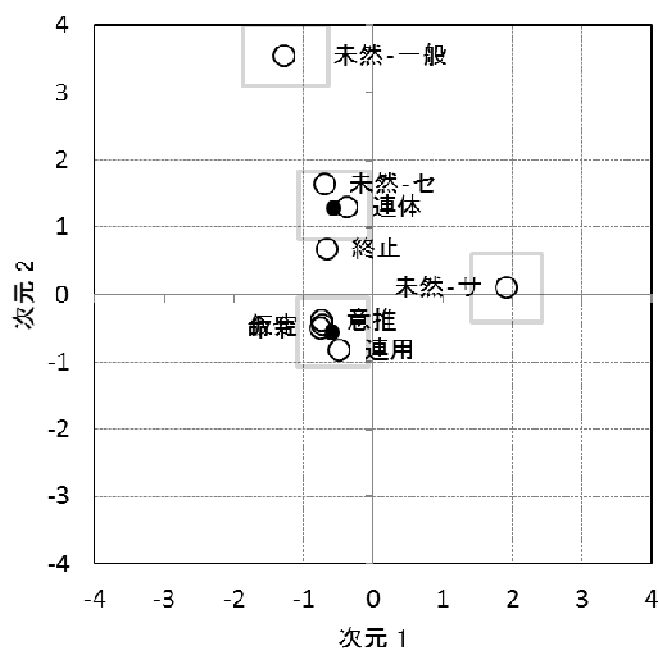


図7 グループごとの中核部分の範囲

つづいて、各グループに含まれる高頻度・汎用的漢語サ変動詞を特定する。その際、各漢語サ変動詞の第2アイテムにおける得点に基づく。

表8 第2アイテムの得点

	次元 1	次元 2		次元 1	次元 2		次元 1	次元 2
存在する	-1.57	3.40	主張する	-0.86	-0.21	支配する	0.14	0.60
利用する	-0.35	-0.22	要求する	0.97	0.66	結婚する	-1.13	-0.90
紹介する	-0.08	-1.17	完成する	0.40	-1.08	実行する	-0.24	0.77
説明する	-0.83	-0.60	判断する	-0.33	0.20	変更する	-0.10	0.82
使用する	0.02	0.60	成功する	-0.67	-1.06	拡大する	-0.42	-0.98
確認する	-0.39	-0.52	設置する	1.25	-0.01	解決する	-0.82	2.19
理解する	-0.47	-0.19	決定する	0.33	0.19	解放する	2.58	0.34
表示する	2.84	0.90	作成する	-0.23	-0.34	比較する	-1.15	-0.77
発見する	1.57	-0.79	選択する	-0.83	-0.86	集中する	-0.54	-0.89
発生する	-0.94	-0.07	開始する	0.55	-0.77	購入する	-1.04	-1.15
注目する	2.00	-0.32	採用する	0.74	-0.28	発揮する	-0.15	0.61
指摘する	0.80	-0.63	登場する	-1.04	0.36	一致する	-1.29	1.75
期待する	0.73	-0.40	認識する	0.50	0.08	無視する	-0.38	-1.28
実施する	0.07	-0.21	予想する	2.52	-0.29	維持する	-0.19	1.12
用意する	0.28	-1.01	成立する	-0.95	0.69	適用する	2.02	1.31
発表する	0.63	-1.42	報告する	0.68	-0.32	確立する	0.28	0.15
注意する	-1.04	0.54	導入する	0.78	-0.03	記載する	1.32	0.54
開催する	2.38	-0.20	発売する	2.94	0.07	勉強する	-1.14	0.01
構成する	1.82	1.61	意識する	-0.58	-0.36	分類する	1.33	0.00
評価する	0.72	0.80	移動する	-0.32	-0.26	安定する	-0.68	-1.93
設定する	0.11	-0.16	指定する	0.57	-0.01	観察する	-0.32	-0.28
変化する	-0.60	0.18	強調する	-0.07	-0.41	保存する	0.10	0.00
提供する	-0.44	1.23	発展する	0.34	-0.97	心配する	-1.00	1.15
形成する	1.49	0.39	増加する	-0.92	-1.97	重視する	-0.15	0.36

実現する	-0.23	1.53	開発する	1.21	-0.82	考慮する	-0.80	-0.06
表現する	-0.07	0.59	否定する	-0.26	1.14	販売する	0.72	0.04
展開する	0.43	-0.49	提出する	0.15	0.66	想像する	-0.52	-0.73
参加する	-0.93	-0.72	反映する	1.07	-0.97	活用する	-0.57	-0.58
検討する	-0.48	0.09	規定する	0.81	1.22	限定する	1.72	0.47
意味する	-1.29	1.39	代表する	1.02	2.44	減少する	-0.81	-1.90
対応する	-1.03	0.26	掲載する	2.32	-0.44	区別する	0.30	1.39

上表に基づき、各グループに典型的な漢語サ変動詞を抽出した結果、以下の漢語サ変動詞が特定された。

表9 グループ別典型的漢語サ変動詞

グループ	典型語
I 未然形 - サ (4 語)	注目する, 開催する, 形成する, 限定する
II 未然形 - 一般 (1 語)	存在する
III 未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般 (6 語)	提供する, 実現する, 否定する, 実行する, 変更する, 心配する
IV 意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般 (20 語)	利用する, 説明する, 確認する, 理解する, 発生する, 主張する, 作成する, 選択する, 意識する, 移動する, 結婚する, 拡大する, 比較する, 集中する, 勉強する, 観察する, 考慮する, 参加する, 想像する, 活用する

上記より、各グループの典型的な漢語サ変動詞の特定ができることが確認された。言い換えれば、特定された漢語サ変動詞は、特に活用上の選好性が明らかなものである。これらの漢語サ変動詞を用いて活用形に関する知識を教授することは妥当性が高く、効果的であると考えられる。

ただし、活用グループ間において、典型語例の数に若干差が見られることに留意しなければならない。グループ (II) 「未然形 - 一般」には「存在する」の 1 語のみあり、グループ (I) 「未然形 - サ」には「注目する」、「開催する」、「形成する」、「限定する」の 4 語のみである。一方、グループ (IV) 「意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一

般」には、「利用する」、「説明する」、「確認する」、「理解する」、「発生する」、「主張する」、「作成する」など、典型的漢語サ変動詞は 20 語に達している。前節ですでに確認できたように、漢語サ変動詞は全体として「連用形 - 一般」、「未然形 - サ」、「連体形 - 一般」で最も多く使用されている。この点をあわせて考えれば、グループ (IV) には「連用形 - 一般」が含まれているため、典型語例の数も最も多いのが当然である。しかしながら、2 番目に多く使われているグループ (I)「未然形 - サ」には、典型語例が非常に少ない。このことから、「連用形 - 一般」が漢語サ変動詞、あるいは動詞全般に共通して多く使われるものであり、「未然形 - サ」は特定した漢語サ変動詞が選好する活用形であることが裏付けられた。

以下、グループごとに典型的漢語サ変動詞の用例を概観しておこう。グループ (I) については「注目する」、「開催する」、グループ (II) については「存在する」、グループ (III) については「提供する」、「実現する」、グループ (IV) については「利用する」、「説明する」の例を取り上げる。

グループ (I)

- (1) 各球団とも上位候補としてリストアップしており、進路が注目されていました。
(ブログ OY15_05833)
- (2) 02 年日本民藝館で生誕百年記念の展覧会が開催された。ミケランジェロはおよそ生誕五百年になる。
(書籍・芸術 PB47_00157)

グループ (II)

- (3) そういう理由によるだろう。プロが初心者の非合理性の中に、存在しない高度な合理性を誤認するからである。
(書籍・芸術 PB47_00139_4120)

グループ (III)

- (4) 「ネットワークの一部又は全部において I P ネットワーク技術を利用して提供する音声電話サービスとする」と位置付けています。
(書籍・技術・工学 PB35_00140)
- (5) ・ ・ ・ 文書や表、データベースを作るなど、それぞれの目的を実現するためのソフトのことで。アプリケーション・ソフトウェアというのを略した言い方です。
(知恵袋 OC02_07719)

グループ (IV)

(6) 利用できる超自然的な力の存在を知って、同じようにその力を利用しようとしたらどうするんです」 (書籍・文学 LBo9_00079)

(7) 専門知識が必要な技術でも、知的好奇心を満たすようにわかりやすく説明すれば、むしろ興味をもって読んでくれるし、実際多くの読者の共感を得る・・・ (書籍・産業 LB16_00021)

活用形というのは非常に幅広い概念であり、教育現場において、個々の漢語サ変動詞について、すべての活用形を提示して細かく指導するのが難しいことであるが、上記のように、グループに分けて、それぞれにおける典型的漢語サ変動詞の用例を取り出して指導することが、効率的で有益であろう。

5.5 まとめ

本章では、従来の漢語サ変動詞に関する研究においてほとんど重視されていなかった活用形の問題に焦点を当てて議論を進めてきた。以下では、リサーチクエスチョンごとに結論を述べる。

RQ1 「漢語サ変動詞の活用上の選好性」については、大分類について、基本形にあたる「終止形」が1割にも達しておらず、「連用形」、「未然形」、「連体形」の3種類が全体の9割を占めていることが明らかになった。また、小分類について、13種のうち、漢語サ変動詞はとくに「連用形 - 一般」、そして「未然形 - サ」を選好していることが明らかになった。

RQ2 『『する』と比較した場合の漢語サ変動詞の活用上の選好性』については、全体として、「する」と似ている部分が多いものの、漢語サ変動詞の独自の特徴として、(1) 順位として、「連用形」の次に「連体形」ではなく、「未然形」が多いこと、(2) 「連用形 - 一般」の比率が低く、代わって「未然形 - サ」の比率が高いことが確認された。

RQ3 「個々の漢語サ変動詞の活用上の選好性」については、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語のすべてについて、活用形別使用頻度、および選好する活用形の上位 3 種を特定したうえで、情報として漢語サ変動詞リストに付与した。また、ほんの一部が異なるものの、その多くが「連用形 - 一般」、「未然形 - サ」、「連体形 - 一般」を典型的活用パターンとして持つことを確認できた。

RQ4 「活用上の選好性に基づく漢語サ変動詞の分類」については、全 13 種類の活用小分

類は、事実上、使用状況にふまえ9種類に絞られ、こういった9種類がさらに(1)「未然形 - サ」、(2)「未然形 - 一般」、(3)「未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般」、および(4)「意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般」の4つのグループに区分されることが明らかになった。なお、各グループの中核範囲を定め、そこに含まれる漢語サ変動詞を特定することを通して、「未然形 - サ」については「注目する」、「開催する」など、「未然形 - 一般」については「存在する」など、「未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般」については「提供する」、「実現する」など、「意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般」については「利用する」、「説明する」などの典型的語例が存在することが明らかにされた。

このように、高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語について、選好する活用形の調査、「する」との活用上の振る舞いの比較、選好する活用形に基づく分類を行い、有益な知見を得た。すでに述べたように、先行研究では、漢語サ変動詞の活用については、「とくに指摘すべきことはない」(田野村, 1998)と指摘されていたわけであるが、漢語サ変動詞は「する」と比較しても、固有の活用上の特性を持ち、また、漢語サ変動詞の枠内における個々の単語も、それぞれ特有の活用選好性を持つことが明らかになった。これらの点を組み込んだモデル化を試みることにより、漢語サ変動詞の振る舞いをより多元的に記述することができよう。今後、漢語サ変動詞の問題を、日本語学的にまた、日本語教育学的に扱っていくうえで、こうした活用情報を考慮していくことがきわめて重要であろう。

第6章 漢語サ変動詞の内部構成性

4章では、大規模なコーパスデータをふまえ、現代日本語における高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行い、5章では、それらの語の活用上の選好性について議論を行った。ただし、すでに述べたように、漢語サ変動詞の特性を明らかにするうえでは、活用上の選好性のみならず、多面的な検討が必要になる。本章では、漢語サ変動詞を研究するうえでもう一つの観点として、漢語部の内部構成性について考察を行う。

漢語サ変動詞の内部構成の問題は古くから取り上げられてきたが、内省的・理論的分類や構造の解明を目指したものが多くて、頻度や汎用性を考慮せずに漢語サ変動詞を扱う傾向が強い。しかしながら、学習者にとっては、漢語サ変動詞を満遍なく指導するのではなく、主要的・典型的なものに絞った効率的な指導法が求められる。この点をふまえ、4章で特定された高頻度・汎用的漢語サ変動詞について、その典型的な内部構成パターンを明らかにできれば、漢語サ変動詞を学習するうえでは非常に有益な情報を与えられると言えよう。

6.1 本章の目的と構成

よって、本章では、重要漢語サ変動詞の各々について、漢語部の構成要素間の結合パターンを計量的に概観することで、漢語サ変動詞全般に見られる典型的な語構成モデルを特定する。そのうえで、内部構成パターンごとに典型語例を整理し、学習者にわかりやすく示す。

ただし、すでに見たように、漢語部の内部構成パターンについて、多様な分類の枠組みが提唱されてきたが、それらの枠組み間には食い違いや矛盾がしばしば観察され、また、実際にはほとんど使用されないような語も包含できるよう、過度に煩瑣な分類がなされていることもある。この点をふまえると、先行研究で提唱された分類の枠組みを再整理し、言語学および教育的に有用性の高い新たな内部構成分類の枠組みを決定することが重要であろう。よって、本章では、従来の研究を参考に漢語サ変動詞の語構成分類の枠組みを検討し、その上で、計量調査により、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の内部構成上の特徴を検討する。

これまでの研究では、多くの研究者が、語の構成要素の機能的側面である品詞結合、あるいは、意味的側面である意味結合に注目して研究を行ってきた。確かに、構成要素間の品詞結合と意味結合は漢語サ変動詞の構成上の特性を示す重要な観点である。ただし、これらを別個に見るだけでなく、組み合わせて見ることもまた必要である。たとえば、同じ

「V-V」という品詞結合の中には「並列関係」と「修飾関係」という2つの異なる意味結合が存在する。また、一口に「並列関係」と言っても、「N-N」、「V-V」、「A-A」など、多様な品詞結合が含まれる。これらの点をふまえると、2種類の観点を統合した結合についても調査する必要があると言える。

よって、以下では、漢語サ変動詞の(1)品詞結合、(2)意味結合、(3)品詞・意味結合の3つの観点につき、新たな分類の枠組みを決定し、主として量的観点から分析を進めていくこととする。6.2においては、本章の目的にそって、リサーチクエスチョンを設定する。6.3においては、上記の3つの観点それぞれから、新たに内部構成パターンの分類の枠組みを決める。6.4においては、リサーチクエスチョン順に研究手順を説明する。6.5においては、分析の結果をふまえ、考察を加える。6.6においては、まとめを行う。

6.2 リサーチクエスチョン

上述したように、本章では、(1)品詞結合、意味結合、および品詞・意味結合における新たな枠組みの検討、(2)4章で抽出された93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞の内部構成分類、(3)分類ごとの主要用例の検証、(4)言語学的・教育学的視点をふまえた分類モデルの精選を行う。リサーチクエスチョンは以下のように設定する。

- RQ1 品詞結合に注目すると、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのように分類され、主として重要性の高い品詞結合範疇にはどのようなものがあるか。
- RQ2 意味結合に注目すると、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのように分類され、主として重要性の高い意味結合範疇にはどのようなものがあるか。
- RQ3 品詞・意味結合に注目すると、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのように分類され、主として重要性の高い品詞・意味結合範疇にはどのようなものがあるか。

6.3 内部構成分類枠組みの検討

すでに述べたように、従来の研究は、品詞結合と意味結合を分けて議論したり、実際の頻度情報を考慮しないモデルを提案したり、各研究者がそれぞれ異なるモデルを提案したりする、といった点で問題が残る。そこで、本研究では、品詞結合、意味結合、品詞・意味結合の3種の観点を立て、実際のコーパスから抽出された高頻度・汎用的漢語サ変動詞の照合を行い、言語学的・教育学的に汎用性と妥当性の高い分類モデルの抽出を目指すこ

とになるが、ここで重要になるのは、広く先行研究の内容を要約したうえで、品詞結合、意味結合、及び品詞・意味結合のそれぞれについて、妥当性の高い分類の枠組みを決定することである。以下では、3観点に基づく分類の枠組みについて詳説する。

6.3.1 品詞結合分類の枠組みの決定

漢語サ変動詞の漢語部は、前項文字と後項文字の組み合わせである。ゆえに、前項文字のとりうる品詞分類数と後項文字のとりうる品詞分類数の積が、理論上の品詞結合枠組み数ということになる。日本語の品詞は細かく分けると多岐にわたるが、漢語部の前項・後項文字がとりうる品詞はその中のごく一部である。野村（1999）は、叙述の対象となる物や事をあらわす「事物類（N）」、事物の動作・作用をあらわす「動態類（V）」、事物や精神の性質・状態をあらわす「様相類（A）」、動作や状態の程度・内容を限定・修飾する「副用類（M）」、および語基について形式的な意味をそえる「接辞（s）」の5種類あるとしている。これらは一般に言う名詞、動詞、形容詞、副詞、接辞に相当するものである。本研究においても、野村（1999）を踏襲し、漢語サ変動詞の漢語部の前項文字と後項文字のとりうる品詞を上記の5種類と考える。

この場合、品詞結合としては、理論的に（5×5＝）25種が存在することになる。しかしながら、「N-M」、「s-M」、「A-M」、「V-M」、「M-N」、「s-s」など、語形成上では認められないものを排除すれば、漢語の品詞結合は最大で「N-N」、「N-V」、「N-A」、「N-s」、「V-N」、「V-V」、「V-A」、「V-s」、「A-N」、「A-V」、「A-A」、「A-s」、「M-V」、「M-A」、「M-s」、「s-N」、「s-V」、「s-A」の18種類になる。この中には、漢語としては成立するが、漢語サ変動詞としては成立しないものも含まれる。18種類の品詞結合のそれぞれについて、例を示すと下表のようになる。

表1 品詞結合の枠組み

品詞結合	語例	品詞結合	語例
N-N	矛盾する, 形容する	A-V	軽視する, 重視する
N-V	骨折する, 銃殺する	A-A	温暖, 簡易
N-A	民主, 性善	A-s	悪化する, 深化する
N-s	風化する, 砂化する	M-V	予想する, 予測する

V-N	帰国する, 読書する	M-A	最速, 極悪
V-V	存在する, 増加する	M-s	特化する
V-A	拡大する, 減少する	s-N	無力, 無口
V-s	進化する, 退化する	s-V	否定する
A-N	紅葉する	s-A	不精する, 無益

6.3.2 意味結合分類の枠組みの決定

意味結合についても、様々な研究がなされているが、個々の研究間には食い違いや矛盾がしばしば観察される。本研究では、日向（1985）の「並列関係」、「修飾関係」、「客体関係」、「実質関係」の4分類を採用し、新たに「補充関係」という分類を加え、全体で5分類とする。なお、「補充関係」を加えたのは、野村（1999）を参考にしたものである。

表2 意味結合の枠組み

意味結合	語例
並列関係	存在する, 選択する
修飾関係	紅葉する, 短縮する
客体関係	帰国する, 登山する
補充関係	拡大する, 縮小する
実質関係	否定する, 無視する

これらの分類範疇について、以下、詳細に定義を行っておく。

(1) 並列関係

漢語サ変動詞の語幹部漢語を構成する要素間に、同義、類義、対義、反義の関係が存在する場合を指す。たとえば、同義については「削減する」、「増加する」、「減少する」、類義については「尊敬する」、「排除する」、「参加する」、対義・反義については、「開閉する」、「勝負する」、「始終する」などが挙げられる。野村（1999）では、「並列関係」は「対立関係」と「重複関係」と別項に区分されているが、左右両方の構成要素が語の意味形成において、ほぼ同等の重みを持ち、いずれか片方が主要な要素とはなっていない点において共通することから、本研究では、これらをすべて「並列関係」に統合する。

(2) 修飾関係

漢語サ変動詞の語幹部漢語を構成する要素間に、連体修飾ないし連用修飾の関係が存在する場合を指す。連体修飾と連用修飾は、統語的な位置づけは異なるものの、後項文字が語の意味的主要部となり、前項文字が後項文字を修飾するという点では共通することから、本研究では両者の区別は行わない。たとえば、「激増する」、「前進する」、「直送する」、「軽視する」、「紅葉する」などがこの分類に当てはまる。

(3) 客体関係

漢語サ変動詞の語幹部漢語を構成する要素間に、「が格」、「を格」、「に(へ)格」、「から格」など、何らかの格関係が内包される場合を指す。各種の意味結合のうち、「客体関係」は、先行研究において、最もネーミングや範疇に食い違いが見られるものの一つである。ここでいう「客体関係」は、たとえば、斎賀(1957)では「主述関係」と「客体関係」として、野村(1999)では「補足関係」と定義されている。これらに対し、本研究では、前項文字と後項文字間で何らかの格関係が含まれるものをすべて「客体関係」に分類する。「が格」の例としては「骨折する(→骨が折れる)」、「気絶する(→気が絶える)」など、「を格」の例としては「読書する(→書(本)を読む)」、「返品する(→品(物)を返す)」など、「に(へ)格」の例としては「入学する(→学校に入る)」、「登山する(→山に登る)」など、「から格」の例としては「離陸する(→陸から離れる)」、「落馬する(→馬から落ちる)」などが挙げられる。

(4) 補充関係

漢語サ変動詞の語幹部漢語を構成する要素間に、意味的な補完関係が存在する場合を指す。このとき、語全体の動的意味の中核をなすのは前項要素で、後項構成要素は前項構成要素に対して意味を補完する役割を果たしている。たとえば、「拡大する(→大きく広げる)」、「縮小する(→小さく縮める)」などである。意味的主要部を担う文字要素とそれを説明・解釈する文字要素の組み合わせである点において(2)の「修飾関係」に類似するが、主要部要素が前項であれば「補充関係」になり、後項であれば「修飾関係」となる。なお、漢語サ変動詞の語幹部漢語については、前後の文字の入れ替え(「拡大する←→*大拡する)が成立しないことから、「補充関係」と「修飾関係」を区別することは重要であると考えら

れる。

(5) 実質関係

漢語サ変動詞の語幹部漢語を構成する要素間に、単独では語として使用しにくい構成要素と、その接辞的成分の結合関係が存在する場合を指す。本研究では、基本的に日向(1985)の分類における「実質関係」の立場に立つ。野村(1999)では、接辞を構成要素とするものは「その他」と扱われているが、ここでは、日向(1985)にならんで、すべて「実質関係」の分類として扱う。たとえば、「酸化する」、「鈍化する」、「退化する」、「悪化する」、「否定する」などが挙げられる。

6.3.3 品詞・意味結合分類の枠組みの決定

前節では、漢語サ変動詞の品詞結合は18種あり、意味結合は5種あるとした。このことから、構成要素間の品詞・意味結合は、理論上、 $(18 \times 5 =) 90$ 種類になるわけであるが、すべての品詞結合とすべての意味的結合が組み合わせられるわけではない。たとえば、「A-N」という品詞結合は「並列関係」にはなれず、「V-V」という品詞結合は「客体関係」になれない。また、野村(1999)に基づくと、「A-A」という品詞結合は漢語サ変動詞になりにくい。

これらの点を考慮に入れ、漢語サ変動詞の語幹部漢語の構成要素間の品詞・意味結合を整理したところ、以下の18種類となる。例の一部は野村(1999)から引用したものである。なお、以下の分類中、「並列関係」は「-」、「修飾関係」は「>」、「客体関係」は「+」、「補充関係」は「<」、「実質関係」は「・」の記号で示している。

表3 品詞・意味結合の枠組み

統合結合分類	例
N-N 並列関係	意味する, 意見する
V-V 並列関係	選択する, 開閉する
N>N 修飾関係	手術する, 病気になる
N>V 修飾関係	林立する, 列挙する
V>N 修飾関係	起因する, 残業する
V>V 修飾関係	誤診する, 傾聴する

A>N 修飾関係	紅葉する, 大病する
A>V 修飾関係	短縮する, 軽減する
M>V 修飾関係	予防する, 再建する
N+V 客体関係	骨折する, 気絶する
V+N 客体関係	看病する, 入院する
V<A 補充関係	拡大する, 縮小する
N・s 実質関係	風化する, 電化する
V・s 実質関係	進化する, 激化する
A・s 実質関係	酸化する, 強化する
M・s 実質関係	特化する
s・V 実質関係	否認する, 不足する
s・A 実質関係	不精する

6.4 研究手法

以下、上記の3観点に基づく語構成パタンの分類の枠組みに基づき、93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞の語幹部漢語を分類していく。その際、一般的には、93語のうち、個々の分類範疇に何語が分類されたかを調べ、分類範疇間の関係性を見ることになる。たとえば、93語中、20語がある範疇に分類される場合は、20を93で割った21.5パーセントが当該範疇の占有比ということになる。これを語種ベースの計量と呼ぶ。

しかしながら、93語は頻度・汎用性において必ずしも等しいものではなく、上位語と下位語では当然ながらその重要性も変わってくる。そこで、本研究では、以上で示した語種ベースの計量に加え、頻度と汎用性を加味した総合指標ベースでの計量を行うこととする。ここで言う総合指標とは、4章で示した93語の各々が持つ第1主成分得点（詳しくは4章の主成分分析を参照されたい）のことである。この場合、93種の高頻度・汎用的漢語サ変動詞の持つ第1主成分得点の合計値に占める当該範疇に分類された漢語サ変動詞の持つ第1主成分得点の合計値の比率を求めることになる。

以下、各リサーチクエスションについて、具体的な研究手順を紹介する。

まず、RQ1「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞結合」については、前節で決定した品詞結合分類に基づき、特定された93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞を対応する範疇に割り当て、範疇間の関係性を計量的に調査する。あわせて、とくに多く出現する品詞結合範

疇について、実例をふまえて質的検証を行う。

次に、RQ2「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の意味結合」については、はじめに、前節で決定した意味結合分類に基づき、特定された93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞を対応する範疇に割り当てる。そのうえで、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はどのような意味結合的特徴を有するかを計量的に考察する。それとともに、とくに多く出現する意味結合について、実例をふまえて質的検証を行う。

また、RQ3「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞・意味結合」については、前節で決めた漢語サ変動詞の品詞・意味結合分類の枠組みに基づき、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を各範疇に分類する。そのうえで、質的検証と計量的考察を加えていく。

なお、構成要素の意味や品詞性の判定に際して、判断の揺らぎを避けるため、『新潮日本語漢字辞典』（新潮社、2008）、『漢字源』（改訂第5版、学習研究社、2011）、『三省堂常用漢字辞典』（三省堂、2013）の3種類の漢字辞書を参照し、これら3種類の漢字辞書に記載されている個々の文字の訓や意味を基準として分類する。

1つの漢字が2つ以上の意味や品詞性を持つ場合、また、同じ意味を表す訓が複数ある場合、辞書の記述に基づくことを基本とし、とくに語構成要素間の意味結合に注目する。たとえば、「確立する」の「確立」を例に説明すると、構成要素間の品詞結合は「確かめる＋立てる」という「V+V」パターン、「確か＋立てる」という「A+V」パターン、「確かに＋立てる」という「M+V」パターンのいずれかであると考えられる。このとき、上記の辞書では「確立」という語が「たしか」という形容詞の字訓の例として挙げられていることから、ここでは「A+V」パターンと分類する。ただし、「確か＋立てる」では、意味的結合関係は成立しないことから、意味結合については「修飾関係」と分類する。こうした分類を取ることにより、同一項目について、品詞結合と意味結合に若干のずれが生じている場合もあるが、この点については今後の検討課題とし、本節では辞書に基づく分類を優先する。

なお、辞書間で記述が揃っていない場合は、3つの辞書のうち、2つに出現しているものを採用する。さらに、3辞書間で統一した意味が見つからない場合は、収録内容が最も多く、記述が最も詳細である『新潮日本語漢字辞典』に準ずる。

以上のような処理手順を取ることで、同じ語が先行研究と異なる分類を与えられる場合もある。たとえば、「挨拶」を例にすると、小林（2004）はこれを「構成要素が抽出できないもの」としているが、上記の辞書の解説をふまえると、「挨拶」は「さま挨拶＋さま揉る」と読み下ろすことができるので、本研究ではこれを「並立関係」の「V-V」と認定する。なお、こ

のとき、「挨拶」という語の意味と「挨拶／揉る」（相手に近付く）の意味の間には若干のずれがあるが、本研究では、構成要素の意味間の関係性を基準として分類する。

6.5 結果と考察

6.5.1 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞結合

前節で述べた手順により、93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞を18種類の品詞結合範疇に分類した。結果は以下のとおりである。

表4 品詞結合別高頻度・汎用的漢語サ変動詞

品詞結合	高頻度・汎用的漢語サ変動詞
N-N	意味する（意 ^{オモイ} ＋味 ^ミ ），意識する（意 ^{オモイ} ＋識 ^{シキ} ）
N-V	理解する（理 ^{コトワリ} ＋解 ^ク く），心配する（心 ^{ココロ} ＋配 ^{ケイ} る），形成する（形 ^{カタ} ＋成 ^ネ す），規定する（規 ^キ ＋定 ^{テイ} める），一致する（一 ^{イチ} ＋致 ^チ す）
N-A	該当なし
N-s	該当なし
V-N	想像する（想 ^{オモ} う＋像 ^{ゾウ} ），注目する（注 ^{ツク} ぐ＋目 ^メ ），用意する（用 ^{ヨウ} いる＋意 ^イ ），注意する（注 ^{ツク} ぐ＋意 ^イ ），評価する（評 ^{アゲツラ} う＋価 ^カ ），分類する（分 ^{ワケ} ける＋類 ^{ライ} ），成功する（成 ^{セイ} す＋功 ^{コウ} ），開始する（開 ^{ヒラ} く＋始 ^シ まり），登場する（登 ^{トウ} る＋場 ^バ ），強調する（強 ^{チヨウ} める＋調 ^{テウ} ），集中する（集 ^{シユ} める＋中 ^{チュウ} ），適用する（適 ^{テキ} う＋用 ^{ヨウ} ）
V-V	存在する（存 ^{ソン} る＋在 ^{ザイ} る），利用する（利 ^リ く＋用 ^{ヨウ} いる），紹介する（紹 ^{ショウ} ぐ＋介 ^{ケイ} する），使用する（使 ^シ う＋用 ^{ヨウ} いる），確認する（確 ^{コク} かめる＋認 ^{ニン} める），表示する（表 ^{ヒョウ} す＋示 ^シ す），発見する（発 ^{ハツ} く＋見 ^{ケン} える），発生する（発 ^{オコ} る＋生 ^{セイ} む），観察する（観 ^{カン} る＋察 ^{サツ} る），保存する（保 ^ホ つ＋存 ^{ゾン} つ），考慮する（考 ^{コウ} える＋慮 ^ロ ），販売する（販 ^{ハン} ぐ＋売 ^{バイ} る），活用する（活 ^{カツ} かす＋用 ^{ヨウ} いる），限定する（限 ^{ゲン} る＋定 ^{テイ} める），区別する（区 ^ク する＋別 ^{ベツ} かつ），指摘する（指 ^シ す＋摘 ^{テキ} む），期待する（期 ^キ つ＋待 ^{タイ} つ），発表する（発 ^{ハツ} く＋表 ^{ヒョウ} す），開催する（開 ^{ヒラ} く＋催 ^{サイ} す），構成する（構 ^{コウ} える＋成 ^ネ す），設定する（設 ^{セツ} ける＋定 ^{テイ} める），変化する（変 ^{ヘン} わる＋化 ^カ ける），提供する（提 ^{テイ} げる＋供 ^{コウ} える），表現する（表 ^{ヒョウ} れる＋現 ^{ゲン} れる），展開する（展 ^{テン} げる＋開 ^{カイ} ける），参加する（参 ^{サン} る＋加 ^カ える），検討する（検 ^{ケン} べ

	<p>る+討^{ツク}ねる), 対応する(対^{コタ}える+応^{コタ}える), 要求する(要^{ヨウ}る+求^{モト}める), 完成する(完^{カン}わる+成^ナす), 判断する(判^{ワカ}つ+断^{ツク}つ), 設置する(設^セける+置^ケく), 決定する(決^{ケツ}める+定^{テイ}める), 作成する(作^{サク}る+成^ナす), 選択する(選^{セン}ぶ+択^{タク}ぶ), 採用する(採^{サイ}る+用^{ヨウ}いる), 認識する(認^ニめる+識^シる), 成立する(成^{セイ}る+立^リつ), 報告する(報^{ホウ}せる+告^{コウ}げる), 導入する(導^{ドウ}く+入^{ニュウ}れる), 発売する(発^{ハツ}る+売^ウる), 移動する(移^イす+動^{ドウ}く), 指定する(指^シす+定^{テイ}める), 発展する(発^{ハツ}く+展^{テン}げる), 増加する(増^{ゾウ}やす+加^カえる), 開発する(開^{カイ}る+発^{ハツ}く), 提出する(提^{テイ}げる+出^{シュツ}す), 反映する(反^{カン}る+映^{エイ}る), 代表する(代^{ダイ}わる+表^{ヒョウ}す), 掲載する(掲^{ケイ}げる+載^{サイ}せる), 支配する(支^シつ+配^{ハイ}る), 結婚する(結^{ケツ}ぶ+婚^{コン}する), 変更する(変^{ヘン}わる+更^カる), 解決する(解^{ケツ}く+決^{ケツ}める), 解放する(解^{ケツ}く+放^{ホウ}す), 比較する(比^ヒべる+較^{コウ}べる), 購入する(購^{コウ}う+入^{ニュウ}れる), 発揮する(発^{ハツ}つ+揮^ヰう), 維持する(維^ヰぐ+持^チつ), 記載する(記^キす+載^{サイ}せる), 勉強する(勉^{メン}ます+強^{カウ}める), 安定する(安^{アン}んじる+定^{テイ}まる)</p>
V-A	説明する(説 ^{セツ} く+明 ^{メイ} らか), 減少する(減 ^{ケン} らす+少 ^{ショウ} ない), 拡大する(拡 ^{クワ} げる+大 ^{ダイ} きい)
V-s	該当なし
A-N	該当なし
A-V	重視する(重 ^{ジュウ} く+視 ^シ る), 主張する(主 ^{シュウ} に+張 ^{カウ} る), 無視する(無 ^ム +視 ^シ る), 確立する(確 ^{ケツ} か+立 ^リ てる)
A-A	該当なし
A-s	該当なし
M-V	実施する(実 ^{ジツ} に+施 ^{セシ} す), 実現する(実 ^{マコト} に+現 ^{ゲン} れる), 予想する(予 ^{アヲカジメ} +想 ^{オモ} う), 実行する(実 ^{ジツ} に+行 ^{コウ} う)
M-A	該当なし
M-s	該当なし
s-N	該当なし
s-V	否定する(否 ^{イナ} +定 ^{テイ} める)
s-A	該当なし

上表を観察して気が付くことは3点ある。

1点目は、18種類の品詞結合が存在するが、高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、このうち、8種類にのみ存在しており、実際の漢語サ変動詞のとりうる品詞的結合範疇はきわめて制約的だということである。言語理論上許容されるものと、実質上使用されるものとの間に乖離が存在することは多くのコーパス研究では明らかにされているが、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞結合についても同じことが言える。なお、このように、コーパス調査をふまえることで、品詞結合の数が圧縮されたことは、言語学的に、また、教育学的にきわめて重要なことであると言える。

2点目は、存在が確認された8種類の結合分類のうち、「N-N」を除けば、すべての結合分類において、「V」という動詞的構成要素が含まれている一方、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現していない品詞結合として、出現が確認されなかった品詞結合は、すべて動詞的要素「V」を含まないことである。これは、漢語サ変動詞としての内部構成を判断する際に有用な知見となりうる。すなわち、多くの場合、構成要素「V」は、漢語サ変動詞全体の動詞性を保証するものであり、内部構成要素に動詞性の文字が含まれていれば、当該語が漢語サ変動詞として使われやすく、一方、動詞性の文字が含まれていなければ、当該語が漢語サ変動詞として使いにくいということになる。従来、漢語サ変動詞は、「する」の部分で動詞性を補充することから、きわめて幅広い漢語に対して、漢語サ変動詞形が成り立つと考えられてきた。しかしながら、今回の研究結果では、そうした結論と異なる造語的・語構成的特性が示されている。すなわち、漢語部だけでもすでに動詞性が包含されており、強意・強調の目的で「する」が添えられることで、漢語サ変動詞形が成り立つということである。

3点目は、8種類の品詞結合がそれぞれ同等の重要性を持つのではなく、多くの高頻度・汎用的漢語サ変動詞が分類される範疇の数はさらに制約的だということである。語種ベースと総合指標ベースの2つの観点から品詞結合範疇の構成比を調べた結果、以下のようになる。

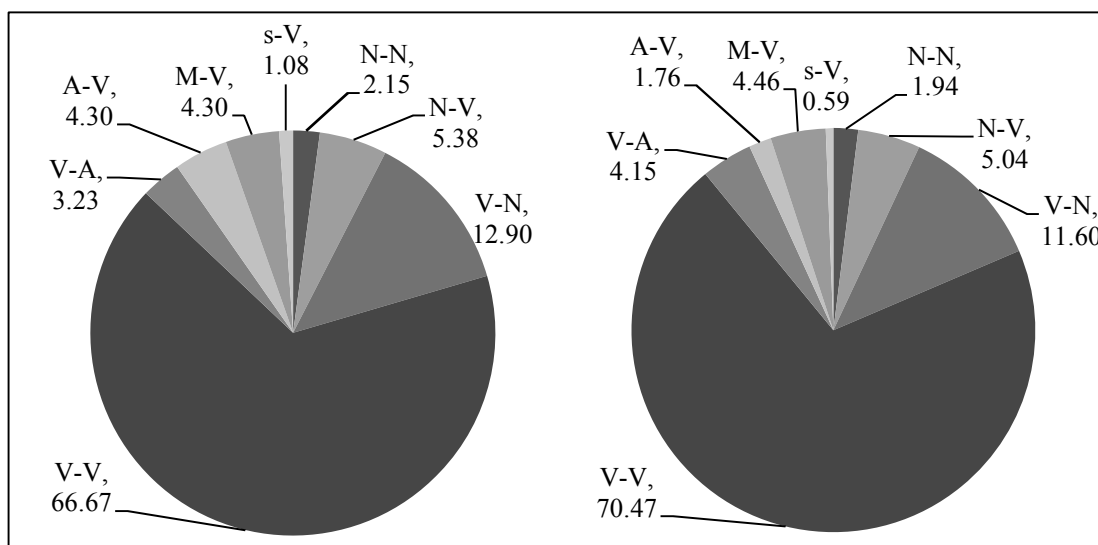


図1 品詞結合範疇比率 (左：語種ベース；右：総合指標ベース)

上図から明らかなように、語種ベースにおいても、総合指標ベースにおいても、93語のうち、最も多いのは「V-V」分類で、それだけで高頻度・汎用的漢語サ変動詞全体の約7割を占めている。また、「V-N」分類を加えると、全体の約9割がカバーされる。一方で、ほかの6種類はすべて合わせても、全体の約1割程度にしかならない。すでに述べたように、18種類の範疇のうち、実際に使用が確認されるのは8種類であったわけであるが、中でも「V-V」と「V-N」のわずか2種類の品詞的結合範疇で、高頻度・汎用的漢語サ変動詞のほぼすべてが包含されることが明らかになった。このことは、言語学的にも日本語学的にもきわめて重要である。

従来の言語研究や日本語教育では、漢語サ変動詞の事例を示すものの、その一般性、言い換えれば、どのような内部構成のものが漢語サ変動詞として多用されるかについては、必ずしも明らかにされていなかった。今回の研究では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限った場合、その品詞結合が「V-V」と「V-N」の2種類に精選されることが示されたが、この点はきわめて重要である。以下では、こうして特定された「V-V」と「V-N」という2範疇に着目し、事例を取り上げて、質的に検証してみよう。

93語中、「V-V」、「V-N」に含まれる語は数が多いが、ここでは、第1主成分得点が最も高い5語をサンプルとして取り上げる。「V-V」については、「存在する」、「利用する」、「紹介する」、「使用する」、「確認する」の5語、「V-N」については、「想像する」、「注目する」、「用意する」、「注意する」、「評価する」の5語である。

「V-V」

- (1) また、パラメータの初期設定等もまったく存在しない。D r i v e r E n t r y に記述されているのは、デバイスが追加されたときの…… (雑誌 PM45_00072)
- (2) 大学生協と組んだ全国各地の大学のほか、テークアウト店や野球場で利用されているとのこと。販売額は総売上高の1割程度ながら学生の…… (新聞 PN5a_00002)
- (3) ……を続けたい人のために、自分でできる速読訓練法のいくつかを紹介しよう。まず、単行本を使った時間測定読書が考えられる。 (書籍・総記 LBc0_00003)
- (4) ……以内の期間を定めて使用される者。ただし、所定の期間を超えて引き続き使用されるようになったときは、そのときから被保険者となります。 (書籍・社会科学 LBq3_00004)
- (5) その知人は交差点で赤信号が青に変わったのを確認して、車を発進させようとした。 (書籍・哲学 LBt1_00015)

「V-N」

- (6) 山深く道なき道を掻き分け、生き延びてきた人たちの決意を想像すると、その強い団結心は中途半端じゃなかったと思えるのである。 (書籍・総記 PB40_00015)
- (7) ……さて、ここでコンドルセが目指すのは、従来あまり注目されていなかった学問分野である。 (書籍・哲学 PB21_00027)
- (8) 訪問を受ける新盆の家ではごちそうや茶菓子を用意して迎える。 (書籍・歴史 PB22_00238)
- (9) 次の段階を考慮に入れるためにデザインの制約に注意しながら、より効果的にその問題を解決するようにデザインの解決策を修正する。 (書籍・社会科学 PB23_00527)
- (10) いまある自分から出発したありのままの自己に対して、自分で評価することができます。 (書籍・自然科学 PB24_00311)

これらの漢語サ変動詞は、表面上・意味上はまったく関連性を持たないものである。しかし、品詞結合という観点に注目すると、それぞれ共通の範疇に整理できるものである。漢語サ変動詞をこのように整理しなおすことが有用であると言えよう。

6.5.2 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の意味結合

前節の調査・分析により、93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限って言うと、品詞結合は相当に限定され、とくに「V-V」および「V-N」の結合分類が全体の9割を占めることが確認された。意味結合についても、このような優先性は確認されるのであろうか。

本節では、構成要素間の意味的結合関係に注目し、同様に範疇ごとの内容を検討する。各高頻度・汎用的漢語サ変動詞の意味結合を示すと、以下のとおりである。

表5 意味結合別高頻度・汎用的漢語サ変動詞

意味結合	高頻度・汎用的漢語サ変動詞
並列関係	存在する（存 ^ゾ る＋在 ^ゾ る）、使用する（使 ^ス う＋用 ^ユ いる）、確認する（確 ^カ かめる＋認 ^ニ める）、表示する（表 ^ヒ す＋示 ^シ す）、発生する（発 ^{ハツ} る＋生 ^ナ む）、指摘する（指 ^サ す＋摘 ^ツ む）、期待する（期 ^キ つ＋待 ^マ つ）、発表する（発 ^{ハツ} く＋表 ^ヒ す）、開催する（開 ^{ヒラ} く＋催 ^メ す）、設定する（設 ^{セツ} ける＋定 ^{テイ} める）、変化する（変 ^{ヘン} わる＋化 ^カ ける）、提供する（提 ^{テイ} げる＋供 ^コ える）、表現する（表 ^ヒ れる＋現 ^{ゲン} れる）、展開する（展 ^{ヒラ} げる＋開 ^{ヒラ} ける）、参加する（参 ^マ る＋加 ^カ える）、検討する（検 ^{ケン} べる＋討 ^ト ねる）、意味する（意 ^イ ＋味）、対応する（対 ^{タイ} える＋応 ^{オウ} える）、要求する（要 ^{ヨウ} る＋求 ^{モト} める）、完成する（完 ^{カン} わる＋成 ^{セイ} す）、判断する（判 ^{ハン} つ＋断 ^{タン} つ）、設置する（設 ^{セツ} ける＋置 ^チ く）、決定する（決 ^{ケツ} める＋定 ^{テイ} める）、選択する（選 ^{セン} ぶ＋択 ^{タク} ぶ）、採用する（採 ^{サイ} る＋用 ^ユ いる）、認識する（認 ^ニ める＋識 ^シ る）、成立する（成 ^{セイ} る＋立 ^ツ つ）、報告する（報 ^{ホウ} せる＋告 ^コ げる）、意識する（意 ^イ ＋識 ^シ ）、発展する（発 ^{ハツ} く＋展 ^{ケン} げる）、増加する（増 ^{ゾウ} やす＋加 ^カ える）、開発する（開 ^{ヒラ} る＋発 ^{ハツ} く）、掲載する（掲 ^{ケツ} げる＋載 ^{サイ} せる）、支配する（支 ^シ つ＋配 ^{ハイ} る）、変更する（変 ^{ヘン} わる＋更 ^カ る）、解決する（解 ^{ケツ} く＋決 ^{ケツ} める）、解放する（解 ^{ケツ} く＋放 ^{ホウ} す）、比較する（比 ^ヒ べる＋較 ^{カウ} べる）、発揮する（発 ^{ハツ} つ＋揮 ^ヰ う）、維持する（維 ^ヰ ぐ＋持 ^チ つ）、記載する（記 ^キ す＋載 ^{サイ} せる）、観察する（観 ^{カン} る＋察 ^{サツ} る）、保存する（保 ^{ホウ} つ＋存 ^{ゾン} つ）、考慮する（考 ^{コウ} える＋慮 ^ロ る）、販売する（販 ^{ハン} ぐ＋売 ^ウ る）
修飾関係	利用する（利 ^リ く＋用 ^ユ いる）、紹介する（紹 ^{ショウ} ぐ＋介 ^ケ する）、発見する（発 ^{ハツ} く＋見 ^{ケン} える）、実施する（実 ^{ジツ} に＋施 ^シ す）、構成する（構 ^{コウ} える＋成 ^{セイ} す）、実現する（実 ^{ジツ} に＋現 ^{ゲン} れる）、主張する（主 ^{シュウ} に＋張 ^{テウ} る）、作成する（作 ^{サク} る＋成 ^{セイ} す）、予

	想する（ ^{アラカジメ} 予＋ ^{オモ} 想う），導入（導く＋入れる），発売（ ^{オコ} 発る＋ ^ウ 売る），移動（移す＋動く），指定する（指す＋定める），提出する（ ^ト 提げる＋ ^ダ 出す），反映する（ ^{カエ} 反る＋ ^ウ 映る），代表する（代わる＋表す），結婚する（ ^{コン} 結ぶ＋ ^{コン} 婚する），実行する（ ^ス 実に＋ ^ウ 行う），購入する（ ^{アガナ} 購う＋ ^ウ 入れる），無視する（無＋ ^シ 視る），確立する（ ^カ 確か＋ ^リ 立てる），勉強する（ ^メ 勉ます＋ ^ク 強める），安定する（ ^{ヤス} 安んじる＋ ^ス 定まる），重視する（ ^{オモシ} 重く＋ ^シ 視る），活用する（ ^{カク} 活かす＋ ^ク 用いる），限定する（ ^{リミ} 限る＋ ^ス 定める），区別する（ ^ク 区する＋ ^{ベツ} 別かつ）
客体関係	理解する（ ^{コトワリ} 理＋ ^カ 解く），注目する（ ^{ツク} 注ぐ＋ ^メ 目），用意する（ ^{ヨウ} 用いる＋ ^{コト} 意），注意する（ ^{オモイ} 注ぐ＋ ^イ 意），評価する（ ^{アゲツラ} 評う＋ ^{アタイ} 価），形成する（ ^シ 形＋ ^ス 成す），成功する（ ^ス 成す＋ ^{コウ} 功），開始する（ ^{ヒラ} 開く＋ ^{ハジ} 始まり），登場する（ ^ト 登る＋ ^バ 場），強調する（ ^{オモシ} 強める＋ ^{テウ} 調），規定する（ ^キ 規＋ ^{テイ} 定める），集中する（ ^シ 集める＋ ^{チュウ} 中），一致する（ ^{イツ} 一＋ ^シ 致す），適用する（ ^{タウ} 適う＋ ^{ヨウ} 用），分類する（ ^{ブン} 分ける＋ ^{レイ} 類），心配する（ ^{シン} 心＋ ^{ソウ} 配る），想像する（ ^{オモ} 想う＋ ^{ゾウ} 像）
補充関係	説明する（ ^{シヤク} 説く＋ ^{メイ} 明らか），拡大する（ ^{ヒロ} 広げる＋ ^{ダイ} 大きい），減少する（ ^{ヘン} 減らす＋ ^{ショウ} 少ない）
実質関係	否定する（ ^{イナ} 否＋ ^{テイ} 定める）

上表を観察して気が付くことは3点ある。

1点目は、全体で5種類の意味的結合範疇が存在するわけであるが、そのすべてにおいて、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現が確認されたことである。これにより、5種類の意味結合の妥当性が改めて確認されたと言えよう。

2点目として、本研究で独自に補った「補充関係」に実質な用例が確認され、この点をふまえれば、当該分類はまず妥当性が確認されたと考えられる。また、先行研究で提唱された「実質関係」という意味的結合範疇については、該当例がきわめて限定的であったということである。日向（1985）は理論的整合性を重視し、「実質関係」についてはほかの分類と等分に扱っているわけであるが、実際の調査をふまえれば、当該分類はごくまれであることは重要な知見であると言える。

3点目は、それぞれの範疇に分類された高頻度・汎用的漢語サ変動詞の分量に顕著な差が存在することである。以下では、語種ベースと総合指標ベースの2つの観点から、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を分類した結果を示す。結果は以下のとおりである。

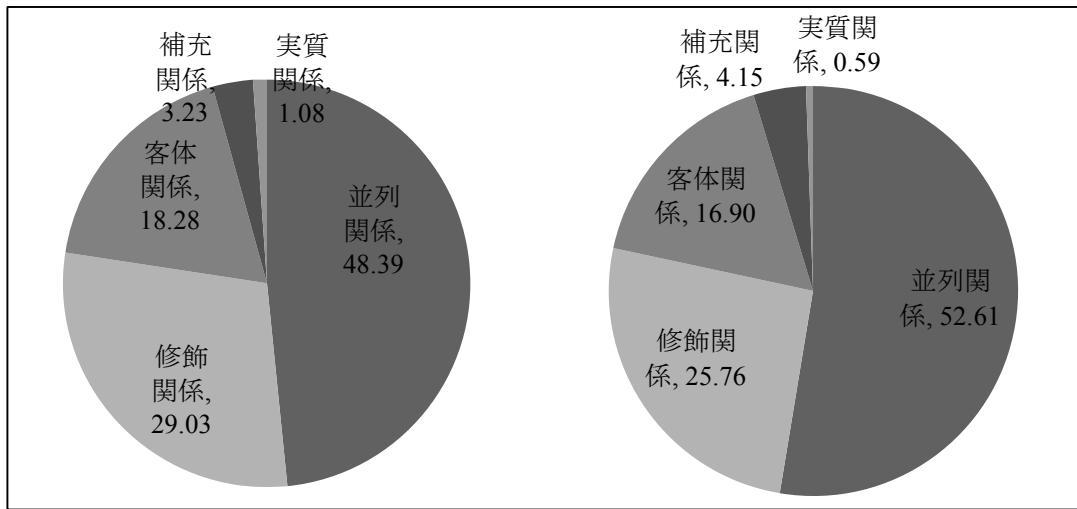


図2 意味結合範疇比率 (左図：語種ベース；右図：総合指標ベース)

上図より明らかなように、語種ベースにおいても、総合指標ベースにおいても、5種類の意味結合のうち、「並列関係」のみで高頻度・汎用的漢語サ変動詞の約5割を占めている。これに、全体の約3割を占める「修飾関係」、約2割を占める「客体関係」を加えれば、全体の約95%がカバーされる。一方で、他の2種、すなわち、「補充関係」と「実質関係」を合わせても、構成比は5%程度にとどまる。すでに品詞結合について述べたように、意味結合についてもまた、理論的な分布と実際の言語使用状況はきわめて大きく異なっていることが確認された。理論的に成立しうる5種類の意味結合のうち、実際の日本語においては、「並列関係」、「修飾関係」、「客体関係」の3種類でほぼ全体が占められることは重要な知見と言えるだろう。

以下、これら3種類の意味結合について、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の実例を取り上げて、質的に検証してみよう。93語中、各範疇に含まれる語は数多く存在するが、ここでは、第1主成分得点が多い5語をサンプルとして取り上げて観察を行う。「並列関係」については「存在する」、「使用する」、「確認する」、「表示する」、「発生する」、「修飾関係」については「利用する」、「紹介する」、「発見する」、「実施する」、「構成する」、「客体関係」については「理解する」、「注目する」、「用意する」、「注意する」、「評価する」である。

「並列関係」

- (11) 最近の研究によると、人間の脳にはカオスが存在するらしい。そういえば、クロアッサンのドウは他のパンのものより水気が多く、…… (書籍・総記 LBd0_00003)
- (12) ……知力の欠乏にあるのではなく、他の人の指導なしに知力を使用する決断と勇気の欠乏にあるならば、未成年の状態は自ら責めを負うべき…… (書籍・哲学 LBj1_00020)
- (13) ……を推定することはじゅうぶん可能であるが、残念ながらこれらを史料的に確認するには、なお大きな困難をとまなっている。 (書籍・歴史 LB12_00002)
- (14) 電子レンジとほかの付加機能の操作をわかりやすく表示し、うっかり両者のボタンを押しまちがえることのないような工夫を期待します。 (書籍・社会科学 LBm3_00019)
- (15) 自然地震では、応力の解放に応じて断層という一種の割れ目破壊が発生します。それにかかわる速さは、断層の破壊速度とずれのすべり速度です。 (書籍・自然科学 LBe4_00024)

「修飾関係」

- (16) そういう特性を活かして、レースやジムカーナなどのモータースポーツで利用されています。 (雑誌 PM45_00045)
- (17) ポリープを疑って訪れた近所の病院で公立病院を紹介され手術した。 (新聞 PN1f_00023)
- (18) ……現在は現場検証中である」と語った。今のところ遺書は発見されていないが、現在のところは自殺とみて調べを進めている。 (ブログ OY15_09640)
- (19) 在来線については、日本鉄道建設公団によって実施されている新線建設が引き続いて施工されている。 (白書 OW1X_00050)
- (20) ほとんどの場合の血液検査は赤血球や白血球、ヘモグロビンなどなど血液の構成されている成分の分析によって割り出された数値が数字になって出てくる。 (知恵袋 OC09_03504)

「客体関係」

- (21) ……で議論を重ねた付いた呼び名が「老太太」エミの考え方を理解しないスタッフもいた。黒澤を崇め、黒澤の言うことならば無条件に受け入れる……

(雑誌 PM41_00599)

(22) 大きな渦に巻き込まれた女性を主人公にした二つの小説が注目されている。宮本輝
『森のなかの海』(光文社)と…… (新聞 PN1a_00032)

(23) ホテル側もなれたもので自転車保管用に1室が用意されていた。
(ブログ OY15_10545)

(24) でも、友達と言い争いをしているので、注意すると「僕が悪いんじゃないんですよ。
彼が、ちょっかい出して来るから…… (書籍・社会科学 PB13_00070)

(25) その高度な品質が評価され、書道用紙、版画用紙、永久保存用紙などに用いられる
ように…… (書籍・技術・工学 PB35_00153)

漢語サ変動詞が扱いにくい理由の一端は、該当する項目の多さと、理論的な分類の難しさにあると言える。この意味において、語構成、とくに意味結合を基準として、多様な漢語サ変動詞が体系的に分類することには利点が多いと思われる。以上の用例は、表記形の単位で見れば、相互に無関係なものであるが、意味結合について言うとそれぞれ同等の性質を分有している。こうした観点から漢語サ変動詞を再整理することが重要である。

6.5.3 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞・意味結合

これまでの節では、語構成要素間の品詞結合と意味結合それぞれの観点から、93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞の語構成的特性を検討した。本節においては、品詞結合と意味結合を統合した観点から調査・分析を行う。語構成要素間の品詞結合と意味結合をあわせてみることにより、語構成タイプの分類がより精緻化されると期待できる。高頻度・汎用的漢語サ変動詞を品詞・意味結合という観点で分類したところ、以下の結果が得られた。

表6 統合的結合分類別高頻度・汎用的漢語サ変動詞

分類	例
N-N 並列関係	意味する, 意識する
V-V 並列関係	存在する, 使用する, 確認する, 表示する, 発生する, 指摘する, 期待する, 発表する, 開催する, 設定する, 変化する, 提供する, 表現する, 展開する, 参加する, 検討する, 対応する, 要求する,

	完成する, 判断する, 設置する, 決定する, 選択する, 採用する, 認識する, 成立する, 報告する, 発展する, 増加する, 開発する, 掲載する, 支配する, 変更する, 解決する, 解放する, 比較する, 発揮する, 維持する, 記載する, 観察する, 保存する, 考慮する, 販売する
N>N 修飾関係	該当なし
N>V 修飾関係	該当なし
V>N 修飾関係	該当なし
V>V 修飾関係	利用する, 紹介する, 発見する, 構成する, 作成する, 導入する, 発売する, 移動する, 指定する, 提出する, 反映する, 代表する, 結婚する, 購入する, 勉強する, 安定する, 活用する, 限定する, 区別する
A>N 修飾関係	該当なし
A>V 修飾関係	主張する, 無視する, 確立する, 重視する
M>V 修飾関係	実施する, 実現する, 予想する, 実行する
N+V 客体関係	理解する, 形成する, 規定する, 一致する, 心配する
V+N 客体関係	注目する, 用意する, 注意する, 評価する, 成功する, 開始する, 登場する, 強調する, 集中する, 適用する, 分類する, 想像する
V<A 補充関係	説明する, 拡大する, 減少する
N・s 実質関係	該当なし
V・s 実質関係	該当なし
A・s 実質関係	該当なし
M・s 実質関係	該当なし
s・V 実質関係	否定する
s・A 実質関係	該当なし

この表を見て気が付くことは3点ある。

1点目は, 18種類の品詞・意味結合が存在するが, 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現が確認されたのは, このうち, わずか9種類であったということである。理論的にはより

幅広い出現が予想されるわけであるが、実際には、品詞・意味結合タイプは9種にまで精選できる。

2点目は、すでに品詞結合について述べたように、「N-N 並列関係」を除くと、その他すべてにおいて、「V」という動詞的構成要素が含まれていることである。すでに述べたように、漢語サ変動詞において、「する」という動詞部はすでにある動詞的意味を補完するだけで、漢語サ変動詞そのものの動詞性は漢語部が担っていることが改めて確認される。

3点目は、各分類範疇に含まれる高頻度・汎用的漢語サ変動詞の分量に顕著な差が存在することである。語種ベースと総合指標ベースの2つの観点から検討したところ、以下の結果となった。

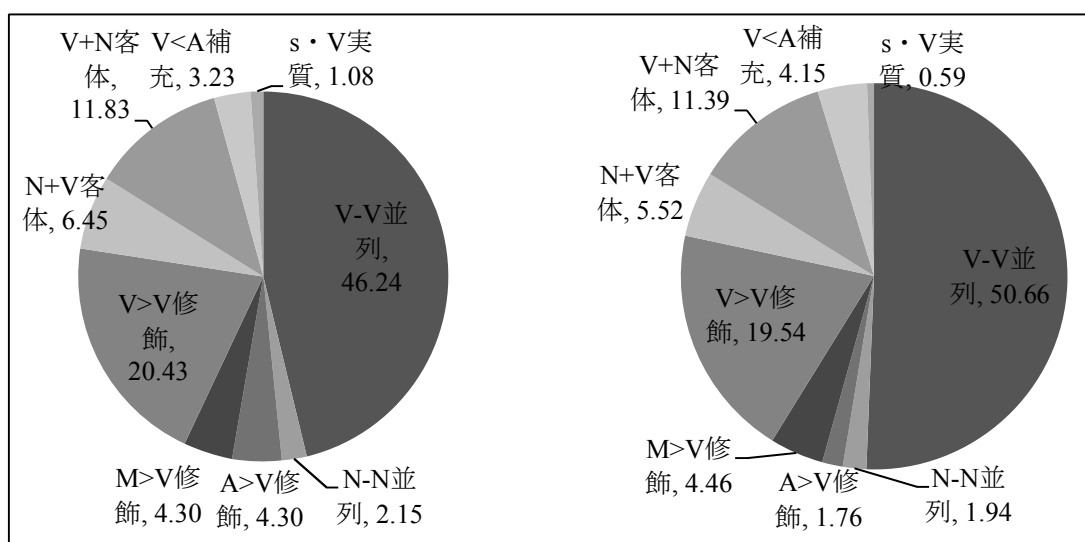


図3 品詞・意味結合範疇比率 (左：語種ベース；右：総合指標ベース)

上図より読み取れることは、語種ベースで見ても、総合指標ベースで見ても、「V-V 並列関係」が高頻度・汎用的漢語サ変動詞の約5割を占めており、これに次ぐ約2割を占める「V>V 修飾関係」、「V+N 客体関係」まで含めると、全体の約8割がカバーされるということである。

18種類の品詞・意味結合は、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現の有無という観点で9種類に絞られるが、さらに、その約8割がわずか3種類の統合結合範疇で説明されることになる。

6.6 まとめ

先行研究は、漢語サ変動詞の内部構成について様々な分類の枠組みを提案する一方、そもそも何が代表的で典型的であるかについてはほとんど触れていなかったわけであるが、本章では、多様な日本語変種間に共通して高頻度に使われる汎用的漢語サ変動詞を対象に、その語構成の特徴の解明を目指して議論を進めた結果、先行研究ではっきり示されていなかった一般性の高い汎用的漢語サ変動詞の典型的語構成パターン、および各結合分類での分布状況などが一定の範囲で明らかにされた。コーパスから得られた高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限定した計量分析により、当該動詞形の内部構成の典型性について、きわめて重要な知見が得られた。ここでは、リサーチクエスチョン順に結論を概説する。

RQ1「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞結合」では、先行研究を整理して得られた18種類の範疇のうち、実際に出現が確認されたのは8種類のみであり、とくに「V-V」と「V-N」の2種類で全体の約8割がカバーされることが明らかになった。

RQ2「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の意味結合」については、先行研究をふまえ、独自に修正した5種類の意味結合について調査したところ、5種類の意味的結合範疇のすべてについて、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現が確認されたが、そのうち、「並列関係」、「修飾関係」と「客体関係」の3種類で全体の約9割がカバーされることが確認された。

RQ3「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の品詞・意味結合」において、18種類の品詞・意味結合について調査した結果、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の出現が確認されたのは9種類となり、そのうちさらに、「V-V 並列関係」「V>V 修飾関係」と「V+N 客体関係」の3種類で、全体の約80%が占められることが明らかになった。

以上で得られた結論を下表にまとめておく。

表7 高頻度・汎用的漢語サ変動詞の典型的な語構成モデル

品詞結合	意味結合	品詞・意味結合
V-V (約7割)	並列関係 (約5割)	V-V 並列関係 (約5割)
V-N (約1割)	修飾関係 (約3割)	V>V 修飾関係 (約2割)
	客体関係 (約2割)	V+N 客体関係 (約1割)

漢語サ変動詞は、個々の表記形から見た場合、非常にばらつきが大きく、捉えがたいものである。しかしながら、品詞結合、意味結合といった点に注目すると、これらの多様な

漢語サ変動詞は、ごくわずかの範疇に集約しうる。とくに重要な知見としては、漢語サ変動詞の語幹部漢語には原則として動詞的要素が含まれるということである。「Xする」という漢語サ変動詞において、「する」の働きは動詞要素を補完するだけで、実際の動詞性は漢語部が担っている場合が多いというのは本研究で得られた重要な知見の一つであると言えるだろう。

こうした語構成の情報を、4章で特定された高頻度・汎用的漢語サ変動詞に新たに加えることにより、言語学的な分析の基礎資料としての価値がさらに高まったことができたと考えられる。また、このような情報付加は日本語教育の観点から見ても意味が大きい。学習者は単に語を羅列したリストを与えられるのではなく、語構成の情報を付記したリストを与えられることによって、それぞれの高頻度・汎用的漢語サ変動詞の成り立ちや意味がより理解しやすくなるだろう。

本章は、日本語語彙研究におけるコーパスデータの重要性を示すとともに、コーパスから得られた知見の教育応用の可能性についても一定の示唆を行うものとなった。ただし、漢語サ変動詞の指導に生かすための情報については、語構成という形態的な観点からだけでなく、語用的・統語的など、多角的な観点から得る必要も考えられる。この点については、以降の章の分析により明らかにする。

第7章 漢語サ変動詞の自他性

これまで、4章において、無数に存在する漢語サ変動詞の中から、多様なジャンルで共通して多用される高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93語を特定した。これらの語を対象として、5章では、活用的選好性、6章では漢語部の内部構成性に焦点を当てて研究を行ってきた。これまでの議論を受け、本章では、漢語サ変動詞の文法的諸相のもう一つ重要な側面である自他性の問題を取り扱うこととする。

漢語サ変動詞の自他に関しては、先行研究の概観にも示されていたように、大きく分けて4つの問題点がある。1点目は、漢語サ変動詞に限る議論ではないが、自動詞・他動詞という概念が一般に思われるほど明確に定義されていないことである。この点については、先行研究でもよく指摘されている(森田, 1994など)。2点目は、漢語サ変動詞の中には、自動詞専用型、他動詞専用型とされるものがあるが、実際の言語データを調べてみると、食い違いのあるものが観察されることである。たとえば、「発生する」について、ある辞書においては自動詞と記載されている。ところが、コーパスを調べると、他動詞用法の用例も見られる(例:a.津波が発生する。b.暴力行為が発生する。)。3点目は、自他両用型とされているものでも、実際には自他両形が均等に出現しない場合が多いということである。たとえば、「減少する」について、ある辞書には自他両用動詞と記載されているが、コーパスを調べると、他動詞用法がきわめて少なく、自動詞用法がほとんどである(例:a.数量が減少する。>b.生産を減少する。)。4点目は、1点目とも関わるが、従来の議論においては、受身形や使役形という自他の変形パターンと思われるものについては、ほとんど考慮に入れられていないことである。たとえば、「解決する」について、多くの辞書は自他両用動詞としている。実際に、「a.問題が解決する。」と「b.問題を解決する。」の形の出現が確認されるが、同時に「c.問題が解決される。」や「d.問題を解決させる。」といった形態も存在するのである。これまでの議論ではaとbのみが主として議論されており、cとdのような形は考慮されることが少なかった。

このように、漢語サ変動詞の自他特性について、従来の研究においては、必ずしも完全な形で記述されていない。したがって、教育現場においても、適切な記述がなされていないことが予想される。

7.1 本章の目的と構成

よって、本章においては、従来の研究で残った問題点を整理したうえで、これまでの研

究ではほとんどなされていなかった詳細なデータをふまえた自他特性の記述を行うことを目的とする。具体的には、以下の問題点の解明を目指す。

まず、国語辞典における自他記述を調査し、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語の自他がどう記述されているかを辞書間で比較しながら考察する。次に、先行研究をふまえ、自他の判定基準を確認したうえで、93 語について、それぞれのコーパス用例に基づいて自他判断を行う。その後、教育的観点に立ち、自他特性によって、漢語サ変動詞を体系的に捉えることを試みる。

構成として、7.1 では本章の目的と構成を述べ、7.2 ではリサーチクエスチョンを示す。7.3 では研究手法を紹介し、7.4 では調査結果と考察を行う。7.5 ではまとめを行う。

7.2 リサーチクエスチョン

すでに述べたように、本章では、漢語サ変動詞の自他特性について計量的に記述・定義することを目指すわけであるが、データを調査する際に留意すべきは、自他が受身形や使役形といったヴォイスの概念とも深く関わることである。このことから、本研究では、自他の基本形に対する調査に加え、受身形・使役形の調査を行う。リサーチクエスチョンは、以下の 4 点に設定する。

- RQ1 高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語について、辞書はどのような自他パターンを示しているか。辞書間の記述は一致しているか。
- RQ2 自他基本形に基づくコーパス調査では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語はどのような自他特性を示すか。
- RQ3 高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語のそれぞれについて、基本形他動詞、基本形自動詞に加え、受身形および使役形がどの程度使用されたか。
- RQ4 高頻度・汎用的漢語サ変動詞を基本形と拡張形で分類する場合、どのようにグループ化されるか。また、グループごとにどのような特性を持つか。

これらのリサーチクエスチョンで明らかにしようとすることについて、簡潔にまとめる。まず、RQ1 では、伝統的な国語学の枠組みをふまえ、主要辞書が示す主要漢語サ変動詞の自他パターンを概観し、その一致度を確認する。その後、本研究が採用する自他の判定基準を確認し、RQ2 では、基本形に絞り、大規模なコーパス調査をふまえて、高頻度・汎用的

漢語サ変動詞の実際の自他傾向を明らかにする。RQ3 では、基本形に加え、受身形や使役形の拡張形での使用状況をあわせて調べることで、重要漢語サ変動詞がどのような特性を持つかを調査する。最後 RQ4 は、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語を自他の観点からより有効に学習者に提示する方法を探る。個々の動詞について、自他情報を示すだけではなく、何らかのグループ性や共通性がないか検討する。これにより、言語記述がさらに深まるとともに、学習者にとってもより理解しやすい漢語サ変動詞の学習上の手掛かりが得られると考えられる。

7.3 研究手順

7.3.1 研究手法

本節では、各リサーチクエスチョンに対応する調査・分析の手順について詳細に紹介する。

RQ1「辞書における漢語サ変動詞の自他認定」については、『岩波国語辞典』（第7版，以下『岩波』），『学研現代新国語辞典改訂』（第4版，以下『学研』），『明鏡国語辞典』（携帯版，以下『明鏡』）の3冊を対象に、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語の自他記述を調査・比較する。この3冊を調査対象にしたのは、国語辞典の中で広く使用されており、かつ、動詞の自他記述が明確に記載されているためである。なお、先行研究で多く引用される『広辞苑』などについては、自他情報が一切記載されていないため、本研究では、分析対象から除く。

辞書を比較する以上、各辞書の自他判断の基準についても把握しなければならない。このため、3辞書においてどのように自他を認定しているかについて紹介しておく。

まず、『岩波』においては、以下のように記載されている。

動詞は自動詞と他動詞とに分けられるが、国語の場合この区別は文法的なものというより意味上のものである。他動詞は動作・作用が他に影響を及ぼす意を積極的に表した動詞，自動詞はそういう意を積極的には表していない動詞である。一つの動詞が時代の変遷につれて自動詞から他動詞に変わるといようなこともある。古語の「恋ふ」「恋ひす」は自動詞であったが、すなわち「君に恋ひ」のように助詞「に」のついた文節を受けて、「自然にひきつけられ慕わしく思う」のような意であったが、後にはもっと能動的な態度を表し、「君を恋する」のような他動詞に転じた。他動詞は助詞「を」

のついた文節によって修飾され得るが、逆にそういう連用修飾語を伴えば必ず他動詞かと言うと、そうとは限らない。「山を越える」「空を飛ぶ」「席を立つ」などの「越える」「飛ぶ」「立つ」は皆、自動詞である。これらの動作の影響が他に全く及んでいないわけではないが、表現の重点がそこになく、この助詞「を」は動作の規準点・経過点を示すものであるから、これらは自動詞ということになる。「山を越える」と「山を越す」と比べてみるとよい。「越す」は他動詞である。また「野に行く」と「野を行く」との「行く」は、共に自動詞であるが、これにかかる連用修飾語が「に」で示されるか「を」で示されるかによって、全体として意味に差がある。しかしその意味の差は「行く」の意味の差ではなく、むしろ助詞「に」「を」に帰せられるべきである。

自動詞「見える」に対する他動詞はと言えば、「見る」のほかにも「見せる」がある。「見る」は、その行為者が他に対してそういう行為をする、つまり甲が乙を見るのであるが、「見せる」は甲が乙を見るのではなく、甲が丙に対して丙が乙を見るようにし向けるのである。同じく他動詞と言っても、こういう区別がある。後者の類には「着せる」「寝かす」「生かす」などがある。また自動詞の意味も単一ではない。「行く」「寝る」などはみずからそうするのであるが、「見える」「聞こえる」「老いる」などは自然にそうなるのである。後者は動作や作用を表すというより、時間的推移が考えられるような状態を表すと言えよう。

『学研』では、以下のような記述が見られる。

自動詞・他動詞

ア 水が流れる。 授業が終わる。

イ 水を流す。 授業を終える。

右のアの「流れる」「終わる」は、<対象>を表す目的語を必要とせず、それ自身の働きとして、充足した意味を表すことのできる動詞であり、イの「流す」「終える」は、ある事物（水・授業）に及んで、それに対する働きかけを表す動詞である。その場合、その事物に「を」を添えて表す。アの類の動詞を自動詞、イの類の動詞を他動詞といい、対応に応じて意味も異なる。「を」を受ける動詞がすべて他動詞かというとはなく、「家を出る」「零度を割る」「道を歩く」のように、離脱点や基

準点や移動の場所などを表す「～を」の下にくる動詞は自動詞である。この「を」は<対象>を表してはいない。

自動詞・他動詞は、「結果が残っている」ことを言い表すときの違いによって区別することもできる。「戸が開いている」「戸が開けてある」のように、「ている」のついたものが自動詞、「てある」のついたものが他動詞であるが、この方法はすべての動詞に適用できないという弱点がある。

また、「犬が人をかむ→人が犬にかまれる」のように、直接的な受身を作るかどうかも自他動詞の弁別のために使われるが、「犬が人にかみつく」のように「～に」をとるものも直接的な受身を作ったり（人が犬にかみつかれる）、「私は右手を骨折した」などでは純然たる他動詞でありながら受身を作らなかつたりするので、これも自他動詞弁別の有効な手段とはならない。あくまで、<対象>の「を」をとるかどうかで他動詞と自動詞の区別がつけられることに注意したい。

自動詞・他動詞の対応は、「流れる／流す」「終わる／終える」のように、多く語幹または語幹の一部を等しくし、活用の種類及び語尾の行を異にすることによって示される。しかし、「する」「吹く」「笑う」などのように同一語形で両方用いられるもの、「来る」「行く」「あわてる」などのように自動詞だけで他動詞の対応のないもの、「殺す」「飲む」「着く」「思う」などのように他動詞だけで自動詞の対応のないものもある。

また、「走る」「跳ぶ」「生きる」のように本来的な自動詞が、「～を」をとって他動詞に転じる用法もあり、(マラソンを走る・三段跳びを跳ぶ・八十年の生涯を生きる)、本来的な他動詞(机を右に寄せる)を、「波が寄せる」のように自動詞として使う例もある。他動詞「替える」に対応する自動詞「替わる」には、「住所が替わる(自)」のほか、「住所を替わる(他)」の言い方もある。「替わる」の他動詞表現は「住所を替える(他)」に比べて、動作主の<意図性>が穏やかな表現となっている。

「もちにかびが生じる(自)」「もちがかびを生じる(他)」、「解決には困難が伴う(自)」「解決は困難を伴う(他)」や、「字が上手に書けますか(自)」「字を上手に書けますか(他)」のように、自他動詞で意味が異ならないと考えられるものもあり、この意味では、日本語の動詞は自他に二分されるとするよりは、自動詞・他動詞・自他動詞に三分されると考えるべきかもしれない。「二〇〇ccの血を輸血する」「本

丸を築城する」など、目的語を含み持つ漢語サ変動詞にとりわけこの傾向が強いようだ。

『明鏡』では、以下のように記載している。

自動詞・他動詞

自動詞・他動詞は、以下のように区別する。

(ア)「割れる／割る」のように、形態的な対と「～が／～を」の格の対応があるものは、「～が」を取るものを自動詞、「～を」を取るものを他動詞とする。「夜を明かす」のように、「～を」への働きかけは希薄でも、「夜が明ける」のような対を持つものは、他動詞とする。

(イ) 対を持たないが、「～を」を取る動詞のうち、「ご飯を食べる」「石を蹴る」のように意味的に「～を」への働きかけの強いものは、他動詞とする。

(ウ)「道を歩く」や「幸福な人生を送る」など、移動や時間の経過を表す動詞で、対もなく、「～を」への働きかけも認めにくいものは、自動詞とする。

(エ)「人にかみつく」のように、対象への働きかけはあるが、「～を」にはならないものも、自動詞とする。

(オ)「ダンスを踊る」「マラソンを走る」のように、対がなく、しかも動詞と意味的に近接した名詞(いわゆる「同族目的語」)だけが「～を」で現れるものは、項目の品詞表示では自動詞とするが、語法で他動詞としての用法があることを注記する。

(カ) 動詞の連用形に付いて複合動詞を作る用法や補助動詞には、自他の区別をしない。

3 辞書の観点をまとめて示すと以下ようになる。

表1 辞書における自他定義

『岩波』	『学研』	『明鏡』
・文法よりも意味の	・自動詞は対象を表す目的語	・形態的な対と「～が／～を」

<p>基準を重視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動作・作用が他に影響を及ぼす意を積極的に表しているかどうか ・他動詞は「を」のついた文節によって修飾され得るが、「を」は動作の規準点・経過点を示すものは自動詞 	<p>を必要とせず、それ自身の働きとして、充足した意味を表すことができる、他動詞は、「を」を添え、ある事物に対する働きかけを表す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・離脱点や基準点や移動の場所などを表す「～を」の下にくる動詞は自動詞 ・自他動詞で意味が異なるものもあるため、日本語の動詞は自他2分類よりは、自動詞・他動詞・自他動詞に3分されるべき 	<p>の格の対応がある場合、「～が」を取るものが自動詞、「～を」への働きかけは強いかどうかによらず、「～を」を取れば他動詞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対がない場合、「を」を取り、かつ対象への働きが認められるものが他動詞、片方のみのものは自動詞 ・動詞の連用形に付いて複合動詞を作る用法や補助動詞には自他の区別はない
--	--	--

RQ2「基本形に基づく漢語サ変動詞の自他特性」については、各語について、コーパスに基づき、「～を X する」（語によっては、「～に X する」の場合がある）という他動詞形、「～が X する」（語によっては、「～に X する」の場合もある）という自動詞形の頻度を調査する。その後、他動詞用法の頻度を自動詞と他動詞用法の合計で割り、動詞ごとの他動詞率を求めて、それに基づき、各語の自他性の判定を行う。自他記述については、既存の辞書の表記をふまえ、自動詞、他動詞、自他両用動詞の3分類法を採用し、自動詞は「自」、他動詞は「他」、自他両用動詞は「自他」のように表示する。ただし、自他両用動詞については、自動詞よりのものと他動詞よりのものを区別するため、自動詞よりの自他両用動詞は「自他」、他動詞よりの自他両用動詞は「他自」と記す。本研究では、他動詞率が100%のものを他動詞、0%のものを自動詞、それ以外のものをすべて自他両用動詞とする。さらに、自他両用動詞については、他動詞率が50%以上のものを「他自」、50%未満のものを「自他」とする。なお、自他性の判断作業については、次節で紹介する基準に照らし合わせて用例を1例ずつ質的に判断する。その後、母語話者に検証を依頼する。

RQ3「拡張形を加えた漢語サ変動詞の自他特性」については、93語のそれぞれについて、基本形他動詞と基本形自動詞に加え、受身形（「される」）と使役形（「させる」）の4形の

総頻度に占める受身形及び使役形の総頻度の比率を求め、拡張形出現率とする。その後、基本形に対する拡張形の出現度を根拠として、93語の特性を考察する。

RQ4「自他性に基づく漢語サ変動詞の分類と共通特性の考察」については、RQ3で調べた自他特性をふまえ、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を分類し、各分類における語の共通特性を捉えることを試みる。分類には、階層的ケースクラスター分析を用いる。階層的クラスター分析の詳細については、第3章の手法を参照されたい。ここでは、ケースを93語の漢語サ変動詞、変数を他動詞、自動詞形、受身形、使役形という4種類の形にして、ケース側を分類する。各形の頻度は、粗頻度ではなく、4形の総頻度に占める比率値で表す。データ間距離の計算には平方ユークリッド距離を採用する。また、クラスター併合の方法としてワード法を採用する。結果を解釈する際には、『分類語彙表』に基づく意味分類を参考にする。

7.3.2 自他基準の決定

一般的な自他基準に従えば、「～ヲ」格をとれば他動詞、「～ガ」格をとれば自動詞ということになる。しかしながら、実際の使用において、漢語サ変動詞は必ずしも理論的研究で述べられたように、「を～する」「が～する」の2つの自他使用形式に統一されているわけではない。多様な格助詞や助詞の代用などにより複雑になっている。

そこで、本研究においては、寺村(1982)と須賀ら(1995)を参考に判定基準を厳密に提示したうえで、他動詞形・自動詞形・受身形・使役形の4分類を行う。なお、本研究で採用した自他判定の基準について、7点に分けて述べる。

7.3.2.1 「～ヲ」格の問題

先行研究では、特に和語動詞については、形態上対応する形を持つかどうか(例:集まる↔集める)で自他区別ができるいわゆる自他有対動詞(語幹の一部が等しい)が多い。しかしながら、漢語サ変動詞の場合、こういった手法を取ることができない。そこで、本研究は最も単純な分析手法に立ち返り、当該動詞が「～ヲ」格、しかも対象への働きかけを含意する「～ヲ」格を取るかどうかを判定基準とした。このために、移動の場所、離脱点や基準点を表す「～ヲ」格を取るものについては、先行研究と同様、自動詞であるとする。たとえば、以下の用例を見てみよう。

- (1) したがって、もし人間の群れが環太平洋を移動するならば、それに先立ってか、あるいは
いはびったりくっついて自分たちも移動すれば、… (書籍・哲学 PB51_00130_22140)

この用例においては、「移動する」が「～ヲ」格を取っているが、単純に移動の場所を表すものであるため、本研究においては、他動詞として認定しない。

7.3.2.2 「～ニ」格の問題

「～ヲ」格ではなく、「～ガ」格を持つものは基本自動詞と判定するわけであるが、ただし、留意しなければならないのは、漢語サ変動詞の取り得る格助詞は「～ヲ」と「～ガ」のみでなく、語によっては、「～ニ」格を取りうることである。「～ニ」格をとる動詞の自他判定については、未だに統一した説に至っていない状況である。森田(1994)では、「～ヲ」をとらないものはすべて自動詞とされているが、寺村(1982)は、「～ニ」格をとるものの一部が、他動詞(「相手動詞」と言われる)として存在することを指摘している。そのうえで、直接受身を作ることができれば、「～ニ」格の他動詞として認めるべきであると主張している。

寺村によれば、場所性を表す「に」とは異なり、他動詞の目印としての「に」は、同じ場所格を表す「へ」格と置き換えができない空間に存在する個体、また、動作主が「に」格の前にくるこの個体に向かって、それに対して何らかの動きをすることを表す、という点で特徴付けられる。「XがYに～スル」だとすると、YがXという動作主の向かう対象となり、意味的にはXのYに対する関係の仕方や心理的な動きを表すものである(p.92)。この類は他動詞か否かを検証する際には、「を」の場合と同様に、直接受身文が作れるかどうかという基準が有効であるとされている。本研究では、寺村(1982)などを踏襲し、心理的・意識的動きも含め、働きかけを表すものか否か、及び直接受身文になりうるかどうかという基準により判断を行う。以下では2つの用例を見てみよう。

- (2) それに比べ、男性は自分の得たものや結果に集中する。ものや目的を重視する男性とは違って逆に、女性は人や感情… (書籍・哲学 PB31_00008_13340)
- (3) 物体の周りでは空間が曲がっていると考える。質量が狭い領域に集中すればするほど、空間の曲がり方は強くなる。 (書籍・自然科学 LBs4_00016_5970)

以上のように、「～ニ」格を取る動詞「集中する」を例にすると、(2)における「男性はものや結果に集中する」は「ものや結果が男性に集中される」という直接受身文になりうるため、この「集中する」は他動詞用法の用例として認定する。一方、(3)における「質量が狭い領域に集中する」という文は「*狭い領域が質量に集中される」のように、直接受身文になれないため、この「集中する」は自動詞用法の例であると認定する。

7.3.2.3 他の格助詞や助詞の代用の問題

また、「～ヲ」や「～ガ」は実際の使用において、ほかの助詞や格助詞で置き換えられる場合がある。こういった状況に関しては、動詞が対象格を持つかどうか、持つ場合、動詞の表す動作・作用が対象に働きかけを持つかどうかで判断を行う。働きかけ（心理的や意識的動きも含め）が認められるものについては他動詞、そうでないものは自動詞であると判断する。以下の用例を見てみよう。

(4) この詩は発表したというよりは、採用された、と書くべきだったかも知れぬ…

(書籍・文学 LBd9_00054_74570)

この例において、目的格「ヲ」の代わりに、「ハ」が使われている。しかしながら、この「ハ」は「詩を発表する」のように、「ヲ」を取り立てて表すものであると考えられる。よって、この例も「～ヲ」の用例として見做す。なお、対象に対する働きかけを表すものであると認められるため、他動詞であると判断する。

7.3.2.4 格助詞の省略の問題

実際の用例において、前後の文脈により、助詞を伴う成分が省略されたり、対象格以外の助詞を伴う補助的な成分が出現したりする場合がある。これらの状況による判断困難を避けるために、前後の文脈を広げたくて判断する。以下の用例を見てみよう。

(5) …, かなりのお年であるにもかかわらず、現在も活発に発表している方である。マスタートーズ博士といい、このホイラー博士といい、… (書籍・技術・工学 Lbt5_00049_19080)

以上の用例では、「発表する」の対象語が省略されている。こういった場合、前後の文脈

を広げて、「～が～を発表する」のように文脈を補完したうえで、「～ヲ」の対象格を取るため他動詞である、どのように判断を行う。

7.3.2.5 倒置表現の問題

一般に、他動詞構文は「A ガ B ヲ～する」となるが、実際に用例を調べると、構文成分の位置が変化したりするものが存在することに気が付く。こういった場合、順序を「が～を～する」のように整えた後、自他判断を行う。たとえば、以下の用例を見てみよう。

- (6) …に巻き込まれるケースが多くなっている。外務省領事移住部邦人保護課が発表している「海外邦人援護関係統計」によると、千九百九十… (書籍・歴史 LBg2_00069_390)

上記のように、「発表する」直前に「ガ」格が来ているが、実際には、これは「～ヲ」格の対象語となる「海外邦人援護関係統計」という部分が倒置されている。このため、「発表する」は他動詞として認める。

7.3.2.6 受身形の問題

受身形と使役形を加えるのは、自他と深く関わる概念として、それぞれ代行他動詞と代行自動詞とのような役割を果たすことができる(寺村, 1982)とされているためである。ただし、「される」については、受け身以外に、可能や尊敬を表す場合もある。本研究では、受身でないと判断される例はすべて除外する。また、待遇表現などの用例も除外する。以下の(7)は尊敬表現、(8)と(9)は待遇表現の用例である。

- (7) …の周知・著名表示等の不正競争防止法で保護される利益を不正に使用された者が、その使用者(不正競争行為者)に対して… (書籍・社会科学 PB16_00083_258_3860)

- (8) いただきました写真は返却致しかねます。また、応募先のコーナー以外でも使用させて頂くこともございます。予めご了承ください。

(雑誌 PM41_00358_311_12790)

- (9) 想像しているのではないかと…。ゆかりんの弟さんがご結婚されることになったそう
な…。 (ブログ OY15_19133_9230)

7.3.2.7 その他

なお、(10) のような古文的表現についても、調査対象から省く。

(10) 疑いようのない事実です。宇宙の根源にあつて、宇宙のすべてを存在せしめているものを、特に宇宙神と呼びます。 (書籍・社会科学 PB41_00013_62530)

7.4 結果と考察

7.4.1 辞書における漢語サ変動詞の自他認定

『岩波国語辞典』(岩波), 『学研現代新国語辞典改訂版』(学研), 『明鏡国語辞典』(明鏡) の3冊を調べた結果、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の93語の自他認定は以下のとおりであった。

表2 辞書の自他認定

	岩波	学研	明鏡		岩波	学研	明鏡		岩波	学研	明鏡
存在する	自	自	自	主張する	他	他	他	支配する	他	他	他
利用する	他	他	他	要求する	他	他	他	結婚する	自	自	自
紹介する	他	他	他	完成する	自他	自他	自他	実行する	他	他	他
説明する	他	他	他	判断する	他	他	他	変更する	他	他	他
使用する	他	他	他	成功する	自	自	自	拡大する	他自	自他	自他
確認する	他	他	他	設置する	他	他	他	解決する	他自	自他	自他
理解する	他	他	他	*決定する	他自	自他	自他	解放する	他	他	他
表示する	他	他	他	作成する	他	他	他	比較する	他	他	他
発見する	他	他	他	選択する	他	他	他	集中する	自他	自他	自他
*発生する	自他	自	自	開始する	自他	自他	自他	購入する	他	他	他
注目する	自他	自他	自他	採用する	他	他	他	発揮する	他	他	他
指摘する	他	他	他	登場する	自	自	自	一致する	自	自	自
*期待する	他	自他	自他	認識する	他	他	他	無視する	他	他	他
実施する	他	他	他	*予想する	自他	他	他	維持する	他	他	他
*用意する	自他	他	他	成立する	自	自	自	適用する	他	他	他

発表する	他	他	他	報告する	他	他	他	確立する	自他	自他	自他
*注意する	自	自他	自他	導入する	他	他	他	記載する	他	他	他
開催する	他	他	他	発売する	他	他	他	*勉強する	他自	他	自他
構成する	他	他	他	意識する	他	他	他	分類する	他	他	他
評価する	他	他	他	移動する	自他	自他	自他	安定する	自	自	自
設定する	他	他	他	指定する	他	他	他	観察する	他	他	他
*変化する	なし	自	自	強調する	他	他	他	保存する	他	他	他
提供する	他	他	他	発展する	自	自	自	*心配する	自他	他	他
形成する	他	他	他	増加する	自他	自他	自他	重視する	他	他	他
実現する	自他	自他	自他	開発する	他	他	他	考慮する	他	他	他
表現する	他	他	他	否定する	他	他	他	販売する	他	他	他
*展開する	他自	自他	自他	提出する	他	他	他	想像する	他	他	他
参加する	自	自	自	*反映する	自他	自他	自	*活用する	他	自他	自他
検討する	他	他	他	規定する	他	他	他	限定する	他	他	他
*意味する	他	なし	なし	代表する	他	他	他	減少する	自他	自他	自他
対応する	自	自	自	掲載する	他	他	他	区別する	他	他	他

ここで指摘したいことは2点ある。

1点目は、全93語のうち、13語において何らかのずれが確認されたことである。上表において、該当する語の左端に*が付けられているものである。そのうち、「変化する」、「意味する」については、当該語の動詞形そのものが辞書に立項されていないことに由来するもので、自他判定の問題ではない。しかし、「発生する」、「期待する」、「用意する」、「注意する」、「予想する」、「反映する」、「勉強する」、「心配する」、「活用する」の9語については、主要辞書の自他判定そのものが明白に食い違っていることが示された。この食い違いは従来の自他研究の限界を示すものであり、また教育的に見れば、学習者を混乱させる原因となるものである。

2点目は、自他両用動詞の記述の問題である。『岩波』では、「自他」と「他自」の2種類の記述法を採用しており、自他両用動詞が自動詞に偏っているか他動詞に偏っているかが示されている。しかし、ほかの2冊の辞書では、「自他」の記述で代表されているため、

自動詞用法と他動詞用法のどちらがより多いかという情報は把握できない。これに起因する自他記述のずれがある語は「展開する」、「決定する」の2語である。この点からも辞書の記述に食い違いがあると言える。

以上のように、辞書の記述において、少なからず問題点が残っていることが確認できた。各漢語サ変動詞の自他情報を正確に捉えるために、次節では、コーパス調査をふまえ、前で述べた基準に基づき、93語の自他性の再確認を行うこととする。

7.4.2 基本形に基づく漢語サ変動詞の自他特性

高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語について、コーパスに基づき、使用頻度を調べ、他動詞形使用率を計算したところ、以下ようになった。すでに述べたように、「他」「自」「他自」「自他」の判断は前述の基準に基づいている。また、他動詞形出現頻度、自動詞形出現頻度、他動詞形使用率はそれぞれ他動、自動、他動率に短縮して示す。なお、自他両用動詞について、自動詞と他動詞の優先性を表記のうえで区別している『岩波』については、「自他」や「他自」と記載する。一方でこの点を区別していない『学研』と『明鏡』については、「自=他」で示す。左端に*がついている語は、既存の辞書記述に何らかの問題が認められたものである。

表3 漢語サ変動詞の自他頻度および他動詞形使用率

	他動	自動	他動率	岩波	学研	明鏡
存在する	0	9728	0.00	自	自	自
利用する	10127	0	100.00	他	他	他
紹介する	6609	0	100.00	他	他	他
説明する	7741	0	100.00	他	他	他
使用する	8260	0	100.00	他	他	他
確認する	6918	0	100.00	他	他	他
理解する	5943	0	100.00	他	他	他
表示する	2386	0	100.00	他	他	他
発見する	2545	0	100.00	他	他	他
*発生する	128	6342	1.98	自他	自	自

*注目する	1615	0	100.00	自他	自=他	自=他
指摘する	3069	0	100.00	他	他	他
*期待する	3536	0	100.00	他	自=他	自=他
実施する	8107	0	100.00	他	他	他
*用意する	3472	0	100.00	自他	他	他
発表する	3302	0	100.00	他	他	他
*注意する	734	3355	17.95	自	自=他	自=他
開催する	1478	0	100.00	他	他	他
構成する	1795	0	100.00	他	他	他
評価する	2612	0	100.00	他	他	他
設定する	3993	0	100.00	他	他	他
*変化する	0	4343	0.00	なし	自	自
提供する	4176	0	100.00	他	他	他
形成する	1968	0	100.00	他	他	他
*実現する	2151	1504	58.85	自他	自=他	自=他
表現する	3066	0	100.00	他	他	他
*展開する	1863	1460	56.06	他自	自=他	自=他
参加する	0	6454	0.00	自	自	自
検討する	3719	0	100.00	他	他	他
*意味する	4289	0	100.00	他	なし	なし
対応する	0	6054	0.00	自	自	自
主張する	3696	0	100.00	他	他	他
要求する	2032	0	100.00	他	他	他
完成する	202	1813	10.02	自他	自=他	自=他
判断する	3804	0	100.00	他	他	他
成功する	0	3595	0.00	自	自	自
設置する	2481	0	100.00	他	他	他
*決定する	2449	496	83.16	他自	自=他	自=他
作成する	4349	0	100.00	他	他	他

選択する	4855	0	100.00	他	他	他
*開始する	2418	194	92.57	自他	自=他	自=他
採用する	2254	0	100.00	他	他	他
登場する	0	4518	0.00	自	自	自
認識する	1977	0	100.00	他	他	他
*予想する	938	0	100.00	自他	他	他
成立する	0	3484	0.00	自	自	自
報告する	2109	0	100.00	他	他	他
導入する	2142	0	100.00	他	他	他
発売する	502	0	100.00	他	他	他
意識する	2628	0	100.00	他	他	他
移動する	396	2436	13.98	自他	自=他	自=他
指定する	2624	0	100.00	他	他	他
強調する	2352	0	100.00	他	他	他
発展する	0	1992	0.00	自	自	自
増加する	73	6131	1.18	自他	自=他	自=他
開発する	1633	0	100.00	他	他	他
否定する	2190	0	100.00	他	他	他
提出する	2351	0	100.00	他	他	他
反映する	1670	210	88.83	自他	自=他	自
規定する	2291	0	100.00	他	他	他
代表する	1406	0	100.00	他	他	他
掲載する	912	0	100.00	他	他	他
支配する	1749	0	100.00	他	他	他
結婚する	0	6098	0.00	自	自	自
実行する	2223	0	100.00	他	他	他
変更する	2667	0	100.00	他	他	他
*拡大する	1283	1644	43.83	他自	自=他	自=他
*解決する	1791	872	67.25	他自	自=他	自=他

解放する	532	0	100.00	他	他	他
比較する	3497	0	100.00	他	他	他
集中する	867	1342	39.25	自他	自=他	自=他
購入する	4828	0	100.00	他	他	他
発揮する	2027	0	100.00	他	他	他
一致する	0	2024	0.00	自	自	自
無視する	2577	0	100.00	他	他	他
維持する	2507	0	100.00	他	他	他
適用する	1181	0	100.00	他	他	他
確立する	1087	536	66.97	自他	自=他	自=他
記載する	1830	0	100.00	他	他	他
*勉強する	2773	0	100.00	他自	他	自=他
分類する	879	0	100.00	他	他	他
安定する	0	2206	0.00	自	自	自
観察する	2024	0	100.00	他	他	他
保存する	2073	0	100.00	他	他	他
*心配する	3195	0	100.00	自他	他	他
重視する	2066	0	100.00	他	他	他
考慮する	2571	0	100.00	他	他	他
販売する	1309	0	100.00	他	他	他
想像する	2182	0	100.00	他	他	他
*活用する	2720	0	100.00	他	自=他	自=他
限定する	815	0	100.00	他	他	他
減少する	20	4004	0.50	自他	自=他	自=他
区別する	1107	0	100.00	他	他	他

上表について、詳細な分析に先立ち、辞書の記述の妥当性について確認しておこう。上表に示した漢語サ変動詞 93 語のうち、コーパスと照合すると、17 語について辞書の記述に問題が見られる。以下、該当する語とその問題点について示す。なお、3 種類の辞書における自他表記をあわせて掲載する。

表4 辞書記述とコーパス調査結果にずれが見られる漢語サ変動詞

	問題ある辞書記述	コーパス調査の結果
(1)	発生する (学研；明鏡) 自	自他
(2)	注目する (岩波) 自他 (学研；明鏡) 自＝他	他
(3)	期待する (学研；明鏡) 自＝他	他
(4)	用意する (岩波) 自他	他
(5)	注意する (岩波) 自	自他
(6)	変化する (岩波) 立項なし	自
(7)	実現する (岩波) 自他 (学研；明鏡) 自＝他	他自
(8)	展開する (学研；明鏡) 自＝他	他自
(9)	意味する (学研；明鏡) 立項なし	他
(10)	決定する (学研；明鏡) 自＝他	他自
(11)	開始する (岩波) 自他 (学研；明鏡) 自＝他	他自
(12)	予想する (岩波) 自他	他
(13)	拡大する (岩波) 他自	自他
(14)	解決する (学研；明鏡) 自＝他	他自
(15)	勉強する (岩波) 他自 (明鏡) 自＝他	他
(16)	心配する (岩波) 自他	他
(17)	活用する (学研) 自他 (明鏡) 自＝他	他

まず、(6) と (9) については、一部の辞書において当該語が動詞として立項されていないものである。コーパス調査に基づき、当該2語はともに漢語サ変動詞として使用されていることが確認された。検証した範囲においては、「意味する」は他動詞、「変化する」は自動詞で、その他の用法は存在しなかった。以下はその例である。

(1) ・ ・ ・ だけでなく、言語の十分な発展のために必須の社会的ならびに機能的な空間を意味している。 (書籍・言語 PB58_00022)

(2) 大幅に増加していることがわかります。このように物質は、固体・液体・気体と状態が変化するときには、体積も変化します。 (書籍・自然科学 PB44_00098)

次に、(1) については、一部の辞書において自動詞とされているが、コーパス調査の結果、他動詞用法もあることが確認された。以下では、「発生する」の他動詞用例を示す。

(3) 運動をすると、まず筋肉に蓄えられた糖類が分解されてエネルギーを発生する。すなわち、無酸素呼吸が起こる。 (書籍・自然科学 PB14_00176)

続いて、(2) と (3) について、一部の辞書において自他両用動詞とされているが、コーパス調査の結果、他動詞用法のみであることが確認された。ここでは留意すべきは、「注目する」「期待する」の2語については、「ニ」格と「ヲ」格がともに使用しうることである。辞書によって、「ヲ」格以外の助詞を使用する動詞はすべて自動詞として扱われている。一方、本研究では、すでに述べたように、「ニ」格である場合に、受身形が許容されれば、それを他動詞として認める。そこで、こういった食い違いが生じてきたと考えられる。

次に(4)について、一部の辞書においては自他両用動詞とされているが、コーパス調査の結果に限って言うと、他動詞用法のみとなっている。以下その用例を示す。

(4) 包丁を奪い取り、和之は小さく吐息をついた。知人に連絡して部屋を用意してもらおう。 (書籍・文学 PB29_00494)

また、(5) について、一部の辞書においては自動詞のみとされているが、コーパス調査の結果、実は他動詞用法も存在することが確認された。以下はその他動詞用法の用例である。

(5) 日本語よりもむしろ翻訳されて海外の投資家に流れる文章の方を注意する。親会社の広報にもチェックさせる。 (書籍・文学 LBq9_00191)

また、(8)、(9)については、一部の辞書においては、自動詞の用法が多い自他両用動詞とされているが、コーパス調査の結果、他動詞に偏った自他両用動詞であることが確認された。ここでは、それぞれの他動詞用法の用例を示す。

(6) このようにして、住民が安心して子どもを産み育てられる社会を実現することは、自治体の重要かつ緊急の課題である。 (書籍・社会科学 PB33_00054)

(7) 行政と連携し、多彩な高齢者福祉活動を展開するとともに、JAから健康対策費として行政に助成もしている。 (雑誌 PM21_00508)

また(10)、(11)については、一部の辞書においては自他両用動詞とされているが、コーパスを調査した結果、確かに自動詞用法もあるが、他動詞用法がより多い自他両用動詞であることが確認された。以下はそれぞれの他動詞用法の用例である。

(8) このため、先住民が自らの将来を決定する可能性は、小さくなるがあっても、大きくなることはありえない。 (書籍・社会科学 LBq3_00110)

(9) ドコモがm o v aを終了させるにあたり次のキャンペーンを開始する。これでエリア拡大も今以上に拡大していこう。 (ブログ OY14_43431)

さらに(12)については、一部の辞書においては自他両用動詞とされているが、コーパスを調べたところ、他動詞用法のみとなっている。以下はその用例である。

(10) また泣いていた。「ハニー、大丈夫かい？」最悪のことを予想しないようつとめて、ギルは尋ねた。 (書籍・文学 PB19_00252)

(13) については、一部の辞書では他動詞よりの自他両用動詞とされているが、コーパス調査の結果、自動詞用法が多い自他両用動詞であることが確認された。以下、その自動詞用法の用例を示す。

(11) ベーリングの温暖期には、オウシュウカンバやオウシュウナナカマドが拡大する。

(書籍・歴史 LBs2_00039)

(14) については、一部の辞書においては自他両用動詞とされているが、コーパス調査の結果、確かに自動詞用法も他動詞用法もあるが、自動詞用法よりも他動詞用法が多いことが示された。以下はその他動詞用法の用例である。

(12) 教職員の努力と父母・県民の共同の力で子どもたちの学力問題を解決することを基本に、五つの実践課題を提起しました。(書籍・社会科学 LBm3_0009)

(15), (16) と (17) については、一部の辞書において自動詞用法もあるとされているが、コーパス調査の結果、他動詞であることが確認された。以下ではそれぞれの用例を示す。

(13) 彼はさらに勉強するために、日本にいかねばならなかった。(書籍・哲学 LBm1_00002)

(14) この要請は、少しずつひどくなってきている大気汚染と病気との関係を心配する市民の声が市役所に寄せられはじめていることもある。(書籍・技術・工学 LBq5_00036)

(15) なお、ムーブメントセラピーに音楽を活用することの意義をまとめると、以下の3点に集約される。(書籍・自然科学 PB34_00189)

以上で概観したように、コーパス調査を行うことにより、高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語の自他特性について、詳細な記述を行うことができた。あわせて既存の辞書記述の問題点も明らかにされた。全体の中で見れば、自他記述に問題がある語は必ずしも多くない。しかしながら、実際には、自他両用動詞であるのに、一部の辞書においては、自動詞用法または他動詞用法とされ、その他の用法が認められていないという問題が確認された。これは主観のみに頼った言語観察の限界を示していると言えよう。

ただし、留意しなければならないのは、実際の使用において、漢語サ変動詞は自動詞形や他動詞形という基本形のみではなく、受身形や使役形でも使われていることである。この点を考慮に入れば、漢語サ変動詞の自他特性の記述の精緻化を一層高めることができると考えられる。よって、次節では、基本形に加え、拡張形の使用状況を調査し、漢語サ

変動詞の自他特性をより細かく捉えることを試みる。

7.4.3 拡張形を加えた漢語サ変動詞の自他特性

高頻度・汎用的漢語サ変動詞の 93 語について、拡張形を加えた 4 パタンの使用状況をコーパス調査し、比率を求めた。結果は以下のとおりである。RQ2 での自他調査と比較するため、基本形をふまえた自他判断の結果も合わせて示す。

表 5 漢語サ変動詞の基本形と拡張形における使用率

	基本形に ふまえた 自他特性	基本形			拡張形		合計
		他動詞形	自動詞形	合計	受身形	使役形	
存在する	自	0.00	99.86	99.86	0.01	0.13	0.14
利用する	他	86.00	0.00	86.00	13.70	0.31	14.01
紹介する	他	80.99	0.00	80.99	18.95	0.06	19.01
説明する	他	93.20	0.00	93.20	6.34	0.46	6.80
使用する	他	78.88	0.00	78.88	20.73	0.39	21.12
確認する	他	86.38	0.00	86.38	13.31	0.31	13.62
理解する	他	86.97	0.00	86.97	10.52	2.50	13.02
表示する	他	32.63	0.00	32.63	62.34	5.03	67.37
発見する	他	53.98	0.00	53.98	45.75	0.28	46.03
発生する	自他	1.87	92.67	94.54	0.03	5.44	5.47
注目する	他	46.34	0.00	46.34	53.00	0.66	53.66
指摘する	他	66.19	0.00	66.19	33.81	0.00	33.81
期待する	他	67.00	0.00	67.00	32.28	0.72	33.00
実施する	他	78.23	0.00	78.23	21.57	0.20	21.77
用意する	他	74.55	0.00	74.55	24.74	0.71	25.45
発表する	他	69.38	0.00	69.38	30.20	0.42	30.62
注意する	自他	16.65	76.11	92.76	7.15	0.09	7.24
開催する	他	40.60	0.00	40.60	59.29	0.11	59.40

構成する	他	50.78	0.00	50.78	49.08	0.14	49.22
評価する	他	67.44	0.00	67.44	32.40	0.15	32.55
設定する	他	77.13	0.00	77.13	22.70	0.17	22.87
変化する	自	0.00	88.38	88.38	11.58	0.04	11.62
提供する	他	87.42	0.00	87.42	12.27	0.31	12.58
形成する	他	55.37	0.00	55.37	43.47	1.15	44.62
実現する	他自	48.51	33.92	82.43	10.24	7.33	17.57
表現する	他	80.68	0.00	80.68	19.16	0.16	19.32
展開する	他自	41.96	32.88	74.84	23.06	2.09	25.15
参加する	自	0.00	97.79	97.79	0.00	2.21	2.21
検討する	他	87.53	0.00	87.53	12.21	0.26	12.47
意味する	他	99.77	0.00	99.77	0.19	0.05	0.24
対応する	自	0.00	97.46	97.46	0.48	2.06	2.54
主張する	他	94.12	0.00	94.12	5.76	0.13	5.89
要求する	他	97.74	0.00	97.74	2.26	0.00	2.26
完成する	自他	7.28	65.31	72.59	8.32	19.09	27.41
判断する	他	84.65	0.00	84.65	15.00	0.36	15.36
成功する	自	0.00	89.65	89.65	0.12	10.22	10.34
設置する	他	59.11	0.00	59.11	40.72	0.17	40.89
決定する	他自	61.56	12.47	74.03	25.79	0.18	25.97
作成する	他	83.33	0.00	83.33	16.21	0.46	16.67
選択する	他	92.37	0.00	92.37	7.10	0.53	7.63
開始する	他自	65.00	5.22	70.22	29.46	0.32	29.78
採用する	他	67.10	0.00	67.10	32.72	0.18	32.90
登場する	自	0.00	96.50	96.50	0.02	3.48	3.50
認識する	他	70.71	0.00	70.71	24.64	4.65	29.29
予想する	他	73.00	0.00	73.00	25.45	1.56	27.01
成立する	自	0.00	92.49	92.49	0.03	7.49	7.52
報告する	他	67.70	0.00	67.70	31.46	0.83	32.29

導入する	他	66.75	0.00	66.75	33.16	0.09	33.25
発売する	他	31.16	0.00	31.16	68.84	0.00	68.84
意識する	他	87.31	0.00	87.31	9.27	3.42	12.69
移動する	自他	11.87	73.04	84.91	0.54	14.54	15.08
指定する	他	69.69	0.00	69.69	30.25	0.05	30.30
強調する	他	80.71	0.00	80.71	18.94	0.34	19.28
発展する	自	0.00	73.78	73.78	0.30	25.93	26.23
増加する	自他	1.11	93.36	94.47	0.21	5.31	5.52
開発する	他	59.84	0.00	59.84	39.90	0.26	40.16
否定する	他	83.02	0.00	83.02	16.79	0.19	16.98
提出する	他	75.64	0.00	75.64	22.04	2.32	24.36
反映する	他自	55.12	6.93	62.05	26.04	11.91	37.95
規定する	他	67.64	0.00	67.64	32.27	0.09	32.36
代表する	他	64.91	0.00	64.91	33.98	1.11	35.09
掲載する	他	41.87	0.00	41.87	57.94	0.18	58.12
支配する	他	77.98	0.00	77.98	21.71	0.31	22.02
結婚する	自	0.00	98.48	98.48	0.00	1.52	1.52
実行する	他	82.30	0.00	82.30	15.70	2.00	17.70
変更する	他	80.07	0.00	80.07	18.94	0.99	19.93
拡大する	自他	37.89	48.55	86.44	8.92	4.64	13.56
解決する	他自	60.84	29.62	90.46	8.97	0.58	9.55
解放する	他	37.12	0.00	37.12	61.69	1.19	62.88
比較する	他	96.90	0.00	96.90	2.91	0.19	3.10
集中する	自他	34.58	53.53	88.11	1.40	10.49	11.89
購入する	他	98.41	0.00	98.41	1.20	0.39	1.59
発揮する	他	81.93	0.00	81.93	12.25	5.82	18.07
一致する	自	0.00	96.20	96.20	0.00	3.80	3.80
無視する	他	85.87	0.00	85.87	14.10	0.03	14.13
維持する	他	83.04	0.00	83.04	15.73	1.23	16.96

適用する	他	68.74	0.00	68.74	29.92	1.34	31.26
確立する	他自	49.52	24.42	73.94	23.83	2.23	26.06
記載する	他	56.85	0.00	56.85	42.84	0.31	43.15
勉強する	他	100.00	0.00	98.44	0.00	1.56	1.56
分類する	他	57.41	0.00	57.41	42.59	0.00	42.59
安定する	自	0.00	91.04	91.04	0.00	8.96	8.96
観察する	他	84.76	0.00	84.76	14.87	0.38	15.25
保存する	他	77.50	0.00	77.50	22.43	0.07	22.50
心配する	他	92.77	0.00	92.77	5.37	1.86	7.23
重視する	他	82.02	0.00	82.02	17.94	0.04	17.98
考慮する	他	90.31	0.00	90.31	9.59	0.11	9.70
販売する	他	68.04	0.00	68.04	31.70	0.26	31.96
想像する	他	92.03	0.00	92.03	4.85	3.12	7.97
活用する	他	88.92	0.00	88.92	10.95	0.13	11.08
限定する	他	50.40	0.00	50.40	49.29	0.31	49.60
減少する	自他	0.46	92.22	92.68	0.05	7.28	7.33
区別する	他	74.60	0.00	74.60	25.07	0.34	25.41
平均				77.72			22.28

上記を観察すると、以下のことがわかる。

1 点目は、全 4 パタンの中で、従来の研究ではほとんど考慮されていなかった拡張形がすべての語において出現していることである。たとえば、「表示する」の場合は 67.37%、「注目する」の場合は 53.66%、「開催する」の場合は 59.40%、「発売する」の場合は 68.84%、「解放する」の場合は 62.88%となり、全体的に見ても 2 割を超えている。このことは、漢語サ変動詞が実際の使用において、必ずしも基本形他動詞、または基本形自動詞のいずれかの形のみではなく、4 つの形式の中で使用されているものである。

2 点目は、93 語はすべて基本形のみならず、拡張形でも使用されているわけであるが、その中でも、語によって、拡張形の選好率が大きく異なることである。たとえば、すでに述べたように、「表示する」、「発売する」、「解放する」のように、拡張形で多く使用されるものもあるが、一方で、「存在する」、「説明する」、「参加する」のように、拡

張形がきわめて少なく、ほとんどの場合に基本形で使用されている。この点については、上表から明らかなように、多くの語において、拡張形には受身形が大半を占めているが、自動詞は受身形を取りにくいいため、拡張形全体としての比率が相対的に低くなることが考えられる。こうした情報は、従来の日本語研究においても、また日本語教育においてもほとんど触れられていないが、語の自然の運用を理解するうえでは欠かすことのできない情報であると考えられる。

このように、他動詞基本形、自動詞基本形、および受身形、使役形の使用頻度を調査したことにより、高頻度・汎用的漢語サ変動詞は語によって選好する自他使用パターンが異なる可能性がわかった。よって、次節では、各自他使用パターンの比率に基づいて、93語の高頻度・汎用的漢語サ変動詞を体系的に分類することを試みる。

7.4.4 自他性に基づく漢語サ変動詞の分類と共通特性の考察

本節では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語について、他動詞基本形・自動詞基本形・受身形・使役形の比率に基づき、階層的ケースクラスター分析を行った。結果として、まず、以下の樹形図が得られた。

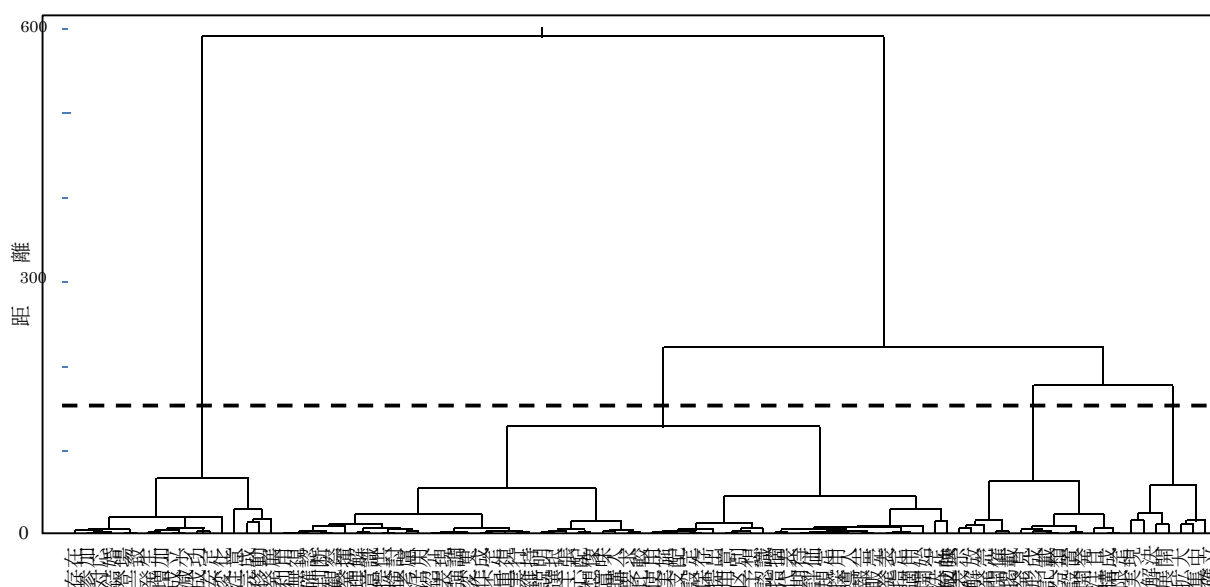


図1 樹形図

一般に、樹形図の解釈では、定常状態（その状態が長く持続する部分）が長い部分にカ

ッティングポイントを置いて、全体のデータをいくつかのクラスターに分ける。上記の場合、もっとも定常状態にあるのは230~570までの間であり、ここで分けると、全体のデータは2つに分かれることになる。その場合、左側のクラスターに含まれるのは、「存在する」、「発生する」、「変化する」など、ほとんど自動詞である。一方で右側のクラスターに含まれるのが、「利用する」、「理解する」、「確認する」などの他動詞、「反映する」、「開始する」、「展開する」などの自他両用動詞のように、まちまちである。

樹形図の定常状態の長い部分に注目することで、自動詞的なものとそれ以外がわかるようになったが、一方、右側のクラスターにさらに下位構造が隠れていると考えられる。そこで、ここでは、上図の点線で示した部分にあえてカッティングポイントを設定し、右側クラスターをさらに3つにわけて、より詳細な分析を行うこととする。この場合、全体のデータが以下の4クラスターに分類されることとなり、各クラスター間の平均が以下のようになる。

表6 クラスター間平均

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	第4クラスター
他動詞形	2.20	79.67	48.11	44.36
自動詞形	89.19	0.45	0.00	40.59
受身形	1.70	18.89	51.20	10.92
使役形	6.92	0.99	0.70	4.13

上表において、すでに述べたように、第1クラスターには自動詞形が圧倒的に多く、他動詞形と受身形はきわめて少ない比率を占めることから、第1クラスターは<自動詞形優勢クラスター>と名付けられる。また、第2クラスターは、他動詞形が最も多く、自動詞形と使役形がほぼないことから、このクラスターは<他動詞形優勢クラスター>として扱っても差支えないだろう。さらに第3クラスターを見てみると、受身形が最も多く、他動詞形も非常に高い比率を占めている一方、自動詞形と使役形の比率がごく少ないことから、当該クラスターは<受身形他動詞形併用クラスター>と名付けられる。最後に第4クラスターを見てみると、他動詞形と自動詞形の二つの基本形が拮抗する特徴が見られるため、このクラスターは<自他動詞形拮抗クラスター>と名付けられる。

ちなみに、上記からもう一つ興味深いことに気が付く。それは、自動詞形と使役形が同

じクラスターに分類されている一方、他動詞形と受身形は2つのクラスターに分けられているという点である。このことから、使役形と自動詞形はともに自動詞的な特性をもつ使用パターンであると考えられる。逆に、同じく他動詞であっても、他動詞形で多く使われるものと、受身形で多く使われるものの2種類の可能性があることが裏付けられている。

以上で、4つのクラスターにどのような語が含まれ、それらがどのような自他特性を持っているかが明らかになった。しかし、これらの各クラスターは単なる自他特性のみならず、ある種の意味的傾向性を共有している可能性もある。そこで、以下では、4クラスターに含まれる各語の意味特性を『分類語彙表』に基づき調査することとしたい。以下では、各語の意味情報を大分類と小分類の2種類で表記する。

表7 各クラスターに分類される漢語サ変動詞

		大分類		小分類
(I) 自動詞 形優勢 クラス ター (17)	存在する	自	抽象的關係	存在
	発生する	自他	抽象的關係	出現
	注意する	自他	人間活動 - 精神及び行為	注意・認識・了解
	変化する	自	抽象的關係	変化
	参加する	自	人間活動 - 精神及び行為	協力・参加
	対応する	自	抽象的關係	相對
	完成する	自他	抽象的關係	成否
	成功する	自	人間活動 - 精神及び行為	成功・失敗
	登場する	自	抽象的關係	復活・前兆・存亡
	成立する	自	抽象的關係	成否
	移動する	自他	抽象的關係	移動・発着
	発展する	自	抽象的關係	発達・消長
	増加する	自他	抽象的關係	増減
	結婚する	自	人間活動 - 精神及び行為	慶弔
	一致する	自	抽象的關係	類似・一致
	安定する	自	抽象的關係	変換
	減少する	自他	抽象的關係	増減

(II) 他動詞 形優勢 クラス ター (56)	利用する	他	人間活動 - 精神及び行為	使用
	紹介する	他	人間活動 - 精神及び行為	紹介・周旋
	説明する	他	人間活動 - 精神及び行為	説明
	使用する	他	人間活動 - 精神及び行為	使用
	確認する	他	人間活動 - 精神及び行為	注意・認識・了解
	理解する	他	人間活動 - 精神及び行為	注意・認識・了解
	指摘する	他	人間活動 - 精神及び行為	呈示・指定など
	期待する	他	人間活動 - 精神及び行為	欲望・期待など
	実施する	他	人間活動 - 精神及び行為	実行・犯罪
	用意する	他	人間活動 - 精神及び行為	見当・準備
	発表する	他	人間活動 - 精神及び行為	宣言・発表
	評価する	他	人間活動 - 精神及び行為	計算・しんしゃく・測定・評価
	設定する	他	人間活動 - 精神及び行為	解決・決定・きまり
	提供する	他	人間活動 - 精神及び行為	譲与
	表現する	他	人間活動 - 精神及び行為	表現・叙述・翻訳
	検討する	他	人間活動 - 精神及び行為	研究・実験・調査・検査など
	意味する	他	人間活動 - 精神及び行為	意味・問題・趣旨・大綱など
	主張する	他	人間活動 - 精神及び行為	原理・規則・主義
	要求する	他	人間活動 - 精神及び行為	請求
	判断する	他	人間活動 - 精神及び行為	想像・推測・判断・決心など
	決定する	他自	人間活動 - 精神及び行為	解決・決定・きまり
	作成する	他	人間活動 - 精神及び行為	製造・荷造り
	選択する	他	人間活動 - 精神及び行為	比較・区別・選択・参考
	開始する	他自	抽象的關係	開始・終了
	採用する	他	人間活動 - 精神及び行為	使用
	認識する	他	人間活動 - 精神及び行為	注意・認識・了解
予想する	他	人間活動 - 精神及び行為	想像・推測・判断・決心など	
報告する	他	人間活動 - 精神及び行為	報告・申告	

導入する	他	抽象的關係	込み
意識する	他	人間活動 - 精神及び行為	心
指定する	他	人間活動 - 精神及び行為	呈示・指定など
強調する	他	人間活動 - 精神及び行為	表現・叙述・翻訳
否定する	他	人間活動 - 精神及び行為	承認・肯定など
提出する	他	抽象的關係	復活・前兆・存亡
反映する	他自	自然物及び自然現象	光
規定する	他	人間活動 - 精神及び行為	原理・規則・主義
代表する	他	抽象的關係	本体
支配する	他	人間活動 - 精神及び行為	支配・政治・革命
実行する	他	人間活動 - 精神及び行為	実行・犯罪
変更する	他	抽象的關係	変化
比較する	他	人間活動 - 精神及び行為	比較・区別・選択・参考
購入する	他	人間活動 - 精神及び行為	売買
發揮する	他	抽象的關係	出現
無視する	他	人間活動 - 精神及び行為	視・察・番など
維持する	他	抽象的關係	保存
適用する	他	人間活動 - 精神及び行為	使用
勉強する	他	人間活動 - 精神及び行為	自我・信念・努力
觀察する	他	人間活動 - 精神及び行為	研究・実験・調査・検査など
保存する	他	抽象的關係	保存
心配する	他	人間活動 - 精神及び行為	安心・焦燥・満足
重視する	他	人間活動 - 精神及び行為	視・察・番など
考慮する	他	人間活動 - 精神及び行為	思考・感想・疑い
販売する	他	人間活動 - 精神及び行為	売買
想像する	他	人間活動 - 精神及び行為	想像・推測・判断・決心など
活用する	他	人間活動 - 精神及び行為	使用
区別する	他	人間活動 - 精神及び行為	比較・区別・選択・参考
表示する	他	人間活動 - 精神及び行為	呈示・指定など

(III) 受身形 他動詞 形併用 クラス ター (14)	発見する	他	人間活動 - 精神及び行為	見聞・見・観・覧など
	注目する	他	人間活動 - 精神及び行為	視・察・番など
	開催する	他	人間活動 - 精神及び行為	活動
	構成する	他	抽象的關係	内容・組織
	形成する	他	抽象的關係	確立
	設置する	他	人間活動 - 精神及び行為	設立・運営
	発売する	他	人間活動 - 精神及び行為	売買
	開発する	他	人間活動 - 精神及び行為	土木
	掲載する	他	人間活動 - 精神及び行為	出版・興行
	解放する	他	人間活動 - 精神及び行為	命令・制約
	記載する	他	人間活動 - 精神及び行為	記載
	分類する	他	人間活動 - 精神及び行為	比較・区別・選択・参考
	限定する	他	人間活動 - 精神及び行為	比較・区別・選択・参考
	(IV) 自他動 詞形拮 抗クラ スター (6)	実現する	他自	抽象的關係
展開する	他自	抽象的關係	伸縮	
拡大する	自他	抽象的關係	伸縮	
解決する	他自	人間活動 - 精神及び行為	注意・認識・了解	
集中する	自他	抽象的關係	離合・集合	
確立する	他自	抽象的關係	確立	

各クラスターの特性を観察する前に、4つのクラスター全体の特徴としてわかることを述べる。それは93語のうち、「反映する」（自然物及び自然現象）を除くすべてが「抽象的關係」もしくは「人間活動 - 精神及び行為」に関連していることである。これは自他特性に関わらず、漢語サ変動詞そのものが実際の行為・動作というよりも、より抽象的で精神的な概念を扱いやすい傾向を示している。たとえば、「比較する」と「比べる」、「購入する」と「買う」、「販売する」と「売る」といった漢語サ変動詞と和語動詞のペアからイメージできるように、和語動詞が直接に具体的な行為・行動を指すのに対して、漢語サ変動詞は「する」を付けることで形態上動詞になるが、表す行為・行動がより抽象的になる。

次に、4つのクラスターの意味的特性について、順に観察する。すでに述べたように、

各クラスターは共通して「抽象的關係」を表すものと「人間活動 - 精神及び行為」を表すものに分けられる。それぞれの割合を示すと、以下のようになる。

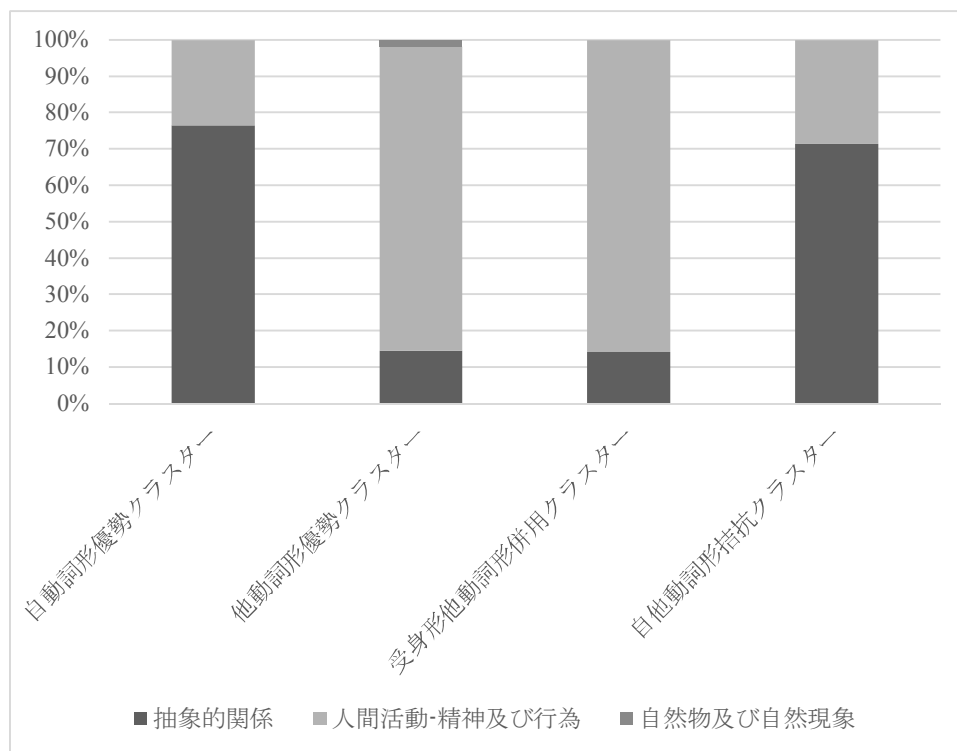


図2 各クラスターにおける意味特徴別割合

上図からわかるように、自動詞形優勢クラスターにおいて、圧倒的に抽象的關係を表す語が多い。他動詞形優勢クラスターにおいては、抽象的關係を表す語が1割程度含まれているが、その大半が人間活動を表すものである。受身形他動詞形併用クラスターにおいては、他動詞形優勢クラスターに類似し、抽象的關係を表すものが少なく、8割以上が人間活動を表す語である。自他動詞形拮抗クラスターにおいては、抽象的關係を表す語が圧倒的に多い。このように、自動詞形優勢クラスターと自他動詞形拮抗クラスターは共通して抽象的關係を表す語が多く、一方で、他動詞形優勢クラスターと受身形他動詞形併用クラスターは共通して人間の活動や行為を表す語が多い、という各語群に応じた傾向が示されている。ここからは、自動詞形優勢クラスターと自他動詞形拮抗クラスターに含まれる語については、自動詞的に使われることができるため、意図や意志による具体的な行為行動ではなく、何らかの状態のありようを示すものとなりうるため、抽象的關係を表す意味特徴を表しているが、一方、他動詞形優勢のものであろうが、受身形併用のものであろうが、

他動詞として使われる場合が多いため、意志・意図を前提となる人間活動を表すものとなりやすいと考えられる。

次に、意味特徴の小分類に注目してみよう。上記の大分類ではほとんど差がなかった自動詞形優勢クラスターと自他動詞形拮抗クラスター、および他動詞形優勢クラスターと受身形他動詞形併用クラスターについて小分類で比較してみよう。まず、自動詞形優勢クラスターと自他動詞形拮抗クラスターについて、意味の小分類を比較した結果、以下のようになる。

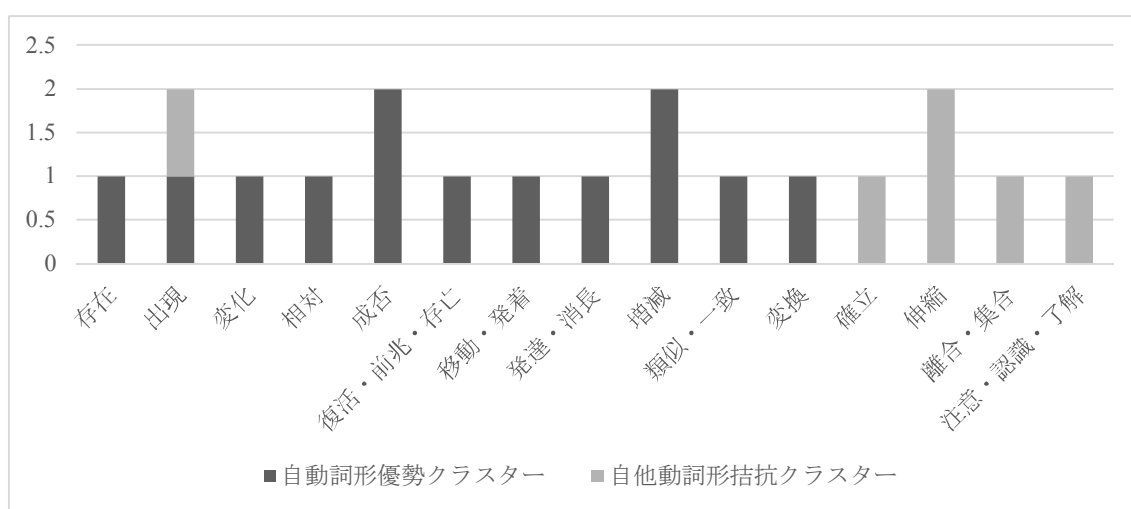


図3 「抽象的關係」の小分類

すでに述べたように、大分類で見た場合、この2つのクラスターは共通して抽象的關係を表している。しかしながら、小分類で見ると、2つのクラスターに同時に含まれる意味分類は〈出現〉のみであり、その他について、2つのクラスターは意味的にはっきり分かれていることが示されている。

自動詞形優勢クラスターについては、ある種の状態や変化が明示的に示されており、はっきりとそのありようが把握できる場合に自動詞を取りやすい傾向がある。一方、自他動詞形拮抗クラスターについては、自動詞形優勢クラスターとほぼ同じ方向を共有しているものの、自動詞形優勢クラスターに比べると、その言葉によって、表出される概念がより明確に定義しにくい。たとえば、自動詞形優勢クラスターにある「増加する」や「減少する」(〈増減〉)であれば、その変化はイメージしやすいが、自他動詞拮抗クラスターの「展開する」「拡大する」(〈伸縮〉)であれば、語の指す内容は幾分明確性が欠く。また、自

動詞形優勢クラスターにある「成立する」<成否>は、客観的事実を表しているが、同様の物事を「確立する」<確立>で表す場合、他動詞の要素、言い換えれば、話者の主観性が一定程度介在することで、その現象を前向きに捉えているということが生じてくる。

このように、ともに「抽象的關係」を表すような語が多く含まれている自動詞形優勢クラスターと他動詞形拮抗クラスターについては、自動詞形優勢クラスターは話者の意志が介在せず、客観的な事象を中立的に描写するようなものが多い。それに対して、自他動詞形拮抗クラスターになると、他動詞の要素が幾分関わってくることから、話者の関与の度合いがより大きくなっていくことが確認された。

つづいて、ともに「人間活動 - 精神及び行為」を表す語が多い他動詞形優勢クラスターと受身形他動詞形併用クラスターについて、小分類で比較した結果は以下のとおりである。

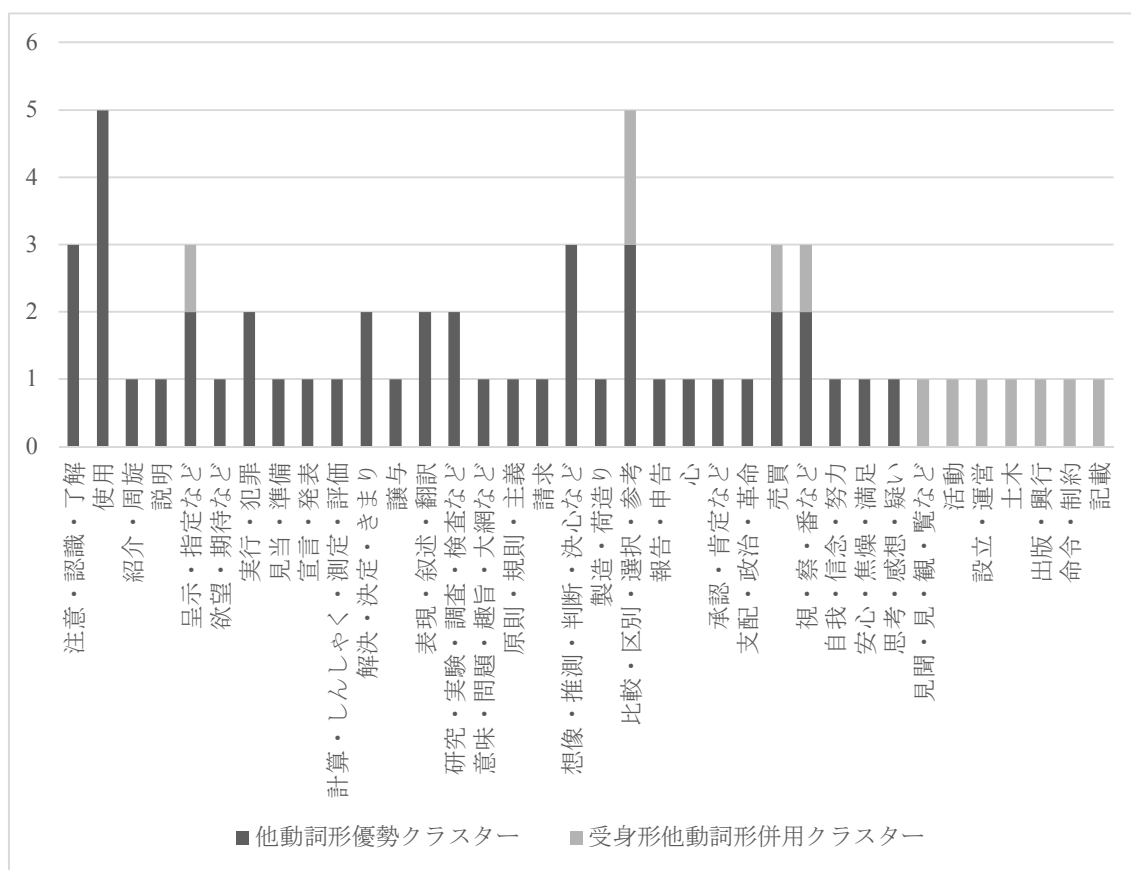


図4 「人間活動 - 精神及び行為」の小分類

上図で示したように、小分類で見た場合に、2つのクラスターは<呈示・指定など><比較・区別・選択・参考><売買><視・察・番など>が共通しているが、それ以外2つ

のクラスターはそれぞれ独自の意味特性を持っていることがわかる。

他動詞形優勢クラスターについては、細かな意味を表すことを特徴とし、またそのうち、とくに<使用><注意・認識・了解><比較・区別・選択・参考><想像・推測・判断・決心など><自我・信念・努力>などのように、個人の行動・行為および精神的・心理的活動を表している。それと比べると、受身形他動詞形併用クラスターは<見聞・見・観・覧など><活動><設立・運営><土木><出版・興行><命令・制約><記載>のように、行われる行為・行動が自発的ではなく、ある種の公的な社会的活動であるため、受身形になることが多い。

このように、他動詞形優勢クラスターと受身形他動詞形併用クラスターは共通して人間活動を表しているものの、他動詞形優勢クラスターは個人的な行為行動を表しているのに対して、受身形他動詞形併用クラスターは、ある種の権力性・公共性を持つ社会的活動を表していることが確認された。

以上をふまえ、4つのクラスターはさらに以下のように細かな定義を行うことができる。自動詞形優勢クラスターには抽象的關係を客観的に描写するものが多く、自他動詞形拮抗クラスターは抽象的關係を表すことを主とし、かつ、話者の主観が関与してくるものである。また、他動詞形優勢クラスターは全体として人間活動を表すことを中心とし、個人的な行動および精神的・心理的行為を表すものが多いが、一方、受身形他動詞形併用クラスターには個人的ではなく、ある権力に依存・関係する公的な社会的活動を表すものが多い。

7.5 まとめ

本章では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞について、自他の観点から考察を行ったうえで、意味特性の観点から検討を行った。以下、リサーチクエション順に内容を簡潔にまとめる。

まず、RQ1「辞書における漢語サ変動詞の自他認定」については、93語について既存の辞書の自他認定を検討し、当該語の動詞形そのものが辞書に立項されていなかったり、自他判定そのものに食い違いが存在したりしていることが明らかにされた。

次に、RQ2「基本形に基づく漢語サ変動詞の自他特性」については、コーパス調査を行うことにより、高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語の自他特性について詳細な記述を行うことができた。あわせて既存の辞書記述の問題点も明らかにされた。全体の中で見れば、自他記述に問題がある語は必ずしも多くないが、実際には自他両用動詞であるのに、一部の辞書においては、自動詞用法または他動詞用法とされ、その他の用法が認められていない

という辞書記述の問題が確認された。

さらに、RQ3「拡張形を加えた漢語サ変動詞の自他特性」については、他動詞基本形、自動詞基本形、および受身形、使役形の使用頻度を調査したことにより、高頻度・汎用的漢語サ変動詞は語によって選好する自他使用パターンが異なる可能性がわかった。また、多くの語において、拡張形には受身形が大半を占めているが、自動詞は受身形を取りにくいいため、拡張形全体としての比率が相対的に低くなることが明らかになった。

最後に RQ4「自他性に基づく漢語サ変動詞の分類および共通特性の考察」については、クラスター分析により、高頻度・汎用的漢語サ変動詞はその自他特性により、＜自動詞形優勢クラスター＞＜他動詞形優勢クラスター＞＜受身形他動詞形併用クラスター＞および＜自他動詞形拮抗クラスター＞の4分類に分けられることが確認された。さらに、意味的特徴をあわせて分析したところ、自動詞形優勢クラスターには抽象的関係を客観的に描写するものが多く、自他動詞形拮抗クラスターには抽象的関係を表す際に一定の主観性が関与してくる語が多い。また、他動詞形優勢クラスターと受身形他動詞形併用クラスターは共通して人間活動を表しているが、他動詞形優勢クラスターは個人的行為行動を中心としているのに対して、受身形他動詞形併用クラスターは権力性や公共性を持つ社会的活動を表すものが多い。

このように、本章では、漢語サ変動詞の自他について調査を行い、既存の辞書間の記述が食い違っていることや、従来の自他研究の手薄だったところについて検討を行った。また、コーパス調査により、従来の主観に頼った言語研究や辞書記述の限界を示しており、また日本語教育においてもほとんど触れられていなかった語の自然運用を理解するうえで欠かすことのできない知見を得たと言える。

第8章 漢語サ変動詞の語彙的排他性

4章では、コーパスを用いて、多様なジャンルにおいて共通して高頻度に出現している漢語サ変動詞の特定を行った。引き続き、5章、6章、7章において、特定された漢語サ変動詞を対象に、活用上の選好性、内部構成性、および自他性について議論してきた。

以上で漢語サ変動詞そのものの振る舞いについて多元的に考察したわけであるが、一方で、漢語サ変動詞とその関連表現の問題については未だ検討していない。たとえば、「確認する」を例にすると、当該語の表出する意味は「確かめる」という和語や、「確認をする」といった「漢語+を+する」形でも表出できる。漢語サ変動詞の振る舞いの本質をより厳密に検証するには、こうした関連表現を考慮に入れる必要があるだろう。その際、とくに重要なのは、当該漢語を含む「漢語+を+する」の形態である。この形態について、本章では「～をする」形と呼称する。

本論文の4章において、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を重要漢語サ変動詞の候補として提示したわけであるが、仮に当該意味が漢語サ変形よりも「～をする」の形でより多く使用されているならば、当該語が漢語サ変動詞としての重要性が必ずしも高いとは言えなくなる。つまり、単に漢語サ変形で高頻度・汎用的に使用されるものではなく、それとともに、もっぱら当該漢語サ変形で使用されるのが必要になる。言い換えれば、他の類義表現を広く許容するものより、排他的に当該漢語サ変形のみで使用される語が、より典型性の高い漢語サ変動詞と見なすことができる。ゆえに、ここでは、「漢語+する」の形で多く使用され、同時に「漢語+を+する」の形での使用頻度が低いものを抽出し、その特性を検討していくこととしたい。

2章の先行研究からわかるように、漢語サ変動詞の「～をする」使用の問題について、従来の研究でも関心が寄せられていた。しかしながら、どのような漢語サ変動詞は語彙的排他性が強いかという問題について、個別の用例を用いた内省的・理論的分析がほとんどであり、コーパスに基づく計量的分析により、幅広い範囲で考察を行うものが見当たらない。

8.1 本章の目的と構成

よって、本章では、特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞を対象として、「～をする」形の頻度調査をふまえ、その語彙的排他性について検討する。あわせてこういった語彙的排他性がどのような要件によって影響されているかを考察する。

本章の構成として、8.2 ではリサーチクエスチョンを設定し、8.3 では研究手順について説明する。8.4 では調査結果に基づき、考察を行う。最後に 8.5 では、本章のまとめを行う。

8.2 リサーチクエスチョン

既述したように、本章では、高頻度で汎用的な漢語サ変動詞について、「～をする」の形が併用されているか、併用されている場合、どの程度併用されているかの調査と、漢語サ変動詞の語彙的排他性の強さを説明しうる要因モデルの検討を目指すわけであるが、調査に際して、以下の 3 つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1 高頻度・汎用的漢語サ変動詞について、語彙的排他性を考慮することでどのように絞り込めるか。

RQ2 語彙的排他性が強い語と相対的に弱い語にはどのような違いがあるか。

RQ3 どのような条件によって、漢語サ変動詞の語彙的排他性を説明できるか。

8.3 研究手順

本節では、リサーチクエスチョンごとに研究の手順を紹介する。

まず、RQ1「個々の漢語サ変動詞の語彙的排他性」については、コーパスに基づき、各高頻度・汎用的漢語サ変動詞の漢語部について、「～をする」の頻度を調べる。その後、漢語サ変動詞形と「～をする」形の合計頻度に占めるサ変動詞形の頻度の比率を求め、これを当該漢語サ変動詞の語彙的排他性の指標と見なす。そのうえで、各語を語彙的排他性を手掛かりに並べ替えて、考察を行う。

次に、RQ2「語彙的排他性の強いものと弱いものとの特性」については、RQ1 で求めた語彙的排他性（比率値）に基づき、値が高いものおよび低いものについて、それぞれ BCCWJ からランダムに用例を抽出して、質的に検討を行う。分析にあたっては、「～をする」形の成立条件を整理した田野村（1988）の枠組みを参照する。

また、RQ3「語彙的排他性説明モデルの特定」については、語彙的排他性に影響を及ぼしうる要因を想定して数量化する。数量化したデータを複数の説明変数で単一の目的変数を説明・予測する重回帰分析（詳細は 3 章）にかけて分析する。目的変数は高頻度・汎用的漢語サ変動詞 93 語それぞれの語彙的排他性（サ変動詞形率）である。この値に影響を及ぼし得る説明変数の候補としては様々なものが考えられるが、ここでは、漢語サ変動詞の

核となる漢語部に関わるパラメタと、漢語部に「する」が付加された漢語サ変動詞に関わるパラメタ、の2つを想定し、それぞれ以下のような説明変数を設定する。

表1 漢語サ変動詞の語彙的排他性に関与する要因候補

		要因項目	変数性質
漢語部 に関わ る特性	言語的 要因	(1) 漢語の頻度	量的変数
		(2) 漢語の意味数	量的変数
		(3) 漢語の語構成パタン	ダミー変数
		(4) 漢語の前項共起成分の長さ	量的変数
		(5) 漢語「～をする」形の前項連体修飾率	量的変数
漢語サ 変動詞 に関わ る特性	言語的 要因	(6) 漢語サ変動詞のアスペクト性	ダミー変数
		(7) 漢語サ変動詞の自他性	ダミー変数
		(8) 漢語サ変動詞形の前項連体修飾率	量的変数
	非言語 的要因	(9) 漢語サ変動詞の非公式ジャンル出現性	量的変数
		(10) 漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性	量的変数

上記のうち、(1) 漢語の頻度、(2) 漢語の意味数、(4) 漢語の前項共起成分の長さ、(5) 「～をする」の前項連体修飾率、(8) 漢語サ変動詞形の前項連体修飾率、(9) 漢語サ変動詞の非公式ジャンル出現性、(10) 漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性はそれぞれ一つの説明変数しか持たないが、(3) 漢語部の語構成パタンは5種、(6) 漢語サ変動詞のアスペクト性は3種、(7) 漢語サ変動詞の自他性は3種の説明変数を持つ。これらを合わせると、全体で説明変数の数は18種となる。以下、それぞれについて詳しく述べる。

(1) 頻度については、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の93語の語幹部漢語の頻度である。ただし、粗頻度をそのまま使用すると、値の差によってモデルが歪められる可能性がある。このことから、ここでは、粗頻度を自然対数に変換して使う。対数 (logarithm) は、 $\log_x y$ の形で記載されるもので、底 (x) を何乗すれば真数 (y) になるかを示す。自然対数化により、大きな値が効率よく圧縮され、比較的近い範囲に値が収束することとなる (石川他, 2010)。データをこのように修正したうえで、回帰分析を行うと、より妥当なモデルが得られると考えられる。

(2) 意味数については、漢語部について、辞書の当該項目内で言及されている意味の総数を調査したデータを用いる。辞書によって意味の数は異なる場合が多いが、本研究では、一般に広く使用されている辞書の一例として、『大辞林』（第3版、三省堂）を参考資料とする。たとえば、「使用」の場合、語義区分は一つのみ（「使うこと。用いること。」）であるため、1つの意味項目があるとする。また、「紹介」の場合、同辞書は、「①知らない人どうしを引き合わせること、なかだちをすること（「家庭教師を一する」「アルバイトの一」「自己一）」と、「②未知の物事を広く知らせること（「日本文化の一）」という2つの語義区分があるため、意味数は2つとなる。さらに「展開」になると、「①（次々と物事を）繰り返し広げること。」、「②（順や筋を追って）発展すること。進展すること。また、発展させること。」、「③目前に広がりあらわれること。」、「④軍隊で、密集した隊形から、散開した隊形になること。」、「⑤【数】単項式と多項式の積あるいは多項式と多項式の積の形の式を、分配法則を使って単項式の和の形にすること。一つの関数を級数の形に表すこと。多面体・柱体・錐体などの表面を切り開いて一平面上に広がること。」という5つの語義区分があるため、意味項目を5つとする。

(3) 語構成パターンについては、漢語部を構成する2つの漢字間の意味的結合関係を5種類に区分したデータを使用する。区分は6章に基づくもので、並立関係（「選択」など）、修飾関係（「活用」など）、客体関係（「読書」など）、補充関係（「拡大」など）、実質関係（「否定」など）の5種類である。

(4) 前項共起成分の長さについては、93語の各々について、漢語部をキーにランダムに500例を抽出して前項成分の長さを平均した値である。前項成分の長さを調べる際に、漢語部との修飾・共起関係を基準にする。「を」「が」などの文構造要素である場合に、その長さを「0」にし、修飾成分である場合に、意味の表出性に基づき計算する単位の長さを決める。たとえば、「英語の勉強」である場合、「英語の」まで数えればよいが、一方、「泣きそうな努力」を例で言うと、「努力」の前の「そうな」までは意味的には不完全であるため、もう一語「泣きそうな」まで調査対象の長さを決める。なお、漢字の長さについては、それにあたる仮名の数とする。

(5) 「～をする」の前項連体修飾率については、各語の漢語部と「～をする」の前項1語が連体修飾語の場合の割合を使用する。「中納言」では、検索キーを「各漢語+をする」に、また、前項1語以内の共起条件を<活用形>の<大分類>が「連体形」にして用例を抽出する。その後、「～をする」の総頻度に占める割合を求める。

(6) アスペクト性については、金田一(1950)に基づく継続動詞と瞬間動詞の2分類を使用する。金田一(1950)は「～ている」が付くか付かないか、また、「～ている」がつく場合にはどのような意味になるかというアスペクトの観点から、日本語の動詞を状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞に分類している。

状態動詞とは、時間の観念を超越して本来的に状態を表す動詞で、「～ている」がつかない「ある」、「いる」、「できる」、「要する」、「値する」のようなものである。継続動詞はある時間内続いて行われるような動作・作用を表し、「ている」がつくと動作が進行中であることを意味するものである。たとえば、「読む」、「書く」、「笑う」、「歌う」などがこの類である。瞬間動詞は瞬間に終わってしまうような動作・作用を表し、「ている」がつくと、その動作・作用の結果の残存を意味するものである。たとえば、「結婚する」、「卒業する」、「死ぬ」、「消える」、「届く」、「決まる」などである。第四種の動詞はいつも「～ている」の形で用いられ、ある状態を帯びていることを表すものである。たとえば、「そびえる」、「優れる」、「富む」、「似る」などである。

このうち、漢語サ変動詞には、状態動詞と第四種の動詞の分類は該当しないため、継続動詞と瞬間動詞の2種類の可能性がある。継続動詞は動作・作用を表し、その動作の継続があるものとされ、瞬間動詞は動作・作用を表すが、その動作が一瞬にして終わるものであるとされている。

(7) 自他性については、7章の調査結果に基づき、自動詞、他動詞、自他両用動詞の3分類を用いる。ここでは先行研究をふまえ、「～を」格を持ち、かつ、対象に対する「働きかけ」が認められるものが他動詞、それ以外は自動詞とする。

(8) 動詞形連体修飾率については、「～する」の漢語サ変動詞が連体修飾語としての使用率と定義する。書籍などのデータに基づき、93語の各々の動詞形をキーワードに500例ずつ抽出した後、「～する」の連体形比率を求める。

(9) 非公式ジャンル出現性については、当該語がコーパス内の15種のジャンル中、非公式性の強い2ジャンル(ブログと知恵袋)における出現率データを使用する。ブログと知恵袋は、インターネット上の自由な発言の場であり、校閲のプロセスを経ていないため、言語としての公式性が低いと考えられる。

(10) メディアジャンル出現性については、当該語がコーパス内の15ジャンル中、メディア性の強い2ジャンル(雑誌と新聞)における出現率データを用いる。雑誌や新聞は、圧倒的に大多数の読者を対象として、正確かつ適切な表現となるよう、慎重な校閲を行っ

たテキストと言える。単に非公式ジャンルに対する公式ジャンルと考えれば、ほかに政府刊行の白書類なども候補となるが、ここでは、読者層が圧倒的幅広い雑誌と新聞に限り、前述の非公式ジャンルの対称ジャンルとした。

なお、重回帰分析において、説明変数をモデルに投入する場合、「全変数導入法」と「変数増減法」の2つの方法が存在する。前者は手元の説明変数をすべて使って回帰モデルを作りたい場合に、後者は多数の説明変数候補の中から最適な変数の数を決めたい場合に使用される手法である（石川・前田・山崎，2010，p. 116）。ここでは、両者をともに実行し、結果を解釈することで、候補としたすべての変数の位置づけを確認すると同時に、より最適なモデルを求める。以上の処理には Seagull-Stat 2010 版を使用する。

8.4 結果と考察

8.4.1 個々の漢語サ変動詞の語彙的排他性

漢語サ変動詞 93 語を語彙的排他性に基づいて並べ替えたところ、以下の結果が得られた。

表2 語彙的排他性順漢語サ変動詞リスト（漢語部のみ）

語	比率	語	比率	語	比率	語	比率	語	比率
反映	100.00	限定	99.88	形成	99.69	検討	98.91	選択	96.22
発揮	100.00	安定	99.87	支配	99.68	変化	98.88	対応	96.09
一致	100.00	導入	99.87	作成	99.68	指摘	98.86	注意	96.07
確立	100.00	考慮	99.86	否定	99.66	無視	98.86	決定	95.75
重視	100.00	適用	99.84	構成	99.66	保存	98.85	表現	95.54
増加	99.98	減少	99.84	意識	99.63	移動	98.80	用意	95.43
存在	99.98	維持	99.83	発売	99.62	紹介	98.58	判断	95.41
完成	99.96	成功	99.80	購入	99.52	期待	98.57	心配	95.21
集中	99.96	拡大	99.79	参加	99.45	指定	98.53	設定	94.98
成立	99.95	掲載	99.77	認識	99.36	区別	98.26	説明	94.83
開始	99.95	活用	99.77	発展	99.29	比較	98.24	報告	94.42
開催	99.94	注目	99.77	分類	99.28	想像	98.19	理解	94.30

実施	99.94	代表	99.76	提供	99.24	観察	97.83	評価	93.32
登場	99.93	使用	99.76	記載	99.23	開発	97.77	発見	91.38
強調	99.93	提出	99.74	解決	99.12	主張	97.52	勉強	83.73
意味	99.93	実行	99.73	発表	99.11	要求	97.42	確認	79.54
実現	99.91	解放	99.72	予想	99.07	販売	97.16	表示	77.61
利用	99.90	規定	99.70	展開	99.04	結婚	96.98		
設置	99.88	採用	99.70	発生	98.94	変更	96.78		

すでに述べたように、本研究が調査対象としたのは、様々な言語変種の中で共通して高頻度で汎用的に出現しているものである。にもかかわらず、上表が示しているように、これらの語の語彙的排他性には一定の違いが存在することが確認された。予想されたように、大部分の語の語彙的排他性は強く、中には100%に達した語もいくつか存在する。これらの語は「～をする」形で一般には使用されないことを示し、多くの漢語サ変動詞が典型性を持ち、同時に排他性を持つことを示している。一方で、注目すべきは、他と比べると、相対的に語彙的排他性が弱いものもまた含まれていることである。たとえば、「勉強する」、「確認する」、「表示する」の場合に、語彙的排他性が8割程度であり、言い換えれば、2割から3割程度「～をする」形を併用していることを意味している。これらの語については、漢語サ変動詞としての典型性はやや低く、扱う場合に留意する必要があるだろう。

以下、語彙的排他性の強弱に基づき、93語を排他性指標値が100%のもの、95%~100%のもの、90%~95%のもの、および90%未満のもの、の4分類に仮に分類し、レンジ別の割合を調べた。結果は以下のとおりである。

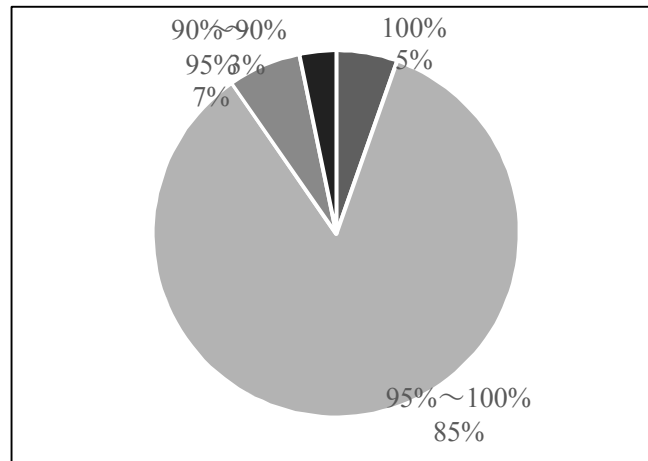


図1 排他性指標レンジごとの漢語サ変動詞数比率

ここでは、上図よりわかることとして2点を示す。

1点目として、93語のうち、ほとんどの語は排他性が90%を超えていることである。これは特定された高頻度・汎用的漢語サ変動詞の大部分が語彙的排他性という観点から見ても、高い典型性を持つことを裏付ける結果と言える。

2点目は、ごく一部であるが、語彙的排他性が弱いものも存在しているということである。該当するのは、指標値が90%未満となった「勉強」、「確認」、「表示」の3語である。これらの3語は各種の漢語サ変動詞の中で高頻度かつ汎用的な語ではあるが、当該の意味を表出しようとする場合、漢語サ変動詞形に加えて、「～をする」の表現形も一般的に併用されることが示されている。漢語サ変動詞の「典型用例」を狭義で捉えた場合、これらの3語をそこに含めるかどうかについては、今後再検討の余地がある。

いずれにせよ、こういった点は従来の日本語研究においても、日本語教育においてもほとんど注目されてこなかった。漢語サ変動詞の排他性指標に基づく本調査は、従来の研究・教育に新たな視点を示したものであると言える。

8.4.2 語彙的排他性の強いものと弱いものの特性

前節の分析結果をふまえ、語彙的排他性の高い漢語サ変動詞として、指標値が100%となった「反映」、「発揮」、「一致」、「確立」、「重視」の5語、及び語彙的排他性がより低いものの例として、指標値が90%未満となった「勉強」、「確認」、「表示」の3語に注目し、それぞれの用例を質的に検討する。まず、排他性が高い5語について用例を見てみよう。これらは現代日本語書き言葉均衡コーパスの15変種において、「～をする」表現形が一例も

確認されなかったものである。

- (1) 密着したものとなるに従い、道路交通をめぐる国民の意識、要求は、それぞれの立場を反映し、多様化してきている。 (白書 OW1X_00441)
- (2) ベレッタにとりつけられた新品のサイレンサーは、見事に効力を発揮した。 (書籍・文学 LB19_00257_6370)
- (3) 振込人名とイーバンク口座名が一致しない場合、対象となりませんのでご注意ください。 (知恵袋 OC14_02242_700)
- (4) 近習の地位を得たことは、生活の基盤が確立したという芽出たいことなのであるから、杯酒に沈湎して、自分は才能が発揮できないなど・・・ (書籍・文学 LBg9_00012_16230)
- (5) おれが仕事を重視するのが、どうしてもこの人には納得できないことだったのかもしれない、と。 (書籍・文学 PB39_00045_56460)

上記の用例を用い、「～をする」表現形が許容されない理由を田野村(1988)に基づいて考察する。前述のように、田野村(1988)によれば、「～をする」の成立条件としては、(A) 意図性、(B) アスペクト性、(C) 物理性、(D) 概念部非動作性、(E) 意味的勢力、の5点が必要であるとされている。ただし、(D) と (E) の2点は語に関係する条件ではなく、むしろ語が出現する文型・文脈という外的な条件であると考えられる。よって、ここでは、主として語と直接に関わる条件としての(A) (B) (C) の3点に注目して分析を行う。上記の用例を見てみると、(1)の「反映する」は、主語は「意識・要求」であって、まず(A)の意図性という条件は満たさない。また、「?反映し始める」や「?反映し終わる」のように、(B)アスペクト性も表しにくい。(2)の「発揮する」は無生物の「サイレンサー」が主語であるため、(A)の意図性を表していない。(3)の「一致する」と(4)の「確立する」は、単に事象の様態や状態を表しているため、(A)の意図性も(C)の物理性も備わっていない。(5)の「重視する」は、動作・行為というよりも、単に心理的活動を表しているため、(C)の物理性は認められない。これらの点をふまえると、以上の5語の排他性が100%となり、「～をする」形が許容されないことは説明がつく。

次に、語彙的排他性が相対的に低い3語について用例を見てみよう。以下はそれぞれの「～をする」形の一例を示している。

- (6) いっしょに、近づきつつある秋の中間試験のための勉強をしていたので、すっかりおそくなってしまったのである。 (書籍・文学 PB29_00130_9540)
- (7) また、一端選択受信を設定し、件名を読み込みに行って、メールの確認をする方法もあります。 (知恵袋 OC02_09229_1970)
- (8) ……また、ドアがきちんと閉まっていない場合は加熱しないでくださいという表示をしてください。 (書籍・社会科学 LBm3_00019_11270)

上記について、同じく田野村(1988)の枠組みに基づいて確認しておきたい。まず、(1)の「勉強」について言うと、主語は人であり、「中間試験のため」という行為には明確な(A)意図性が備わっており、かつ「勉強」という行為には「勉強していた」のように、明白な(B)アスペクト性の事柄を表しており、単純な心理的活動ではないため、(C)物理性も持つと考えられる。(2)の「確認」は何らかの目的を持ち、メールをチェックする行為を表していると想像がつくため、(A)の意図性も(C)の物理性も認められる。また、この動作・行為は一定の期間をわたってのことであるため、(B)のアスペクト性も備わっている。(3)の「表示」についても、前後の文脈からも分かるように、何らかの目的を持ち、かつ動作・行為は一定の時間幅を持つものであるため、(A)意図性、(B)アスペクト性、(C)物理性の3つの特性をすべて備わっていると考えられる。このように、これらの例は、いずれも先行研究で提唱された「～をする」形の成立条件にあてはまり、先行研究の議論を支持したものであると考えられる。

以上より、排他性が高いものと低いものがそれぞれ一定の共通特徴を持ち、その特徴の大部分が先行研究で示された枠組みで説明できることが確認された。

8.4.3 語彙的排他性説明モデルの特定

まず18種の説明変数を用いて、全変数導入法で重回帰分析を行ったところ、下記の分散分析表、回帰係数・標準偏回帰係数表および回帰式が得られた。

表3 分散分析表

要 因	自由度	偏差平方和	不偏分散	分散比 (F 値)	p 値
回 帰	17	359.20	21.13	1.69	0.06

残 差	75	935.40	12.47	
全 体	92	1,294.60		
決定係数				R ² =0.28
重相関係数				R=0.53
(自由度調整済)				R*=0.34
(自由度二重調整済)				R**=(虚数)
赤池の情報量基準				AIC=516.60
ベイズ情報量基準				BIC=291.73

表 4 回帰係数・標準偏回帰係数

変 数	回帰係数	標準偏回帰
漢語の頻度 (ln)	-1	0
漢語サ変動詞の非公式ジャンル出現性	0	0
漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性	0	0
漢語の意味数	-1	0
並立関係	-968	-130
修飾関係	-967	-118
客体関係	-968	-100
補充関係	-968	-46
実質関係	-965	-27
継続動詞	0	0
瞬間動詞	0	0
自動詞	-1282	-111
他動詞	-1285	-160
自他両用動詞	-1284	-136
漢語の前方修飾成分平均長	0	0
漢語サ変動詞の前方連体修飾率	0	0
漢語「～をする」形の前項連体修飾率	0	0
定数	2361	

回帰式：

< 語彙的排他性 > = 2361.00 - 1.50 < 漢語の頻度 (ln) > - 0.69 < 漢語の意味数 > - 968.20 < 並立関係 > - 967.50 < 修飾関係 > - 967.60 < 客体関係 > - 967.70 < 補充関係 > - 965.30 < 実質関係 > + 0.44 < 漢語の前方修飾成分平均長 > - 0.00 < 漢語「～をする」形の前項連体修飾率 > - 0.01 < 継続動詞 > - 0.35 < 瞬間動詞 > - 1282.00 < 自動詞 > - 1285.00 < 他動詞 > - 1284.00 < 自他両用動詞 > + 0.09 < 漢語サ変動詞の前項連体修飾率 > - 0.08 < 漢語サ変動詞の非公式ジャンル出現性 > + 0.36 < 漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性 >

上記のモデルは有意水準 $\alpha = .05$ で見た場合にわずかに有意レベルに達していない ($p = .06$)。したがって、当該の語彙的排他性説明モデルは妥当性に制約があるが、変数間の関係を見るという目的に基づき、それぞれの説明変数に付与された係数に注目し、得られた情報を整理してみよう。すなわち、重要度の順に言うと、当該漢語そのものの頻度が低く、多義性を持たず、並立関係・修飾関係・客体関係・補充関係・実質関係といった明確な構造を持たず、漢語の前方修飾成分が長く、「～をする」形の前項連体修飾率が低く、継続動詞ないしは瞬間動詞ではなく、自動詞・他動詞・自他両用動詞のいずれの性質も持たず、漢語サ変動詞の前項連体修飾率が高く、かつ非公式的ジャンルであまり使用されず、多くの読者に向けて校閲を重ねたメディアジャンルにおいて多く出現するような漢語サ変動詞は、「Xをする」形で使用されることが少なく、つまりは高い語彙的排他性を持つという一般的な傾向が示された。ただし、各変数の分散が影響を及ぼしている可能性があるため、標準偏回帰係数に注目すると、漢語サ変動詞の語彙的排他性は、漢語部の語構成パターン（並立・修飾・客体・補充・実質）や自他性（自動詞・他動詞・自他両用動詞）から強い影響を受けている可能性が示唆された。

つづいてより関連性の強い変数に限って総合の関係を検証するため、変数増減法により、変数の取捨・整理をした。結果として、以下の分散分析表、回帰係数・標準偏回帰係数表および回帰式が得られた。

表5 分散分析表

要因	自由度	偏差平方和	不偏分散	分散比 (F 値)	p 値
回帰	6	320.87	53.48	4.72	0.0003

残 差	86	973.71	11.32	
全 体	92	1,294.58		
決定係数				R ² =0.25
重相関係数				R=0.50
(自由度調整済)				R*=0.44
(自由度二重調整済)				R**=0.38
赤池の情報量基準				AIC=498.33
ベイズ情報量基準				BIC=245.61

表 6 回帰係数・標準偏回帰係数

変 数	回帰係数	標準偏回帰
漢語の頻度 (ln)	-1.42	-0.23
漢語サ変動詞形の非公式ジャンル出現性	-0.08	-0.24
漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性	0.36	0.33
漢語の意味数	-0.59	-0.19
自動詞	2.05	0.18
漢語サ変動詞の前方連体修飾率	0.08	0.18
定数	109.33	

回帰式：

<語彙的排他性> =109.30-1.42<漢語の頻度 (ln)>-0.60<漢語の意味数>+2.05<自動詞>+0.08<漢語サ変動詞の前項連体修飾率>-0.08<漢語サ変動詞の非公式ジャンル出現性>+0.36<漢語サ変動詞のメディアジャンル出現性>

上記のモデルは有意 ($p < .05$) であり、決定係数は .25、自由度二重調整済相関係数は .38 となったため、より妥当性の高いモデルになっていることが確認される。

このモデルに基づく、漢語の重要度が低く、多義性を持たず、漢語サ変動詞の自動詞性が強く、漢語サ変動詞の前項連体修飾率が高く、ブログや知恵袋のような非公式ジャンルではなく、雑誌や新聞のようなメディアジャンルで多く使用される場合に、当該語は「～をする」でほとんど使用されておらず、漢語サ変動詞の語彙的排他性が高まることがわか

る。つまり、すでに全変数導入法の場合にわかったように、ある漢語のフォーマリティーが高まるほど、「～をする」形が配慮され、語彙的排他性が高まるということがここで改めて確認された。すなわち、漢語部の頻度が低いということは、当該漢語が日本語の中で十分に浸透しておらず、一般化していないということを示す。意味数が少ないということが、語がそれほど普及していないことにつながると考えられる。また、自動詞性が強いということは、当該語が主観による行為行動を表す他動詞とは異なり、客観的で状況を表すものであるためだと考えられる。これもまた当該語のフォーマリティーが高くなることを意味する。さらには、前項連体修飾率が高いということは、当該語が述語として使われるのではなく、名詞を修飾するものとして使われるものとなるため、最後に、ブログや知恵袋などの非公式的ジャンルではなく、新聞や雑誌のような公的ジャンルで使われるということは、同様、当該語のフォーマリティーが高いことを示すこととなる。

なお、変数に付与された回帰係数に注目すると、自動詞性が最も強い影響を与えている要因であること、また、非言語的要因も語彙的排他性に一定の影響を与えているが、それに比べると、漢語の頻度や意味数、および漢語サ変動詞の自他性や前項連体修飾率といった言語的要因がより大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。ただし、各々の変数の分散が影響を及ぼしている可能性があるため、各変数の標準偏回帰係数に注目すると、ジャンル出現性という非言語環境がより大きく影響を及ぼしていることが明らかになった。

このように、変数導入法を実施することにより、漢語の語構成や漢語サ変動詞のアスペクト性というよりも、漢語の使用頻度、意味の多様性、および漢語サ変動詞の自動詞性、前項連体修飾率、および使用した非言語環境がその語彙的排他性に影響を及ぼしうる要因であることが確認された。

もちろん、この結論は 93 語に限ったものであり、漢語サ変動詞全体の説明モデルとしては決して十分なものとは言えない。しかしながら、漢語サ変動詞の語彙的排他性、あるいは「～をする」形併用性を多様な観点から検討したことにより、従来の漢語サ変動詞に関する研究では観察されなかった傾向性が見えてきた。この点は漢語サ変動詞の研究にも、今後の日本語教育にも新たな視点を加えたものとなりうる。

8.5 まとめ

本研究では、特定された漢語サ変動詞 93 語を対象に、「～をする」の使用状況をあわせて調査することにより、各語の語彙的排他性を確認した。以下、リサーチクエスチョン順

に結論をまとめる。

まず RQ1「個々の漢語サ変動詞の語彙的排他性」については、93 語のうち、90 語において語彙的排他性が 90%を上回り、高頻度汎用的漢語サ変動詞は、高頻度と高汎用性以外に、高い語彙的排他性を持つことが確認された。一方で、「勉強（する）」、「確認（する）」、「表示（する）」のように、相対的に語彙的排他性の弱い語も存在することに留意しなければならない。

次に RQ2「語彙的排他性の強い語と弱い語の特性」については、漢語サ変動詞の語彙的排他性の高い語と低い語をコーパスから抽出した用例に基づき、田野村（1988）で提唱された「～をする」形成立条件（意図性、アスペクト性、物理性、概念部非動作性、意味的勢力）を参照しながら、質的検討を行った。

最後に RQ3「語彙的排他性説明モデルの特定」では、重回帰分析により、漢語部の頻度が低く、意味数が少なく、漢語サ変動詞の自動詞性が強く、漢語サ変動詞の前項連体修飾率が高く、ブログや知恵袋のような非公式ジャンルではなく、雑誌や新聞のようなメディアジャンルで多く使用される場合に、漢語サ変動詞の語彙的排他性が高まることを確認できた。また、漢語部の頻度や漢語サ変動詞の使用環境などに比べると、漢語部の語構成パターンなどの影響は限定的であることも確認された。

以上のように、本章は漢語サ変動詞の語彙的排他性に注目し、従来の研究では十分に検討されてこなかった漢語サ変動詞の排他性について調査し、有益な知見を得ており、従来の漢語サ変動詞に関わる研究や日本語教育に新たな視点を加えたものとなりうる。ただし、得られた知見は、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に限ったもので、漢語サ変動詞全体の特性として捉えうるかどうかを今後の課題としたい。

第Ⅲ部 日本語教育における漢語サ変動詞

第9章 中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識

9.1 本章の目的と構成

第Ⅱ部では、漢語サ変動詞の諸特性を言語学的に解明することを目指し、漢語サ変動詞の特性を活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性など多様な観点から調査し、漢語サ変動詞そのものの特性や、漢語サ変動詞の運用上の特徴について、多くの事実を明らかにした。しかしながら、日本語教育の観点をふまえた場合、これらの言語学的事実をただ羅列的に提示するだけでは必ずしも有効とは言えない。学習者がどのような情報を必要としているのか、得られた情報をどのように整理して提示すべきか、また、得られた情報を根拠としてどのような学習を行わせるのが効果的かについても解明する必要がある。

よって、第Ⅲ部の起点となる本章では、学習者にとって望ましい漢語サ変動詞の指導システムを考案する前提として、中国人日本語学習者を対象に、(1) 漢語サ変動詞の基礎知識の理解度はどうか、(2) 漢語サ変動詞の応用知識の理解度はどうか、(3) 漢語サ変動詞の指導に対する意識はどうか、の3つの観点から、アンケート調査を実施する。これらの点を記述的に解明することで、学習者の漢語サ変動詞の理解度の現状がどの程度であり、今後、どの程度の指導をどのように行うべきかが明らかになると考えられる。コーパス調査で得られた漢語サ変動詞の言語事実を活用した学習者の意識調査は過去にはほとんど存在しておらず、本調査は重要な意味を持つ。

9.2 リサーチクエスチョン

本章のねらいは、中国人日本語学習者について、(1) 漢語サ変動詞の基礎知識の理解度、(2) 漢語サ変動詞の応用知識の理解度、(3) 漢語サ変動詞の指導に対する意識、の3点を解明することである。それぞれについて、3つから5つの小観点を導入し、以下のリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1 漢語サ変動詞の基礎知識の理解度はどうか。

- (1) 漢語サ変動詞の知識と運用能力に関する学習者の自己評価はどの程度か。
- (2) サ変化する漢語について、学習者はどの程度理解しているか。
- (3) 漢語サ変動詞の一般性について、学習者はどの程度理解しているか。

RQ2 漢語サ変動詞の応用知識の理解度はどうか。

- (1) 漢語サ変動詞の活用上の選好性について、学習者はどの程度理解しているか。
- (2) 漢語サ変動詞の内部構成性について、学習者はどの程度理解しているか。
- (3) 漢語サ変動詞の自他性について、学習者はどの程度理解しているか。
- (4) 漢語サ変動詞の語彙的排他性について、学習者はどの程度理解しているか。
- (5) 漢語サ変動詞の共起語について、学習者がどの程度理解しているか。

RQ3 漢語サ変動詞の指導に対する意識はどうか。

- (1) 学習者は漢語サ変動詞についてどのような指導を受けたか。
- (2) 受けた漢語サ変動詞の指導について学習者がどのような感想を持っているか。
- (3) 漢語サ変動詞について学習者がどのような指導を受けたいと思っているか。

以上のリサーチクエスチョンに基づき、学習者の実態と意識を把握する。それらをふまえ、どういった指導を行うべきかを考えていく。

9.3 研究手順

9.3.1 協力者

協力者は中国の国立大学の日本語学科で日本語を第2言語として学ぶ学生92名である。A大学に80名、B大学に50名の調査を実施したが、最終的に得られた回答数は、A大学が60名、B大学が32名、合計92名となった。両大学はともに中国の西北地区では有名な大学であり、当該地区の中において、学力の高い学生が集まっている。A大学は主として『総合日本語』と『基礎日本語総合教程』を教材として用い、B大学は主として『基礎日本語総合教程』を教材として用いている。全体として日本語の授業のやり方や進度などには大きな差はないため、以下では、両大学のデータを区別せずに扱う。

学年については、2年生は40名、3年生は32名、4年生は20名であった。1年生を調査範囲に入れなかったのは、中国の日本語教育の現状を考えると、事実上、大学入学後に日本語の学習を開始するのが一般的であるため、1年生では、漢語サ変動詞についての基礎知識がない場合も多いと考えたためである。

習熟度については、日本語能力試験の合格級を基準にすると、4級(L4)合格者が2名、2級(L2)合格者が1名、1級(L1)合格者が11名となり、何らかのレベルの日本語能力

試験に合格した学習者は調査対象学習者全体の約 15%となる。なお、これらの大学では、卒業前に何らかの日本語能力試験を受けることが事実上義務付けられているため、仮に調査時点において、日本語能力試験の合格級を持っていない学生でも、比較的高い日本語力を持っていると考えられる。

また、調査対象者の 92 名のうち、日本に留学した経験がある人は 5 名、そのうち、2 名が 3 ヶ月、3 名が 1 年であり、全体の 5%程度である。

日本語を勉強する方法については、主として教科書や辞書を使ったり、日本人の先生や友達とコミュニケーションしたりすることで勉強している。

調査の時期は 2014 年 11 月であった。アンケート調査は両大学における調査協力者（日本語教師）が担当する授業の最初の 30 分間を使って行った。アンケート調査の回答内容は、当該授業の成績に影響しないことを明示した。

9.3.2 アンケートの概要

アンケートの詳細は巻末を参照されたい。ここでは、その趣旨と設計理念について簡潔に紹介する。

設計として、アンケートは 3 部からなっている。1 部は漢語サ変動詞に関わる基礎知識の理解度を問うものである。漢語サ変動詞の理解度に対する自己評価を調査し、その後、どういった漢語がサ変化できるか、またどういった漢語サ変動詞が一般的なものであるかについて学習者の理解度を調査する。

まず、「漢語サ変動詞理解度の自己評価」においては、漢語サ変動詞の知識と運用能力のそれぞれについて、学習者に自己評価させる。以下で示したように、「全くない」、「あまりない」、「どちらとも言えない」、「少しはある」、「十分にある」の 5 項目を設け、当てはまるものを選んでもらう。

[1] 漢語サ変動詞理解度の自己評価

日本語には、「努力する」、「勉強する」など、漢語に「する」を付けた漢語サ変動詞というものがあります。こうした漢語サ変動詞について、あなたは自分で自分の能力をどのように判断していますか？

- A. 漢語サ変動詞の知識については ()
B. 漢語サ変動詞の運用能力については ()

全くない……1, あまりない……2, どちらとも言えない……3,
少しはある……4, 十分にある……5

その後、漢語サ変動詞そのものについて、学習者の基礎理解度を問う。まず、「サ変化できる漢語の理解度」では、どういった漢語が「する」をとってサ変化できるかを問う。ここでは、漢語サ変動詞（例：「意味する」、「調査する」）と、漢語サ変動詞として認めにくい漢語に「する」を付けた語（例：「*従来する」、「*自由する」）をあわせて20語を提示して、学習者に漢語サ変動詞かどうかの判断をさせる。なお、学習者が知らないため判断できないという状況を回避するため、調査に用いた漢語はすべて中国語に存在するものに限定する。以下は内容の一部である。

[2] サ変化できる漢語の理解度

以下に挙げた語の中で、日本語として存在すると思うものには○、存在しないと思うものには×を付けてください。

意味する[]	機能する[]	効果する[]	特徴する[]
調査する[]	理解する[]	関係する[]	番組する[]
表記する[]	参考する[]	対照する[]	重複する[]

次に、「漢語サ変動詞の一般性の理解度」調査を行う。漢語サ変動詞のうち、一般的に多く使われている漢語サ変動詞と使用頻度が非常に低い漢語サ変動詞をまぜて提示し、学習

者がどのような漢語サ変動詞を一般的だと思っているか調査する。なお、本調査では、すでに4章で特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞93語のリストに含まれる語を「一般的」漢語サ変動詞と見なす。また、同調査において、15変種の日本語データにおいて、いずれの変種においても上位50語に含まれなかった漢語サ変動詞を一般的でない漢語サ変動詞と見なす。以下では一部を示している。

[3] 漢語サ変動詞の一般性の理解度

漢語サ変動詞には様々なものがあります。その中では、多く使われるものもあれば、ほとんど使わないものもあります。下記の漢語サ変動詞20語について、漢語サ変動詞として一般的で多く使われると思うものには○、それほど多く使われていないと思うものには△を付けてください。

使用する []	実行する []	提示する []	包含する []
破壊する []	解析する []	紹介する []	移動する []
指定する []	連続する []	規定する []	誤解する []

以上が、漢語サ変動詞の基礎知識の理解度調査である。

つづいて、2部では、漢語サ変動詞に関わるより応用的な知識の有無を問うこととする。この点については、本研究において、コーパス調査によって明らかになった活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性、共起語の5つに注目する。

まず、「活用上の選好性の理解度」を調べる。重要漢語サ変動詞から15語を選び、最も多く使用されると思う活用形にチェックを入れてもらう形となる。「連用形 - 一般」、
「未然形 - サ」と「連体形 - 一般」の3種類の活用分類で93語の9割以上を占めているため、この3つの活用形を調査対象に決め、それぞれを選好する重要漢語サ変動詞を5語ずつ示して学習者に選択してもらう。内容の一部は以下のようなになる。

[4] 活用上の選好性の理解度

下記の 15 語について、それぞれの形で最も多く使われていると思いますか。対応する枠にチェックを入れてください。

- ・ 連用形 - 一般：「し (て)」のような形のものです，例：努力して成功する
- ・ 未然形 - サ変：「さ (れる)」「さ (せる)」などにつながるもの，例：努力させる
- ・ 連体形 - 一般：「～する (こと)」のように，名詞につながるもの，例：努力する人

A. 利用する	<input type="checkbox"/>	連用形	<input type="checkbox"/>	未然形	<input type="checkbox"/>	連体形
B. 変化する	<input type="checkbox"/>	連用形	<input type="checkbox"/>	未然形	<input type="checkbox"/>	連体形
C. 理解する	<input type="checkbox"/>	連用形	<input type="checkbox"/>	未然形	<input type="checkbox"/>	連体形

次に「内部構成性の理解度」を調査する。6章では、漢語サ変動詞の内部構成性を品詞結合（例えば、「名詞＋名詞」，「動詞＋動詞」の8パターン）と意味結合（たとえば、「並列関係」，「修飾関係」などの5パターン）の2つの観点から調査したため、品詞結合と意味結合それぞれについて質問を設けている。各パターンがどの程度漢語サ変動詞になりやすいかについて、「まったくなりにくい」，「どちらかと言えばなりにくい」，「どちらとも言えない」，「どちらかと言えばなりやすい」，「非常になりやすい」の5つで回答してもらう。

学習者が語構成の知識を持っていない可能性があるため、内部構成の分類や対応する語についてまえもって説明をしている。品詞結合の観点からは「名詞＋名詞」，「名詞＋動詞」，「動詞＋名詞」，「動詞＋動詞」，「動詞＋形容詞」，「形容詞＋動詞」，「副詞＋動詞」，「接辞＋動詞」の6種，意味結合の観点からは「並列関係」，「修飾関係」，「客体関係」，「補充関係」，「実質関係」の5種を使っている。以下では、それぞれについて一部を示す。

[5] 内部構成性の理解度

漢語サ変動詞の漢語部は、それを構成する要素の品詞（動詞か名詞か形容詞など）によって、以下のように分類することが可能です。タイプにより、漢語サ変動詞になりやすいものとなりにくいものがあります。以下の分類について、それぞれどの程度漢語サ変動詞になりやすいかについて教えてください。

まったくなりにくい……1, どちらかと言えばなりにくい……2, どちらとも言えない……3, どちらかと言えばなりやすい……4, 非常になりやすい……5

- A. 【名詞＋名詞】（ ）
（例：意味（³意＋⁴味），意識（³意＋⁴識））
- B. 【名詞＋動詞】（ ）
（例：理解（³理＋⁴解く），形成（³形＋⁴成す））
- C. 【動詞＋名詞】（ ）
（例：注目（³注ぐ＋⁴目），分類（³分ける＋⁴類））

漢語サ変動詞の漢語部は、それを構成する要素間には様々な結合関係が存在します。ただし、タイプにより、漢語サ変動詞になりやすいものとなりにくいものがあります。以下の分類につて、それぞれどの程度漢語サ変動詞になりやすいか教えてください。

まったくなりにくい……1, どちらかと言えばなりにくい……2, どちらとも言えない……3, どちらかと言えばなりやすい……4, 非常になりやすい……5

- A. 【並列関係】（ ）
（同じような意味を持つものの組み合わせ、たとえば、使用（³使う＋⁴用いる），判断（³判つ＋⁴断つ））
- B. 【修飾関係】（ ）
（前の文字が後ろの文字を修飾するもの、たとえば、重視（³重く＋⁴視る），活用（³活かす＋⁴用いる））

次に「自他性の理解度」を調査する。自他について、最も典型的な区別標識は助詞であ

る。このため、この部分では、「が」をとるか「を」をとるかという質問を設けている。具体的には、一般的漢語サ変動詞の中から自動詞、自他両用動詞、他自両用動詞、他動詞をあわせて15語取り出して、それぞれについて、「が」と「を」のいずれがあてはまるかを学習者に判断させる。質問の一部を以下に示す。

〔6〕 自他性の理解度

漢語サ変動詞は、その前に「が」がつきやすいものもあれば、「を」がつきやすいものもあります。以下の各語について、どちらが自然であるか教えてください。

絶対「が」のほうが自然……1, あえていうと「が」のほうがより自然……2,
「が」と「を」がともに自然……3, あえていうと「を」のほうがより自然……4,
絶対「を」のほうが自然……5

- (1) 製品が完成する⇔製品を完成する ()
- (2) 人物が登場する⇔人物を登場する ()
- (3) 品質が安定する⇔品質を安定する ()
- (4) 勝負が決定する⇔勝負を決定する ()

さらに、「語彙的排他性の理解度」を調査する。8章では、一般的漢語サ変動詞を対象に、「～する」と「～をする」のいずれの形で多く使用しているかという語彙的排他性の観点から調査を行った。ここでは、その調査結果をふまえ、15語を提示して、それぞれが「～する」の形で多く使用されるか、「～をする」の形で多く使用されるかを問う。ここでは、「～する」と「～をする」の使用に占める「～する」の割合が100%のものを5語、「～する」の割合が90%以上100%未満のものを5語、「～する」の割合が80%を下回った、93語の中で最も語彙的排他性が低い語を5語が調査対象にされている。回答の選択肢は、「絶対『～をする』のほうが自然」、「あえていうと『～をする』のほうがより自然」、「『～する』と『～をする』がともに自然」、「あえていうと『～する』のほうがより自然」、「絶対『～する』のほうが自然」の5つとなる。以下は内容の一部である。

〔7〕 語彙的排他性の理解度

漢語は、その後に「～する」がつきやすいものもあれば、「～をする」がつきやすいものもあります。以下の各語について、どちらが自然であるか教えてください。

絶対「～をする」のほうが自然……1, あえていうと「～をする」のほうがより
自然……2, 「～する」と「～をする」がともに自然……3, あえていう
と「～する」のほうがより自然……4, 絶対「～する」のほうが自然……5

- (1) 一致 () (5) 観察 () (9) 意味 ()
(2) 確立 () (6) 予想 () (10) 評価 ()

最後に、「共起語の理解度」を調査する。この部分では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を具体的にどのような語とともに使うのが自然であるか、学習者がどの程度理解しているかを調べる。なお、ここで取り扱う漢語サ変動詞は、すべて漢語部は中国語にも存在しており、単語そのものを知らないという可能性はない。一部の内容を示すと、以下のようになる。

〔8〕 共起語の理解度

下記の語について、それぞれ2つの主語もしくは対象語や目的語を書いてください。

- 例. (1) 減少する：旅行客数が減少した。(主語)
(2) 提供する：商品を提供する。(目的語)

(1) 存在する

- (A) _____ が存在する。
(B) _____ が存在する。

(2) 利用する

- (A) _____ を利用する。
(B) _____ を利用する。

以上が、漢語サ変動詞の応用知識についての調査内容であった。

3部では、学習者はこれまで実際にどのような指導を受けてきたか、また、これからの指導についてどのような希望を持っているか、その意識を問うものとする。日本語でうまく書けないために回答しないことを防ぐ目的で、中国語で書いてもかまわないとした。以下、質問を示すことをもって本節を終える。

[9] 受けた指導 / [10] 受けた指導への感想

これまでに漢語サ変動詞の指導を受けたことがあれば、(1) どのような指導を受けたか、(2) その指導についてどう思ったか、下記に書いてください(中国語でもかまいません)。

[11] 指導への希望

あなたが授業で漢語サ変動詞を習うとすると、どのように指導してほしいですか。希望する指導法について、2~3文程度で具体的に書いてください(中国語でもかまいません)。

9.3.3 研究手法

ここでは、リサーチクエスチョン順に調査結果の分析方法を詳細に説明する。

RQ1「漢語サ変動詞の基礎知識の理解度」においては、漢語サ変動詞の基礎知識を問うた結果に基づき分析を行う。

まず、「漢語サ変動詞理解度の自己評価」においては、漢語サ変動詞の知識と運用能力のそれぞれについて学習者が自分の理解度をどの程度評価するかの調査結果に対して、「全くない」の場合を1点、「あまりない」の場合を2点、「どちらとも言えない」の場合を3点、「少しはある」の場合を4点、「十分にある」の場合を5点として、全体と学年別の平均値をとって分析する。知識と運用能力の2項目では、学習者の理解度差があるかどうかを検証するには t 検定を用いる。また、知識と運用能力の差・学年の差の2つの要素をあわせて分析する際には、二元配置分散分析(詳細は3章)を実行する。

次に、「サ変化できる漢語の理解度」については、学習者の回答の正答率を求めて分析する。その際、学習者全体と学年別の調査をそれぞれ行い、学年差があるかどうかについて、一元配置分散分析（詳細は3章）で検定を行う。その後、個別に語の正答率を検討する。

最後に、「漢語サ変動詞の一般性の理解度」においては、学習者全体と、学年別に正答率を求めて分析を行う。その後、重要漢語サ変動詞に限って、学習者の正答率を求めて分析する。

続いて RQ2「漢語サ変動詞の応用知識の理解度」においては、9章までで得られた重要漢語サ変動詞の知見に基づく内容で、学習者が漢語サ変動詞の応用知識についてどの程度理解しているか分析する。

まず、「活用上の選好性の理解度」においては、活用形別正答率を求めて、学習者全体を見る場合と学年別に見る場合それぞれについて考察を行う。

また、「内部構成性の理解度」においては、品詞結合の6種と意味結合の5種の結合パターンについて、学習者の回答を、「まったくなにくい」と思う場合に1点、「どちらかと言えばなにくい」と思う場合に2点、「どちらとも言えない」と思う場合に3点、「どちらかと言えばなりやすい」と思う場合に4点、「非常になりやすい」と思う場合に5点として、点数の平均に基づき、学習者理解を6章の結果と照らし合わせて分析する。

さらに「自他性の理解度」については、各語のとり助詞の選択という形で、学習者の自他性に関する理解度を確認する。学習者の回答をコーパスで調べた結果と照合し、正答率を求めて分析する。その後、どういった自他分類において、学習者の理解度がとくに低いかを確認するため、分類ごとの正答率を見る。

「語彙的排他性の理解度」についても同様に、学習者の回答とコーパス調査で得られた結果と照らし合わせて比較して、その後、学年別の正答率を調べる。

なお、内部構成性、自他性、語彙的排他性の理解度調査では、様々な言語形式について、その出現確率に関する学習者の意識を問うことになる。このうち、内部構成性については、尋ねる内容が抽象的であり、学習者が正確な判断を行えないと考え、実際のデータと照合して、○か×かの一致判断でデータを処理するのではなく、学習者の選んだ選択肢をそれぞれ点数化して平均化することで、全体の傾向を見ることとした。一方、自他性と語彙的排他性については、具体的な語が示されており、また、コーパスから明確な頻度情報が得られているため、内部構成性の調査手法を採用せず、コーパスから得られた頻度情報と合致しているかどうかの判断を行った。

最後に、「共起語の理解度」については、まず、それぞれの漢語サ変動詞の主語、もしくは目的語として、学習者が書いた語のリストを作成する。次に、母語話者による自然な漢語サ変動詞共起語の傾向を探り、学習者の回答と比較する。母語話者による漢語サ変動詞の主語や目的語を確認するには、東京工業大学の仁科研究室で開発された日本語共起語検索システム「なつめ」を利用する。主語の場合は「が」、目的語の場合は「を」に統制して、共起語の検索とリスト化を行う。その結果から上位5語に注目して比較する。比較にあたっては、母語話者による共起語使用傾向との類似度を測る場合、重複している語の数を数える方法が想定されるが、今回の調査結果では、重なり度合いがきわめて低かったため、質的な観察にとどめる。なお、Wikipedia と BCCWJ に基づいた「なつめ」は、日本語学習者のための様々な学習支援・検索システムを無料で公開している「ひのきプロジェクト」の一部であり、ある語について、複数の機能語それぞれと多く共起する語を拾い出す検索システムである。「なつめ」で検索した結果には、「もの」、「こと」、「これ」などの代名詞や引用、人名、数詞なども多く含まれているが、本調査ではそうした語を除いた。以下では、「存在する」と「利用する」を例に、「が」や「を」など、それぞれの機能語と共起する語の検索結果を示している。

■ 存在する ▼			■ 利用する ▼		
が	を	に	が	を	に
もの	こと	【引用】	客	雛型	ため
【引用】	これ	よう	【人名】	これ	主
種類	【引用】	他	人	こと	積極的
施設	もの	間	住民	【引用】	よう
【数詞】	【人名】	ため	【数詞】人	それ	際
集落	部分	中	人々	機能	逆
バリエーション	称号	各地	【引用】	性質	有効
【人名】	【数詞】	日本	利用者	情報	巧み
バージョン	世界	過去	乗客	技術	最大限
制度	それ	時代	生徒	サービス	【数詞】年
モデル	存在	将棋	多く	バス	代わり
概念	結果	中心	市民	制度	同様
列車	社会	世界	企業	インターネット	為
組織	工程	以前	会社	システム	自由

図1 「なつめ」の検索結果（一部）

上記のように、「存在する」のような自動詞については、こういった主語と多く共起しているかを見るため、機能語「が」に注目する。一方で、「利用する」のように、何らかの目

目的語と共起する他動詞については、動作・行為の主語というよりも、こういった目的語・対象語と共起するかに焦点を置くため、主語を指し示す「が」ではなく、目的語を指し示す機能語「を」に注目する。なお、このシステムの検索結果では、自動的に共起する度合いの高い順に共起語を検出しているため、「もの」、「これ」などの代名詞語や数量詞を除き、上位の5語を抽出した。

続いてRQ3「漢語サ変動詞の指導に対する意識」においては、「漢語サ変動詞について受けた指導」、「受けた指導に対する感想」、及び「希望する指導」について分析する。学習者に日本語で書くよう指示したため、全員が日本語で回答している。ただ、文法上の誤りや、意味がはっきりとしないものもあるが、それについては、筆者が本人に確認のうえ、修正をかけてから分析に用いる。修正済みの回答文章について、形態素解析ツール KH-coder で解析したあと、質的観察を行う。

9.4 結果と考察

9.4.1 (1) 漢語サ変動詞理解度の自己評価

漢語サ変動詞の能力は、漢語サ変動詞の知識と運用能力の両面が合わさったもので、漢語サ変動詞に関する正確な知識を持ち、かつ、それを実際の言語運用の中で使用できてはじめて、漢語サ変動詞を理解できていると言える。そこで、本節では、漢語サ変動詞の能力の二面である知識と運用能力に分けて、学習者の意識のありようを見ていく。学習者の自己評価の平均値を求めたところ、以下の結果が得られた。

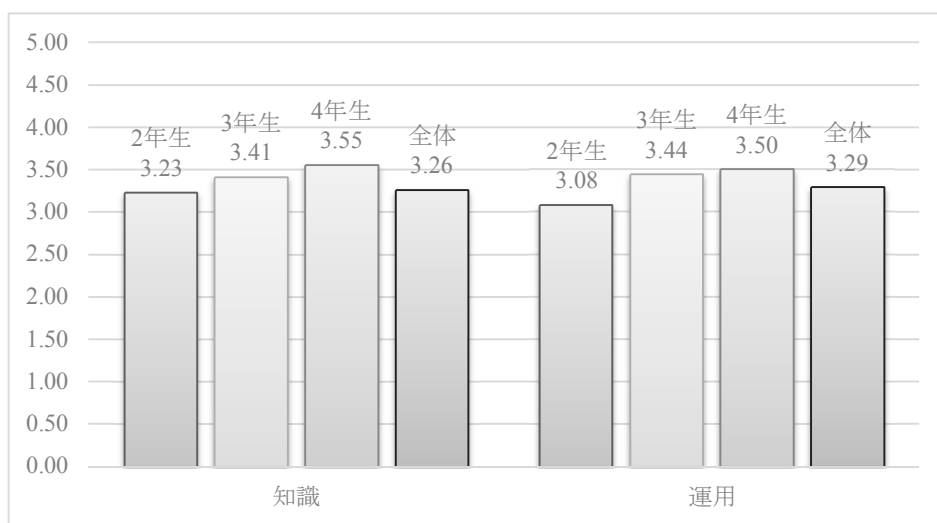


図2 漢語サ変動詞知識と運用能力の自己評価

まず、3 学年をあわせた全体の平均値について注目しよう。上図から分かるように、知識の場合も、運用能力の場合も、全体の自己評価値は3点台にとどまっている。このことは、学習者は自らの理解度について「どちらとも言えない」という印象を持っており、漢語サ変動詞の知識ならびに運用能力のいずれに対してもはっきりと判断できない状況にあることを示している。加えて注目すべきは、知識と運用能力の自己評価値に統計的な差がない ($t=0.42$, $p=.67$) ということである。このことは、漢語サ変動詞の知識面と運用面の違いも、学習者が十分に意識していないことを示している。

次に、学年進行に伴う自己評価度の変化を確認してみよう。上図からわかるように、学年進行につれて、漢語サ変動詞の知識・運用能力に関する自己評価値はともに徐々に上昇しているように見える。しかしながら、漢語サ変動詞の能力タイプ（知識・運用）と学年差（2年・3年・4年）を2要因とする分散分析を実行した結果、学年要因の主効果は有意ではなかった ($F=1.04$, $p=.36$)。すなわち、学年が変化しても、学習者の自己認識に基本的に変化がない。また、漢語サ変動詞能力タイプの主効果も有意ではなかった ($F=0.88$, $p=.35$)。すなわち、知識の場合も、運用能力の場合も、漢語サ変動詞の理解に対して、はっきりした自己認識の差が生じていないと考えられる。

すでに述べたように、本アンケートの対象とした学習者は中国人日本語学習者の中で比較的上位層に含まれるわけであるが、そうした学習者であっても、漢語サ変動詞の知識や運用能力に対して、自信を持っていない者が数多くいるという現状が明らかとなった。とくに学年要因が有意でなかったことは、学習者は従来型の指導を継続して受けたとしても、漢語サ変動詞に対する理解度が必ずしも上昇するとは限らないのだろう。

9.4.1 (2) サ変化できる漢語についての理解度

前節で示したように、漢語サ変動詞の知識・運用能力に関する学習者の自己評価値は「どちらとも言えない」という水準にあった。しかしながら、自己評価値と実際の能力が一致するかどうかは必ずしも明確ではない。そこで、本節では、学習者の実際の漢語サ変動詞能力を見るために、漢語サ変動詞と漢語サ変動詞でないものを混ぜて学習者の判断を求めた。正答率を求めた結果、以下のようになった。

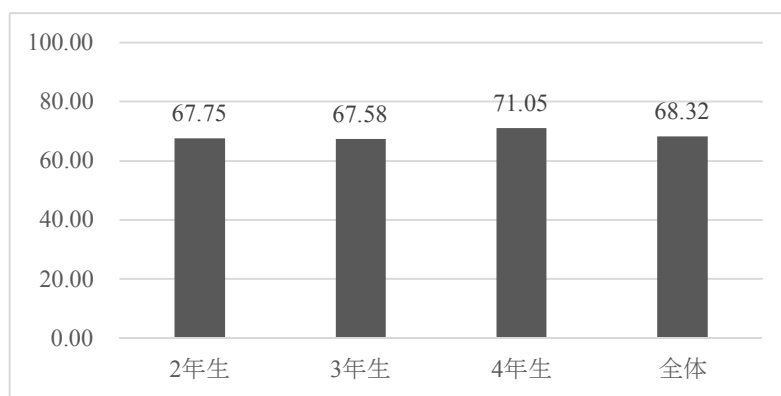


図3 サ変化できる漢語の理解度

はじめに、3 学年全体の平均値に注目しよう。上図に明らかなように、サ変化できる漢語に対して、学習者の理解度の正答率は 68.32%であった。「どちらとも言えない」という消極的な自己評価のわりには、一定の正答率が出ているとも言えるが、今回調査で使った漢語サ変動詞は、いずれも基本的なものであったことをふまえれば、3 割近い誤答があったことは注目に値する。

次に、学年進行に伴う理解度の変化を見るため、学年別の正答率を見てみよう。上図に明らかなように、3 年生から 4 年生にかけて、正答率が一定程度上昇しているように見える。しかしながら、学年を要因とする一元配置分散分析で検証したところ、学年要因の主効果は有意ではなかった ($F=0.58, p=.57$)。すなわち、学年があがっていても、漢語サ変動詞の成立性に関する理解度に有意な上昇は見られない。このことから、現在漢語サ変動詞指導の問題が浮かび上がってきたとも考えられるだろう。

なお、以上は 20 語全体の正答率の平均値に基づいた議論であり、いわゆる誤答のパターンには、正しいものを間違っていると答えた誤りと、正しくないものを正しいと答えた誤りとがある。実際のコミュニケーションの現場では、存在する漢語サ変動詞を存在しないものと考えていたとしても、誤りを犯すことはなく、具体的な問題が生じる可能性は低いと想定される。しかしながら、存在しないものを存在すると誤解していれば、そうした誤用を実際の運用の中で行い、コミュニケーションの破綻が想定される。そこで、学習者の理解状況をより細かく見るために、存在する漢語サ変動詞に関する正答率と存在しない漢語サ変動詞に関する正答率を分けて見た。両方それぞれの正答率を調べたところ、以下のような結果となった。

表1 各語の正答率

存在する漢語サ変動詞	正答率	存在しない漢語サ変動詞	正答率
調査する	97.83	*従来する	89.13
理解する	94.57	*特徴する	85.87
表記する	91.30	*番組する	84.78
対照する	83.70	*効果する	79.35
関連する	82.61	*自由する	78.26
議論する	77.17	*順位する	71.74
重複する	69.57	*娯楽する	67.39
関係する	57.61	*参考する	5.43
相関する	53.26	平均	70.24
特定する	39.13		
意味する	34.78		
機能する	20.65		
平均	66.85		

まず、存在する語と存在しない語の正答率の平均値に注目すると、66.85%と70.24%となった。若干存在しない語の正答率が高いと思われるが、 t 検定の結果、差は有意ではなかった($t=-0.28$, $p=.78$)。すなわち、学習者は、正しい語を正しいと言い当てる際にも、正しくない語を正しくないと言い当てる際にも、ほぼ同じ確率で誤りを犯していることがわかる。このことは、漢語サ変動詞の成立性の理解は、存在する語と存在しない語で差がなく、いずれ同じぐらい問題を抱えていることを示す。コミュニケーションの観点から言えば、存在しない漢語サ変動詞についても、3割程度の誤解が存在していることは留意すべきであろう。

次に、個別の語の正答率に注目しよう。ここでは、正答率が6割以上のものと6割未満のものに分けて見てみよう。まず、存在する漢語サ変動詞について見てみると、正答率が6割以上の語は、「調査」、「理解」、「表記」、「対照」、「関連」、「議論」、「重複」であった。このうち、「調査」、「理解」、「表記」、「対照」はすべて中国語においても動詞であり、母語における動詞を日本語においても同じように動詞として用いる場合、学習者は高い理解度を示すことが明らかになった。一方、正答率が低い語は、「関係」、「相関」、「特定」、「意味」、

「機能」であった。これらの語について、いずれも中国語ではつねに動詞として使われない。すなわち、学習者は、母語の中国語の中で動詞として使われないものは、日本語においても動詞として使われないという誤った意識を持っていたと考えられる。

次に、漢語サ変動詞でないものについても、正答率が6割以上のものと6割未満のものに分けて見てみよう。正答率が6割以上のものとして、「従来」、「特徴」、「番組」、「効果」、「自由」、「順位」、「娯楽」の7語があり、いずれも中国語において動詞として使われない。一方、正答率が低いものとして、「参考」は中国語においてごく一般的な動詞である。したがって、学習者は母語の知識をそのまま使って、日本語においてもこの語が動詞であろうと判断したと思われる。このように、中国人日本語学習者にとって、ある語が漢語サ変動詞であるかどうかを理解する際には、母語が大きな影響を及ぼしていることが確認された。

9.4.1 (3) 漢語サ変動詞の一般性の理解度

前節の調査から、中国人日本語学習者は、漢語サ変動詞の成立性について、およそ7割程度理解できているように見えるが、その理解度は母語の転移によって大きく影響されている可能性が示唆された。実際のコミュニケーションでは、漢語サ変動詞を正しく理解し、正しく運用するうえでは、「存在する」と「存在しない」のような基礎知識をわかっているだけでなく、その語がどの程度一般的に使用されるかという知識に対しても十分理解していることが求められる。よって、本節では、学習者の漢語サ変動詞の一般性に対する理解度を確認する。コーパスに出現する頻度と照らし合わせた正答率を求めたところ、以下の結果が得られた。

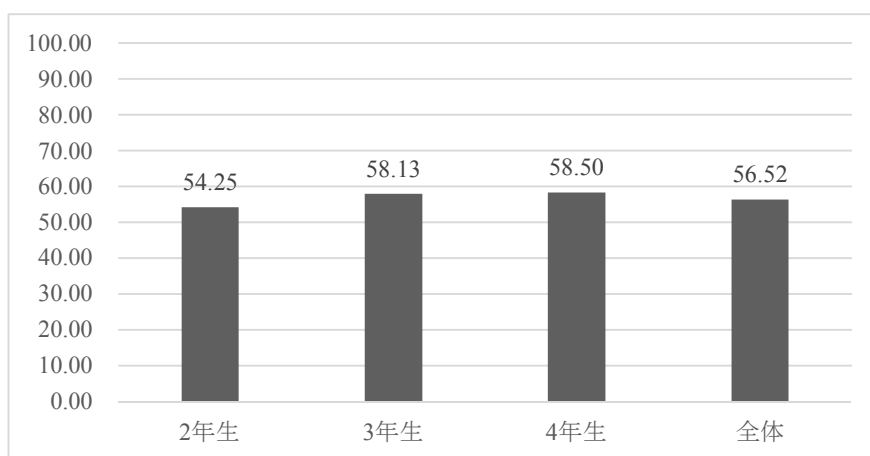


図4 漢語サ変動詞の一般性の理解度

まず、全体の正答率を見てみよう。上図に示されているように、一般的なものかどうかに関して、正答率が 56.52%となった。この結果を、ある語が漢語サ変動詞であるかどうかに関する前節の正答率（約 7 割）と比較すると、1 割以上正答率が低くなり、学習者の漢語サ変動詞の一般性の理解度が制約的であることが如実に示された。

次に、学年進行に伴う理解度の変化を確認するために、学年別正答率を見てみよう。上図からわかるように、学年進行につれて、漢語サ変動詞の一般性に対する理解度が一定程度上昇しているように見える。しかしながら、学年を要因とする一元配置分散分析で検証したところ、学年要因の主効果は有意ではなかった ($F=1.37, p=.26$)。つまり、一般的漢語サ変動詞か否かという知識は、学習量、あるいは習熟度と関係がないことが示される。このことは、従来の漢語サ変動詞指導あるいは学習では、漢語サ変動詞の理解が深まらないことを示唆している。

一般に、ある語が一般的に使われるものかどうかについては、大量の L2 インプットを受け、その中から、直感的に意識が育っていくものであると考えられる。この点をふまれば、学年が上昇していけば、インプット量も増えるため、漢語サ変動詞の一般性についての理解も自然に上昇すると推測される。しかしながら、今回の調査結果はそうではないことを示唆している。この点については、インプットの絶対量が少なかったか、あるいは、インプットはあったものの、学習者が漢語サ変動詞に意識を振り向けていなかったため、インテイク（取り込み）が十分になされていなかったという可能性が考えられる。なお、今回の調査では、一般的なものを一般的でないと判断した誤答と、一般的でないものを一般的であると判断した誤答があった。コミュニケーションの観点から考えると、一般的でないものを一般的であると判断する誤りのほうが問題である。これは、先ほど述べたように、一般的でない語を一般的であると誤解していれば、不自然な語を多く使用してしまう可能性があるからである。そこで、ここでは、一般的漢語サ変動詞とそうでないものに分けて、それぞれの正答率を示す。

表 2 漢語サ変動詞一般性における正答率

一般的漢語 サ変動詞	正答率	一般的でない 漢語サ変動詞	正答率

紹介する	96.74	破壊する	59.78
注意する	91.30	連続する	55.43
実行する	89.13	誤解する	54.35
検討する	88.04	解析する	52.17
注目する	75.00	選定する	50.00
指定する	70.65	実験する	46.74
使用する	68.48	提示する	34.78
移動する	60.87	告白する	26.09
考慮する	47.83	包含する	9.78
規定する	44.57	判定する	8.70
平均	73.26	平均	39.78

まず、一般的漢語サ変動詞とそうでないものの正答率を比較してみると、一般的でないものより、一般的漢語サ変動詞の正答率が高い ($t=4.02$, $p<.001$) ことがわかった。言い換えれば、一般的でないものを一般的であると捉える誤りのほうが多かったことになる。すでに述べたように、コミュニケーション上、こうした誤りの影響が大きいと考えられる。

個々の語の正答率に注目すると、一般的な漢語サ変動詞の中では「考慮する」と「規定する」が、一般的でない漢語サ変動詞の中では「告白する」、「包含する」と「判定する」がそれぞれ正答率において5割を下回っている。これらの語について、正答率が下がった原因の一つとして、母語の干渉が想定される。まず、学習者に過小評価されたものとして、「考慮する」と「規定する」を見てみよう。この2語は中日間において、意味・用法のズレが存在する。「考慮する」については、たとえば、「我考慮下。(訳:「ちょっと考えてみる。）」のように、中国語では「考えてみる」や「検討する」のような意味で使われており、使用場面が単一である。これに対して、日本語の「考慮する」は、たとえば、「その決定に際して、公務員の利益を考慮しないとならない。」や「読者がほぼ若い者であることを考慮し、内容をすべて現代文に変換した。」のように、「念頭に入れる」の意味で多く使われる。また、「規定する」については、中国語では、たとえば、「法律规定, 严禁危害国家利益的行为。(「訳: 国の利益を損害する行為は禁じられている。）」のように、法律や条例の内容を伝達する場合に限った言葉である。これに比べて、日本語の「規定する」は、たとえば、「以下のように、研究方法を規定する。」のように、「定める」の意味で広い場面で使える。

次に、学習者に過剰評価されたものとして、とくに「包含する」は、中国語では、たとえば、「小说包含三个章节。(訳：この小説には三つのセクションが含まれる。)」のように、「含まれる」という意味をもつ一般的な語である。これに対して、日本語の「包含する」は、「問題も包含する。」のように、主として硬い文脈でのみ使用する。

以上をふまえれば、前節で述べたように、漢語サ変動詞理解と同様、漢語サ変動詞の一般性の理解についても、中国人学習者は母語の知識を借りることが多く、それが漢語サ変動詞の理解度に支障を及ぼしていることが明らかになった。この点をふまえると、母語である中国語の影響をいかに防ぐかという点も、今後の漢語サ変動詞指導の一つのポイントになるだろう。

9.4.2 (1) 活用上の選好性の理解度

以上で、RQ1に即して、学習者の持っている漢語サ変動詞の基礎知識の理解度を多面的に検討してきた。その結果、基礎知識に限って見ても、学習者の理解には様々な問題が存在していることが明らかになった。

では、漢語サ変動詞のより応用的な側面について、学習者はどの程度理解できているのであろうか。以下、RQ2に即して、5つの観点を取り上げて、学習者の理解度を検証していく。はじめに論じるのは、漢語サ変動詞の活用上の選好性についてである。一般に、日本語教育では、漢語サ変動詞は「する」という基本形を代表形として指導されているが、実際の日本語においては、漢語サ変動詞は、それぞれが異なる活用形で使用されることが多い。つまり、どの漢語サ変動詞がどのような活用形とより深く結びついているかを知ることが、自然な運用を行う上で重要である。なお、活用形には多くのタイプがあるが、ここでは、すでに述べたように、典型性という立場から、一般的漢語サ変動詞が最も選好する「連用形」、「未然形」と「連体形」の3種類に絞り、それぞれを選好する漢語サ変動詞について、学習者の判断を求めた。回答の正答率を調査したところ、以下のような結果が得られた。

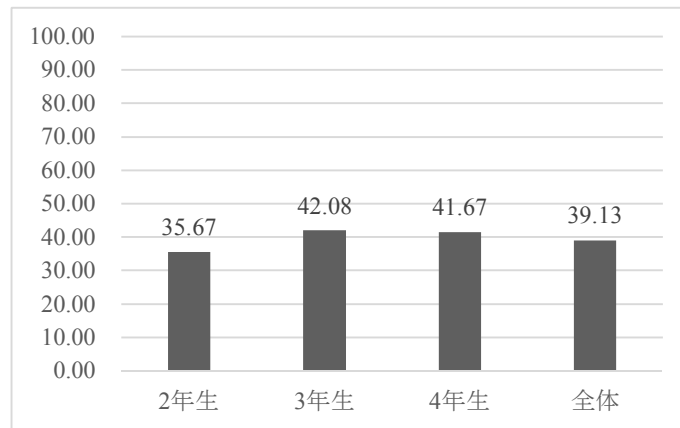


図5 活用上の選好性の理解度

まず、全体の正答率の平均値に注目しよう。上図に明らかなように、漢語サ変動詞の活用上の選好性に対する正答率は39.13%にとどまっている。これは、前節で調査した漢語サ変動詞の一般性に対する理解度と比べてもはるかに低い値である。

次に、学年進行に伴う理解度の変化を確認するため、学年別に正答率を見てみよう。上図よりわかるように、正答率が一見2年生から3・4年生にかけて上昇しているように見えるが、学年を要因とする一元配置分散分析を実行したところ、学年要因の主効果は有意ではなかった ($F=1.08$, $p=.34$)。すなわち、学年進行につれて、活用上の選好性の理解度が有意に変化しているとは言えないことになる。

ただし、全体の正答率を見るだけでは、どの活用形において問題が存在しているか知ることができない。学習者の誤答箇所をより細かく確認するには、活用形ごとに回答率を調べることも重要である。よって、ここでは、活用形別に回答率を調べた。結果は以下のとおりである。なお、下表において、縦方向の列見出しは漢語サ変動詞が実際に選好する活用形を示し、横方向の行見出しは学習者が最も一般的であると考えられる活用形である。たとえば、実際に「連用形」をもっとも選好する漢語サ変動詞について言うと、学習者がそれを正しく「連用形」と言い当てた割合は41.52%に限られる。これに対し、誤って「未然形」と答えた割合は28.48%、誤って「連体形」と答えた割合は35.00%となる。

表3 活用形別回答率

	連用形	未然形	連体形
連用形	41.52	28.48	35.00
未然形	31.74	42.83	31.09
連体形	26.74	28.70	33.91

上表よりわかることは、実際の活用上の選好パターンを正しく言い当てた割合は、活用形により、33.91%から42.83%の幅を持つということである。このことは、活用形によって、学習者の理解度に差があるという可能性を示すが、活用形を要因とする一元配置分散分析を実施した結果、3種類の活用形では、正答率の差は有意でなかった ($F=1.58$, $p=.25$)。すなわち、いずれの活用形についても大差なく、学習者は選好される活用形を理解できていないことになる。

こういった活用形に対する理解がきわめて制約的であることの原因としては、教育と母語干渉という2つの可能性が考えられる。つまり、これらについて、適切な指導を受けていないか、あるいは、活用という概念が中国語に存在せず、結果として、母語知識を活用して正しい判断ができなかった可能性が存在する。いずれにせよ、このように、漢語サ変動詞の活用形に対する理解が不十分のままでは、学習者は実際のコミュニケーションの中で漢語サ変動詞を不自然な形で使用してしまう可能性が示唆される。日本語教育の観点から考えると、まず、母語である中国語に存在しない活用形の重要性を示すとともに、個々の漢語サ変動詞について、典型的な活用パターンを示す必要があるだろう。

9.4.2 (2) 内部構成性の理解度

本節では、漢語サ変動詞に関する応用的側面の2点目として、内部構成性について、学習者の理解度を分析する。6章で指摘したように、漢語サ変動詞の漢語部の内部構造は、当該語が漢語サ変動詞になりやすいかどうかの影響を及ぼしている。この点をふまえると、どのような漢語が漢語サ変動詞になりやすいかを理解するうえでは、漢語部の典型的内部構成パターンを知ることが重要であると言える。この点について学習者の理解度を見る場合、工夫が必要である。というのも、これまでの分析は、学習者の回答がコーパスデータから得られた知見と完全に一致しているか否かに着目していたが、内部構成性と漢語サ変動詞の成立性の関係は高度に抽象的であり、同じく一致しているかどうかの二択判断では、十

分な情報が取り出せないためである。そこで、本節の分析に関しては、学習者の選んだ選択肢をそれぞれ点数化して平均化したうえで、コーパス調査の結果と比較していく。また、6章における分析の枠組みをふまえ、理解度調査も、品詞結合と意味結合の2つの観点から行う。

まず、品詞結合の点で見た内部構成性の理解度について、以下の分析結果が得られた。

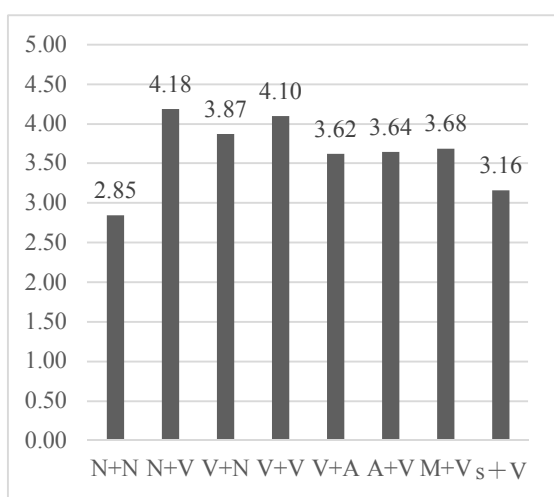


図6 品詞結合別回答の平均値

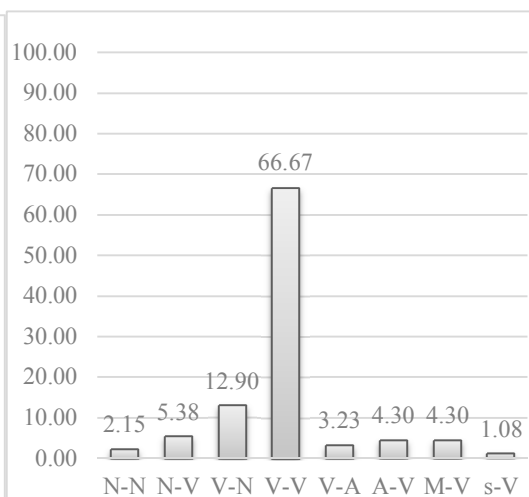


図7 コーパス調査で得られた品詞結合別の割合

まず、学習者の回答パターンを見てみよう。左図は、学習者が個々の品詞結合パターンについて、当該パタンの漢語サ変動詞のなりやすさを5点満点で評価した平均値である。学習者は、漢語サ変動詞と言え、**「N+V」(4.18)**や**「V+V」(4.10)**がもっとも取りやすい形であり、一方、**「N+N」(2.85)**や**「s+V」(3.16)**がもっとも取りにくい形と判断している。では、こうした学習者の理解は、母語話者のコーパスで見られた言語事実とどの程度一致しているのだろうか。右図はすでに6章で示したすべての重要漢語サ変動詞に占める各品詞結合パタンの語の割合をパーセントにしたものである。両図は異なる基準に基づいた値であるため、値同士ではなく、全体の順位の一貫性を比較した。結果は以下のとおりである。

表4 品詞結合における比較

	学習者の回答	コーパス調査の結果	順位差
N+V	1	3	+2
V+V	2	1	-1
V+N	3	2	-1
M+V	4	4	0
A+V	5	4	-1
V+A	6	6	0
s+V	7	8	1
N+N	8	7	-1

すでに上図で示したように、コーパス調査では、1位、2位、3位といった上位の品詞結合パターンでは、はっきりした差が確認された。しかしながら、学習者の回答でははっきりした差が見られない。つまり、もっとも典型的な品詞結合パターンについて、学習者の理解が十分ではないことが示された。

ここでとくに注目すべきは、コーパス調査で圧倒的に1位であった「V+V」パターンを、学習者が過少評価していることである。この理由として、ある漢語が、「する」がくっついてきてはじめて動詞的な役割を果たすようになると思われるが、6章でも示したように、実際はそうではなく、漢語サ変動詞のもっとも典型的な内部構成は動詞と動詞の組み合わせであることを学習者が正しく認識できていないと考えられる。

次に、意味結合の点で見た内部構成性の理解度については、以下の分析結果が得られた。

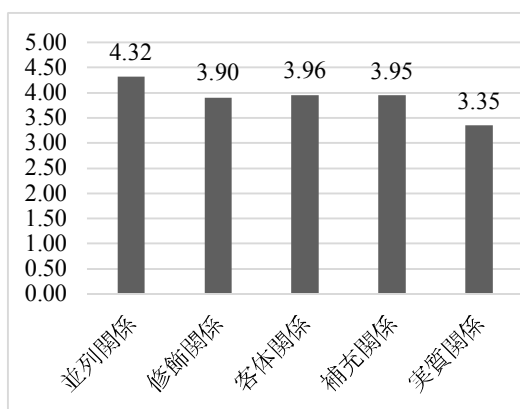


図8 意味結合別回答の平均値

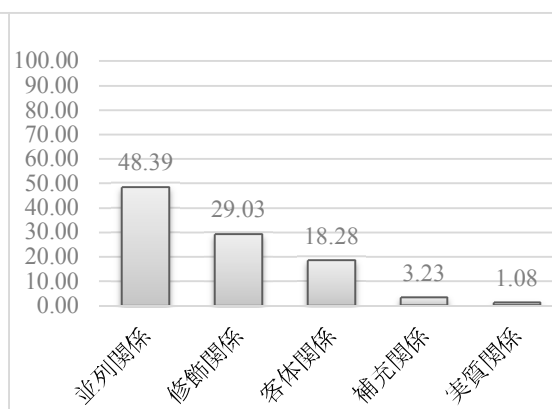


図9 コーパス調査で得られた意味結合別の割合

まず、学習者の回答パターンを見てみよう。左図は、学習者が個々の意味結合パターンについて、当該パターンの漢語サ変動詞のなりやすさを5点満点で評価した平均値である。学習者にとって、漢語サ変動詞と言えば、「並列関係」(4.32)がもっとも取りやすい形であり、一方、「実質関係」(3.35)がもっともとりにくい形であると判断されている。では、こうした学習者の理解は、母語話者のコーパスで見られた言語事実とどの程度一致しているのだろうか。右図はすでに6章で示したすべての重要漢語サ変動詞に占める各意味結合パターンの語の割合をパーセントにしたものである。両図は異なる基準に基づいた値であるため、値同士を比較するのではなく、全体の順位の一致度を比較した。結果は以下のとおりである。

表5 意味結合における比較

	学習者の回答	コーパス調査の結果	順位差
並列関係	1	1	0
客体関係	2	3	1
補充関係	3	4	1
修飾関係	4	2	-2
実質関係	5	5	0

すでに図9で示したように、コーパス調査では、各意味結合パターンでは、はっきりした差が確認される。しかしながら、学習者はこういったことを正しく理解していない。ここで注目すべきは、コーパス調査で2位であった「修飾関係」(例:「重視する」,「活用する」)パターンを、学習者が過小評価していることである。この理由として、「修飾関係」パターンの語も典型的な漢語サ変動詞の内部構成パターンだということを正しく認識できていないからだと考えられる。

このように、漢語サ変動詞の内部構成性に対する理解がきわめて制約的である。理由としては、中国人日本語学習者は、母語に過度に馴染んでおり、通例、漢語の内部構成のことを意識して使うことはない。このため、彼らが日本語を学ぶ場合にも、漢語サ変動詞を漢語部の内部構成から捉えることはきわめて少なく、結果的に理解が限定されているという実状が明らかになってきた。このように、漢語サ変動詞の内部構成性に対する理解が不十分のままでは、未知の漢語が出現した場合、それを漢語サ変動詞として使いやすいかど

うかを判断することが難しい状況だと考えられる。日本語教育の観点から考えると、こういった典型的な知識を持つことは、漢語サ変動詞を正しく理解するうえで重要な手掛かりとなるため、内部構成性について一定の指導が必要になる。

9.4.2 (3) 自他性の理解度

本節では、漢語サ変動詞に関する応用的側面の3点目として、自他性について、学習者の理解度を分析する。

漢語サ変動詞の自他性については、その識別に選択する助詞を見るのが一般的であると思われる。調査にあたって、コーパス調査で明らかにした漢語サ変動詞の自他特性に基づき、自動詞、他動詞、自他動詞、他自動詞の4種あわせた15語を取り上げて、学習者の判断を求めた。その結果をコーパス調査の結果と照合して正答率を求めたところ、以下の結果が得られた。

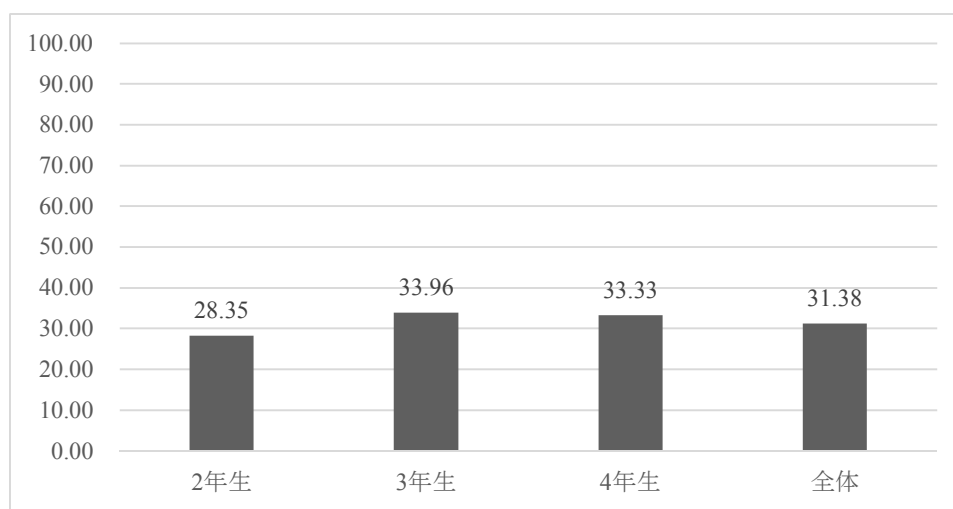


図 10 自他性の理解度

まず、全体の正答率を見てみると、学習者の漢語サ変動詞の自他認識度が 31.38%にとどまっていることがわかる。

次に、学年進行が理解度に影響を与えているかどうかを確認するため、学年別正答率を見よう。上図から明らかなように、4年生にかけて、正答率がすこし上がったように見える。しかしながら、学年を要因とする一元配置分散分析で検証したところ、学年要因の主効果は有意でなかった ($F=2.25, p=.11$)。つまりは、自他性の理解度には、学習年数

やそれに伴う習熟度の向上がまったく関与していない結果となった。言い換えれば、これまでの指導では、漢語サ変動詞の自他性について、学習者の理解度が向上していくとは考えにくい。

以上は全体的概観であるが、日本語教育の観点から見ると、自動詞、他動詞、自他動詞、他自動詞のいずれにおいて、学習者がより大きな問題を抱えているか特定することが重要である。そこで、4種類の自他パターン別に学習者の回答率を調べた。結果は以下のようになった。なお、下表において、縦方向の列見出しは正しい回答であり、横方向の行見出しは回答パターン別の割合である。たとえば、「自動詞」を例に言うと、正しく「自動詞」と答えた割合は37.27%、誤って「自他動詞」と答えた割合は28.88%、「どちらとも言えない」と答えた割合は15.06%、誤って「他自動詞」と答えた割合は13.51%、誤って「他動詞」と答えた割合は5.28%となる。

表6 自他性の回答率

	自動詞	自他動詞	どちらとも言えない	他自動詞	他動詞
自動詞	37.27	28.88	15.06	13.51	5.28
自他動詞	29.62	26.90	19.02	14.40	10.05
他自動詞	17.93	13.04	24.46	30.43	14.13
他動詞	8.70	11.96	9.24	42.93	27.17

上表で示しているように、4つの自他パタンのうち、正しくは自動詞であるものを自動詞と答えた正答率は37.27%で、正しくは他動詞であるものを他動詞と答えた正答率は27.17%であり、自他パターンによって、学習者の理解度がずいぶん異なっているように見える。しかしながら、自他パターンを要因とする一元配置分散分析を実施したところ、4種類の自他パンの間において、差は有意ではなかった ($F=1.93$, $p=.18$)。すなわち、自動詞や他動詞であっても、自他動詞であっても、学習者が等しく理解できておらず、かなり習得度が低いことが明らかになった。

さらに学習者の回答状況を細かく探るため、自動詞、自他動詞、他自動詞、他動詞のそれぞれ、単語別に正答率を見てみたところ、以下のようになった。

表7 各語の回答

調査項目	回答					
	自動詞	自他動詞	どちらとも言えない	他自動詞	他動詞	
自動詞	登場する	56.52	30.43	3.26	7.61	2.17
	安定する	36.96	28.26	10.87	15.22	8.70
	成立する	29.35	33.70	11.96	17.39	7.61
	一致する	36.96	25.00	16.30	14.13	7.61
	変化する	35.87	29.35	23.91	10.87	0.00
	成功する	36.96	34.78	15.22	8.70	4.35
	発展する	28.26	20.65	23.91	20.65	6.52
自他動詞	完成する	26.09	18.48	17.39	21.74	16.30
	開始する	20.65	25.00	25.00	19.57	9.78
	発生する	50.00	31.52	9.78	3.26	5.43
	増加する	21.74	32.61	23.91	13.04	8.70
他自動詞	決定する	21.74	9.78	23.91	32.61	11.96
	移動する	14.13	16.30	25.00	28.26	16.30
他動詞	活用する	7.61	11.96	6.52	44.57	29.35
	重視する	9.78	11.96	11.96	41.30	25.00

上記に注目すると、同じ自他タイプにおいても、正答率が個々の語によって大きくばらついていることがわかる。たとえば、自動詞タイプについて言うと、正答率が28.26%から56.52%で約2倍の開きがある。このことが、すでに表6で見たように、平均正答率に大きな差があるものの、自他タイプ間で有意差が出なかったことの原因であると考えられる。

こういった状況の原因として、自他性という概念は活用などと同じく中国語にないことが考えられる。学習上重要なことは、個々の漢語サ変動詞を個別に捉えるのではなく、自他という視点で再構築していくことが重要であろう。

9.4.2 (4) 語彙的排他性の理解度

本節では、漢語サ変動詞に関する応用的側面の4点目として、語彙的排他性について、学習者の理解度を分析する。

ある意味を漢語変動詞で表出する場合、同義のほかの表現（「～をする」）を使用することも可能である。漢語サ変動詞を自然な形で使用するためには、こういった語彙的排他性という概念についても、一定の理解を持っていることが望まれる。漢語サ変動詞の使用が必ずしも間違いでないとしても、同じ意味を表すには、仮に母語話者が「～をする」の形で表現するならば、学習者もまたそうした習慣に馴染んでおくことが役に立つだろう。そこで、本節では、学習者の回答に基づき、漢語サ変動詞の語彙的排他性に対する正答率を求めた。結果は以下のとおりである。

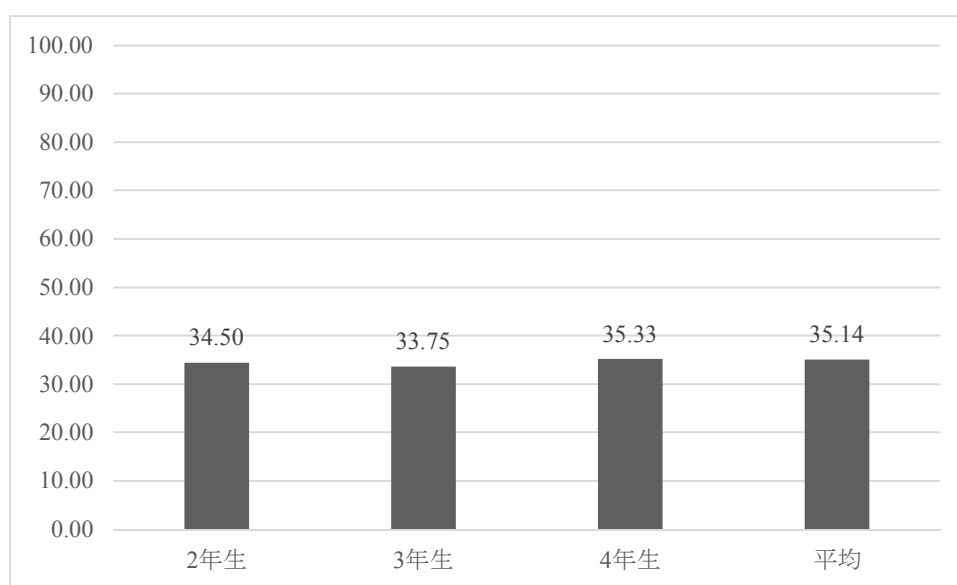


図 11 語彙的排他性の正答率

上図よりわかるように、全体の正答率は 35.14%にとどまっている。つまり、語彙的排他性についても、学習者の認識度が相当低いことが示された。

また、学年別に見てみると、4年生の正答率がやや高いように見えるが、学年を要因とする一元配置分散分析で検証した結果、学年要因の主効果は有意ではなかった ($F=0.21$, $p=.81$)。この点から、ほかの漢語サ変動詞の特性と同様、これまでの指導が不足している可能性があり、また、これまでの指導をそのままの形で続けたとしても、漢語サ変動詞の語彙的排他性に対する学習者の理解が深まることは考えにくい。

ただし、上記の分析は全体の傾向を見たもので、学習者の理解状況をより細かく見るため、母語話者コーパスにおいて、「絶対『～する』と結合するほうが自然」な漢語サ変動詞 5 語と、「あえていうと『～する』のほうがより自然」である 10 語のそれぞれについて学

習者の回答を調べた。なお、下表において、横方向の行見出しは順に、A:「絶対『～をする』のほうが自然である」もの、B:「あえていうと『～をする』のほうが自然」であるもの、C:「『～する』と『～をする』がともに自然」なもの、D:「あえていうと『～する』のほうが自然」なもの、E:「絶対『～する』のほうが自然」なものを示す。たとえば、「一致」を例にすると、学習者の回答はAが4.35%、Bが13.04%、Cが3.26%、Dが20.65%、Eが58.70%となるが、母語話者の言語運用ではE、すなわち、「絶対『～する』のほうが自然」であるという答えが正答になることを示す。したがって、この場合、学習者の約6割がこの語の排他性を正しく捉えており、約4割が誤っていることがわかる。

表8 各語の語彙排他性に関する回答

	A	B	C	D	E
一致	4.35	13.04	3.26	20.65	58.70
確立	4.35	9.78	0.00	19.57	66.30
重視	5.43	9.78	8.70	26.09	50.00
発揮	2.17	13.04	7.61	20.65	56.52
反映	4.35	11.96	9.78	27.17	46.74
平均	4.13	11.52	5.87	22.83	55.65
記載	2.17	10.87	10.87	26.09	50.00
発見	0.00	7.61	5.43	20.65	66.30
観察	7.61	8.70	8.70	29.35	45.65
予想	1.09	11.96	10.87	34.78	41.30
勉強	5.43	5.43	19.57	22.83	46.74
分類	8.70	17.39	18.48	26.09	29.35
意味	14.13	30.43	9.78	13.04	32.61
評価	6.52	9.78	18.48	22.83	42.39
確認	2.17	4.35	2.17	27.17	64.13
表示	4.35	14.13	8.70	26.09	46.74
平均	5.22	12.07	11.31	24.89	46.52

まず、母語話者の言語運用において、「絶対『～する』のほうが自然」である5語につい

と言うと、正答率の平均は 55.65%であった。一方、母語話者の言語運用において、「あえていうと『～する』のほうがより自然」である 10 語について言うと、正答率の平均は 24.89%であった。これらをふまえると、学習者は、排他性の強い漢語サ変動詞について、ある程度正しく言い当てることができるが、排他性が弱まると適切な判断がより難しいと考えられる。この差が有意なものかどうかを確認するために、語彙的排他性を要因とする一元配置分散分析を実施した。結果として、差が有意である ($F=68.20, p<.001$) ことが確認された。つまりは、語彙的排他性が下がると、学習者の理解困難度が高くなる。

このように、語彙的排他性については、学習者の理解度に大きな違いが存在することが明らかになった。この原因としては、語彙的排他性のことは活用などと同じ中国語にないことが考えられる。これについては、日本語教育の観点から考えると、まず語彙的排他性の知識を導入し、そのうえで、語彙的排他性の高いものと低いものを分けて学習者に意識させる指導が有用であろう。

9.4.2 (5) 共起語の理解度

本節では、漢語サ変動詞に関する応用的側面の 5 点目として、共起語に注目し、学習者の理解度を分析する。

高頻度・汎用的漢語サ変動詞の上位 10 語について、学習者が想起した共起語は以下のとおりであった。それぞれの回答数の多かった上位 5 語を示している。また、母語話者がどのような共起環境で使用しているかと比較するため、「なつめ」で抽出された母語話者の多く使用している共起語上位 5 語をあわせて示す。なお、下表において、右端の「重複」は、それぞれの共起語における重複語数を示す。たとえば、「存在する」について言うと、学習者が共起語として答えた上位 5 語は、母語話者の多く使用している上位 5 語とまったく重複していないため、重複語数は 0 となる。

表 9 共起語上位 5 語

	学習者による上位 5 語	「なつめ」で抽出した上位 5 語	重複
(が) 存在する	価値, 問題, 人, 神様, 人間	種類, 施設, 集落, バリエーション, バージョン	0
(を) 利用する	辞書, パソコン, 道具, 資源, 資	雛型, 機能, 性質, 情報, 技術	0

	料		
(を) 紹介する	<u>自分</u> , 友達, 現状, 家族, 商品	情報, 作品, 文化, 内容, 商品	1
(を) 説明する	内容, 使い方, 方法, 原因, 意味	理由, 事情, 方法, 現象, 状況	1
(を) 使用する	パソコン, 携帯電話, 辞書, ペン, 教室	テンプレート, 名称, 車両, エンジン, カード	0
(を) 確認する	時間, 人数, 内容, 結果, 答え	状況, 存在, 内容, 状態, 有無	1
(を) 理解する	意味, 内容, 気持ち, 文章, 問題	意味, 内容, 言葉, 構造, 気持ち	2
(を) 表示する	意思, <u>意味</u> , <u>意見</u> , 結果, 成績	情報, 画像, 画面, 結果, 番号	0
(を) 発見する	問題, 新種, <u>秘密</u> , 大陸, 宝物	船団, 小惑星, 彗星, 法則, 死体	0
(が) 発生する	事故, 事件, 地震, 火災, <u>火事</u>	事件, 問題, 事故, 事態, 地震	3

上表に明らかなように、学習者と母語話者によるそれぞれの上位 5 語の中の重複数は 0 語から 3 語までわかるが、平均をとると、0.8 語であった。すなわち、重要な漢語サ変動詞であるにもかかわらず、学習者が考える典型的な共起語と母語話者が実際に多く使用している共起語の重なりは約 16%にとどまることとなる。

もちろん、今回の調査で得られた共起語は、一切文脈などを与えない状態で学習者に書かせたものであって、特定的话题やテーマについて書かれた母語話者のデータを集めた「なつめ」を調査した結果と重複度が低いことは、ある程度想定されるものの、1 割程度の重複度が、学習者の漢語サ変動詞の共起語理解度が必ずしも十分ではないことを示す。

それでは、学習者の考える漢語サ変動詞の共起語には、どのような問題点が存在するのであろう。母語話者の意見も参考に、学習者の回答を概観すると、「自分を紹介する」、「意味を表示する」、「意見を表示する」、「秘密を発見する」、「火事が発生する」の 5 件が誤り、もしくは不自然な回答であることが確認される。これらは 2 つのタイプに大別される。1 つ目は、日本語の他動詞構文においては、目的語となる名詞に意味的な充足性が要求されるが、この点を理解できていないことによる誤りである。たとえば、代名詞「自分」や、形容詞性をもった名詞「秘密」、あるいは、品詞的には名詞であるものの、具体的な指示内容が曖昧であり、抽象化された名詞「意味」である。2 つ目は、フォーマリティーに対する

理解が不足していることに起因するもので、「火事が発生する」はそれにあたる。この表現は決して間違いではないが、フォーマリティー上成立しにくく、許容性が制約的である。

このように、学習者が漢語サ変動詞の共起語について正しい理解ができていないことが明らかになった。この原因として、指導が不十分であることが考えられる。日本語教育の観点から考えると、漢語サ変動詞のみではなく、可能な範囲で共起語とともに指導することが漢語サ変動詞の自然の運用を習得するうえで重要であろう。

9.4.3 (1) 受けた指導に対する意識

以上で、RQ2に即して、学習者の持っている漢語サ変動詞の応用知識の理解度を多面的に検討してきた。その結果、学習者の理解には様々な問題が存在していることが明らかになった。本節からでは、RQ3に即して、漢語サ変動詞についてこれまでどの指導がされたか、受けた指導について、学習者はどのように意識しているか、また、どういった指導上の希望を持っているかを明らかにしていく。

はじめに、これまで、漢語サ変動詞についてどのような指導を受けてきたかを調査した。学習者の自由回答を問うたところ、「教えてもらった記憶はない」や「漢語サ変動詞の使用について教えてもらった」といった回答が得られた。しかしながら、個々の回答文には様々な要素が混在しており、このままの形では、学習者のもつ多様な意識が分析しにくいいため、学習者の回答を形態素解析したうえで、頻度情報を収集することにした。解析後、頻度が2以上となった語を示すと、以下のようになる。ただし、下表において、固有名詞、感動詞は予め除いた。

表 10 受けた指導

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
する	44	単語	5	リスト	2
ない	26	教科書	4	ヲ	2
動詞	24	使用	4	一般	2
漢語	16	触れる	4	記憶	2
サ変	13	発見	4	教わる	2
使う	9	いる	3	区分	2

名詞	9	異なる	3	形	2
教える	8	語	3	呼ぶ	2
ない	7	使える	3	提示	2
説明	6	自動詞	3	特別	2
例文	6	助詞	3	比べる	2
ある	5	場合	3	忘れる	2
意味	5	分類	3	用法	2
指導	5	勉強	3	例	2
他動詞	5	あげる	2	和語	2

上表に明らかなように、学習者の意識において、「する」を除き、圧倒的に多く表れている概念は「ない」であった。「ない」は様々な語と結びつき、多様な意味を表出することが可能であるため、「ない」を含む回答を個別に調べたところ、88.46%は「教えてもらってない」、7.69%は「指導されていない」、7.69%は「教えてもらった記憶はない」であった。つまり、受けた指導の内容に対する意識よりも、指導を受けていないことに対する意識が学習者の中で圧倒的に強いことが明らかになった。これは、漢語サ変動詞の指導を今後充実していく必要性を示していると言えるだろう。

その他の語からはどのような傾向を見られるのであろうか。上表において、「ない」を除き、また、最小出現数が2回以上、かつ、最少文書数が2文以上の34語に限り階層クラスター分析を行ったところ、以下の結果が得られた。

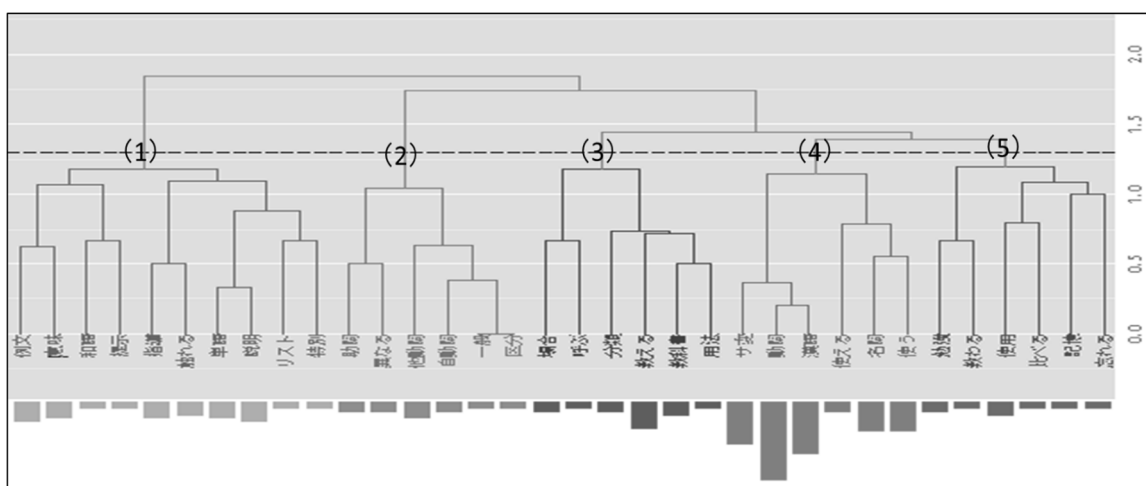


図 12 受けた指導に対する意識

ここでは、全体の傾向をある程度細かく見るために、カッティングポイントを 1.3 前後に設定する。この場合、すべての回答に含まれる語が 5 つに分類されることとなる。学習者が漢語サ変動詞について、これまで受けてきた指導に対する意識は表面上きわめて多様なものであるが、語彙の観点から整理すると 5 種類に区分されることとなる。さらに質的に観察していくとわかるように、これらの 5 種類はさらに少数の観点に絞ることができる。以下、それぞれのクラスターについて順に見ていこう。

まず、クラスター (1) については、「例文」、「意味」、「和語」、「提示」、「指導」、「触れる」、「単語」、「説明」、「リスト」、「特別」の 10 語が含まれている。これらの語から、クラスター (1) は、「例文や単語のリストを通した単語の意味指導」に関わる内容を示していると考えられる。たとえば、以下のような回答が見られる。

- (a) 漢語サ変動詞の分類、例文、説明、および教科書の単語から教えてもらった。
- (b) 使い方、単語の意味を、例文をあげて具体的に説明した。

このように、漢語サ変動詞の様々な知識や特性の中では、ここでは、学習者が意味について一定の指導を受けたということが明示的に示された。一方、後で示すように、漢語サ変動詞のほかの面についての指導はほとんど見られない。

次に、クラスター (2) については、「助詞」、「異なる」、「他動詞」、「自動詞」、「一般」、「区分」の 6 語が含まれている。これらの語をまとめると、クラスター (2) は漢語サ変動詞の「自他の使い分け」に関わる指導内容を示していることがわかる。たとえば、以下のような回答が見られる。

- (c) 漢語サ変動詞は「ヲ」が必要かどうか、状態と動作を表す場合に選ぶ助詞が異なる。
- (d) 他動詞は「を」、自動詞は「が」をとること（が指導された）。

上記のように、クラスター (2) から、「自他の使い分け」の「一般」的な方法として、「助詞」を見るという方法が指導されたことが読み取れる。ただしここで注目すべきは、自他の指導は、単に助詞を見るという機械的な説明で終わらせたことが学習者の回答から

窺える。

クラスター (3) については、「場合」、「呼ぶ」、「分類」、「教える」、「教科書」、「用法」の6語が含まれている。これらの語をふまえると、クラスター (3) は、「教科書」を用いた漢語サ変動詞の「用法と分類」に関わる指導を示していると考えられる。ただし、ここでは、漢語サ変動詞の具体的な何らかについての用法ではなく、「用法」だけというコメントであった。このことから、これまでの指導が希薄で曖昧なもので、学習者の意識ではほぼおおざっぱな印象しか残っていない可能性が示される。たとえば、以下のようなコメントが見られる。

(e) 教科書に出てきた漢語サ変動詞の用法、それがサ変動詞と呼ばれることだけ教えてもらった。

このように、「用法」と「分類」のように、一見漢語サ変動詞に関する指導内容の言葉が現れているように見えるが、実際具体的にどの用法やどの観点からの分類か、具体的な概念や内容はまったく出ていない。つまり、学習者が受けた指導を自分の中できちんと把握しておらず、非常に希薄で曖昧な理解にとどまっていると考えられる。

クラスター (4) については、「サ変」、「動詞」、「漢語」、「使える」、「名詞」、「使う」の6語が含まれている。これらの語をふまえると、クラスター (4) は漢語サ変動詞が「名詞と動詞」の両方の形で使えることに関わる内容を示していることがわかる。たとえば、以下のようなコメントが見られる。

(f) 漢語動名詞が動詞と名詞として使われる例文を提示していた。

(g) 詳しくは教えてもらっていない。漢語動名詞が名詞として使われる場合もあり、動詞として使われる場合もあること（が教えてもらった）。

このように、学習者が漢語サ変動詞の様々な特性の中では、こういったもっとも基礎的な知識が印象が残っていることが示される。すでに分析した「用法」などの曖昧な内容とあわせて考えれば、学習者の中では、これまでの漢語サ変動詞指導は非常にレベルが低く、内容があやふやであることが示唆される。

最後に、クラスター (5) については、「使用」、「比べる」、「勉強」、「教わる」、「記憶」、

「忘れる」の6語が含まれている。これらの語をふまえると、このクラスターは、漢語サ変動詞について教わった内容は「忘れやすい」という内容よりも、コメントを示していることがわかる。このようなコメントから、これまでの指導は効果が薄くて持続性が弱いという学習者の意識が反映されただろう。たとえば、以下のようなコメントが見られる。

(h) 普段から自他を意識しながら勉強していかないといけない。

このように、これまで受けてきた漢語サ変動詞の指導について、多様な回答が見られるが、学習者全員の回答をまとめてクラスター分析で整理したところ、5つに要約できることがわかった。さらに、この5つを指導内容と指導への印象に分けられる。図に示すと以下のようなになる。

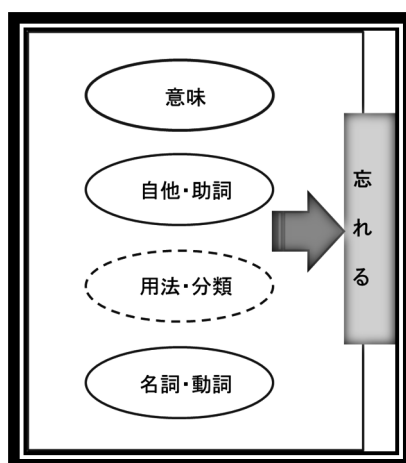


図13 漢語サ変動詞について受けてきた指導

このように、漢語サ変動詞について、意味、自他の使い分け、分類と用法、および名詞と動詞両用といった4つの側面について指導を受けたことが確認されたが、そのうち、用法・分類については、学習者の印象が曖昧で、指導の効果が希薄であることが確認された。このような指導だと、忘れやすいという感想コメントも間接的に出てきた。

すでに述べたように、漢語サ変動詞の特性は多様なものであるが、これまでの指導では、学習者は、漢語サ変動詞の基礎的な知識についてしか指導を受けた印象をもっておらず、教わった内容についても印象が薄く、忘れやすいという意識を持っていることが明らかになった。この結果は、これまでの漢語サ変動詞指導の欠点、かつ、今後漢語サ変動詞指導

の課題を示すものとなるだろう。

9.4.3 (2) 受けた指導に対する感想

引き続き、本節では、学習者が受けた漢語サ変動詞の指導に対して、どういった感想を持っているかを調べた。学習者に自由回答を求めたところ、「指導を受けたが、使い方がまだよくわからない」や「どのような語が漢語サ変動詞になりうるか、どのような構成があり、成り立つ条件は何かまだ理解できていない」などのコメントが得られた。すでに述べたように、こうして書かれた個々の回答文には、多様な要素が混在しているため、形態素解析を行ったうえで、頻度情報を収集した。解析後、頻度が2以上となった語を示すと、以下ようになる。なお、下表において、固有名詞、感動詞は予め除いた。

表 11 受けた指導に対する感想

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
ない	50	思う	5	よく	2
動詞	14	先生	4	違い	2
する	13	ほとんど	3	運用	2
サ変	11	学ぶ	3	感じる	2
漢語	11	詳しい	3	使用	2
指導	10	難しい	3	自分	2
わかる	9	日本語	3	助詞	2
理解	8	いい	2	場合	2
使う	6	なる	2	正確	2
ある	5	はっきり	2	生活	2
できる	5	まだ	2	多く	2
よい	5	もっと	2	知識	2

上表に明らかなように、受けた漢語サ変動詞の指導に対して、「ない」という回答が圧倒的に多く現れている。「ない」を含む回答を個別に調べたところ、「よく理解できていない」、「よくわからない」、「ほとんど使わない」、「はっきり言えない」、「正確な運用ができていない」など、多数の回答パターンは見られるが、そのうち、75.76%は「(感想は) ない」であ

った。このことは、学習者の多くは指導を受けていないとの意識を持っているためだと考えられる。

では、ほかの語からはどのような傾向が見られるのであろうか。上表において、「ない」などの語を除き、また、出現文章数は2文以上の20語に限り、階層クラスター分析を行ったところ、以下の結果が得られた。

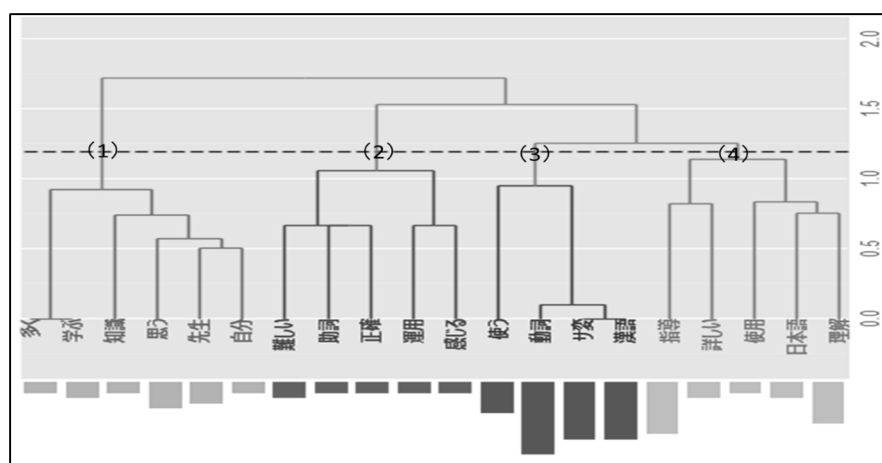


図 14 受けた指導に対する感想

ここでは、全体の傾向をより細かく見るために、カッティングポイントを1.3前後に設定する。こうして、すべての回答語が4つに分類されることとなる。学習者がこれまでの指導に対する感想は多様なものであるが、語彙の観点から整理すると、4種類に区分される。さらに質的に分析すると、これらの内容はさらに絞られることがわかる。以下、それぞれのクラスターについて順に見ていこう。

まず、クラスター(1)には、「多く」、「学ぶ」、「知識」、「思う」、「先生」、「自分」の6語が含まれている。これらの語から、このクラスターでは、「自分で知識を学ぶ」という感想が示されていることがわかる。すなわち、漢語サ変動詞の「知識」を「自分」で「多く学ぶ」ことが必要だという感想が示されたと考えられる。たとえば、以下のような回答文が見られる。

- (a) 日本語の勉強はそもそも自分が少しずつ知識を積み上げていく過程なのである。
- (b) 先生の指導がよくて、ただ、多くの漢語サ変動詞は自分で学ぶ必要があり、学ぶほうがいいと思う。

前節で分析したように、学習者は漢語サ変動詞に対して一定の指導を受けたわけであるが、それは決して十分なものではなく、不足だと感じられている。よって、指導を受けるだけでなく、自分からも多く学ばなければならないという強い意識もここで反映されている。この点は、従来の漢語サ変動詞指導の不十分なところを示すものとなり、教育的に注目すべきであろう。

次に、クラスター (2) については、「難しい」、「助詞」、「正確」、「運用」、「感じる」の 5 語が含まれている。これらの語から、このクラスターは「助詞を手掛かりとした（主として自他の）正確な運用が難しい」という感想を示していることがわかる。すでに前節で、学習者は漢語サ変動詞の様々な知識の中で、意味と自他の使い分けについてある程度指導を受けたことを確認できたが、そうした指導では決して十分な理解に繋がらないことは、このクラスターからわかるだろう。たとえば、以下のような回答が見られる。

- (c) 漢語サ変動詞が表すのは動作か状態かを正確に判断するのが難しいので、助詞を選ぶのが難しい。
- (d) 自他の区別がよくわからないので、正確な運用ができていない。

このように、学習者はこれまで受けた指導から、漢語サ変動詞の自他や助詞の使い分けについて十分正確な理解を得られなく、またこういった理解の障害がさらにかれらの正確な運用に支障を与えると推測されるだろう。

次に、クラスター (3) については、「使う」、「動詞」、「サ変」、「漢語」の 4 語が含まれている。これらの語をふまえ、このクラスターを「漢語サ変動詞を（どう）使うか（がわからない）」という感想に要約できるだろう。たとえば、以下のような回答が見られる。

- (e) 漢語サ変動詞「する」あるいは「をする」がともにあるが、それらの間に違いがある。
この違いははっきり言えないそうだ。たとえば、「生活する」はよく使われているが、「生活をする」はほとんど使わない。
- (f) 「を」を使う場合とそれを略する場合がわからなくて、単に直感で決めている。
- (g) 漢語サ変動詞が動詞と名詞として使われる用法についてよく理解でき、使えるようになった。

すでに前節で述べたように、漢語サ変動詞について、「名詞と動詞両用」という指導を受けたことが確認された。ただ、指導が不十分であるため、学習者の理解も表面的な段階にとどまっていると示唆された。

最後、クラスター (4) については、「指導」、「詳しい」、「使用」、「日本語」、「理解」の 5 語が含まれている。これらの語をふまえると、このクラスターは学習者が漢語サ変動詞の「使用を理解できておらず、詳しい指導」を希望するという感想を示していることがわかる。たとえば、以下のような回答文が見られる。

- (h) どのような語が漢語サ変動詞になりうるか、どのような構成があり、成り立つ条件は何かまだ理解できていない。
- (i) 指導を受けたが、使い方がまたよくわからない。

このように、このクラスターでは、漢語サ変動詞の構成や形成の条件、つまり「サ変化できる漢語」の構成上の特徴について理解できていないことと、具体的な使い方がわからないという感想が見られる。

このように、漢語サ変動詞指導に対する学習者の感想には多様な要素があるように見えるが、クラスター分析で整理した結果、4 つにまとめられることがわかった。クラスター (1) は、指導を受けたが、十分ではないため、自分で学ぶ必要だという感想、クラスター (2) は、助詞で自他を使い分けすることについて指導を受けたが、まだ難しく理解できていないという感想、クラスター (3) は、語彙的排他性の知識は指導が不十分で難しいから、正確な理解・運用ができていないという感想、クラスター (4) は、漢語サ変動詞の語構成やその具体的な使い方について理解できていないという感想であった。これらをさらに指導と理解・運用の関係性で捉えれば、下図のようになると考える。つまり、これまでの漢語サ変動詞指導と学習において、以下のように、負の循環が存在すると考えられる。

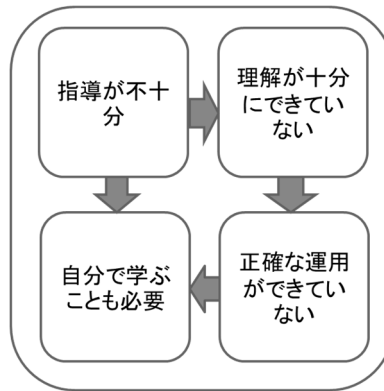


図 15 漢語サ変動詞の指導と学習における循環

このように、学習者の指導に対する感想を調査したところ、指導を受けていないから感想がないという回答もあったが、指導を受けたと答えた学習者の回答を分析したら、指導が不十分であるため、正確な理解も自然な運用もできていない状況にあり、自分で学ぶ必要があるという感想が出てきたことが確認された。このことをふまえると、より詳しくて効果的な指導法を開発することも今後の課題となる。それとともに、学習者の自主学習にふさわしい学習シートの開発も必要であると考えられる。

9.4.3 (3) 指導に対する希望

最後に、漢語サ変動詞について、学習者はどのような指導を希望しているか分析する。学習者の自由回答を問うたところ、「漢語サ変動詞の由来、特徴、用法など多面的な指導」や「授業で漢語サ変動詞を勉強する場合、どの場合に使うか、使うときの注意事項はなにか、一般的な組み合わせはなにかについて教えてほしい」など、様々な回答があった。このままの形では分析しにくいので、学習者の回答を形態素解析したうえで、頻度情報を収集した。解析後、頻度が2以上の語を示すと、以下のようなになる。なお、下表において、固有名詞などは除いた。

表 12 漢語サ変動詞指導に対する希望

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
動詞	50	具体	6	ほか	2
漢語	45	形	6	ほとんど	2

サ変	42	思う	6	違い	2
する	38	一般	5	慣用	2
ほしい	19	形式	5	区分	2
用法	17	生徒	5	構造	2
教える	16	方法	5	混乱	2
使い方	13	名詞	5	最も	2
使用	13	あげる	4	作る	2
意味	12	場合	4	使い分け	2
語	12	他動詞	4	事項	2
使う	12	多い	4	自動詞	2
指導	12	知る	4	助詞	2
ない	11	中国語	4	詳しい	2
組み合わせ	11	注意	4	場面	2
例	10	日本語	4	状況	2
どう	9	なる	3	深める	2
区別	9	よい	3	先生	2
活用	8	挙げる	3	選ぶ	2
構成	8	近い	3	体系	2
説明	8	語法	3	比較	2
多く	7	知識	3	分析	2
ある	6	分類	3	由来	2
やすい	6	理解	3	和語	2
やる	6	にくい	2		

上表に明らかなように、学習者が漢語サ変動詞に対する希望は多数多様である。そのうち、「用法」や「使い方」に関する希望が最も多かったことが示されている。学習者の回答語をもっと整理して分析するため、上記の語のうち、さらに最小文書数が2以上の56語に限って、階層クラスター分析を行った。結果は以下のようなになる。

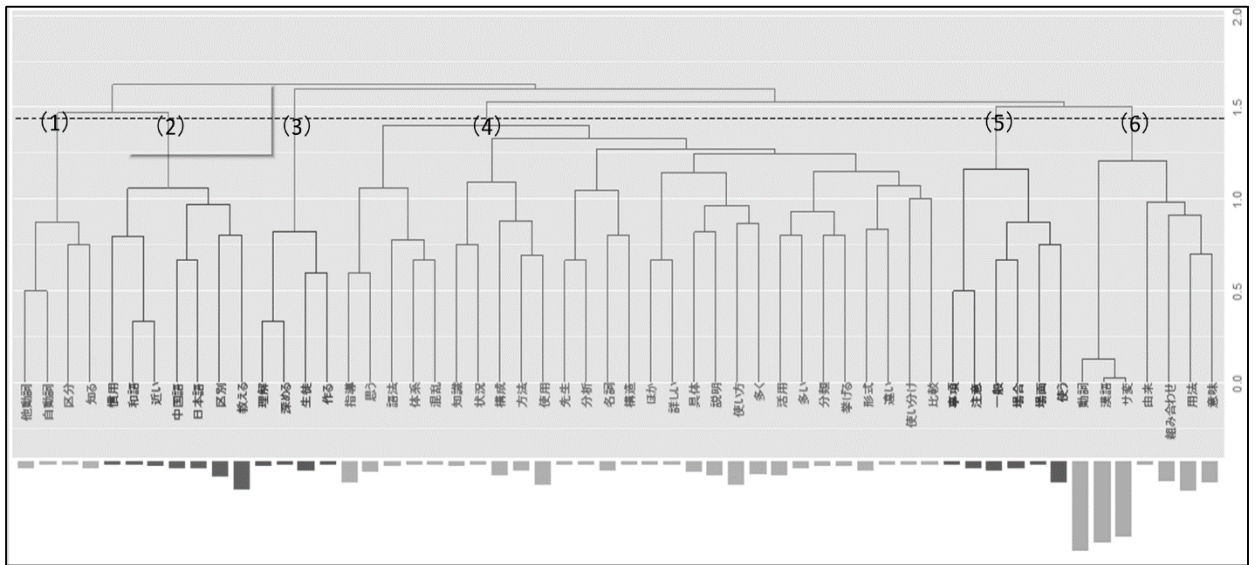


図 16 希望する漢語サ変動詞指導

ここでは、全体の傾向をより細かく捉えるために、カッティングポイントを 1.4 前後に設定する。こうして、すべての回答語が 6 つに分類されることとなる。学習者が希望する指導は多様なものかもしれないが、語彙の観点から整理すると、6 つに区分される。以下、それぞれのクラスターについて順に見ていこう。

まず、クラスター (1) についてであるが、「他動詞」、「自動詞」、「区分」、「知る」の 4 語が含まれている。これらの語をふまえると、このクラスターは「自他区分」に関する希望を示していることが確認された。たとえば、以下のような回答文が見られる。

- (a) 漢語サ変動詞の自他区分があることが知っているが、ある語を見てすぐ自動詞か他動詞か判断できない。

このように、学習者は漢語サ変動詞に自他区分という概念があることについて指導を受けたが、具体的にどのように自他区分をするか、その手掛かりについて指導を受けたいという要望が示されている。

次に、クラスター (2) については、「慣用」、「和語」、「近い」、「中国語」、「日本語」、「区別」、「教える」の 7 語が含まれている。これらの語をふまえ、クラスター (2) を、「中日区別」に関する指導上の希望を持つと要約されるだろう。たとえば、以下のような回答文が見られる。

- (b) 漢語サ変動詞の使用，中国語との違い。
- (c) 漢語サ変動詞の語源・語構成の観点から指導すること，また日本語と中国語の区別を指導することで生徒の理解を深めるべきだと思う。

このように，中国人日本語学習者にとって，母語との違いを知ることは，日本語漢語サ変動詞を正確に学習・理解するうえで必要であると思われることがわかった。

クラスター (3) については，「理解」，「深める」，「生徒」，「作る」の 4 語が含まれている。これらの語をふまえ，このクラスターでは，「(文) を作ることで理解を深めたい」という学習者の希望が示されていることがわかる。たとえば，以下のような回答が見られる。

- (e) 漢語サ変動詞とは何か，働きや文中でどのような役割を果たすか，例で漢語サ変動詞の形式を説明することや，理解を深めるために生徒に文を作らせること（を希望する，筆者）。

すでに前節で示されたように，これまでの指導では，漢語サ変動詞の理解が非常に曖昧で，記憶に残りにくいと思われる。よって，実際に作文したりすることで，漢語サ変動詞の運用をできるようになり，理解を深めることができるようになることが，学習者の強い希望だと上記より確認された。

クラスター (4) については，「指導」，「思う」，「語法」，「体系」，「混乱」，「知識」，「状況」，「構成」，「方法」，「使用」，「先生」，「分析」，「名詞」，「構造」，「ほか」，「詳しい」，「具」，「説明」，「使い方」，「多く」，「活用」，「多い」，「分類」，「挙げる」，「形式」，「違い」，「使い分け」，「比較」の 28 語が含まれている。このクラスターの中身は一見複雑であるが，まとめると，「語法・構造・形式・使い分けなど」の具体的な説明や，それに基づく漢語サ変動詞の使い分けに関する指導を希望していることとなる。たとえば，以下のような回答が見られる。

- (f) 漢語サ変動詞の構成，用法を例で説明してほしい。
- (g) 使い方と活用について知りたい。
- (h) 個別の語にこだわらず，一般的で体系的な知識を教えてください。たとえば，語の語根，

活用形式，使い方など。

このように，学習者は漢語サ変動詞に関する指導を受けたものの，語法，構造，形式，使い分けなど，多様な希望を持っていることは，これまでの指導で十分に学べなかったことを意味すると言えるだろう。

クラスター (5) には，「事項」，「注意」，「一般」，「場合」，「場面」，「使う」の 6 語が含まれている。これらの語をふまえ，このクラスターは，「使う場面や注意事項」という漢語サ変動詞使用に関わる社会的な特性についての希望を示していることがわかる。たとえば，以下のような回答が見られる。

- (i) 漢語サ変動詞の意味・使い方，場面，一般的な使い方とほとんど使わない場合である。
- (j) 授業で漢語サ変動詞を勉強する場合，どの場合に使うか，使うときの注意事項，一般的な組み合わせは何かについて教えてほしい。

このように，漢語サ変動詞そのものに関する指導以外，こういった社会的通用性という外的な特性についても，学習者が希望していることが確認された。このことから，学習者は漢語サ変動詞に関して，できるだけ多面的な指導を受けたいという要望を持っていることがわかった。

クラスター (6) には「動詞」，「漢語」，「サ変」，「由来」，「組み合わせ」，「用法」，「意味」の 7 語が含まれている。これらの語から，クラスター (6) では，漢語サ変動詞の「意味や用法」に関する指導を希望していることが示される。たとえば，以下のような回答文が見られる。

- (k) 漢語サ変動詞の由来，特徴，用法など多面的な指導。
- (l) 漢語サ変動詞の語構成・使用状況・具体的な組み合わせ・誤りやすいところ・運用において間違いやすいところや混同しやすいところである。

すでに述べたように，「意味」や「用法」という言葉は，これまで受けてきた漢語サ変動詞指導の内容に現れていたにもかかわらず，学習者の希望であらためて出てきたことは，これまでの指導は十分ではないと思われたためであると考えられる。

このように、漢語サ変動詞において、学習者が希望する指導は多面的であるが、整理すると、クラスター (1) は「自他」についての指導、クラスター (2) は「中日比較」に関する指導、クラスター (3) は「作文」に対する指導、クラスター (4) は「語法・構造・形式・使い分け」などに関する具体的な指導、クラスター (5) は「社会的特性」に関する指導、クラスター (6) は「意味・用法」に関する具体的な指導、を示していることがわかる。このうち、とくに (1) や (4), (6) は、これまで受けてきた指導にも含まれていることは、これまでの漢語サ変動詞指導の問題点を改めて示すものとなるだろう。

9.5 まとめ

本章では、日本語教育の観点から、漢語サ変動詞の基礎知識の理解度、漢語サ変動詞の応用知識の理解度、および漢語サ変動詞の指導に対する意識の3つの観点から、学習者の知識や意識を調査した。以下、リサーチクエスチョン順に内容を簡潔にまとめる。

まず、RQ1「漢語サ変動詞の基礎知識の理解度」に関しては、はじめに学習者に漢語サ変動詞の能力を自己評価で問うたところ、知識面においても運用能力においても、学習者が「どちらとも言えない」ことがわかった。また、サ変化できる漢語、漢語サ変動詞の一般性について、学習者の理解度はそれぞれ6割と5割程度にとどまり、学年進行に伴う理解度の上昇も見られないことが明らかになった。

次に、RQ2「漢語サ変動詞の応用知識の理解度」について、(1) 活用上の選好性、(2) 内部構成性、(3) 自他性、(4) 語彙的排他性、および(5) 共起語の5つの観点から学習者の理解度を分析した。結果として、いずれの場合も、学習者の正答率が4割以下にとどまっており、学年別の差も見られないことが明らかになった。とくに共起語の調査では、学習者の回答には一見大きな問題がないようであるが、微妙な違いが存在しており、日本語漢語サ変動詞の独特なフォーマリティー上の特徴を正確に捉えていないことが示された。

最後にRQ3「漢語サ変動詞の指導に対する意識」において、まず、これまで受けてきた指導について回答を求めて分析したところ、漢語サ変動詞の意味、自他の使い分け、分類と用法、名詞と動詞両用という指導内容が意識されていることがわかった。また、受けた指導に対する感想を問うたところ、指導が不十分であるため、正確な漢語サ変動詞理解と運用ができておらず、自分で学ぶ必要があるという感想が確認された。さらに、指導に対する希望を問うたところ、語法・構造・形式・使い分けなど、漢語サ変動詞の多くの側面について指導が希望されていることがわかった。そのうち、すでに指導を受けた自他や意

味・用法に関する内容についてあらためて指導の希望が現れていることは注目に値する。また、漢語サ変動詞の中日比較や社会的特性に関する指導への希望、正確な運用能力を身に付けるよう、実際に作文させたりする指導への希望が確認された。受けてきた指導、その指導に対する感想、および今後の希望の3つをまとめると、下図のようになると思う。そこから、学習者の意識の全体像が浮かび上がってくると言えるだろう。

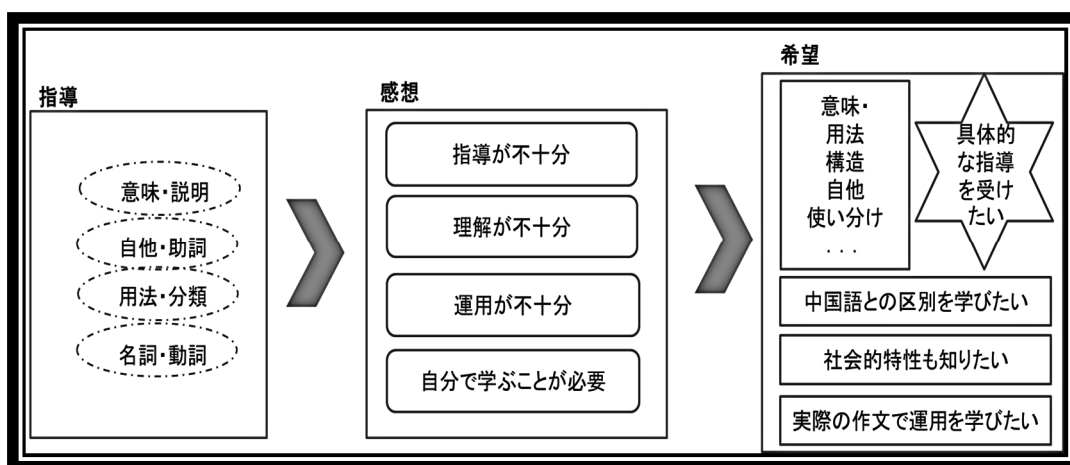


図 17 漢語サ変動詞指導に対する学習者の意識

このように、本章の調査により、従来の漢語サ変動詞指導に少なからず問題があり、効果的で多面的な指導法が求められていることが確認された。また、こういった意識のもと、学習者の漢語サ変動詞使用にはどのような特徴があるかを知ること、漢語サ変動詞指導法を確保するうえで重要なことである。よって、次章においては、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用もあわせて確認する。

第10章 中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用

10.1 本章の目的と構成

9章では、学習者にとって望ましい漢語サ変動詞の指導システムを考案する前提として、学習者が実際に漢語サ変動詞をどのようなものとして捉え、どのような知識を持ち、またどのような学習を受け、さらにどのような指導上の希望を持っているかに注目して調査した。その結果、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞理解度が不足していること、従来の指導は十分ではないと思われることが明らかになった。中国語には、日本語とほぼ同形の漢語が多く存在するため、中国人日本語学習者は、漢語サ変動詞の習得が比較的容易であると一般的に思われるが、前章で行われたアンケート調査の結果が示すように、中国人日本語学習者が漢語サ変動詞の使用に自信を持っておらず、かつ、これまでに受けてきた指導に対しても手ごたえを感じていないことをふまえれば、こうした常識は必ずしも当てはまらない可能性がある。

ここで特に注目すべきは、こうした中国人日本語学習者の実態及び意識がかれらの実際の漢語サ変動詞運用にどのような影響を及ぼしているかということである。

ここで重要になるのは、(1) 使用量、(2) 使用する語彙項目、(3) 正確性、の3点である。まず(1)については、仮に学習者が漢語サ変動詞の使用を苦手だと感じているのであれば、いわゆるコミュニケーション方略によって、漢語サ変動詞の使用を回避するはずである。結果的に、母語話者に比べ、中国人日本語学習者は漢語サ変動詞を少なく使用する可能性がある。一方、そうした意識が強く影響していないのであれば、中国人日本語学習者は日本人と同等、あるいは、それ以上に漢語サ変動詞を多く使用している可能性もある。この点は実証的に調べないと明らかにならない。

次に(2)については、仮に学習者が母語の知識をうまく活用し、漢語サ変動詞を上手に使用できているとするならば、彼らが実際に使用している漢語サ変動詞と母語話者が使用している漢語サ変動詞は、完全に一致していないにせよ、ある程度類似してくるはずである。仮に根本的な違いが見られるとすれば、このことは学習者の漢語サ変動詞運用の問題の根深さを示すと言えよう。

最後に(3)については、仮に漢語サ変動詞を十分に理解できておらず、また、十分な指導が行われていないのであるとすると、学習者が漢語サ変動詞を誤った形で使ってしまう可能性もある。この問題はこれまでの研究では大きく注目されていなかったが、前章の調査の結果をふまえると、中国人日本語学習者による漢語サ変動詞使用には、少なからぬ誤

用が存在する可能性もまた否定できないのである。

よって、本章では、中国人日本語学習者が日本語作文の中で、漢語サ変動詞をどのように使用しているか、という点に着目して調査を進めていく。なお、学習者の漢語サ変動詞使用量のみではなく、使用している漢語サ変動詞の内容をあわせて見ることにより、かれらの漢語サ変動詞使用の実態を立体的に解明していく。

10.2 リサーチクエスチョン

前述したように、本章では、量的観点と質的観点から学習者の漢語サ変動詞使用実態を調査する。量的観点からは、学習者の漢語サ変動詞使用量に注目し、母語話者と比べて、過剰・過少使用の問題があるかどうかの確認を行う。質的観点からは、学習者が実際に使用している漢語サ変動詞にどのような問題があるか、また、どういった誤りが見られるか検討する。リサーチクエスチョンは以下のように設定する。

RQ1 中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用量は母語話者と一致しているか。

RQ2 中国人日本語学習者の使用する漢語サ変動詞は母語話者と一致しているか。

RQ3 中国人日本語学習者は漢語サ変動詞使用において、どのような誤用が見られるか。

10.3 使用するデータ

すでに述べたように、本調査は、中国人日本語学習者による漢語サ変動詞使用を、母語話者による漢語サ変動詞使用と比較しながら検討するため、以下では、中国人日本語学習者の作文データと母語話者のデータをそれぞれ紹介する。

10.3.1 学習者の作文データ

本章で使用する学習者の作文データは、既存の日本語学習者コーパスと、筆者が独自に中国の2大学で収集した大学生学習者の作文データである。以下、それぞれについて詳しく紹介する。

まず、既存の学習者コーパスについてであるが、近年、日本語学習者の産出データを集めたいわゆる学習者コーパスが徐々に増えてきている。学習者の作文を収集したもの、会話を収集したもの、あるいはそれらをふまえた誤用検索システムや用例集など、公開されているものは多種多様である。本章では、すでに行った母語話者コーパス調査の枠組みと

揃えるため、書き言葉コーパスに分析対象を限定した。実際に使用した学習者コーパスは、「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（作文対訳 DB）」、「学習者作文コーパス『なたね』」、「日本語学習者作文コーパス」、「日本語学習者言語コーパス」、「華東政法大学作文コーパス」の5つである。このうち、多様な学習者データを含むものについては、中国人日本語学習者データに限って使用した。

「作文対訳 DB」は国立国語研究所で作成されたもので、21 か国から収集された日本語作文 1565 編が含まれている。テーマは「あなたの国の行事について」、「たばこについてのあなたの意見」、「ワープロソフトについてのあなたの意見」、「外国からの援助についてのあなたの意見」など 10 種がある。このうち、中国人日本語学習者による作文の内訳は以下のとおりである。

表1 「作文対訳 DB」における中国人日本語学習者による作文

テーマ	作文数
たばこについてのあなたの意見	1
あなたの国の行事について	20
ワープロソフトについてのあなたの意見	2
学校の教育についてのあなたの意見	1

「学習者作文コーパス『なたね』」は 9 種類の母語を持つ学習者 192 人による作文 285 件を集めたもので、誤用タグが付けられている。全文検索、誤用検索、学習者情報での検索がそれぞれ可能である。このうち、中国人日本語学習者による作文数は 152 本である。

「日本語学習者作文コーパス」には、初級から上級の中国人と韓国人日本語学習者 304 名が書いた作文データが収録されている。テーマは、「外国語が上手になる方法について」と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」の 2 種である。初級、中級、上級学習者別の作文数も記載されている。当該コーパスに収録される中国人日本語学習者による作文の情報は以下のようなものである。

表2 中国人日本語学習者による作文数

テーマ	初級	中級	上級	合計
-----	----	----	----	----

外国語がうまくなる方法について	20	56	27	103
インターネット時代に新聞や雑誌は必要か	0	43	14	57

「日本語学習者言語コーパス」は E-ラーニング上のタスクとして、学習者が作成した作文を集めたコーパスである。台湾の淡江大学で 2008 年から 2011 年にかけて収集したもので、特定の文法機能を示して、それをふまえた文を書かせる機能タスクと日記の形で書かせる日記タスクの 2 種類が含まれている。作文数は 84 本である。データには品詞タグが付与されている。

「華東政法大学作文コーパス」は華東政法大学外国語学院日本語専門の 2 年生 26 人が書いたもので、2006 年から 2007 年にかけて収集したものである。作文数は 285 本である。テーマは、「夏休みの思い出」、「クラスメート」、「アルバイトについて」、「英語を大学の必修科目にすべきか」、「私の好きな○○」、「インターネットと私の生活」、「○○への手紙」、「心を打たれたこと」、「寓話:親子とろば」、「現代若者のファッション」、「子供の時の夢」、「私の育った町」、「私の友人」などである。

以上を合計すると、705 本、合計字数 231525 語が本研究の対象データとなる。なお、異なるテーマについて書かれた異なるデータの一つにまとめて分析することには、手法上の問題も想定されるが、ここでは、漢語サ変動詞の使用に限った記述的調査を行うため、この点を問題にしない判断を行った。

以上のコーパスはいずれも多くのデータを収集した大規模なものである。また、過去の研究においても使用されており、全体として信頼性の高いものである。しかしながら、漢語サ変動詞という点に限って見れば、必ずしも多くの用例が確認できない。そこで、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用状況をより直接的に観察するため、上記の既存コーパスに加え、学習者に漢語サ変動詞を含むセンテンスを直接的に書かせ、収集することとした。これは 9 章で述べたアンケートと同時に実行した。アンケートの終了後、「思い付いた漢語サ変動詞を使って、できるだけ 2 つ以上の文を書いてください。」と指示した。すでに述べたように、依頼した学習者は中国の 2 大学の 92 人であったが、そのうち、回答しないものがあつたため、1 センテンス以上作文した学習者は 51 名であった。センテンス数は人によって若干異なるが、2 センテンスの人から 6 センテンスの人までいたため、全体として、202 センテンス、2789 語のデータが得られた。学年別の語数は以下のようになる。

表3 学年別作文語数

	2年生 (25名)	3年生 (20名)	4年生 (6名)
異なり語数	392	315	91
延べ語数	1506	1102	181

既存のコーパス及び独自に収集したセンテンス文例集について、それぞれの作文数（センテンス数）を以下に示す。

表4 使用するコーパスにおける中国人日本語学習者の作文

	作文数	トピック (数)
作文対訳 DB	24	<ul style="list-style-type: none"> ・あなたの国の行事について (20) ・たばこについてのあなたの意見 (1) ・学校教育について (1) ・ワープロソフトについてのあなたの意見 (2)
学習者作文コーパス「あなたね」	152	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内で課題として与えられたテーマ (152)
日本語学習者作文コーパス	160	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語が上手になる方法について (103) ・インターネット時代に新聞や雑誌は必要か (57)
日本語学習者言語コーパス	84	<ul style="list-style-type: none"> ・ A summary and opinion essay about news on Japan (1) ・ An opinion essay on fast food and “fast” culture (1) ・ Youth Slang (1) ・ My Strengths and Weaknesses (28) ・ Stories of My Failures (25) ・ Reasons for Studying Japanese (28)
華東政法大学作文コーパス	285	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏休みの思い出 ・ クラスメート ・ アルバイトについて ・ 英語を大学の必修科目にすべきか (等, 計 15 種)

独自収集作文	202 セン テンス	指定せず
--------	---------------	------

10.3.2 母語話者の産出データ

学習者データと比較する母語話者のデータとして、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を使用する。すでに述べたように、BCCWJ には多様な日本語ジャンルが含まれているが、自分の意見を比較的くだけたスタイルで書く学習者の作文に最も近いジャンルとして、今回の研究では、BCCWJ の中で、「特定目的・ブログ」を用いる。

ブログは内容別で見ると、「ビジネスと経済」(348175 語, 3.4%)、「コンピュータとインターネット」(84147 語, 0.8%)、「生活と文化」(981144 語, 9.6%)、「エンターテインメント」(837243 語, 8.2%)、「家庭と住まい」(522466 語, 5.1%)、「政治」(164834 語, 1.6%)、「健康と医学」(297345 語, 2.9%)、「学校と教育」(141151 語, 1.4%)、「科学」(87340 語, 0.9%)、「出会い」(27964 語, 0.3%)、「地域」(473599 語, 4.6%)、「特集」(1096 語, 0.009%)、「芸術と人文」(589157 語, 5.8%)、「Yahoo!サービス」(3551347 語, 34.8%)、「趣味とスポーツ」(2087135 語, 20.5%)、計 15 種 10194143 語がある。

なお、当然ながら、学習者の作文トピックとブログのトピックは一致していない。しかしながら、いずれも比較的くだけた文体で、書き手の意見を自由に書いた文章であるため、最低限の比較要件が整っていると判断した。

10.4 研究手順

本節では、リサーチクエスチョンごとに研究の手順を説明する。

RQ1「漢語サ変動詞使用量の比較」については、使用総量（延べ語数）と種類数（異なり語数）の2つの観点から、学習者による漢語サ変動詞使用量と、母語話者による漢語サ変動詞使用量の比較を行う。既存の学習者コーパスについては、KH-coder を用いて形態素解析し、その後、「する」をキーワードに検索する。以下は検索した結果の一部である。

るし、本当に言えば、良い結果ではない。これは小学生に算数を勉強させる為に、電卓の使用を禁止することと同じようにどんな勉強な教育が各自による、違いと思う。その理由は一人一人の勉強方も違うし、能力も違うからである。したがって、学校では学力成績を紙に書かせる。そこで、成績を達するために、一生懸命に勉強しなければならぬ。一番大事なことは学生に一生懸命に勉強させることができるのではないのでしょうか。それというのも、学生が日本語の一年生です。日本に勉強ことのために、日本語を毎日勉強します。でも、日本語は中国語よりはとも難しい。だから日本語がうまくなる方法について。ぼくは毎日日本語を勉強する(↓)私は日本語専門の学生として、大学一年生の時日本語を勉強し始めた。今にはもう2年3か月がある。初めて日本語を勉強している。単語や、文法や、文化など上手になると、一生懸命勉強している。(↓)私は小学校から外国語の勉強を始めた。最初勉強している。外国語がうまくなりたいなら、一番大切なものは単語が得意になる。興味が一番いい先生である。勉強した外国語は英語である。初めて英語を聞く時に、私は好奇心が強い。勉強のやる意気満々である。しかし、英語を深く勉強した後、外国語がそんな簡単に掌握できないと思う。今、大学がうまくなれるという問題を、よく考える。それから、英語と日本語を勉強する経験に結び、外国語がうまくなる方法に関して少し説明する。方法に関して少し説明する。まず、興味が一番いい先生である。勉強する外国語に興味を持っているほうがいい。興味が勉強の力をもたす。緊張感を解き、流暢で外国人と語り合う。(↓)外国語を勉強するために、一番重要なのは努力することだと思ふ。日本語の勉強の能力がだんだん高くなっていく。もちろん、人によると日本語を勉強する方法が違う。最大限まで周りの事物や環境を利用してレベルを高めるために努力しよう！(↓)私は日本語を勉強したから、日本語は本当に難しいと思ふ。聴解や、文法や、単語を努力しよう！(↓)私は日本語を勉強している学生だ。日本語を勉強している。日本語と中国語がすこし似合っている。同じな漢字でして、二つはぜんぜん違っていると思ふ。漢字と発音のほかに、立派な日本語を使う」と考えている。それで、私にとって外

図1 KH-coder を用いた kwic 画面の表示

一方、母語話者の漢語サ変動詞使用量について、BCCWJ の検索インターフェイス「中納言」を使って抽出する。なお、データサイズが異なるため、比較を行う際には、10万語あたりの調整頻度に換算する。

RQ2「使用する漢語サ変動詞の一致度の比較」については、(1)既存の学習者作文コーパスと母語話者コーパスとの比較と、(2)独自に収集したデータと母語話者コーパスとの比較、の2つの観点に分けて、それぞれ母語話者の使用している漢語サ変動詞と比較する。それぞれの調査・比較を行うことにより、(1)-トピックなどが統制された環境で書かれた、文脈依存の作文と、(2)-トピックを指定せずに非文脈依存の環境で書かれた作文において、学習者が使用している漢語サ変動詞が母語話者とどの程度に重なっているか(重なり合い)を確認する。なお、母語話者のデータと学習者のデータのサイズが大きく異なり、使用されている漢語サ変動詞の種類数が著しく異なるため、ここでは、それぞれがもっとも多用している上位50語に絞って比較を行う。

RQ3「学習者の漢語サ変動詞に関する誤用の種類」については、既存の学習者コーパス「作文対訳DB」を選んで、中国人日本語学習者が最も多く書いた「あなな国の行事について」というテーマについて質的に観察し、漢語サ変動詞に関わる誤用を含む15語例について、筆者が「なたね」の誤用分類基準を参照し、それぞれ誤用タグを付ける。タグ付けの一部を以下に示している。下線部は何らかの誤用があると判断されたもので、後ろの括弧部は訂正した内容である。

- (1) シンガポールは創立するとき（が建国されたころは），平凡な漁村があります。
 (JaZhSG058_01_1)
- (2) いったん大統領が入席後，NDPは正式開始します（正式に開始されます）。
 (JaZhSG085_01_1)
- (3) 観客は6時半ごろ習入席しています（入場しています）。
 (JaZhSG085_01_1)

こうして添削された誤用例について，筆者が「なたね」の誤用分類を参照し，(1) 誤用の要因・背景に関わるもの，(2) 誤用の内容に関するもの，の2つの観点から分類を行う。また，それぞれ複数の下位区分がある。いずれの誤用もこの2つの観点から分析することが可能であるが，ここでは，逐一例示せず，以下のように，簡単な紹介にとどまる。

表5 「なたね」の誤用分類法

範疇	誤用区分	例
誤用の 要因・ 背景	類似	被害者の親戚 → 親族
	母語干渉	「男女平等」への措施 → 意識
	レジスタ	でも → しかし
	待遇表現	ご承知のとおり → ご存じのとおり
	文体の不統一	おられる → いる
	その他	おもう → 思う
誤用の 内容	脱落	こども ø → の頃から
	付加	概ねに → 概ね
	誤形成	現女性たち → 現代女性たち
	混同	評価をもらった → 受けた
	位置	40%の日本人口は → 日本の人口の40%
	接続	から → からだとも思う
	統語的呼応	日本の女性は獲得権利は → 日本女性の獲得権利は
	語の共起	仕事を離れている → 仕事に就かない
	指示語	あの → その時

	正書法からの逸脱	ゆめい →ゆめ
	送り仮名	同 →同じ
	活用	制限されているし →おり
	文法範疇	明示した →明示している
	文字種	精神てき →精神的
	音	それぞれ →それぞれ
	その他	同一な部分 →同一の部分

上記に示した誤用分類法に基づくと、3つの例はそれぞれ以下のように分類されることが考えられる。

(1) シンガポールは創立するとき (が建国されたころは) , 平凡な漁村があります。

(a) 誤用の要因・背景：母語干渉

(b) 誤用の内容：混同

(2) いったん大統領が入席後, NDPは正式開始します (正式に開始されます)。

(a) 誤用の要因・背景：文体の不統一

(b) 誤用の内容：文法範疇

(3) 観客は6時半ごろ習入席しています (入場しています)。

(a) 誤用の要因・背景：母語干渉

(b) 誤用の内容：混同

このように、2つの誤用の観点から、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞に関する誤用の実態を捉えて分析を進める。

10.5 結果と考察

10.5.1 漢語サ変動詞使用量の比較

既述したように、漢語サ変動詞に対する学習者の理解不足は、使用量の増加に結びつく可能性もあれば、減少に結びつく可能性もある。たとえば、個々の語の用法制約を意識せ

ず、本来使ってよい場合以上に使用場면을拡大して、漢語サ変動詞を多用してしまう可能性もあるだろう。また、苦手だと自分で意識して、漢語サ変動詞を使わないように心掛け、結果的に過少使用になる可能性もあろう。そこで、本節では、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用量について、母語話者と比べてどのような量的な特徴があるかを検討する。具体的には、学習者と母語話者それぞれが使用している漢語サ変動詞の総量（延べ語数）と種類数（異なり語数）の2つの側面から調査を行った。以下、それぞれについて見てみよう。

10.5.1 (1) 漢語サ変動詞使用総量の比較

まず、漢語サ変動詞の使用総量について調べたところ、学習者と母語話者はそれぞれ2404語と2092語を使用していることがわかった。両者のデータのサイズが違うため、10万語あたりの調整頻度に換算したところ、以下のようになった。

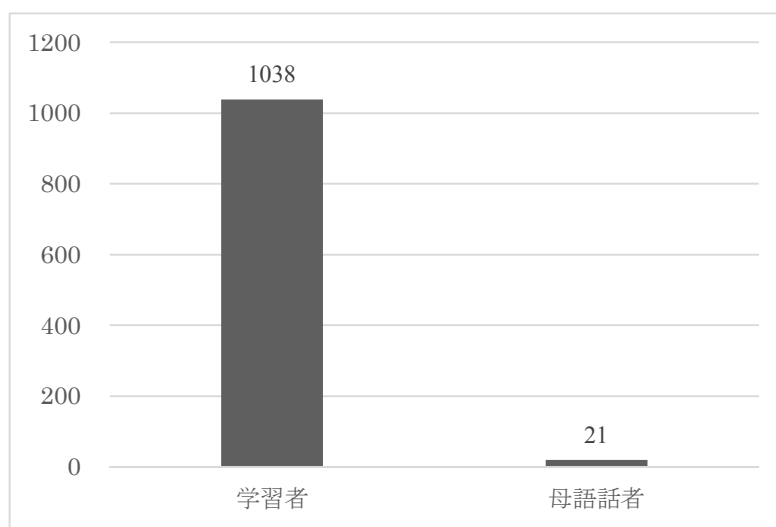


図2 漢語サ変動詞使用総量

上記を見てわかるように、学習者の漢語サ変動詞使用量は、母語話者と比べて、はるかに多かった。この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、差は有意であった ($\chi^2=54382.05$, $df=1$, $p<.001$)。つまり、漢語サ変動詞の使用量において、中国人日本語学習者ははるかに多かった。

10.5.1 (2) 漢語サ変動詞種類数の比較

上記で明らかのように、中国人日本語学習者は、漢語サ変動詞を母語話者以上に多く使用している。しかしながら、このことは、学習者が多様な漢語サ変動詞を使用していることを必ずしも意味するものではない。同じ漢語サ変動詞を繰り返し使用している可能性も否定できないからである。そこで、ここでは、使用している漢語サ変動詞の種類数について見てみよう。

学習者と母語話者の使用した漢語サ変動詞の種類数を調べたところ、それぞれ 180 語と 802 語となった。データサイズが異なるため、10 万語あたりの調整頻度に換算したところ、以下のようになった。

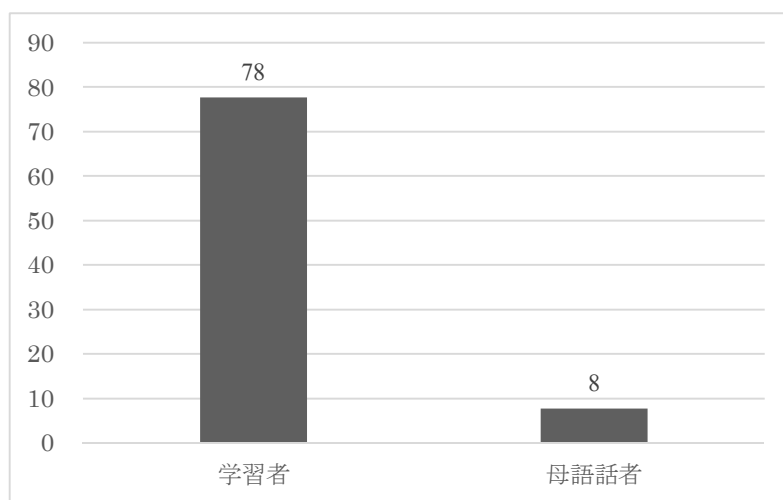


図3 使用した漢語サ変動詞の種類数

上図を見てわかるように、学習者が使用している漢語サ変動詞の種類数も母語話者よりはるかに多かった。この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、差は有意であった ($\chi^2=1166.30$, $df=1$, $p<.001$)。

このように、漢語サ変動詞の使用総量においても、使用した漢語サ変動詞の種類数においても、母語話者より、中国人日本語学習者のほうがはるかに多いことが明らかにされた。すでに9章で述べたように、中国人日本語学習者は漢語サ変動詞について、苦手意識を持っており、実際のコミュニケーションの中で、漢語サ変動詞の使用を回避している可能性もあったわけだが、実際には、母語話者以上に漢語サ変動詞を過剰使用している。苦手意識以上に母語で馴染みのある漢語を用いた表現を多用している傾向がより優勢に現れていると言えるだろう。

10.5.2 使用する漢語サ変動詞の一致度の比較

前節で見たように、学習者は母語話者以上に多様な種類・量の漢語サ変動詞を使用している。学習者がある程度幅広い漢語サ変動詞の知識を持っていると考えれば、母語話者が多用する漢語サ変動詞とおよそ類似した語を使用していると考えられるが、果たしてそのようになっているのだろうか。この点を検証するために、本節では、使用している漢語サ変動詞の内容の一致度に注目して分析を行う。

すでに述べたように、(1) 既存の学習者作文データ、すなわち、何らかのトピックが与えられた中で書かれた文脈依存の内容と、(2) 独自に収集した、特定のトピックの影響がない状況の中で書かれた非文脈依存の内容それぞれについて、学習者の使用している漢語サ変動詞の内容を母語話者と比較した。すでに述べたように、ここでは、学習者と母語話者それぞれの使用している頻度上位 50 語に絞って比較を行う。

10.5.2 (1) 文脈依存の場合

学習者と母語話者の頻度上位 50 語を比較したところ、重複語は 10 語のみであった。つまり、一致率は 20.00%にとどまることとなる。すでに述べたように、学習者データと母語話者データでは、トピックが大きく異なるため、使用する漢語サ変動詞の種類が完全に一致しないことは予想されるが、高頻度漢語サ変動詞に絞って見ても、重複が 2 割程度にとどまることは、学習者は母語話者と異なる漢語サ変動詞を多用していることを示す。

学習者の抱えている問題をより詳細に吟味するため、重複語に加え、学習者のみ使用している語、母語話者のみ使用している語を調査した。結果は以下のとおりである。

表 6 文脈依存の学習者と母語話者の頻度上位 50 語

語	
重複語	影響, 開発, 参加, 使用, 紹介, 存在, 発表, 勉強, 利用, 理解
学習者のみ	暗記, 解決, 改善, 感心, 感動, 緊張, 継承, 結婚, 研究, 見学, 後悔, 交流, 公表, 合格, 失敗, 実現, 主張, 重視, 心配, 成功, 生活, 説明, 相談, 卒業, 尊敬, 注意, 提供, 努力, 発展, 表記, 表現, 復習, 保存, 放棄, 輸入, 流行, 留学, 旅行, 了解, 練習

母語話者のみ	圧倒, 解放, 開催, 確認, 完成, 期待, 記載, 供給, 掲載, 公開, 更新, 構成, 採用, 撮影, 実施, 実証, 実践, 収録, 出演, 整備, 設置, 設定, 創造, 逮捕, 注目, 通用, 展示, 登録, 発見, 発売, 反映, 販売, 表示, 評価, 変更, 報告, 報道, 放送, 予想, 用意
--------	---

すでに述べたように、母語話者のデータでは、比較的公的な内容も扱われているため、一部の難語が母語話者にのみ使用されていることは当然の結果と言えるが、上記のリストをよく見ると、母語話者のみで使用しているものの中でも、「確認する」、「発見する」、「注目する」、「予想する」、「用意する」など、必ずしも公的な文脈を前提としない、日常的な場面でも使われるものも含まれている。今後の漢語サ変動詞指導の観点から考えれば、母語話者が多く使用しているものの、学習者がうまく使えていない、こうした日常的漢語サ変動詞について、体系的な指導を行っていく必要性が示唆された。

10.5.2 (2) 非文脈依存の場合

続いて、非文脈依存のデータを用いて、同じく学習者と母語話者それぞれの多用している漢語サ変動詞上位 50 語を比較してみよう。その結果、重複は 11 語で 22.00%であった。異なる文脈タイプであっても、母語話者との一致度は相変わらず低いことがわかった。同様に、学習者の抱えている問題を明らかにするため、重複語に加え、学習者のみの多用語と母語話者のみの多用語をそれぞれ調べたところ、以下のようになった。

表 7 独自収集したデータと母語話者データにおける漢語サ変動詞上位 50 語

	語
重複語	確認, 撮影, 参加, 使用, 紹介, 存在, 発見, 発表, 勉強, 利用, 理解
学習者のみ	暗記, 運動, 加速, 学習, 感謝, 感動, 関係, 関連, 拒否, 協力, 屈託, 決心, 結婚, 研究, 見物, 考慮, 合格, 参考, 散歩, 自習, 実現, 実行, 準備, 上達, 食事, 進歩, 生活, 精励, 説明, 洗濯, 掃除, 体験, 対照, 注意, 調査, 転換, 努力, 発生, 練習
母語話者のみ	圧倒, 影響, 解放, 開催, 開催, 完成, 期待, 記載, 供給, 掲載, 公開, 更新, 構成, 採用, 実施, 実証, 実践, 収録, 出演, 整備, 設置, 設定,

創造, 逮捕, 注目, 通用, 展示, 登録, 発売, 反映, 販売, 表示, 評価,
変更, 報告, 報道, 放送, 予想, 用意

さきほど母語話者のみが使用している日常語として例示した語のうち、「確認する」と「発見する」について使用が確認できたが、一方で、「注目する」、「予想する」、「用意する」などについては、学習者が依然として使用できていない。この結果からも、母語話者が使用している日常的な漢語サ変動詞を学習者に意識化させることが重要であると言えるだろう。

10.5.3 漢語サ変動詞に関する誤用の種類

以上で、中国人日本語学習者は、母語話者よりも漢語サ変動詞を多く使用する一方、使用される語の中身は母語話者とほぼ一致しておらず、母語話者のように、漢語サ変動詞を自然に運用できていない可能性が示唆された。では、学習者の使用している漢語サ変動詞には、具体的にどのような誤用があるか確認してみよう。

まず、「誤用の要因・背景」については、以下のような結果が得られた。

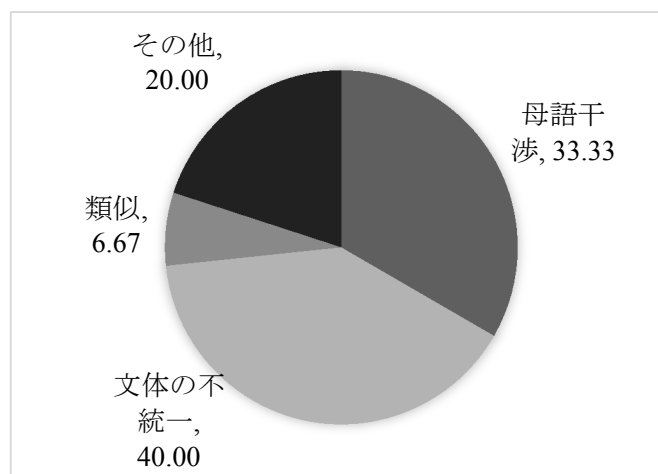


図4 誤用の要因・背景別誤用率

上図からわかるように、誤用の要因・背景の観点から見ると、「母語干渉」、「文体の不統一」、「類似」、および「その他」の4種類の誤用が見られる。そのうち、「文体の不統一」に起因する誤用が最も多く、「母語干渉」に起因する誤りがそれに次ぐ。この2種類は、学

習者の誤用の7割以上を占めている。

(4) また日本に行ったら、日本とう名の恋人の笑顔が見えることを期待してる(期待している)。(文体の不統一)

(5) 1965年8月9日シンガポールはマレーシアから脱離し(離脱し)、独立しました。(母語干渉)

(4) について言えば、母語話者がくだけた文脈でしか使わない「～てる(～ている)」という表現が使用されることもないわけではないが、一般に、漢語サ変動詞はある程度まとまった文体を要求する。すなわち、漢語サ変動詞を使いながら、このようなくだけた形を使うことは不適切である。(5) に関して言えば、中国語では、「脱離」という言葉ではなく、「離脱」という言葉が代わりに使われている。意味的には同じだが、両文字の順序が変わったいわゆる中日異形同義語について理解できていないため、こういった誤用を犯してしまった可能性が想定される。

以上をまとめると、「誤用の要因・背景」の観点から言えば、文体、すなわち、漢語サ変動詞がもつ固有のスピーチレベル、および母語と異なる形の語の使用について、正確な知識を得ることがとくに重要であると言えるだろう。

続いて、誤用の内容については、以下のような結果が得られた。

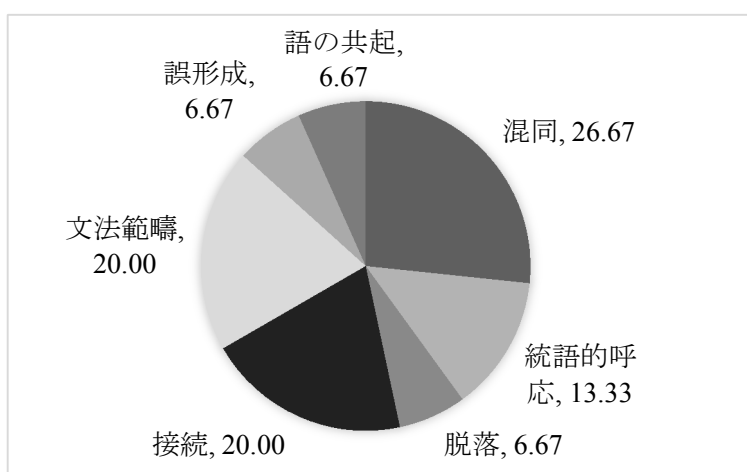


図5 誤用の内容別誤用率

上図からわかるように、誤用の内容の観点から見ると、「接続」、「文法範疇」、「混同」、「統語の呼応」、「誤形成」、「脱落」、「語の共起」のように、7種類の誤用パターンが見られる。そのうち、「混同」、「接続」、「文法範疇」の3種類が最も多く、誤用全体の約7割を占めている。

(6) 独り暮らしの生活は大変だったけど、問題があっても、あきらめないで、自分で理解して（理解するようにして）、だんだん自分も強くなってきたのを感じたのだ。

(接続)

(7) 午後は花嫁と花婿のフラットの一階で宴会と結婚儀式を挙行します（が挙行されま

す）。（文法範疇）

(8) いつ始めたのか忘れるけど、毎年のその日にNDPを必ず進行します。（NDPを必ず行います。／～を必ず挙行します。）

(混同)

(6) については、「理解する」の活用形の使用が不適切であることに起因すると考えられる。学習者が漢語サ変動詞の各々の活用パターンについて十分に理解しておらず、結果的に、接続が不自然な文章を産出してしまったと考えられる。また、(7) については、学習者が漢語サ変動詞の「自他性」の知識を十分に持っていないことが示唆される。「挙行する」は辞書などにおいて基本形で示されるのが一般的であるが、実際の日本語においては、「挙行される」という受身形で使用されるのが一般的である。学習者はこうした典型的な自他パターンの知識を持っていれば、こうした誤りが解消できるのであろう。さらに(8) については、「進行」という言葉は中国語にもあるが、日本語においては、使用場面がきわめて制約的で、中国語と異なることは、学習者が十分に理解しておらず、結果としてこういった誤りを犯してしまったと考えられる。こういった中日同形異義語の理解不足、あるいは、母語の干渉に起因するものに関して十分注意を払う必要がある。

以上、誤用の要因・背景、そして誤用の内容それぞれから分析を行ったわけであるが、2つの観点をあわせると、以下のようなになる。

表 8 誤用の分類

誤用の要因・背景	誤用の内容	割合
母語干渉	混同	26.67
	統語的呼応	6.67
文体の不統一	接続	13.33
	文法範疇	13.33
	誤形成	6.67
	脱落	6.67
類似	統語的呼応	6.67
	接続	6.67
その他	語の共起	6.67
	文法範疇	6.67

上表より、2つの観点をあわせて見ると、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞誤用には、母語の干渉による混同の誤りが最も多く、文体不統一による接続と文法範疇の誤りがそれに次ぐことが明らかにされた。このように、中国人日本語学習者は、母語の干渉を防ぐとともに、母語話者の自然な運用を身に付けることが重要であろう。

10.6 まとめ

本章では、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用に着目して、量的観点と質的観点から比較・分析を行い、有益な知見を得た。以下、リサーチクエスチョン順に簡潔にまとめる。

まず、RQ1「漢語サ変動詞使用量の比較」においては、母語話者と比べながら、学習者の漢語サ変動詞使用量を調べた。結果として、使用総量においても、使用している種類数においても、学習者は漢語サ変動詞を過剰使用する傾向が強く示された。この点については、苦手な漢語サ変動詞の使用を避けようとする気持ちよりも、母語において馴染みの深い漢語を使おうとする意識のほうが優先するためだと推測される。

次に、RQ2「使用する漢語サ変動詞の一致度の比較」については、使用している漢語サ変動詞を母語話者と内容の一致度を比較したところ、重複が2割程度で非常に低いことが確認された。また、学習者は、どちらかと言えば、公的な文脈で使用する難度の高い漢語サ変動詞だけでなく、一般的で日常的に使用される漢語サ変動詞の中にも使用できていな

いものが多く存在することが明らかになった。これらの原因についても、母語干渉がもっとも影響していると思われる。

また、RQ3「漢語サ変動詞に関わる誤用の種類」については、学習者の漢語サ変動詞使用には、母語干渉による、混同のパタンの誤りが最も多く、文体不統一による接続の誤りと、文法範疇の誤りがそれに次ぐことが確認された。

以上で見たように、母語にある漢字漢語に馴染みが深い中国人日本語学習者にとって、漢語サ変動詞は和語などより思いつきやすいため、過度に使用していると言える。ただ、漢語サ変動詞の使用量が多い一方、使用している漢語サ変動詞の内容の一致度は、母語話者とずれが大きい。さらに、多様な誤用が存在し、またその中では、母語干渉による混同や、文体不統一に関わる接続の誤用が特に多いことが明らかになった。これらは、今後の学習者の漢語サ変動詞指導の方向性を示すものとなる。

第 11 章 コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発

11.1 本章の目的と構成

前の章でも述べたように、学習者にとって望ましい漢語サ変動詞のシステムを考案するうえでまず考慮すべきは、学習者が実際にどのような意識と理解度を持っているかを知ることである。そうした観点から、本第Ⅲ部のはじめとなる 9 章において、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞に対する意識と理解度調査を実施した。結果として、学習者の漢語サ変動詞に対する理解度の自己評価は低く、活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性など、漢語サ変動詞の多様な特性について十分に理解できていないことが明らかになった。また、これまで受けてきた指導に対しては、より詳しい指導を受けたいとの感想を持つものが多く、今後の指導希望として、多様な漢語サ変動詞指導を望む声が多いことが確認された。続いて、こういった意識を抱えている学習者の漢語サ変動詞使用にはどういった特徴があるか確認するため、10 章において、既存の学習者コーパスと筆者が独自に収集した中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の作文データに基づき、母語話者の使用と比較しながら、学習者の漢語サ変動詞使用を観察した。その結果、学習者は、苦手意識を持っているにもかかわらず漢語サ変動詞を過剰使用すること、使用する漢語サ変動詞の種類は母語話者と大きくずれていること、使用できない語が多いこと、多くの誤用が見られ、とくに母語の干渉による混同の誤りが多いことなどが明らかになった。

こうした問題は、学習者が、母語話者による十分な量の漢語サ変動詞の使用例に触れていないためであると考えられる。この点を解決するには、一義的には、日本語環境に没入することが効果的であるが、限られた時間の制約の中で、学習効率を高めるためには、母語話者の膨大な言語使用の実例を効率的に要約し、その情報を学習シートとして提供し、学習者に自習させることが有用であろう。なお、この時、コーパスから得られた膨大な情報の中で、何に重点を置いて提示するかという判断が必要になる。一般に、直感や内省に頼った言語研究と比較した場合、コーパス分析の利点は、様々な言語現象に対して、頻度と実例を提示する点にあるとされる。頻度は、語の用法の標準性や典型性を要約したものであり、実例は語の実際の使われ方を例証するものである。これらは本来不可分なものであるが、限られた時間で効率的にコーパスの知見を学ぼうとする場合、いずれかに重点を置くことが現実的であろう。ただ、そうした場合、頻度を優先すべきか、実例を優先すべきかについては、これまではっきりした結論が出ていない。そこで、本研究においては、コーパス情報を提示する方法として、頻度重視、あるいは、実例重視のいずれが学習をよ

り促進するか比較・検討していくこととする。もっとも、指導時間に一定の余裕がある場合は、これらを一つに絞らず、両面を提示できる場合もあるだろう。そこで、本研究では、いずれの手法が有効であるかを比較するのみならず、両方をともに提示する場合は、どちらを先に提示するのがより有効であるかもあわせて検討していく。

なお、こうした学習の効果を厳密に測定するためには、一定数の被験者を集めた実験を行うことが望ましい。しかしながら、本章においては、使用する学習シートそのものが試行的なものであるため、おおよその傾向を掴むことを目的として、実験は試行的で小規模なものとする。今回の調査で得られた結果をふまえ、学習シートをさらに改善させ、より大規模な実験を経て、具体的な指導法の中に組み込んでいくことについては、今後の課題としたい。

本章では、まず、コーパスから得られた頻度の情報を重視する数値型学習シートと、同じくコーパスから得られた実例を重視する実例型学習シートをそれぞれ試作し、学習者にこれらを使って学習させることで、漢語サ変動詞の理解がどのように変化したかを検証することとしたい。

11.2 リサーチクエスチョン

本論文の第Ⅱ部で得られた重要漢語サ変動詞の特性は、学習者にとってきわめて重要なものではあるが、その内容をどのように要約して学習者に提示すべきかについては、必ずしも明確な方向が示されていない。コーパス調査から得られた知見を学習者に提示する方法については、従来、様々なアプローチが試されているが、本研究では、コーパスから得られた頻度情報を強調して示す数値型学習シートと実際の用例を示す実例型学習シートの2種類の学習シートを取り上げ、いずれがより有効であるかを検証していく。また、実際の授業での使用を考えれば、指導は必ずしも1回に限られるものではなく、学習シートの提示順も必ずしも限られたものではない。そうした場合、1回学習と2回学習でどのように効果が違うのか、また、2回学習であれば、数値型学習シートと実例型学習シートをどのように組み合わせるのが効果的であるかについても明らかにしていく必要がある。こういった趣旨にそって、リサーチクエスチョンを以下のように設定する。

RQ1 1回学習を行う場合、数値型学習シートと実例型学習シートのどちらの学習法がより効果的であるか。

RQ2 2回学習を行う場合、数値型学習シートと実例型学習シートをどのような順番で組み合わせるのがより効果的であるか。

RQ3 数値型学習シートと実例型学習シートという2種類の学習法に対して、学習者はそれぞれどのような感想を持つか。

これらの検討を通して、コーパスから得られた知見を活用した、中国人日本語学習者のための漢語サ変動詞指導の在り方を考えていくのが本章のねらいである。

11.3 研究方法

すでに述べたように、本研究では、数値型学習シートと実例型学習シートという2種類の学習シートを使って、学習者に学習を行わせる。それぞれの学習の成果を測るため、一般的な漢語サ変動詞の知識を問うテストを別途開発する。また、今後の学習シートの改善のためのヒントを得るため、学習者にそれぞれの学習スタイルについて、感想を書いてもらう感想シートも開発する。以下、それぞれについて概説する。

11.3.1 学習シートの開発

本研究では、これまでのコーパス調査で明らかになった、現代日本語における高頻度・汎用的漢語サ変動詞、その活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性といった多様な特性を学習シートの形で要約し、学習者に自習させ、学習前と学習後で漢語サ変動詞に対する理解がどのように変化しているかを観察していく。本研究で開発する学習シートに盛り込む内容は、(A) 高頻度・汎用的漢語サ変動詞、(B) 活用上の選好性、(C) 内部構成性、(D) 自他性、(E) 語彙的排他性、の5項目とする。

なお、あまりに多くの内容を詰め込むと、自習が困難になると考え、学習シートに盛り込む情報量は一定範囲にとどめ、また、表現についても、学習者にとってわかりやすくするよう工夫を行う。さらに、単にシートを目で追って読むだけでなく、確実に学習を行わせるため、いずれの学習シートにも一定量のタスク（練習問題）を付ける。以下、それぞれの学習シートについて紹介する。

11.3.1.1 数値型学習シート

以下、上述の漢語サ変動詞に関する知識の(A)から(E)までの5項目について、具体

的な学習シートの内容を示す。

(1-A) 高頻度・汎用的漢語サ変動詞

日本語において、漢語サ変動詞はきわめて多様な種類が存在するが、学習上何が特に重要なのかはこれまで明らかになっていない。学習者が漢語サ変動詞を学ぼうとする場合、まず優先されるべきは、どのような漢語サ変動詞が高頻度かつ汎用的であるかを知ることであろう。そこで、学習シートのはじめに、高頻度・汎用的な漢語サ変動詞を示す。高頻度・高汎用漢語サ変動詞上位 10 語と、これらの語の高頻度・高汎用ポイントをあわせて示している。その後にそれぞれの単語と高頻度・高汎用ポイントとともに書き写させる作業欄を用意している。これは、機械的な作業ではあるが、このような作業タスクを課すことで、学習者が学習シートを確実に学んだことが保証される。この部分の内容は以下に示したとおりである。

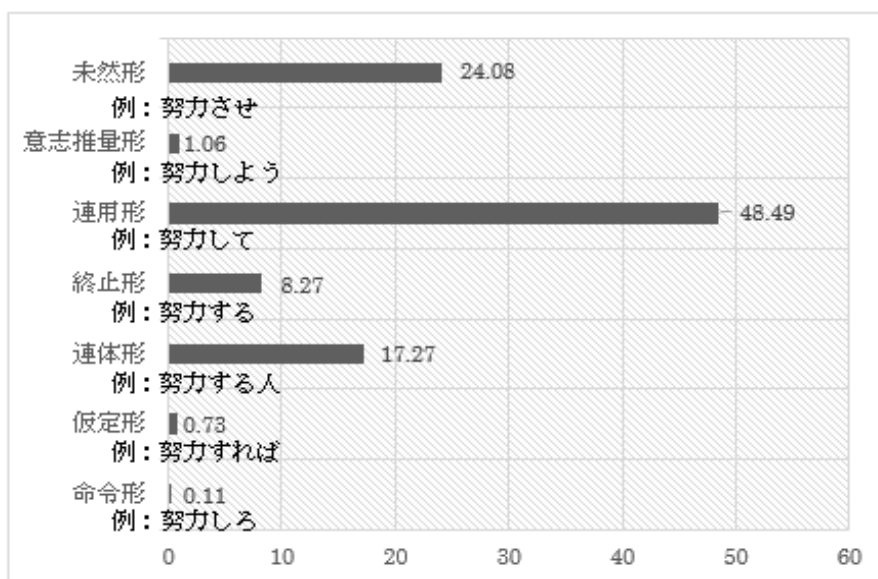
下表に示しているのは、現代日本語において、最も高頻度、かつ、幅広く使用されている漢語サ変動詞の上位 10 語です。高頻度・高汎用ポイントは値が大きいもののほど、高頻度で、かつ、汎用性が高いということを示しています。それぞれのポイントをよく見たうえで、単語とポイントを右側に書き写してください。

順位	語	高頻度・高汎用ポイント	書き写し欄 (単語・ポイント)
1	存在する	12.5	
2	利用する	11.8	
3	紹介する	9.0	
4	説明する	9.0	
5	使用する	8.7	
6	確認する	8.3	
7	理解する	7.1	
8	表示する	6.1	
9	発見する	5.9	
10	発生する	5.7	

(1-B) 活用上の選好性

以上で、学習者は重要な漢語サ変動詞について、一定の理解を得たと考えられる。ただし、実際の日本語の中で使っていくためには、それぞれの語を適切な形に活用させる必要がある。しかしながら、主要な漢語サ変動詞がどのような活用形で多く使用されるのかはこれまでまったく指導されていない。そこで、学習シートの項目の一つとして、高頻度・汎用的漢語サ変動詞がどのような活用形で多く使用されるかを示す。以下のように、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に含まれる各活用形、およびそれぞれの割合をグラフで示し、その後、上位3種類の活用形に書かせるタスクを用意している。

動詞は実際の使用において、様々な活用形をとります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には以下のような活用形があります。



上記のグラフを見て、漢語サ変動詞における上位3種の活用形の名称を下表に書いてください。その後、「完成する」という語を例にそれぞれの活用形を書いてください。

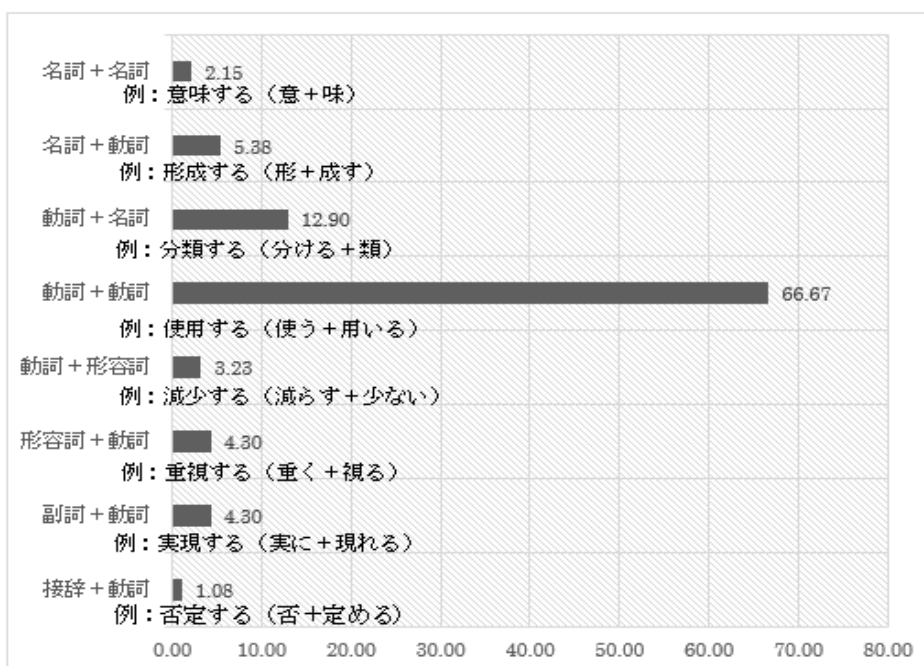
	活用形の名称	「完成する」の各活用形
1位		
2位		
3位		

(1-C) 内部構成性

以上で、どのような漢語サ変動詞が重要であり、またそれらがどのような活用形を取りやすいかといった点が明らかになった。しかしながら、学習者が未知の漢語に出会った場合、それが漢語サ変動詞になりやすいかどうかを自身で判断するうえでは、漢語サ変動詞の漢語部の中に見られる特有の構成パターンを知っていることが望ましい。そこで、以下では、高頻度・汎用的漢語サ変動詞が多く占める内部構成パターンについて示す。内部構成性については、品詞結合と意味結合の2種類の観点から分析を行ったため、それぞれの観点から、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特性を示し、その後、上位3種の結合パターンを書かせ、語を対応する結合パターンに入れるタスクを付している。この部分の学習シートの内容は以下となる。

(1) 品詞結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」であるため、品詞結合のパターンは「動詞+動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ+目」であるため、品詞結合パターンは「動詞+名詞」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような品詞結合パターンが見られます。



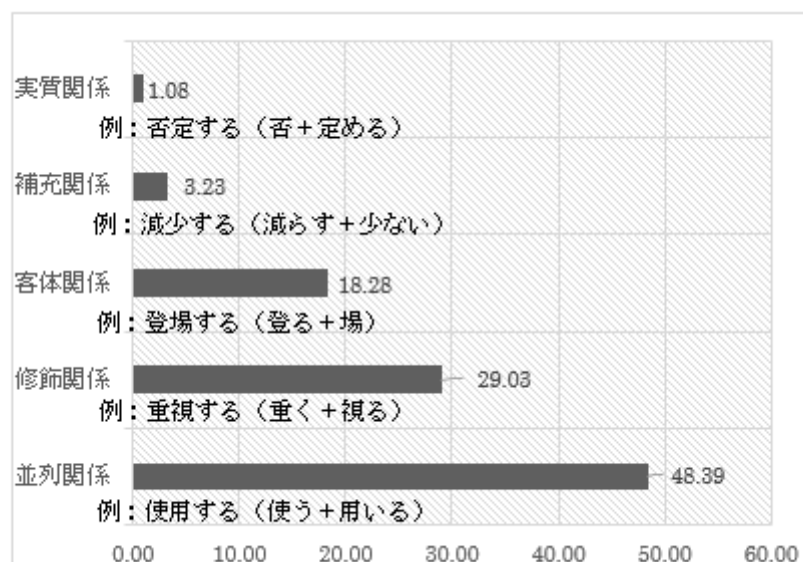
上記のグラフを見て、漢語サ変動詞に最も多い上位3種類の品詞結合パターンを答えてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの品詞結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

A. 販売する B. 用意する C. 心配する

	品詞結合パターン	語例
1位		
2位		
3位		

(2) 意味結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているので、「並列關係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係（客體關係）が示されているので、「客體關係」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような意味結合パターンが見られます。



上記のグラフを見て、漢語サ変動詞に最も多い上位3種類の意味結合パターンを書いてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの意味結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

A. 主張する

B. 選択する

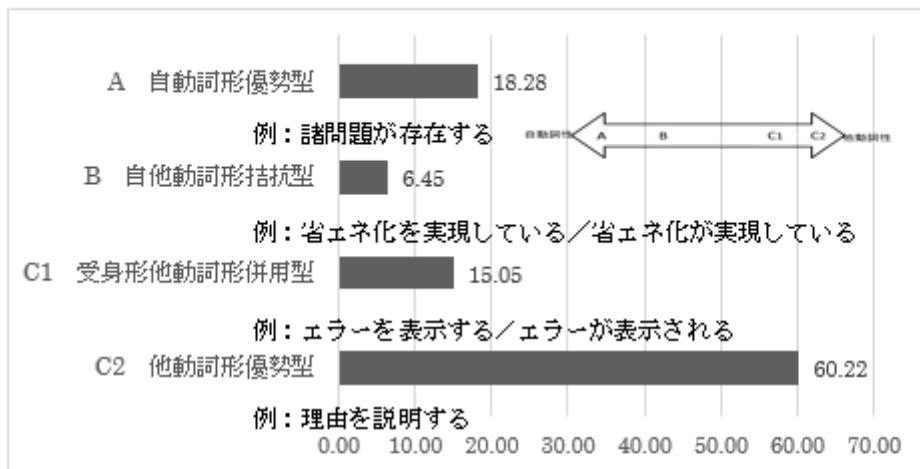
C. 分類する

	意味結合パターン	あてはまると思う語例
1位		
2位		
3位		

(1-D) 自他性

以上で、学習者は重要漢語サ変動詞や、その活用上の選好性と内部構成性について一定の理解ができたと思われるが、漢語サ変動詞を日本語の中で自然な形で運用していくうえで欠かせないのは、個々の漢語サ変動詞が、自動詞で使われやすいか、他動詞で使われやすいかという知識である。そこで、コーパスで特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞について、それぞれの使いやすい自他形式を示す。下記のように、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の自他特性に基づく4分類それぞれの割合を示し、タスクを付けている。

漢語サ変動詞の中には、自動詞のみ、もしくは、他動詞のみで使うものもあれば、自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また、他動詞の中には、能動形で多く使用するものもあれば、受身形で多く使用するものもあります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞を以上の点で分類すると、以下のA, B, C1, C2の4種類になります。自他性の観点でこの4種類の関係を示すと、以下のようになります。



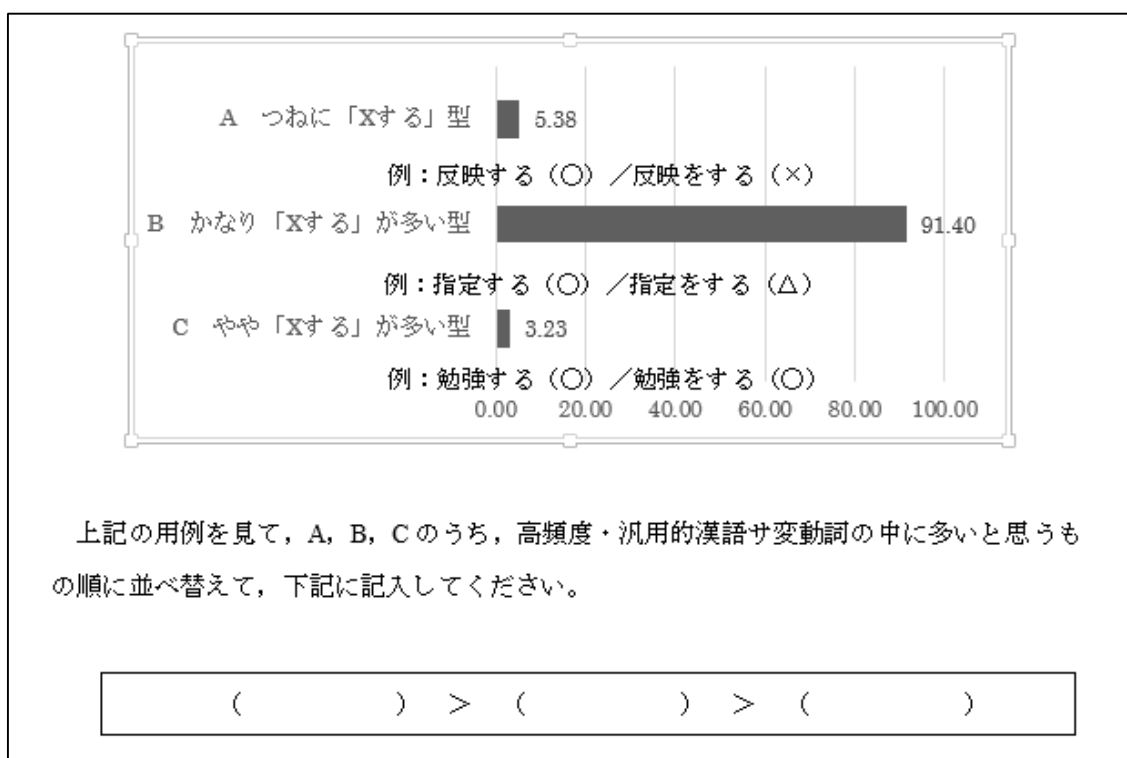
上記のグラフを見て、A, B, C1, C2のうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > () > ()

(1-E) 語彙的排他性

漢語サ変動詞の用法を正しく理解するためには、漢語サ変動詞のみならず、それとほぼ同様の意味合いを表す「～をする」形との関係を知っておく必要がある。そこで、語彙的排他性については、高頻度・汎用的漢語サ変動詞を語彙的排他性の観点から分類した結果を示し、その後、語彙的排他性の高い順に並べ替えるタスクを付している。

漢語サ変動詞は、「Xする」(確認する)の形をとりますが、「Xをする」(確認をする)の形でも同じ意味を表現することができます。高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、以下のグラフで示すように、(A) つねに「Xする」の形で使用するもの、(B) かなり「Xする」の形が多いもの、(C) やや「Xする」の形が多いもの、の3種類に分かれます。



以上がグラフや値を重視する数値型学習シートの概要である。数値型学習シートは、コーパスから得られた頻度の情報をきわめて効果的な形で学習者に示すことができる。とくに、実際の数字を見せるだけではなく、棒グラフなどを併用することで、漢語サ変動詞の様々なものの中で、実際に使われる形がごく一部に限定されていることを、学習者は直感的に理解できるだろう。一方で、こうした学習シートには限界も想定される。それは、実際の日本語の中で漢語サ変動詞がどのように使われているか、実例が十分提示されていないため、理解が表面的な段階にとどまり、学習者が真の意味で漢語サ変動詞を使えるようにならないという可能性である。

11.3.1.2 実例型学習シート

次に、実例型学習シートについて、同じく漢語サ変動詞の知識を (A) から (E) までの5つの観点に分けて学習シートの内容を概観する。

(2-A) 高頻度・汎用的漢語サ変動詞

はじめに、高頻度・汎用的漢語サ変動詞にはどのようなものがあるかを示す。その際、高頻度・高汎用的漢語サ変動詞の上位10語を順に示し、コーパスから1例ずつ抽出して、

加工したうえで示す。学習者に各用例を読んだ後、それぞれの語を用例の中から見出して線を引いて、語を書き写させる作業を要求している。この部分の内容は以下のとおりである。

下表に示しているのは、現代日本語において、最も高頻度、かつ、幅広く使用されている漢語サ変動詞の上位 10 語です。用例をよく見たうえで、用例中に含まれる漢語サ変動詞に線を引き、元の語を右側の欄に書き写してください。

例：	語	用例	書き写し欄
	勉強する	彼は英語を勉強している。	勉強する

順位	語	用例	書き写し欄
1	存在する	多種多様なものが存在している。	
2	利用する	このサービスを利用するには、カードが必要です。	
3	紹介する	DVD ビデオの作成について紹介します。	
4	説明する	この文章は、登場人物について説明している。	
5	使用する	コピー機を使用してください。	
6	確認する	値段をよく確認しましょう。	
7	理解する	相手の話しの意味を理解しましょう。	
8	表示する	ここに印刷画面が表示されます。	
9	発見する	キノコの化石は発見されていません。	
10	発生する	火災が発生したのです。	

(2-B) 活用上の選好性

漢語サ変動詞の活用上の選好性について、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に含まれる各活用形、およびそれぞれの頻度情報を実例の数とあわせて示したあと、上位 3 種類の活用形に書かせるタスクを付けている。内容は以下のとおりである。

漢語サ変動詞は実際の使用において、様々な活用形を取ります。「説明する」を例にすると、「説明する。」(終止形)、「説明する内容」(連体形)、「説明してみる」(連用形)、「説明しようとする」(意志推量形)、「説明すれば」(假定形)、「説明しろ」(命令形)のように、多様な活用形をとります。以下に高頻度・汎用的漢語サ変動詞がとる活用形を示します。

- (1) インターネットを利用して調べる。(連用形)
- (2) 試合が開催されてよかった。(未然形)
- (3) 次のルートを利用すれば間に合う。(假定形)
- (4) 「勉強しろ」と父に厳しく叱られた。(命令形)
- (5) 数字は画面の一番下に表示されている。(未然形)
- (6) 電話で確認しておく。(連用形)
- (7) 日本を代表する企業や官庁です。(連体形)
- (8) その内容を理解しようとした。(意志推量形)
- (9) 選挙の結果が大いに注目された。(未然形)
- (10) ルールを規定する必要があります。(連体形)
- (11) お互い紹介してください。(連用形)
- (12) 手順を説明しながら仕事をする。(連用形)
- (13) ここまで勉強してきた。(連用形)
- (14) 特別な委員会が設置されている。(未然形)
- (15) 自分で決定して自分で責任をとる。(連用形)
- (16) 労働時間が価値と比較して相対的に少ない。(連用形)
- (17) 教育に関しては、補助金が数多く存在する。(終止形)

上記の用例を見て、漢語サ変動詞が最も多い活用形、2番目に多い活用形、3番目に多い活用形を調べて書いてください。また、「完成する」を例にそれぞれの活用形を書いてください。

	活用形の名称	「完成する」の各活用形
1位		
2位		
3位		

(2-C) 内部構成性

内部構成性については、品詞結合と意味結合の観点に分けて、高頻度・汎用的漢語サ変

動詞における各結合パタンの量的関係を実例の数とあわせて示す。実例を読んだ後、実例の数で反映された結合パタンの順位情報を書かせるタスク、および語を対応する結合パターンに入れるタスクを付している。内容は以下のとおりである。

(1) 品詞結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的結合関係が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」であるため、品詞結合のパターンは「動詞+動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ+目」であるため、品詞結合パターンは「動詞+名詞」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような品詞結合パターンが見られます。

- (1) 使用（する）＝使う+用いる（動詞+動詞）
- (2) 確認（する）＝確かめる+認める（動詞+動詞）
- (3) 注目（する）＝注ぐ+目（動詞+名詞）
- (4) 登場（する）＝登る+場（動詞+名詞）
- (5) 否定（する）＝否+定める（接辞+動詞）
- (6) 選択（する）＝選ぶ+択ぶ（動詞+動詞）
- (7) 形成（する）＝形+成す（名詞+動詞）
- (8) 表示（する）＝表す+示す（動詞+動詞）
- (9) 減少（する）＝減らす+少ない（動詞+形容詞）
- (10) 分類（する）＝分ける+類（動詞+名詞）
- (11) 設置（する）＝設ける+置く（動詞+動詞）

（一部）

	品詞結合パターン	語例
1位		
2位		
3位		

(2) 意味結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているので、「並列関係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係(客体關係)が示されているので、「客体關係」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような意味結合パターンが見られます。

- (1) 表示(する) = 表す + 示す (並列關係)
 - (2) 決定(する) = 決める + 定める (並列關係)
 - (3) 実施(する) = 実(に) + 施す (修飾關係)
 - (4) 増加(する) = 増やす + 加える (並列關係)
 - (5) 評価(する) = 評う + 価 (客体關係)
 - (6) 提供(する) = 提供する + 供える (並列關係)
 - (7) 予想(する) = 予め + 想う (修飾關係)
 - (8) 期待(する) = 期つ + 待つ (並列關係)
- (一部)

上記の用例を見て、漢語サ変動詞における意味結合パターンの上位3種類を教えてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの意味結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

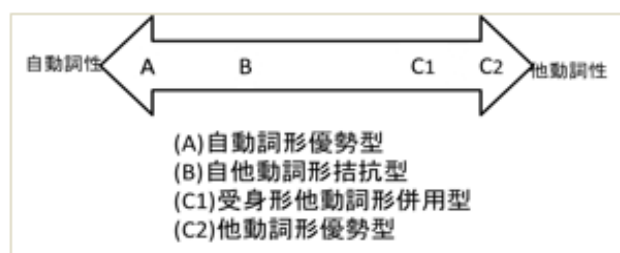
A. 主張する B. 選択する C. 分類する

	意味結合パターン	あてはまると思う語例
1位		
2位		
3位		

(2-D) 自他性

自他性については、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の自他特性に基づく4分類それぞれの割合にあわせた数の実例を示す。その後、多い順に各分類を並べ替えるタスクを付けている。内容は以下のとおりである。

漢語サ変動詞の中には、自動詞のみ、もしくは、他動詞のみで使うものもあれば、自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また、他動詞の中には、能動形で多く使用するものもあれば、受身形で多く使用するものもあります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞を以上の点で分類すると、以下のA, B, C1, C2のような4種類になります。自他性の観点でこの4種類の関係を示すと、以下のようになります。



- (1) 商売が成立する。(A 自動詞形優勢型)
- (2) 画像を選択することができる。(C2 他動詞形優勢型)
- (3) 政府高官との対話をを要求した。(C2 他動詞形優勢型)
- (4) 自分の目標を認識する。(C2 他動詞形優勢型)
- (5) 作品を発表した。(C2 他動詞形優勢型)
- (6) わたしの答えを期待していた。(C2 他動詞形優勢型)
- (7) 考え方が変化した。(A 自動詞形優勢型)
- (8) 精神が大切であることを主張しています。(C2 他動詞形優勢型)
- (9) 女性が解放された。(C1 受身形他動詞形併用型)
- (10) 課題解決のための活動を展開する／が展開する必要があります。(B 自他動詞形拮抗型)
- (11) 歴史的な要素を無視できない。(C2 他動詞形優勢型)
- (12) 4言語を使用できる。(C2 他動詞形優勢型)
- (13) 私を理解してくれた。(C2 他動詞形優勢型)
- (14) 各地で夏至祭りが開催されている。(C1 受身形他動詞形併用型)
- (15) 道家の独自性を強調する。(C2 他動詞形優勢型)
- (16) 諸問題が存在する。(A 自動詞形優勢型)

上記の用例を見て、A, B, C1, C2のうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > () > ()

(2-E) 語彙的排他性

語彙的排他性については、以下に示しているように、語彙的排他性の観点から分類した結果に沿って、その分類の割合とあわせて、各分類の実例を示す。その後、語彙的排他性の高い順に並べ替えるタスクを付している。

漢語サ変動詞は、「Xする」(確認する)の形をとりますが、「Xをする」(確認をする)の形でも同じ意味を表現することができます。高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、下記の用例で示すように、(A)つねに「Xする」の形で使用するもの、(B)かなり「Xする」の形が多いもの、(C)やや「Xする」の形が多いもの、の3種類に分かれます。

- (1) 内容ごとに分類した／分類をした。(Bかなり「Xする」型)
- (2) この言明が情動を否定した／情動の否定をした。(Bかなり「Xする」型)
- (3) 食料を保存する／食料の保存をする。(Bかなり「Xする」型)
- (4) 慎重に判断し／判断をしてください。(Bかなり「Xする」型)
- (5) ここで問題点を指摘して／の指摘をしておく。(Bかなり「Xする」型)
- (6) 様々な観点から検討する／検討をする。(Bかなり「Xする」型)
- (7) 誰も報告して／報告をしてくれない。(Bかなり「Xする」型)
- (8) 人間関係を重視する。(Aつねに「Xする」型)
- (9) 仕事ができるのか心配した／心配をした。(Bかなり「Xする」型)
- (10) 電子手帳で確認する／確認をする。(Cやや「Xする」型)
- (11) お互いの立場を理解しよう／立場の理解をしよう。(Bかなり「Xする」型)
- (12) 力を発揮しようとした。(Aつねに「Xする」型)
- (13) 日本で発売する／発売をすることができなかった。(Bかなり「Xする」型)

上記の用例を見て、A, B, Cのうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の中に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > ()

以上が、実例を重視する実例型学習シートの概要である。実例型学習シートは、数値型学習シートのように、コーパスから得られた頻度の情報だけではなく、個々の語の具体的な用例を示すことで、学習者の漢語サ変動詞理解を深める可能性がある。一方で、こうした実例を用いた学習シートにも同様に限界が想定される。たとえば、実際に使われる用例がごく一部のもので、コーパスの膨大なデータ量に基づく頻度情報に合致することが難しくなり、学習者は量的情報を直接に得ることができなくなり、理解に労力がかかると考えられる。

以上で見てきたように、コーパスから得られた知見を学習者に示すうえで考えられる2つの方法、すなわち、数値重視型と実例重視型はそれぞれ長所と短所を持つ。つまりは、実際の指導においてどちらがより有効であるか、実験を行わなければ明らかにならないのである。

11.3.2 テストの開発

学習効果を測るテストは、(A) サ変化できる漢語、(B) 一般的漢語サ変動詞、(C) 活用上の選好性、(D) 内部構成性、(E) 自他性、(F) 語彙的排他性の6つの項目、全65問から構成される。また、それぞれのテストの末尾には、学習者の漢語サ変動詞理解に対する意識を測る付加設問を加えた。以下、テストの内容について概観する。

第1セクションでは、漢語サ変動詞の基礎知識について問う。

(3-A) サ変化できる漢語

まず、漢語サ変動詞そのものについてであるが、どういった漢語が「する」をとってサ変化できるかを問う。ここでは、漢語サ変動詞(例:「意味する」、「調査する」と、漢語サ変動詞として認められない漢語に「する」を付けた語(例:「*従来する」、「*自由する」)をあわせて20語を提示して、学習者に判断させる。なお、学習者が知らないため判断でき

ないという状況を回避するため、調査に用いた漢語はすべて中国語に存在するものに限定する。内容は以下のとおりである。

以下に示す漢語サ変動詞の中には、日本語として存在しないものが含まれています。存在すると思うものには○、存在しないと思うものには×を付けてください。

意味する []	機能する []	効果する []	特徴する []
調査する []	理解する []	関係する []	番組する []
表記する []	参考する []	対照する []	重複する []
関連する []	娯楽する []	自由する []	順位する []
従来する []	議論する []	相関する []	特定する []

(3-B) 一般的漢語サ変動詞

次は「一般的漢語サ変動詞」についての調査である。漢語サ変動詞のうち、一般的に多く使われている漢語サ変動詞と使用頻度が非常に低い漢語サ変動詞をまぜて提示し、学習者がどのような漢語サ変動詞を一般的だと思っているか調査する。なお、様々な漢語サ変動詞の「一般性」を議論するのは必ずしも容易ではない。そこで、本調査では、すでに4章で利用した15変種の日本語データにおいて、いずれの変種においても上位50種に含まれない漢語サ変動詞を一般的でない漢語サ変動詞と見なす。15変種それぞれの上位50語に基づき、特定した高頻度・汎用的漢語サ変動詞リストを根拠資料として、「一般的」漢語サ変動詞を定義・抽出する。内容は以下のとおりである。

以下に示す漢語サ変動詞はすべて日本語として存在するものです。ただし、これらの中には、一般的な日本語において多く使われる語と、あまり使われない語が含まれています。多く使われると思うものには○、あまり使われないと思うものには△をつけてください。

使用する []	実行する []	提示する []	包含する []
破壊する []	解析する []	紹介する []	移動する []
指定する []	連続する []	規定する []	誤解する []
実験する []	選定する []	注意する []	告白する []
注目する []	判定する []	考慮する []	検討する []

第1セクションでは漢語サ変動詞の基礎知識についての設問が用意されたが、第2セクションでは、漢語サ変動詞の応用知識について、4つの設問を用意した。

(3-C) 活用上の選好性

まずは「活用上の選好性」についてである。重要漢語サ変動詞から15語を選び、最も多く使用されると思う活用形にチェックを入れてもらう形となる。「連用形 - 一般」、「未然形 - サ」と「連体形 - 一般」の3種類の活用分類で93語の9割以上を占めているため、この3つの活用形を調査対象に決め、それぞれを選好する重要漢語サ変動詞を5語ずつ示して学習者に選択してもらう。内容は以下のとおりである。

漢語サ変動詞は実際の使用において、様々な活用形を取ります。「説明する」を例にすると、「説明する。」が「終止形」、「説明する内容」が「連体形」、「説明してみる」が「連用形」、「説明しようとする」が「意志推量形」、「説明すれば」が「假定形」、「説明しろ」が「命令形」となります。漢語サ変動詞ごとに特に多く使う活用形が異なっています。以下に示す語について、それぞれの活用形で最も多く使われると思うか、当てはまるところに○をつけてください。

(A) 利用する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(B) 変化する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(C) 理解する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(D) 使用する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(E) 検討する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(3-D) 内部構成性

内部構成性については、6章では、漢語サ変動詞の内部構成性を品詞結合（例えば、「名詞＋名詞」、「動詞＋動詞」の8パターン）と意味結合（たとえば、「並列関係」、「修飾関係」などの5パターン）の2つの観点から調査したため、品詞結合と意味結合それぞれについて質問を設けている。品詞結合の観点からは【名詞＋名詞】、【名詞＋動詞】、【動詞＋名詞】、【動詞＋動詞】、【動詞＋形容詞】、【形容詞＋動詞】、【副詞＋動詞】、【接辞＋動詞】の6種、意味結合の観点からは【並列関係】、【修飾関係】、【客体関係】、【補充関係】、【実質関係】の5種類を使っている。それぞれの内容は以下のとおりである。

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的結合関係が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う＋用いる」であるため、「動詞＋動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ＋目」であるため、「動詞＋名詞」型となります。以下に示す結合パターンそれぞれについて、こういうパターンの漢語サ変動詞は多いと思いますか。

(A) 【名詞+名詞】(例：意味=意^イ+味^ミ)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(B) 【名詞+動詞】(例：形成=形^カ+成^ス)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(C) 【動詞+名詞】(例：分類=分^クける+類^ル)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(D) 【動詞+動詞】(例：存在=存^ゾる+在^ゾる)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(E) 【形容詞+動詞】(例：重視=重^{オモシ}く+視^ミる)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているので、「並列関係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係（客体關係）が示されているので、「客体關係」型となります。以下に示す結合パターンそれぞれについて、こういうパターの漢語サ変動詞は多いと思いますか。

(A) 【並列關係】（同じような意味を持つ文字の組み合わせ、例えば、使用=使う+用いる）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(B) 【修飾關係】（前の文字が後ろの文字を修飾するもの、例えば、重視=重く+視る）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(C) 【客体關係】（動詞と対象語の組み合わせ、例えば、登場=登る+場）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(D) 【補充關係】（動作とその結果を示すもの、例えば、拡大=拡げる+大きい）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(E) 【実質関係】(「不」,「非」などの接辞と動詞の組み合わせ,例えば,不足=不+足る)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(3-E) 自他性

次は自他性についてであるが,7章では,基本形に加え,受身形と使役形の拡張形を取り入れて,漢語サ変動詞の自他性を特定した。それに基づき,以下では,各語についての自他形式がもっとも一般的だと思うかについて質問を設けた。内容は以下に示す。

漢語サ変動詞の中には,自動詞のみ,もしくは,他動詞のみで使うものもあれば,自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また,他動詞の中には,能動形で多く使用するものもあれば,受身形で多く使用するものもあります。以下の各語について,最も一般的だと思う用例に○をつけてください。

(A) 変更する

- (1) 内容が変更する(自動詞形)
- (2) 内容を変更する(他動詞・能動形)
- (3) 内容が変更される(他動詞・受身形)

(B) 表示する

- (1) 結果が表示する(自動詞形)
- (2) 結果を表示する(他動詞・能動形)
- (3) 結果が表示される(他動詞・受身形)

(C) 適用する

- (1) 規定が適用する (自動詞形)
- (2) 規定を適用する (他動詞・能動形)
- (3) 規定が適用される (他動詞・受身形)

(D) 発見する

- (1) 落とし物が発見する (自動詞形)
- (2) 落とし物を発見する (他動詞・能動形)
- (3) 落とし物が発見される (他動詞・受身形)

(E) 一致する

- (1) 意見が一致する (自動詞形)
- (2) 意見を一致する (他動詞・能動形)
- (3) 意見が一致される (他動詞・受身形)

(3-F) 語彙的排他性

語彙的排他性についてであるが、8章では、一般的漢語サ変動詞を対象に、「～する」と「～をする」のいずれの形で多く使用しているかという語彙的排他性の観点から調査を行った。ここでは、その調査結果をふまえ、5語を提示して、それぞれの形をとりやすいか数字で回答を求めた。内容は以下に示す。

漢語サ変動詞は、「Xする」(例:「確認する」)の形をとりますが、「Xをする」(例:「確認をする」)の形でも表現することができます。ただし、語によって、「Xする」の形を好むものと、「Xをする」の形を好むものがあります。以下に示す語について、どの程度「Xする」の形で使用されるか、あてはまると思う数字に○をつけてください。

(A) 一致する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(B) 重視する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(C) 勉強する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(D) 理解する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(E) 発揮する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

以上で、テストの全体は終了するが、すでに述べたように、学習の前後において、学習者が自身の漢語サ変動詞能力についてどのような意識を持っているか確認するため、以下の設問を加えた。

あなたは自分の漢語サ変動詞の知識や運用能力について、どの程度自信がありますか? あてはまる選択肢の番号で回答してください。

- (A) 漢語サ変動詞の知識については ()
- (1) 全く自信がない (4) ある程度自信がある
(2) ほとんど自信がない (5) とても自信がある
(3) どちらとも言えない
- (B) 漢語サ変動詞の運用能力については ()
- (1) 全く自信がない (4) ある程度自信がある
(2) ほとんど自信がない (5) とても自信がある
(3) どちらとも言えない

11.3.3 感想シートの開発

すでに述べたように、本研究で使用した学習シートは試行段階のものである。今後、大規模な検証をふまえて、よりよいものに改善していくことを計画しているが、その基礎データが取れるよう、学習者に学習に対する感想を問うアンケートも実施した。その内容は以下のとおりである。

1. この実験では、グラフや数値を多く示す数値型学習シートと、グラフや数値は示さず、多くの用例を示す実例型学習シートの2種類で学んでいただきました。この2種類の学習シートのうち、あなたが好きなのはどちらですか。

- (1) 数値型学習シート
- (2) 実例型学習シート
- (3) どちらとも言えない

2. 両方の学習シートを使って学習する場合、どちらの順番で学んだほうが良いと思いますか。

- (1) 数値型学習シート → 実例型学習シート
- (2) 実例型学習シート → 数値型学習シート
- (3) どちらとも言えない

その理由： _____

3. 数値型学習シートは漢語サ変動詞の理解に効果があると思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。

まったく効果がない 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても効果がある

4. 実例型学習シートは漢語サ変動詞の理解に効果があると思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。

まったく効果がない 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても効果がある

5. 数値型学習シートの良いところと悪いところをできるだけ書いてください。

6. 実例型学習シートの良いところと悪いところをできるだけ書いてください。
7. あなたは、こういう学習シートを使って、漢語サ変動詞を学ぶことが重要だと思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。
- まったく重要ではないと思う 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても重要だと思う

以上、学習シート、テスト、感想シートの3種類の概要について説明した。

11.3.4 学習実験のデザイン

以下、2種類の学習シートの学習効果を検証していくわけであるが、学習の回数、および学習シートの使用順序など、複数の要因が関わるため、学習効果をより厳密に検証できるように、以下のように学習実験の実施方法を決定した。

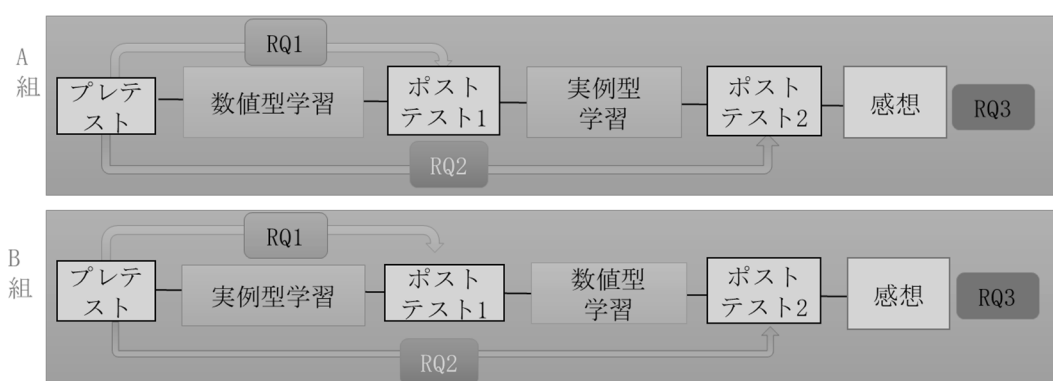


図1 調査の流れと対応するリサーチクエスチョン

まず、学習者をA組とB組の2群に分ける。A組はプレテストを行った後、数値型学習シートで学習を行い、その後、ポストテスト1を受験する。さらに、その後実例型学習シートで学習し、その後ポストテスト2を受験する。一方、B組は最初にプレテストを行った後、実例型学習シートで学習を行い、その後、ポストテスト1を受験する。さらに、その後数値型学習シートで学習し、その後ポストテスト2を受験する。なお、いずれの場合も、ポストテスト2の受験後に感想を回答する。

上図に明らかなように、本研究では、1人の学習者が、プレテスト、ポストテスト1、ポ

テスト 2, という 3 回のテストを受験する。この 3 種類のテストの内容はいずれも同等である。反復効果が過度に結果に影響を及ぼすのがないよう, それぞれのテストの実施後に, 正答は一切示さなかった。もっとも, この実験デザインであっても, 学習者は同じテストを複数回やることによって, 一定の反復による学習効果が生じてしまう可能性は否定できない。しかしながら, こうした効果は, A 組と B 組のいずれにおいても等しく発生するものであると考えられる。このため, 数値型学習シートと実例型学習シートの比較や, 1 回学習と 2 回学習の比較や, 2 種類のテストの提示順の比較には影響を及ぼさないと判断した。

11.3.5 学習実験の概要

実際の実験は 2015 年 7 月から 8 月にかけて行った。実験は一斉実施ではなく, 個別実施となった。プレテストと 2 回のポストテストについては, 制限時間を定めず, 回答し終わるまで十分な時間を与えた。平均所要時間は 15 分程度であった。数値型学習シートと実例型学習シートでの学習についても, 時間制限を定めることはせず, 協力者それぞれのペースで学習することを認めた。所要時間は協力者により差はあるが, およそ 20 分から 30 分程度であった。したがって, 最初のプレテストから最後の感想シートに至るまでの所要時間はおよそ 2 時間程度であった。なお, 実験実施の都合上, 10 名中, 5 名は筆者が同席のもとその場で行わせた。また, 残りの 5 名については, 実験の詳細な手順を示す解説を行った後, オンラインで問題セットを配布し, 全体の回答が終わった後, 送り返してもらうようにした。ただし, 実施にあたって, 疑問が出た場合は, オンラインのチャットシステムを使って, 筆者がすぐ疑問点を解決するようにした。

11.3.6 実験協力者

実験協力者については, 中国語母語話者で, 日本の大学の大学院に在籍する学生 10 名に依頼した。依頼する前に, 口頭で日本語能力試験 N1 に合格したかを確認しているので, 協力者の日本語力は基本同等的なものだと判断される。なお, 本実験で分析対象とした 10 人という人数は, 一般的な実験計画法から考えると, 必ずしも多いものではない。しかしながら, 本研究は多様な中国人日本語学習者の中で, とくにレベルの高い同質の学習者に限った調査であり, その意味においては, 協力者間の能力のばらつきは統制されていると考えられる。さらに, 1 人の協力者が 3 回テストを受けるという反復手法を取り入れること

で、被験者数は少ないものの、データの量がある程度増え、結果について、一定の信頼性と妥当性が確保されたと考えられる。ただし、本研究で得られた結果がそのまま幅広い中国人日本語学習者に当てはまるものではないことは、ここで明確に述べておきたい。協力者の情報について以下に示す。なお、下表において、受験形態については、「オン」はオンライン実施、「オフ」はオフライン実施を示す。また、すべての被験者の専門は外国語教育である。

表1 実験協力者の資料

A組	年齢	来日年数	学年	受験形態	B組	年齢	来日年数	学年	受験形態
A_1	25	3	前期2年	オン	B_1	26	3	前期2年	オフ
A_2	26	2	前期研究	オフ	B_2	27	3	前期2年	オン
A_3	27	1	前期1年	オフ	B_3	26	2	前期1年	オン
A_4	29	3	後期2年	オフ	B_4	29	2	後期2年	オフ
A_5	27	2	前期研究	オン	B_5	27	2	前期1年	オン

なお、実験に先立ち、これらの協力者に、漢語サ変動詞について特別な指導を受けた経験があるかどうかを確認したが、いずれもそうした経験を持っていなかった。

11.3.7 分析方法

学習前後で学習者の漢語サ変動詞理解がどう変化したかを見るために、テストの総得点とセクションごとの得点をもとに、それぞれの設問総数に占める正答数の割合(%)を求め、それを比較する。

以下、リサーチクエスチョン順に分析の手順を詳しく紹介する。

RQ1「1回学習の場合の2種類の学習シートの効果」においては、数値型学習と実例型学習の前後に実施したプレテストとポストテスト1の得点を比較する。その際、まず、A組とB組それぞれの学習者の正答率の平均値を比較する。ともに正答率が上がった場合、いずれの点数の伸び率が高いか確認する。その後、セクションごとに正答率の変化を見る。さらに、追加設問で問うた学習者の漢語サ変動詞に対する理解状況を調べる。

RQ2「2回学習の場合の2種類の学習シートの組み合わせの効果」については、2種類の

学習シートをどのように組み合わせるほうがより効果が高いかを検証する。具体的には、数値型学習シートで学習した後、実例型学習シートで学習した場合（A組）と、実例型学習シートで学習した後、数値型学習シートで学習を行った場合（B組）のそれぞれについて、プレテストとポストテスト2の得点の変化を調べる。ともに正答率が上がった場合、いずれのほうの点数の伸び率が高いか確認する。その後、セクションごとに正答率の変化を見る。さらに、追加設問で問うた学習者の漢語サ変動詞に対する理解状況を調べる。

RQ3「学習シートでの学習に対する感想」については、1回学習に対する感想、および2種類の学習シートを組み合わせた学習に対するコメント文を調べることで、こういった学習シートで学習することの有用性や重要性に関する感想を確認する。それをふまえ、学習シートの改善点などを検討する。

11.4 結果と考察

11.4.1 1回学習の場合の2種類の学習シートの効果

まず、1回学習の場合、どちらの学習シートでの学習が効果的かについて検討した。数値型学習シートで学習した学習者（A組）と実例型学習シートで学習した学習者（B組）それぞれのプレテストとポストテスト1の正答率を調べたところ、以下の結果が得られた。

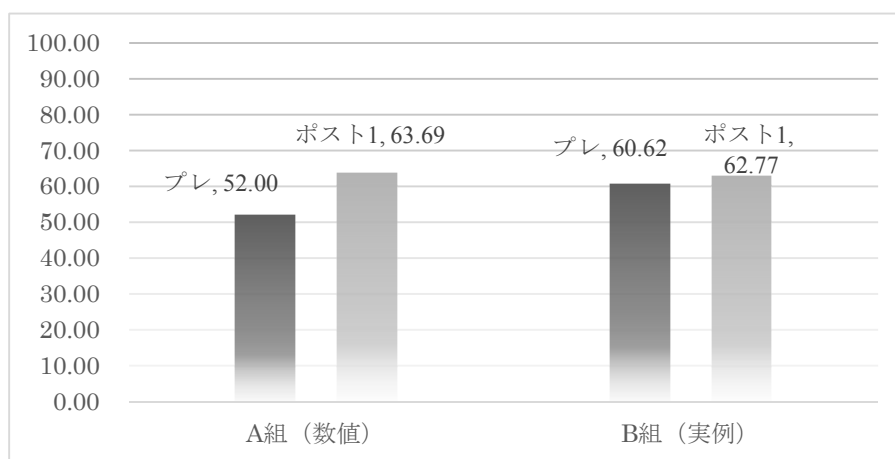
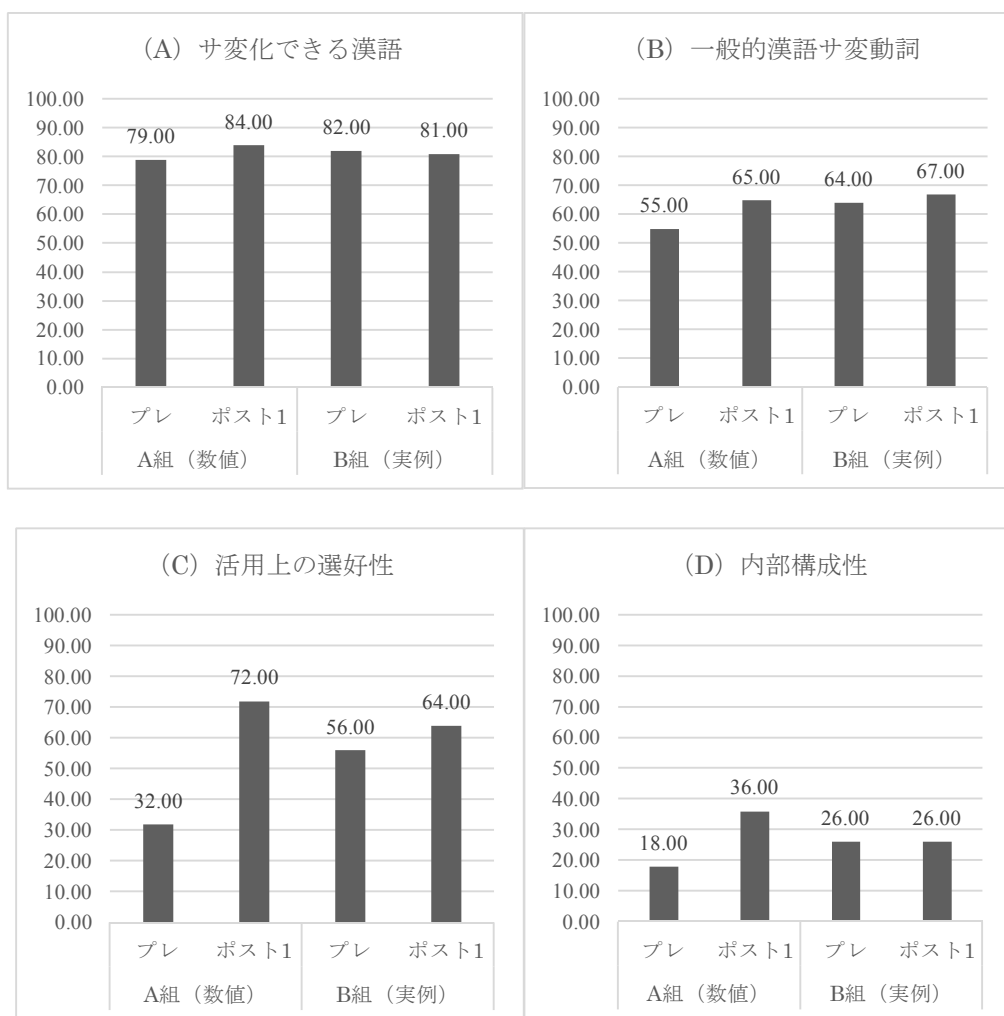


図2 1回学習における正答率の変化

上図よりわかるように、数値型学習と実例型学習のいずれにおいても、プレテストより、ポストテストにおいて正答率が上がっているように見える。伸び率はそれぞれ 11.69%と 2.15%である。ただし、この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、A組につ

いては、有意傾向が確認されたが、B組については、有意でなかった（A組： $t(8)=-2.08$, $p=.07$, $r=.59$ ；B組： $t(8)=-0.51$, $p=.63$, $r=.18$ ）。つまり、1回学習であっても、数値型学習であれば、学習者の記憶に残りやすく、学習者の理解がある程度促進された可能性が示された。

もっとも、以上で述べた学習効果は、学習項目によって異なる可能性がある。よって、6つのセクションごとに正答率の変化を調べたところ、以下の結果を得た。



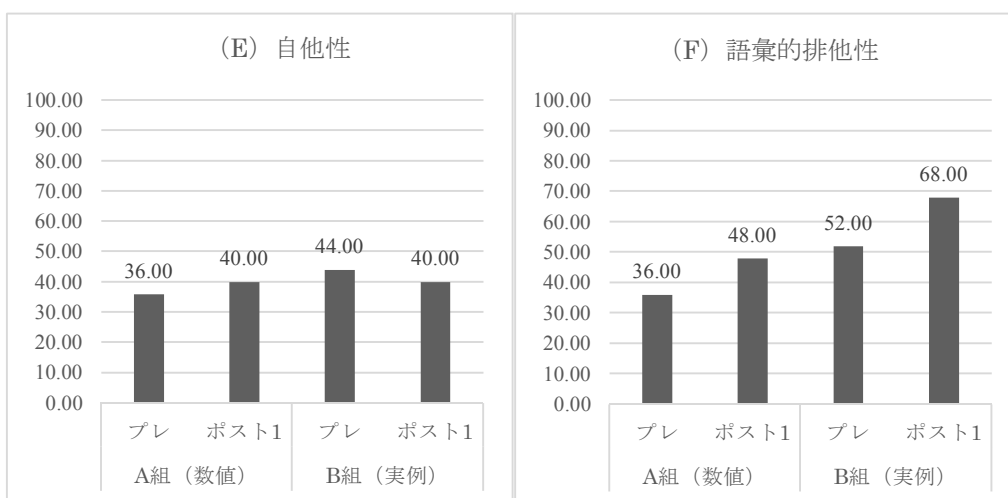


図3 項目ごとの正答率 (A~F)

上記より、セクションによって、また、学習方法によって、学習の効果が異なる可能性が示された。数値型学習では、すべての項目において、一定の正答率の上昇が見られる。一方、実例型学習では、「一般的漢語サ変動詞」、「活用上の選好性」、「語彙的排他性」の3つの項目にのみ、正答率の上昇が見られた。検定を行った結果、「サ変化できる漢語」(A組： $t(8)=-0.59$, $p=.57$, $r=.20$ ；B組： $t(8)=.20$, $p=.85$, $r=.07$)、「一般的漢語サ変動詞」(A組： $t(8)=-1.53$, $p=.16$, $r=.48$ ；B組： $t(8)=-0.51$, $p=.63$, $r=.18$)、「活用上の選好性」(A組： $t(8)=-1.89$, $p=.09$, $r=.56$ ；B組： $t(8)=-0.53$, $p=.61$, $r=.18$)、「内部構成性」(A組： $t(8)=-2.85$, $p<.05$, $r=.71$ ，B組： $t(8)=0.00$, $p=1.00$, $r=0.00$)。「自他性」(A組： $t(8)=-1.00$, $p=.35$, $r=.33$ ；B組： $t(8)=0.41$, $p=.69$, $r=.14$)、「語彙的排他性」(A組： $t(8)=-0.85$, $p=.42$, $r=.29$ ；B組： $t(8)=-1.11$, $p=.30$, $r=.37$)の6項目のうち、A組では、「内部構成性」について、18%の得点の伸び率が見られ、有意な上昇が確認された。また、「活用上の選好性」について、40%の得点の伸び率が見られ、有意傾向が確認された。

すでに述べたように、A組とB組では、数値型学習シートを用いたA組のほうが全体としてより肯定的な学習効果が及ぼすことが確認されたわけであるが、中でも、「内部構成性」や「活用上の選好性」といった抽象的で複雑な概念の理解に、数値を示す学習法が有用である可能性が示された。

最後に、1回学習を経て、漢語サ変動詞理解に対する学習者の自己評価がどう変化したかを確認した。漢語サ変動詞の知識と運用能力のそれぞれについて調べたところ、以下の結果が得られた。

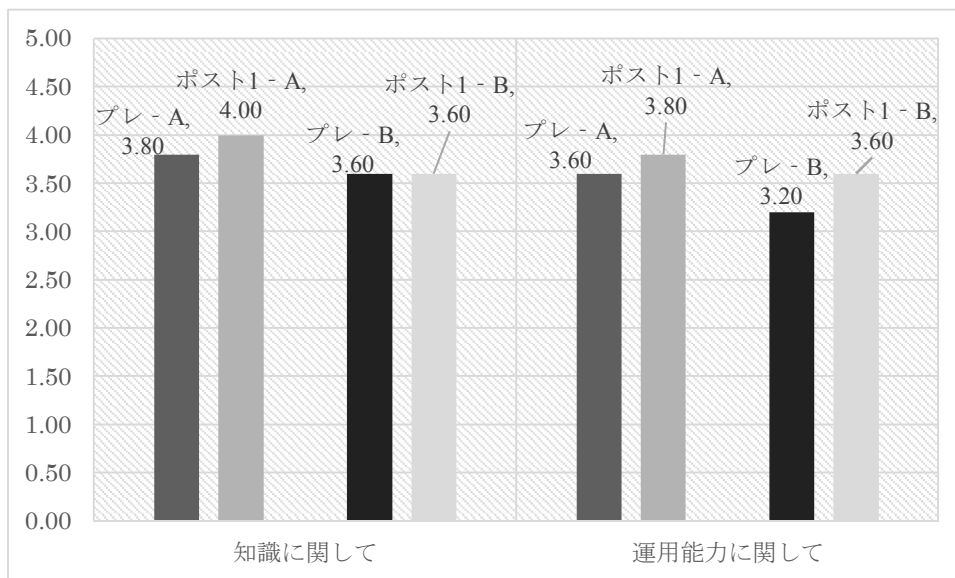


図4 自己評価の変化

上図より分かるように、運用能力に関しては、A組、B組ともに自己評価の値があがっているように見える。一方、知識に関しては、A組でのみ上昇が見られる。なお、運用能力について言うと、A組の自己評価度の上昇幅は5.56%、B組の自己評価度の上昇幅は12.50%である。一方、知識について言うと、A組の自己評価度の上昇幅は5.26%、B組の自己評価の上昇幅は0である。ただし、この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、いずれも有意ではなかった（A（知識）： $t(8)=-1.00$ ， $p=.35$ ， $r=.33$ ；A（運用）： $t(8)=-.45$ ， $p=.67$ ， $r=.16$ ；B（知識）： $t(8)=0.00$ ， $p=1.00$ ， $r=1.00$ ；B（運用）： $t(8)=-0.89$ ， $p=.40$ ， $r=.30$ ）。

以上で見たように、A組、B組ともに、漢語サ変動詞の知識や運用能力の自己評価が有意に上昇したわけではなかったが、一方、テストの得点に注目すると、A組においては、一定の有意傾向が確認された。このように、実力の伸びと意識・実感の伸びが重なっていないことは教育上の課題となるだろう。今後、学習が持続的な営みであることをふまれば、学習者が自身の能力の上昇を正しく自己評価できるように促していくことが重要である。

11.4.2 2回学習の場合の2種類の学習シートの組み合わせの効果

すでに述べたように、学習シートの提示順序が学習効果に影響を及ぼす可能性があるた

め、数値型学習シートと実例型学習シートをあわせた学習の効果を調べたところ、以下の結果が得られた。

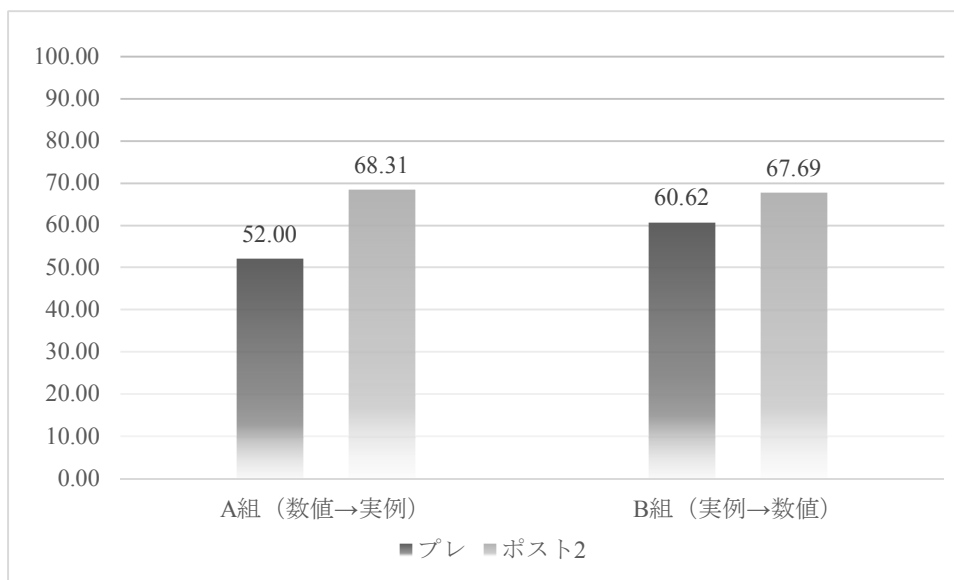


図5 2回学習における正答率の変化

上図よりわかるように、2回学習の場合、いずれの組み合わせでも、プレテストより、ポストテストの正答率が上がっているように見える。伸び率はそれぞれ16.31%と17.07%である。1回学習の場合の伸び率がそれぞれ11.69%と2.15%であったことをふまえれば、1回学習に比べ、2回学習の場合、学習者の漢語サ変動詞理解が一層向上している可能性が示唆される。

ただし、この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、1回学習の場合と同様、A組については有意傾向が確認されたが、B組では有意差が確認されなかった(A組： $t(8)=-2.22$, $p=.06$, $r=.62$; B組： $t(8)=-1.52$, $p=.17$, $r=.47$)。

すでに述べたように、1回学習の場合、実例型学習よりも、数値型学習のほうが効果が高い可能性が示されたわけであるが、数値型学習を後で行ったB組において、正答率の伸びが有意になることはなかった。このことは、2つの学習法を単純に組み合わせることで、つねに同等の効果が得られるわけではないことを示している。また、はじめに数値型学習を行い、その後に、実例型学習を行う順序が効率的であることが示された。

前節でも述べたように、学習効果が項目によって異なる可能性があるため、6つのセクションごとに正答率の変化を調べたところ、以下の結果が得られた。

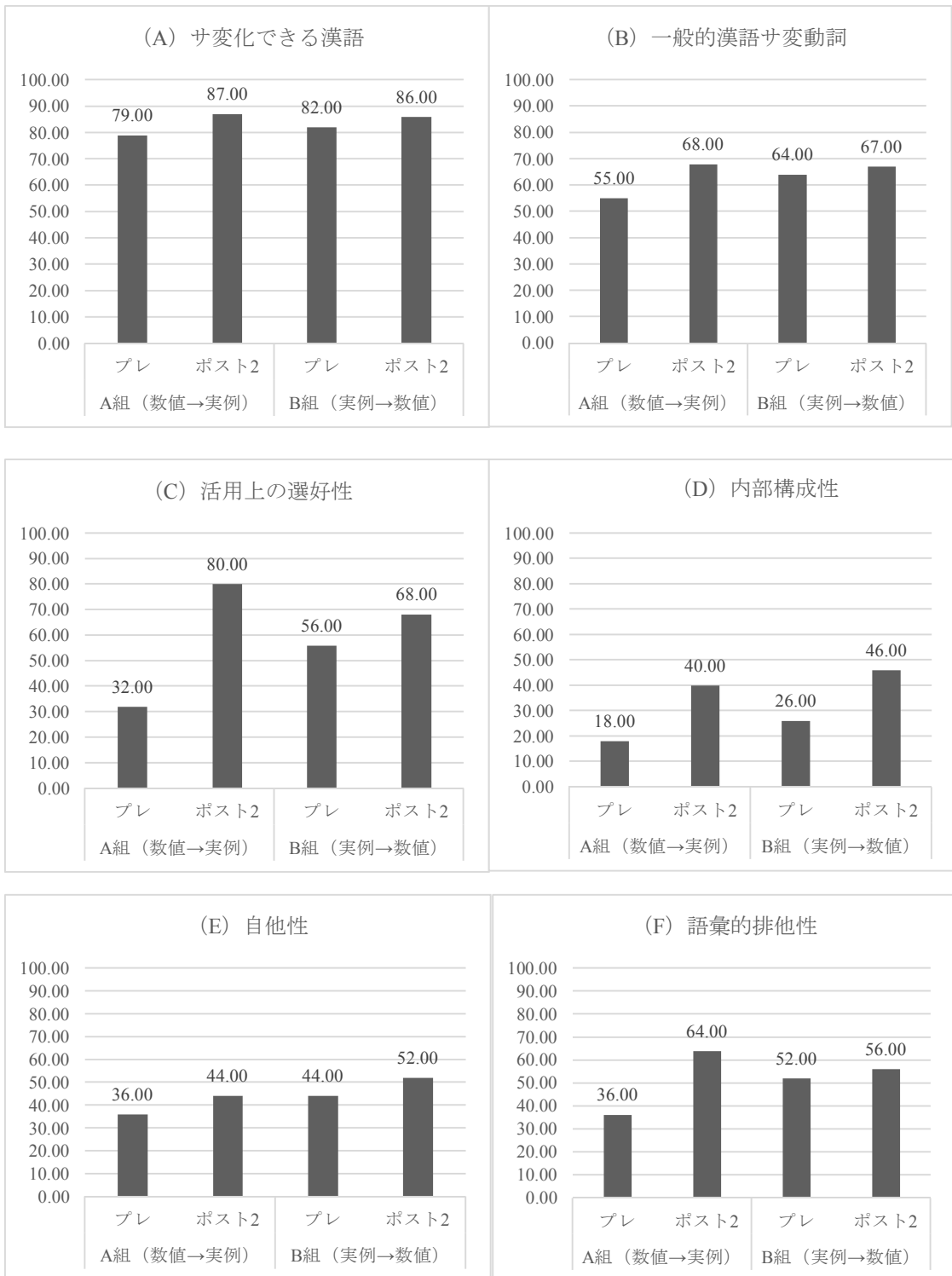


図6 項目ごとの正答率 (A~F)

以上の図より、いずれのセクションでも、2回学習を通して、正答率が上がることが示

された。セクションごとに見てみると、「サ変化できる漢語」(A組： $t(8) = -0.88$, $p = .40$, $r = .30$; B組： $t(8) = -1.03$, $p = .33$, $r = .34$), 「一般的漢語サ変動詞」(A組： $t(8) = -1.34$, $p = .22$, $r = .43$; B組： $t(8) = -0.49$, $p = .64$, $r = .17$), 「活用上の選好性」(A組： $t(8) = -2.14$, $p = .07$, $r = .43$; B組： $t(8) = -0.72$, $p = .49$, $r = .25$), 「内部構成性」(A組： $t(8) = -2.17$, $p < .05$, $r = .70$; B組： $t(8) = -1.68$, $p = .13$, $r = .51$), 「自他性」(A組： $t(8) = -1.41$, $p = .20$, $r = .45$; B組： $t(8) = -0.89$, $p = .40$, $r = .30$), 「語彙的排他性」(A組： $t(8) = -2.02$, $p = .08$, $r = .58$; B組： $t(8) = -0.24$, $p = .82$, $r = .08$) の6つの項目のうち、A組では、「内部構成性」について、22%の得点の伸び率が見られ、有意な上昇が確認された。また、「活用上の選好性」について、48%の伸び率で有意傾向が確認された。さらに、「語彙的排他性」についても、28%の伸び率で有意傾向が確認された。

このように、すでに見た1回学習の場合と同様、こうしたコーパス準拠学習シートは、漢語サ変動詞のもつ様々な言語的特性の中で、「活用上の選好性」や「内部構成性」の理解を深める効果があらためて確認された。くわえて、2回学習をした場合は、1回学習で有意の差が確認されなかった「語彙的排他性」についても、一定の効果が確認された。このことは、「語彙的排他性」はその他の特性と比べ、学習効果が出るまでに反復学習を行う必要性を示している。

なお、今回の分析結果は、漢語サ変動詞がもつ様々な言語特性の中には、コーパス的な学習によって、効果が出やすいものと出にくいものが存在することが示された。相対的により大きな効果が確認されたA組の場合を例として、得点伸び率及び有意性検定における p 値に注目すると、学習効果が出やすいものから出にくいものまで、およそ以下のような段階性が確認できる。

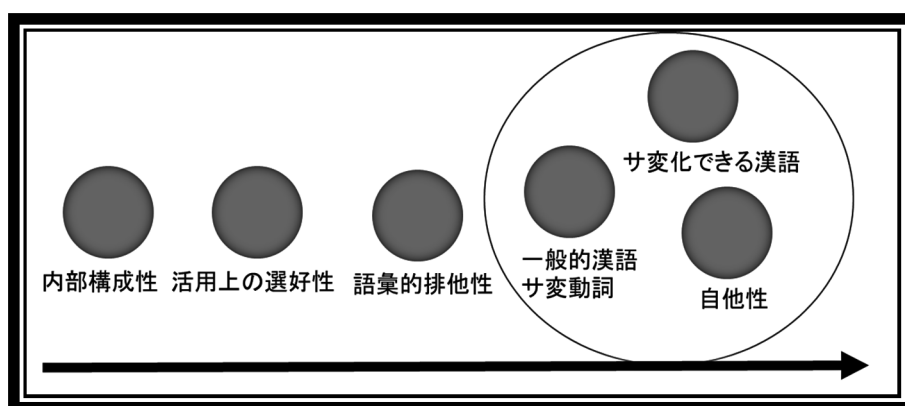


図7 学習効果の出やすい項目

このうち、左側に位置している「内部構成性」と「活用上の選好性」の項目は1回学習でも効果が確認されたため、比較的早く習得できると思われる。また、「語彙的排他性」については、1回学習では効果が確認されなかったが、2回学習では、効果がある可能性が確認されたため、「内部構成性」や「活用上の選好性」について早く習得される項目であると考えられる。一方、「サ変化できる漢語」、「一般的漢語サ変動詞」や「自他性」については、2回学習でも十分な効果が出ず、さらなる学習が必要であると示唆される。今回、2回反復学習のデータしか取れていないが、今後、コーパス準拠学習の回数を増やすことで、漢語サ変動詞のほかの項目についても、有意な学習効果が得られる可能性があると考えられる。

最後に、2回学習を経て、漢語サ変動詞理解に対する学習者の自己評価がどう変化したかを確認する。漢語サ変動詞の知識と運用能力のそれぞれについて調べたところ、以下の結果が得られた。

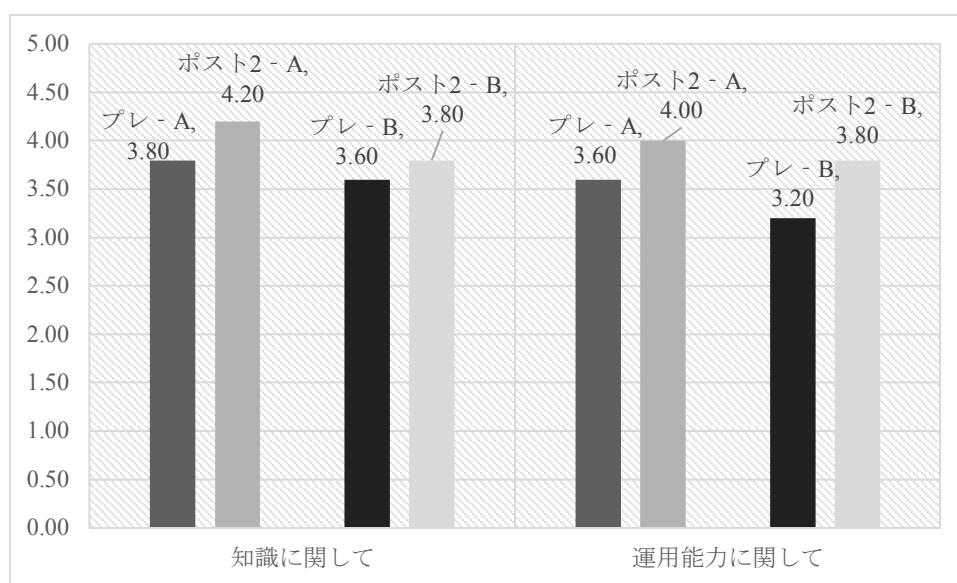


図8 自己評価の変化

上図より分かるように、漢語サ変動詞の知識と運用能力のいずれにおいても、学習者の理解度の自己評価が上昇しているように見える。上昇率は、知識の場合、A組は10.53%、B組は5.56%であり、運用能力の場合、A組は11.11%、B組は18.75%である。これは、1回学習の場合の0%、5.26%、5.26%、12.50%と比べて、伸び率が上昇しているように思わ

れる。ただし、この差が統計的に有意なものかどうかを検証したところ、いずれも有意ではなかった（A（知識）： $t(8)=-1.41$, $p=.20$, $r=.45$ ；A（運用）： $t(8)=-1.00$, $p=.35$, $r=.33$ ；B（知識）： $t(8)=-0.45$, $p=.67$, $r=.16$ ；B（運用）： $t(8)=-1.13$, $p=.29$, $r=.37$ ）。

すでに述べたように、漢語サ変動詞に関する学習者の実力の変化と意識の変化には、一定の時間的ずれが存在する。今回の調査では、A組において、漢語サ変動詞の理解度が上昇する傾向性が示されたわけであるが、学習者はこうした自身の実力の向上を正しく捉えられていない。今後の漢語サ変動詞指導に際しては、アウトプットを多くさせたり、教師が肯定的な評価を与えたりすることで、学習者に自信を付けさせ、自身の能力の向上を意識化させることが必要であろう。実力だけではなく、自分の実力を正當に自己評価できるようになってはじめて、漢語サ変動詞の運用能力が身につけていると判断すべきである。

11.4.3 学習シートでの学習に対する感想

以上より、数値型学習シートと実例型学習シートでは、どちらかと言えば、数値型学習シートのほうが学習効果が高い可能性が示された。しかしながら、それぞれの学習シートについて学習者がどのように感じているのか、どの点を改善すれば学習シートの効果をより高めることができるのか、といった点を明らかにするため、感想シートで得られた学習者の感想データを分析していくこととしたい。

(1) 1回学習において好まれる学習

A組、B組の学習者に対して、それぞれの学習を終えた段階で、漢語サ変動詞について1回のみ学習するとすれば、どちらの学習シートを好むか聞いたところ、以下の結果が得られた。

表2 1回学習の場合学習者が望ましいと考える学習シートのタイプ

	数値型	実例型	どちらとも言えない
A組（数値型→実例型）	60.00%	40.00%	0
B組（実例型→数値型）	80.00%	20.00%	0

上表より、先に数値型学習シートで学習した学習者であっても、実例型学習シートで学習した学習者であっても、ともに数値型学習シートを希望していることがわかった。とく

に、実例型学習シートで先に学習した学習者は、数値型学習シートをより高く評価している。このことは、漢語サ変動詞について、事前の予備知識がほとんどない段階で、いきなり実例型学習シートを与えられると、学習者はそれを持て余してしまい、シートから十分なメリットを感じるができなかつたと考えられる。なお、ここで興味深いことは、実例型学習シートを好ましいと回答した学習者の割合が、A組では4割程度であるのに対し、B組では2割にとどまっていることである。つまりは、同じ実例型学習シートであっても、数値型学習シートの後に追加学習として示せば、その良さが伝わる一方、はじめから導入されると、その良さが学習者に伝わりにくいことが示唆される。

(2) 2回学習において好まれる学習シートの組み合わせ

2回学習を行う場合、数値型学習シートと実例型学習シートをどの順番で学習することが好まれるか、学習者に問うたところ、以下の結果が得られた。

表3 2回学習の場合学習者が好ましいと考える学習シートの組み合わせ

	数値型→実例型	実例型→数値型	どちらとも言えない
A組(数値型→実例型)	100.00%	0	0
B組(実例型→数値型)	80.00%	20.00%	0

上記からわかるように、ほとんどの学習者が数値型学習シートから学んだ方がよいと思っている。この結果は、すでに述べた分析を裏付けるものと言えるだろう。

次に、それぞれの提示順を好む理由を文章で書かせたところ、以下の内容が得られた。はじめに、数値型学習シートを先に学ぶ方が好ましいと答えた学習者のコメントを記載する。なお、文末のA、Bは所属する組を示す。

- (1) 数値型学習シートは一目瞭然で、学習の内容をはっきりと理解できる。しかも、印象が深い。その頭の中での印象を持って、実例と結び付けて学んでいくのは効果的かもしれないと思う。実例型学習シートは詳しい説明に偏っており、補助のものとして使ったほうがよいのではないかと考えている。(A組)
- (2) まず数値型学習シートから概観して、たいていの印象を得てから実例シートに入るのがわかりやすいと思う。それからまた数値を見て、あ、なるほどと感じた。(A組)

- (3) 使用頻度を覚えてから実例を学習したほうが良いと思う。(A組)
- (4) まず全体の傾向を把握して、その後、実際の語や用例で理解を深めるデザインが好きだった。(A組)
- (5) 調査用紙の順番であるため。(A組)
- (6) 先に大きな傾向性を見てから、細かい情報を見せてもらったほうが好きだ。(B組)
- (7) 数値型には各項目のデータを数字で示して、よく使うのとあまり使わないのがはっきり区別されるので、非常に役に立ったと思う。さらに実例型を使ってみれば、正確率を上げる自信がわいてきた。両シートをともに使いたい。(B組)
- (8) 数値でまずイメージを付けて、後で例で説明するのは効果的だと思う。(B組)
- (9) なんとなく。(B組)

以上、9名の回答が得られたわけであるが、(4)と(9)の2名の回答を除けば、数値型学習シートは全体の傾向を効果的に示す点が注目されているようである。以上に示されるように、学習者は数値型学習シートが「一目瞭然」であり、「印象が深く」、「全体の傾向性」を把握するのに有用で、「大きな傾向」を掴みやすく、細かい差が「はっきり区別」でき、「イメージ」を与えてくれる点を高く評価している。

続いて、先に実例型学習シートを学ぶ方が望ましいと回答している学習者の回答を見よう。

- (10) 実例型学習シートもすごく参考になると思うが、テストを2回やったら、迷ってしまった。一方、数値型学習シートと組み合わせて学習すると、ルールに基づいてもう一回答えたとき、自信があがった。(B組)

この学習者の場合は、実例によって大まかなイメージを理解したあと、客観的なデータで知識を整理していくことを好んでいることを示す。ただ、多くの学習者が言及するように、全体的な傾向性や知識の枠組みを理解した後、実例型学習を行うことが、学習者の認知タイプに一致していると言えるだろう。

一般に、学習の過程では、ルールを覚えてから細かい実例を学ぶ「トップダウン」方式と実例から自分でルールを見出していく「ボトムアップ」方式があると考えられる。今回の例で言うと、数値型学習シートは「トップダウン」、実例型学習シートは「ボトムアップ」

方式に相当する。学習者の感想からは、漢語サ変動詞の学習に関して言うと、「トップダウン」方式がより有効であることが改めて確認できた。

(3) 各学習シートの効果

数値型学習シートと実例型学習シートについて、学習者はそれぞれの程度役に立つと思うかについて、5段階の評価方式で問うた。それぞれの回答の平均値を求めた結果、以下のようになった。

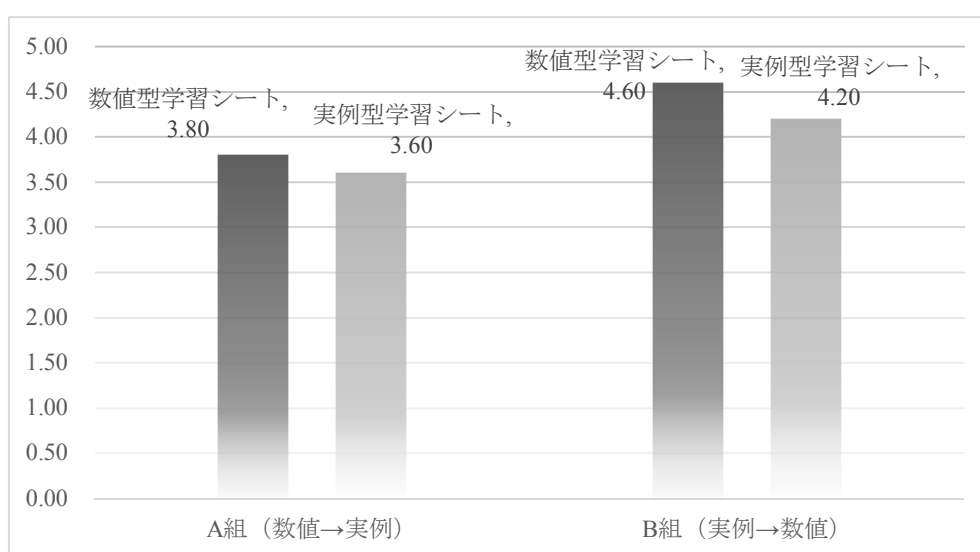


図9 各学習シートの重要度評価

上図より分かるように、A組とB組とともに、数値型学習シートをより高く評価しているように見える。評価値の差はそれぞれ-0.20と-0.40である。ただし、検定を行ったところ、いずれも有意な差はなかった(A組： $t(8)=.37$, $p=.72$, $r=.13$; B組： $t(8)=.89$, $p=.40$, $r=.30$)。つまり、A組でもB組でも、数値型学習シートと実例型学習シートを大差なく評価してくれていることがわかった。すでに述べたように、A組とB組の学習者がともに数値型学習シートを先に学ぶことを好んでいる。この分析結果をあわせて考えると、いずれの学習シートも、それ自体が「悪い」と見なされているわけではなく、むしろ、学習シートの提示順について学習者が一定の好みを持っていると考えられる。

(4) 学習シートの良い点と悪い点

すでに (2) において、2 種類の学習シートの提示順について感想を集めたわけであるが、その中で、数値型学習シートの良さについて、様々なコメントが得られたものの、数値型学習シートの不足点や改善点、また実例型学習シートの良い点・悪い点については、ほとんど言及が見られなかった。そこで、2 種類の学習シートについて、明示的に良い点と悪い点を書くよう求めたところ、以下のコメントが得られた。

表 4 2 種類の学習シートの良さと悪さ

	良かった所	悪かった所
数値型学習シート	(1) 一目瞭然で分かりやすい (2) 文字と図表があり、覚えやすい (3) 退屈ではない (4) 所要時間が少なく、効率的 (5) 信頼性・価値がある (6) 部分ではなく、全体像がわかる	(1) 具体例と説明が少なく、実感が薄い (2) 忘れやすい (3) 数値だけ見てしまいがち (4) 単語の特性がわかりにくい
実例型学習シート	(1) 用例・説明が詳しい (2) 理解しやすい (3) 楽しい (4) 印象に残る	(1) 説明が多すぎて、読みにくい (2) 疲れる (3) 覚えにくい (4) 時間がかかる (5) 用例リストが短かった

すでに述べたように、数値型学習シートの主な良さは、全体像を掴みやすく、一目瞭然であることと言える。一方、学習者は数値型学習シートについて、「実感が薄い」、「忘れやすい」と感じていることも明らかになった。今回の実験は、プレテスト・ポストテストデザインであって、いわゆる遅延型ポストテストを行っていないわけであるが、仮に数値型学習シートによる 1 回学習のみであれば、たとえ学習直後に点数があがったとしても、一定の時間をおけば、記憶が薄くなり、学習した内容が忘れてしまう危険性もありうる。

一方、実例型学習シートについては、「覚えにくい」、「時間がかかる」、「読みにくい」などの改善点に関するコメントが得られたとともに、「印象に残る」という肯定的なコメントも得られた。すでに述べたように、実例型学習シートそのものが悪いのではなく、数値型学習シートで全体の傾向を掴んだ後、実例型学習シートで理解や記憶を補強すれば、数値

型学習シートの欠陥が補われ、全体としてよりよい学習効果が期待されると言えるだろう。

(5) 学習シートで学習することの重要度

最後にコーパスから得られた知見を整理したこのような学習シートを用いた学習の重要性について、学習者の回答を求めたところ、以下の結果が得られた。

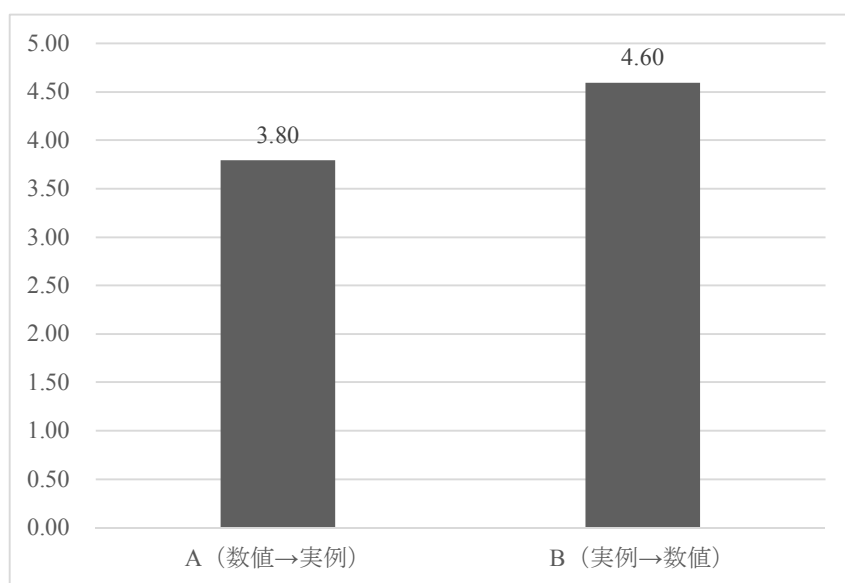


図 10 学習シートの形に対する評価

上記から分かるように、5点満点でA組では3.8点、B組では4.6点のより高い評価が得られた(本節の分析は、A組とB組の差に注目するものではないため、ここでは、検定を行わない)。漢語サ変動詞に焦点を合わせた学習を行った経験がこれまでないため、全体としてより高い評価を与えている可能性は否定できないものの、学習者がこのような学習を全体的に前向きに受け止めていることは重要である。今後、漢語サ変動詞に限らず、中上級日本語学習者を対象とする日本語指導を行っていくうえで、コーパス準拠学習シートが一定の有用性をもつことがあらためて確認されたと言えるだろう。

11.5 まとめ

本章では、コーパスに基づいて漢語サ変動詞の学習シートの開発、および学習実験での効果検証を行った。以下、リサーチクエスチョン順に調査の内容を簡潔にまとめる。

RQ1「1回学習の場合の2種類の学習シートの効果」については、1回学習の場合、2種

類の学習シートのいずれがより効果的かについて学習者の得点に基づいて分析した。結果として、数値型学習シートのほうが全体としてより肯定的な学習効果を及ぼすことが確認された。特に「内部構成性」や「活用上の選好性」といった抽象的で複雑な概念の理解に、数値を示すことが有用である可能性が示された。ただし、学習者の意識上の変化が限定的であることも明らかになった。

RQ2「2回学習の場合の2種類の学習シートの組み合わせの効果」については、2回学習の場合、2種類の学習シートをどういった順序で組み合わせたほうがより効果的かについて学習者の得点に基づいて分析した。その結果、2回学習を行うことで、数値型学習を先に行う場合、1回学習で一定の学習効果が確認された項目について、さらに効果が深まる可能性が示された。また、漢語サ変動詞の多様な言語特性のうち、項目によって、学習効果が出にくいものもあるため、反復学習を行うことの必要性も示された。なお、2回学習の場合であっても、学習者の自己評価に有意な変化が見られないことも確認された。

RQ3「学習シートでの学習に対する感想」については、感想シートの形で、学習者の感想を直接的に捉えた。その結果、1回学習ならば、数値型学習シートが好まれること、2回学習の場合、数値型学習の後実例型学習を行うほうが良いと思われることが確認された。また、学習シートでの学習の有用性について肯定的な評価を得た。

すでに述べたように、今回の実験は試行的に開発した2種類のコーパス準拠学習シートを用いた小規模な調査であったが、その範囲の中では、こうした学習シートの重要性について、肯定的なフィードバックを得ることができたと言える。また、数値型学習シートについては、漢語サ変動詞に関する知識全体の傾向を掴みやすい利点もあるが、忘れやすいという欠点もあり、実例型学習シートについては、記憶に残りやすいという利点がある反面、読むのに時間がかかり、覚えにくいという欠点があることが示された。この点をふまえて、それぞれの学習シートの内容をさらに改善したうえで、数値型学習を先行させ、その後、実例型学習で理解を補強するというアプローチで、より高い学習効果が得られるものと考えられる。本調査は、今後の教材開発や教授システムの考案について多くの示唆を示し、一定の意義をもつものであると言えるだろう。

終章

12.1 本研究の独自性

日本語学においても、日本語教育学においても、漢語サ変動詞を扱った研究は多い。しかしながら、主な先行研究と比べ、本研究は4つの点において独自性を持つ。(1) 主観的分析に客観的分析を加えたこと、(2) 調査対象とする漢語サ変動詞を網羅的とせず、典型的なものに限定したこと、(3) 漢語サ変動詞の語法の分析にあたって、注目する文法観点を単観点ではなく、複合観点としたこと、(4) 日本語学と日本語教育学のいずれか一方のみを志向するのではなく、両者を融合させる方向をねらったこと、の4点である。以下、それぞれについて、詳しく述べる。

まず、(1) について言うと、従来の研究はほぼ内省による主観的分析であった。一方、本研究では、分析を主観的判断のみに頼らず、コーパスやアンケートなどから得たデータを利用し、客観的な分析を行おうとした。これにより、結論の妥当性が高まったと考えられる。

次に、(2) について言うと、過去の研究は、理論上、ありうるすべての漢語サ変動詞にあてはまるモデルや解釈の提示を図ろうとし、そのために得られたモデルはしばしば抽象的で、実用性が薄くなってしまい、教育的な効果も希薄であった。一方、本研究では、すべての漢語サ変動詞にあてはまる抽象的なモデルを作るよりも、実際に多用されないものについては大胆に捨象し、真に典型的に使われるものに限って具体性の高いモデルを構築しようとした。これにより、言語学のみならず、教育的に貢献できるモデルの構築がなされたと考えられる。

また、(3) について言うと、漢語サ変動詞の用法・特性の分析にあたり、先行研究は、内部構成性や自他性など、限定的な観点にのみ注目し、かつそれらの観点を個別的に扱ってきた。それに対して、本研究は、活用選好性や語彙的排他性など、従来の研究でほとんど触れられていないものも含め、多様な観点を設定し、かつそれらを個別的に見るのではなく、全体としてまとめて見ることで、漢語サ変動詞の用法にアプローチしようとした。これにより、漢語サ変動詞の特徴を立体的に捉えることができたと言える。

最後、(4) について言うと、すでに述べたように、これまでの研究は日本語学、もしくは日本語教育学のいずれかの分野で行われてきたわけであるが、本研究は、日本語学と日本語教育学の観点を組み合わせて研究を行おうとした。これにより、言語学的な基盤をふまえながら、学習者が習得しやすい教授法を考案する方向性が得られたと考えられる。

以上の4つの観点において、本研究は一定の独自性をもつと考えられる。

12.2 本研究のねらいと成果

本研究では、まず、現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づき、(a) 漢語サ変動詞の中で最も一般的で典型性の高い語の特定、および (b) 特定された漢語サ変動詞の言語的特性の多角的調査を行った。また、独自に実施したアンケートや学習実験の結果をふまえ、(c) 中国人日本語学習者の漢語サ変動詞に対する知識や意識、またその学習上の問題点の解明、(d) 当該学習者に対する漢語サ変動詞学習法の提案を行った。なお、漢語サ変動詞に関わる特性解明については、重要漢語サ変動詞を特定したうえで、はじめに活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性の4つの側面に注目して議論を行った。このうち、(a) はすでに述べた本研究の独自性の(1)および(2)に対応する。また、(b) は独自性の(3)に対応する。そして、(c) および (d) は独自性の(4)に対応する。

以下、章ごとに、扱った内容、および明らかになったことを簡潔にまとめる。序章においては、本論文の前提となる立場を述べ、従来の研究、言語学、日本語教育学の3つの観点から、漢語サ変動詞を研究する必然性と重要性を論じた。その後、本論文の全体構成を述べた。

第Ⅰ部「研究の枠組み」には、2章と3章が含まれる。2章「先行研究」においては、漢語サ変動詞に関する先行研究を概観した。その際、漢語サ変動詞そのものに関する従来の研究に加え、本論文が立脚するコーパス研究手法、これまでの研究の系譜を整理し、現在の研究の状況を要約した。

3章「リサーチデザイン」においては、本論文全体の目的とリサーチデザイン、研究対象、使用データや統計手法について体系的に説明した。

第Ⅱ部「漢語サ変動詞の諸相」には、4章から8章までの5章が含まれる。4章「高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定」においては、現代日本語における高頻度・汎用的漢語サ変動詞の特定を行った。この調査が必要なのは、既存の辞書や日本語教科書では、個々の漢語サ変動詞の重要性に関する情報が体系的に示されていないため、日本語学習者に適用しうる重要漢語サ変動詞のリストの作成も望まれると考えたためである。そこで、現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づき、新聞、雑誌、書籍など15変種に基づいて主成分分析を行ったところ、高頻度かつ汎用的な漢語サ変動詞93語を特定した。特定されたこれらの語を教育的な重要漢語サ変動詞と位置づけ、それ以降の研究対象とした。

5章「漢語サ変動詞の活用上の選好性」においては、4章で特定された重要漢語サ変動詞の活用上の選好性を調査し分析した。この調査が必要なのは、これまで漢語サ変動詞の活用上の特徴ははっきり示されておらず、単に「する」という代表形だけで教えられているが、漢語サ変動詞の自然な運用を知るうえで、実際にどのような活用特性を持つかを教授することが望まれるためである。そこで、コーパスデータに基づき、重要漢語サ変動詞の活用上の選好性を調査したところ、「連用形」、「未然形」、「連体形」の3種類で全体の9割を占めること、また「する」と似ている部分が多いものの、「未然形 - サ」の比率がとりわけ高いという独自性をもつこと、活用選好性に基づいて、重要漢語サ変動詞は「未然形 - サ」、「未然形 - 一般」、「未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般」、および「意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般」の4種類に分類されること、および、「未然形 - サ」については「注目する」、「開催する」など、「未然形 - 一般」については「存在する」など、「未然形 - セ・連体形 - 一般・終止形 - 一般」については「提供する」、「実現する」など、「意志推量形・連用形 - 一般・仮定形 - 一般・命令形 - 一般」については「利用する」、「説明する」など、各グループに典型的な語例が存在することが明らかにされた。この結果は、漢語サ変動詞の自然な運用を行ううえで重要な手掛かりとなる。

つづいて6章「漢語サ変動詞の内部構成性」においては、重要漢語サ変動詞93語について、内部構成性の解明を行った。この調査が必要なのは、漢語サ変動詞の漢語部に何らかの構成上の典型性が隠れている可能性があるためである。そこで、重要漢語サ変動詞の各々について、漢語部の構成要素間の結合パターンを計量的に概観したうえで、典型的な語構成モデルの特定を試みたところ、品詞結合については「V-V」と「V-N」の2種類で全体の約8割を占め、意味結合については「並列関係」、「修飾関係」と「客体関係」の3種類で全体の約9割がカバーされること、また、品詞・意味結合をあわせると、「V-V 並列関係」、「V>V 修飾関係」と「V+N 客体関係」の3種類で全体の約80%が占められること、および漢語サ変動詞の語幹部漢語には原則として動詞的要素が含まれており、「する」の働きというよりも、実際の動詞性は漢語部が担っている場合が多いことが示唆された。この結果は、ある漢語が漢語サ変動詞になりうるかどうかを判断するうえで有用であろう。

7章「漢語サ変動詞の自他性」においては、重要漢語サ変動詞の自他特性を考察した。この調査が必要なのは、これまでの辞書における漢語サ変動詞の自他記述に食い違いがあり、教科書の記述もはっきりしておらず、さらに受身や使役といった自他の拡張形態に触れた研究はほとんどなかったためである。そこで、重要漢語サ変動詞の各々について、辞

書における自他記述を確認した後、コーパスデータに基づき、各語の自他特性を計量的に把握した。また、受身形と使役形の使用をあわせて考察することにより、漢語サ変動詞の自他特性をより精確に記述した。結果として、既存の辞書間で自他判定に食い違いが存在していること、また、自他性に基づき、高頻度・汎用的漢語サ変動詞は〈自動詞形優勢クラスター〉、〈他動詞形優勢クラスター〉、〈受身形他動詞形併用クラスター〉、および〈自他動詞形拮抗クラスター〉の4分類に分けられること、〈自動詞形優勢クラスター〉には抽象的關係を客観的に描写するものが多く、〈自他動詞形拮抗クラスター〉には抽象的關係を表す際に一定の主観性が関与してくる語が多いこと、〈他動詞形優勢クラスター〉と〈受身形他動詞形併用クラスター〉は共通して人間活動を表しているが、〈他動詞形優勢クラスター〉は個人的行為・行動を中心としているのに対して、〈受身形他動詞形併用クラスター〉は権力性や公共性をもつ社会的活動を表すものが多いことが確認された。こういった結果は、学習者の漢語サ変動詞の自他に関する正確な理解を促すものとなる。

8章「漢語サ変動詞の語彙的排他性」においては、重要漢語サ変動詞について語彙的排他性を考察した。この調査が必要なのは、「漢語+を+する」という類義表現形と漢語サ変動詞形の使い分けにおいても何らかの典型性が存在する可能性があると考えたためである。そこで、重要漢語サ変動詞の各々について、「～する」と「～をする」の使用状況をコーパスで調査し、漢語サ変動詞の語彙的排他性の強さ、およびこういった語彙的排他性の強さに影響を与えうる要因について考察した。その結果、漢語サ変動詞93語のうち、90語において語彙的排他性が90%を上回ること、また、漢語部の頻度が低く、意味数が少なく、漢語サ変動詞の自動詞性が強く、漢語サ変動詞の前項連体修飾率が高く、ブログや知恵袋のような非公式ジャンルではなく、雑誌や新聞のようなメディアジャンルで多く使用される場合に、漢語サ変動詞の語彙的排他性が高まることが明らかにされた。この結果は、漢語サ変動詞の内部的な仕組みや自然な運用を理解するうえで有益な情報となろう。

以上で、漢語サ変動詞の諸特性を言語学的に解明することを目指し、活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性といった多様な観点から体系的に考察してきた。そこで得られた知見は漢語サ変動詞そのものの特性や、漢語サ変動詞の運用上の重要の特徴について多くの事実を明らかにした。

第Ⅲ部「日本語教育における漢語サ変動詞」には、9章から11章の3章が含まれる。9章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の意識」においては、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞に対する意識の解明を目指した。この調査が必要なのは、学習者にとって望まし

い漢語サ変動詞のシステムを考案するうえで、学習者が実際にどのような意識を持つかを把握することが必要だと考えたためである。そこで、中国人日本語学習者を対象に、漢語サ変動詞の基礎知識や応用知識の理解度、および漢語サ変動詞の指導に対する意識調査を行った。結果として、学習者は、漢語サ変動詞の知識や運用能力の程度について自分でもはっきりわかっていないことが示された。また、サ変化できる漢語や一般的漢語サ変動詞についての理解度はそれぞれ6割と5割程度にとどまり、学年進行に伴う理解度の上昇も見られないこと、活用上の選好性、内部構成性、自他性、語彙的排他性のいずれにおいても理解度が4割に達しておらず、学年別の差も見られないことも明らかになった。漢語サ変動詞の実際の運用にきわめて重要となる共起語について言うと、学習者の回答には一見大きな問題がないようであるが、実際には微妙な違いが存在しており、学習者が漢語サ変動詞の独特のフォーマリティーの特徴を正確に理解できていないことがわかった。一方、これまでに受けてきた指導については、多くの学習者が、漢語サ変動詞の意味、自他の使い分け、分類と用法、品詞性について指導を受けたが、これらの指導が十分ではなく、正確な漢語サ変動詞の理解と運用ができておらず、自分で学ぶ必要があると感じていることが示された。とくに、語法・構造・形式・使い分けについて、また、すでに指導を受けた自他や意味・用法についても、あらためて詳しい指導を希望していることや、漢語サ変動詞の社会的特性や、漢語サ変動詞を使った作文のコツなどの指導を希望していることが明らかにされた。この結果は、中国人日本語学習者に対する漢語サ変動詞の必要性、および漢語サ変動詞指導や学習の方向性を示したものとなる。

10章「中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用」においては、中国人日本語学習者の漢語サ変動詞の使用実態の解明を目指した。この調査が必要なのは、漢語サ変動詞指導の方向性を考えるうえで、学習者の意識のみならず、実際の漢語サ変動詞使用をあわせて確認することも必要だと考えたためである。そこで、既存の学習者コーパスや筆者が独自に収集した中国人日本語学習者の漢語サ変動詞使用データをふまえて調査を行った。結果として、漢語サ変動詞の総量においても種類数においても、学習者が過剰使用をしていること、また、使用している漢語サ変動詞の内容は母語話者と2割程度しか一致していないこと、さらに学習者の漢語サ変動詞の使用には、母語干渉による混同のパタンの誤りと、文体不統一による接続の誤り、および文法範疇の誤りが多いことが確認された。この結果は、中国人日本語学習者に対する漢語サ変動詞指導の必要性と方向性を示すものとなる。

11章「コーパスに基づく漢語サ変動詞学習シートの開発」においては、中国人日本語学

習者を対象に、コーパス準拠の漢語サ変動詞学習シートの試行版の開発と予備的な学習実験を行った。そこで、コーパスから得られた頻度情報を強調して示す数値型学習シートと実際の用例を示す実例型学習シートの2種類を作成し、いずれがより有効かを検証するとともに、それらを用いた1回学習と2回学習の効果の違いや、2回学習における効果的な学習シートの提示順を調査した。結果として、1回学習の場合、数値型学習シートのほうが全体としてより高い学習効果につながることで、2回学習の場合、数値型学習を先に行うほうがより効果的であることなどが示唆された。また、学習者の感想から、1回学習ならば、数値型学習シートが好まれること、2回学習の場合、数値型学習の後に実例型学習を行うほうが望まれることが明らかになった。今回の研究で開発された2種類の学習シートについては、全体として、ともに肯定的な評価が得られた。また、それぞれの学習シートについて、今後の改善点が示された。この結果は、漢語サ変動詞の指導・学習において、コーパスから得られた知見を活用することが有用であるという可能性を示すものであった。

12.3 本研究の課題と今後の方向性

本研究では、日本語学と日本語教育学を架橋する立場から、コーパス調査で得られた知見をふまえ、中国人日本語学習者に対する漢語サ変動詞の学習・指導システムの考案を図った。各章で有益な知見が得られたが、一方、課題も残されている。以下では、課題と今後の方向性について詳しく述べる。

1 点目は、調査に使用したデータの問題である。すでに述べたように、本研究は、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) に含まれる 13 種のテキストのうち、とくに重要と思われる 6 種類のみを対象としている。この点については、3 つの問題が認められる。1 つ目は、教科書、広報紙、ベストセラーなどを分析対象から除外していることである。この点については、こうしたテキストにも日本語の重要な側面が表出されている可能性があるため、今後の調査においては、使用するデータの幅を広げていきたい。2 つ目は、本研究で調査対象とした新聞、雑誌、知恵袋、ブログ、白書について、データの収録年代が揃っていないということである。たとえば、新聞は 2001 年から 2005 年のもの、書籍は出版 (書籍) は 2001 年から 2005 年のもの、図書館 (書籍) は 1986 年から 2005 年のもの、雑誌は 2001 年から 2005 年のもの、知恵袋は 2004 年から 2005 年のもの、ブログは 2008 年から 2009 年のもの、白書は 1976 年から 2005 年のものとなっている。分析の妥当性を高めるためにデータの時代を厳格に統制するか、分析の安定性を高めるためにデータ量を優

先するかは難しい判断であるが、今後の研究においては、年代を統制した場合にどのような結果が得られるか比較することを試みたい。3つ目は、BCCWJ そのものの限界でもあるが、話し言葉のデータが今回の分析に含まれていなかったことである。多くの研究が書き言葉と話し言葉では異なる語彙や文法が使用される可能性を指摘しており、今後の研究においては、日本語話し言葉コーパス (CSJ) などの話し言葉データを活用しながら、日本語をより多面的に捉えていくことを試みたいと考える。

2点目は、調査対象の言語単位の問題である。本研究は個別的な語の単位で計量調査を行っており、コロケーションや文脈といったより長い単位は考慮に入れていない。分析にあたっては、現代日本語における高頻度・汎用的漢語サ変動詞を個別的な語の単位で特定した後、それらの多様な言語的特性を調査してきたわけであるが、個別的な語の単位を超えて、これらが他の語とどのように結合するか、またどのように文脈を組み立てていくかといった点に関して、研究の余地はなお残されている。たとえば、「利用する」について言うと、そのコロケーションは、新聞においては「駅」、「交通機関」、「施設」など、書籍においては「制度」、「システム」、「情報」など、知恵袋においては「カード」、「ATM」、「ID」となっている。同じ「利用する」であっても、これらの異なるコロケーションにより、その意味やニュアンスが変化している可能性がある。また、少なからぬ場合において、語と意味の結合が特定の文脈に制約されていることも重要である。今後は、コロケーションや文脈の単位まで広げて分析を行うことで、より立体的に漢語サ変動詞の振る舞いをモデル化していくことを試みたい。

3点目は、得られた知見を日本語学に応用するという問題である。本研究においては、コーパス調査で得られた知見を日本語教育に応用し、学習シートの開発を試みた。一方、日本語学にどのように応用していくかについては、なお検討の余地が残されている。コーパス研究の結果をふまえて日本語学を展開させる一つの方向性としては、辞書記述の改善が考えられる。すでに序章で述べたように、既存の辞書の漢語サ変動詞に関する記述はきわめて不十分なものであるが、コーパス調査で得られた知見を組み込み、記述をより豊かにしていくことができるだろう。以下では、「存在する」と「表示する」という2つの漢語サ変動詞を例に取り上げ、既存の辞書記述と今後想定されるコーパス準拠型の辞書記述の一例を示す。

① ある、または、いること。および「あるもの」。動詞の表す内容のうち、その場で動かず時間の経過する状態。「神の一」「偉大な一」「歴史上に一する人物」

② 『哲』 ① 何かがあることまたはあるもの。実体と属性とに分かれ、前者は基体・本体のようにそれ自体で独立にあるが、後者は前者に付帯して依存的にある。また、実態には自然的・物的なものと、意識的なもの、さらに超自然的で非感覚的なものがある。有。② 命題の主語と述語とをつなぐ繫辞としての「ある」。

図1 既存辞書の「存在」の記述
(『広辞苑』)

- A) 品詞：漢語サ変動詞
- B) 語義：＜抽象的な事物や何らかの状態＞があること
- C) 内部構成：＜V+V＞の並列関係（存る＋在る）
- D) 典型的活用形：未然形（否定形）（例：＜存在しない＞）
- E) 自他特性：99.86%は自動詞形（＜～が存在する＞）
- F) 構文形の可否：99.98%は否（＜？存在をする＞）
- G) 用例：「多くの種類が存在している」；「利便性のある施設は存在していなかった」；「意図的行為が存在しない」；「年齢や競技歴などの差異が存在しない」

図2 「存在する」の新しい記述の提案

- ① 外部へあらわし示すこと。今昔六「此れ、偏に金粟世界に生ぜる一なりと」。「賞味期限を一する」「意思一」
- ② 図表にして示すこと。

- A) 品詞：漢語サ変動詞
- B) 語義：＜主として物など＞が＜情報や図など＞を示すこと
- C) 内部構成：＜V+V＞の並列関係（表す＋示す）
- D) 典型的活用形：未然形（受身形）（例：＜表示される＞）
- E) 自他特性：94.97%は他動詞。ただし、そのうち、62.34%は受身態（＜～が表示される＞）、32.63%は他動詞態（＜～を表示する＞）
- F) 構文形の可否：22.39%で可（＜△表示をする＞）

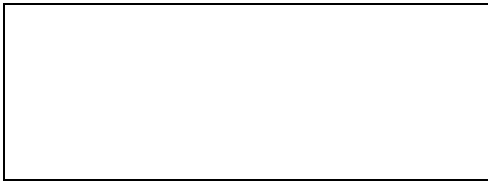


図3 既存辞書の「表示」の記述
(『広辞苑』)

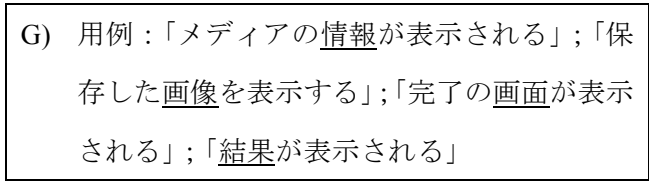


図4 「表示する」の新しい記述の提案

まず、「存在する」について述べる。既存の辞書記述には、(1) 意味記述は高度に抽象的で、学習者にとって実用的とは言い難く、(2) 漢語サ変動詞の用法に関する情報は示されておらず、さらに(3) 用例は「神」、「人物」などに限られ、当該語が人間に関係する主語についてしか使用できないという誤解を与える可能性がある、などの問題がある。そこで、改定案として、(1) については、選択制限を示し、とりうる主語が抽象的な事物や何らかの状態であることを意味記述の中に明示し、(2) については、未然形で多く使用されることや、自動詞形で使用されるのがほとんどであることなど、コーパス調査で明らかになった漢語サ変動詞の典型的な用法・特徴を多面的に記載し、さらに(3) については、実際の用例をできる限り多く示し、当該語が「種類」、「施設」、「差異」のような語とともに使用されることが多いことを示すようにした。これらの用例を見れば、「存在する」の主語として、〈人〉が来ることがむしろ少ないこと、〈物〉についても、具体的なものというよりは、抽象的な事物や何らかの状態が主であることが理解されるだろう。加えて、これらの用例はいずれも硬い文脈のものであり、当該語を使用する日本語の文脈に一定の制約があることもわかるだろう。

次に、「表示する」について述べる。既存の辞書記述には、(1) 意味記述は学習者にとって有用性が低く、(2) 漢語サ変動詞の用法に関する情報はほとんど示されておらず、さらに、(3) 用例は「此れ、偏に金粟世界に生ぜる一なりと」、「意味一」、「賞味期限を一する」のように、必ずしも一般的ではない、といった問題がある。そこで、改定案として、(1) については、選択制限を示し、とりうる主語や目的語が主として〈物〉となることを意味記述の中に明示し、(2) については、当該語はほとんどの場合において他動詞であるが、そのうち、62.34%は受身態で使用されることなど、コーパス調査で明らかになった用法や特徴を多面的に記載し、さらに(3) については、実際の用例をできる限り多く示すようにした。これらの用例を見れば、「表示する」の主語として、〈人〉よりも、むしろ〈物〉が一般的であることが理解されるだろう。また、実際のコーパス用例から、当該語は他動詞

でありながらも、受身形で最も多く使用されることをあわせて学べば、当該語の正しい運用に対する理解も深まるだろう。

これらの提案はあくまでも仮のものであるが、このような情報を積極的に辞書に記述していけば、コーパス調査で得られた知見を日本語学にも応用できると言えるだろう。辞書記述の充実は、外国人日本語学習者のみならず、日本語母語話者にとっても、日本語漢語サ変動詞を正確に理解するうえで有益なものになるだろう。

4点目は、本研究で対象とした学習者が中国人日本語学習者に限られているという問題である。中国人日本語学習者は、母語である中国語において、多くの漢語を共有することから、他の母語をもつ日本語学習者と区別して論じることは妥当であるが、一方で、中国人日本語学習者に見られる問題の多くは、その他の母語をもつ日本語学習者とも共通していると想定される。したがって、今後の研究においては、本研究で得られた指導・学習モデルを拡張し、適宜情報を追加したり削除したりすることで、特定の母語に限らず、幅広い母語をもつ日本語学習者に適応しうる教授モデルを考案していく可能性について検討したい。

12.4 おわりに

本研究は、コーパスデータに基づき、無数に存在する漢語サ変動詞の中から、最も一般的で汎用性が高いものを特定し、それらの言語的特性を多様な観点から調査した。さらに、中国人学習者の漢語サ変動詞に対する知識や意識、またその学習上の問題点を明らかにした後、当該学習者向けの漢語サ変動詞の学習法を考案することを試みた。

本研究は、語彙研究におけるコーパスデータの重要性を示すとともに、コーパスから得られた知見の教育的応用可能性について一定の示唆を示したものと言える。今後の展開として、研究結果の再現性の検証、および試行開発した学習シートの改良、また、より大規模な教育実験を行うことで、研究の価値をさらに高めていくこととしたい。

参考文献

- 青木玲子 (1977) 「使役：自動詞・他動詞との関わりにおいて」須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞の自他』 (pp. 108-123). 東京：ひつじ書房.
- 庵功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11, 47-63.
- 庵功雄 (2010) 「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因：非対格自動詞の場合を中心に」『日本語教育』146, 174-181.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『日本語文法ハンドブック』. 東京：スリーエーネットワーク.
- 五十嵐昌行 (1996) 「表現 (日本語) 時の母語干渉：山東大学語言文学系事例報告」『日語学習と研究』3, 41-43.
- 石井正彦 (2001) 『『文章における臨時一語化』の諸形式：新聞の四字漢語の結合』『現代日本語研究』(大阪大学日本語講座) 8, 1-34.
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』. 東京：ひつじ書房.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (編著) (2010) 『言語研究のための統計入門』. 東京：くろしお出版.
- 井上優 (2006) 「言語データとしての作文対訳データベース」『日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究報告書 (2001-2006)』(国立国語研究所), 43-52.
- 宇佐美洋 (2006) 『『作文対訳データベース』作成の目的とその多様な活用について』『日本語教育のための言語資源及び学習内容に関する調査研究報告書 (2001-2006)』(国立国語研究所), 9-42.
- 内田万里子 (1992) 「日本語と中国語：中国人学習者への日本語教育のために」『日本語・日本文化研究』(京都外国語大学留学生別科) 1, 42-52.
- 江口泰生 (1989) 「漢語サ変動詞の自他性と態」奥村三雄教授退官記念論文集刊行会 (編) 『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』 (pp. 765-784). 東京：桜楓社.
- 汪茂林 (2013) 「国内語料庫中介語研究現状分析」『文教資料』(南京師範大学) 608, 19-20.
- 大石亨 (2012) 「テキストのジャンルとメタファー表現のコレスポネンス分析：関係のメタファーを例に」『日本認知言語学会論文集』12, 52-64.
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典』大槻文彦 (1980) 『広日本文典・別記』. 東京：勉誠社.
- 沖森卓也 (監修) 三省堂編修所 (編) (2013) 『三省堂常用漢字辞典』. 東京：三省堂.

- 何中清・彭宜維 (2011) 「英語語料庫研究綜述：回顧，現状与展望」『外語教学』(西安外国語大学) 32 (1), 6-15.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較：語彙の構造』. 東京：松柏社.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 (pp. 33-70). 東京：ひつじ書房.
- 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得：他言語話者との習得過程の違い」『日本語教育』 125, 96-105.
- 河住有希子 (2005) 「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』 7, 53-65.
- 木山幸子・玉岡賀津雄 (2011) 「自他両用の『一化する』における自動詞用法と他動詞用法の比較：新聞コーパスの用例に基づく多変量解析」『言語研究』 139, 29-56.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15, 48-63.
- 黄鴻信 (2005) 「有関動名詞與変格動詞『suru』結合之考察」『台大日本語研究』 10, 53-84.
- 黄正浩 (1994) 「漢字語彙の日中間対照研究」『講座日本語教育』 29, 334-358.
- 候仁峰 (2002) 「日中言語における同形語の品詞の相違についての再考察」『Quality Japanese Studies and Japanese Language Education in Kanji-Using Areas in the New Century』, 78-88.
- 国際交流基金日本国際教育支援協会 (2012) 『日本語能力試験 JLPT 公式問題集 N1』. 東京：凡人社.
- 国立国語研究所 (1964) 『国立国語研究所報告 25：現代雑誌九十種の用語用字第 3 分冊分析』. 東京：秀英出版.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』. 東京：ひつじ書店.
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理：同形類義語と同形異義語を対象に」『日本語科学』(国立国語研究所), 81-94.
- 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』. 東京：スリーエーネットワーク.
- 後藤齊 (2003) 「言語理論と言語資料：コーパスとコーパス以外のデータ」『日本語学』(明治書院) 22 (5), 6-15.

- 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のズレ：二字漢語の動詞性をめぐって」『一橋大学留学センター紀要』, 3-13.
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武 (編) 『講座・現代国語学Ⅱ：ことばの体系』 (pp. 217-248). 東京：筑摩書房.
- 斎藤倫明 (2004) 『語彙論的語構成論』. 東京：ひつじ書房.
- 佐藤喜代治 (1979) 『日本の漢語：その源流と変遷』. 東京：角川書店.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』. 東京：笠間書院.
- 朱京偉 (2011a) 「在華宣教師の洋学資料に見える三字語：蘭学資料との対照を兼ねて」『国立国語研究所論集』 1, 93-112.
- 朱京偉 (2011b) 「蘭学資料の四字漢語についての考察：語構成パターンと語基の性質を中心に」『国立国語研究所論集』 2, 165-184.
- 周平・陳小芬 (2009) 『新編日語』. 上海：上海外語教育出版社.
- 新潮社 (編) (2008) 『新潮日本語漢字辞典』. 東京：新潮社.
- 新村出 (編) (2008) 『広辞苑 (第6版)』. 東京：岩波書店.
- 須賀一好・早津恵美子 (1995) 『動詞の自他』. 東京：ひつじ書房.
- 鈴木義昭 (1994) 「誤用分析：『努力に勉強する』をめぐって」『講座日本語教育』 (早稲田大学日本語教育センター) 29, 50-56.
- 曹紅波・王雪利 (2013) 「近十年国内語料庫語言学研究綜述」『山东外語教學』 154, 41-47.
- 曹大峰 (2012) 「2011年中国日語研究綜述」『日語學習与研究』 158, 10-18.
- 田辺和子・中條清美・船戸はるな (2012) 「新聞コーパスにおける二字漢語動名詞の動詞的・名詞的ふるまいについて」『日本女子大学紀要』 61, 19-32.
- 田野村忠温 (1988) 「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』」『日本語学』 (明治書院) 7 (11), 70-80.
- 田野村忠温 (2001) 「サ変動詞の活用のゆれについて：電子資料に基づく分析」『日本語科学』 (国立国語研究所) 9, 9-32.
- 田野村忠温 (2009) 「サ変動詞の活用のゆれについて・続：大規模な電子資料の利用による分析の精密化」『日本語科学』 (国立国語研究所) 25, 91-103.
- 張志剛 (2010) 「語構成による漢語動詞の自他使用の予測可能性：形容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞の場合」『言語社会』 (一橋大学) 4, 415-423.
- 張善実 (2008) 「漢語動詞の二格構文に関する誤用調査：中国人日本語学習者を対象に」『言

- 葉と文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科) 9, 205-220.
- 張善実 (2010a) 「V-N 型漢語動詞の自他 : N の意味の限定化をめぐって」『第 8 回日本語教育研究集会予稿集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科「対話創生プロジェクト」企画), 36-39.
- 張善実 (2010b) 「V-N 型の漢語動詞の語構成と自他」『言葉と文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科) 11, 155-164.
- 張善実 (2013) 「日本語の V-N 型漢語動詞の語構成論的研究 : 離脱・帰着を表す動詞を中心に」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士学位論文.
- 陳毓敏 (2003a) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について : 同義語・類義語・異義語・脱落語の 4 タイプからの検討」『平成 15 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 174-179.
- 陳毓敏 (2003b) 「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観 : 意味と用法を中心に」『言語文化と日本語教育 : 第二言語習得・教育の研究最前線』, 96-113.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 : 言語類型論から見た日本語 (改訂版)』. 東京 : くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』. 東京 : くろしお出版.
- 藤堂明保・松本昭・竹田晃ほか (2011) 『漢字源 (改訂第 5 版)』. 東京 : 学習研究社.
- 中川正之 (2005) 『漢語からみえる世界と世間』. 東京 : 岩波書店.
- 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』(日本語学会) 3 (4), 17-32.
- 西尾寅弥 (1982) 「自動詞と他動詞 : 対応するものとしらないもの」『日本語教育』 47, 57-68.
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』. 東京 : 明治書院.
- 日本語教育学会 (編) 水谷修ほか (編集) (1999) 『日本語教育辞典』. 東京 : 大修館書店.
- 日本語教育学会 (編) 水谷修ほか (編集) (2005) 『新版日本語教育事典』. 東京 : 大修館書店.
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』 (pp. 211-232). 東京 : くろしお出版.
- 野村剛史 (1982) 「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』 11, 161-179.
- 野村雅昭 (1987) 「複合漢語の構造」水谷静夫 (編) 『朝倉日本語新講座 1 : 文字・表記と語構成』 (pp. 130-141). 東京 : 朝倉書店.

- 野村雅昭 (1988a) 「現代漢語の品詞性」 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集 編集委員会 (編) 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 (pp. 128-143). 東京: 汲古書院.
- 野村雅昭 (1988b) 「二字漢語の構造」 『日本語学』 (明治書院) 7 (5), 44-55.
- 野村雅昭 (1999) 「サ変動詞の構造」 森田良行教授古稀記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』 (pp. 1-23). 東京: 明治書院.
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて: 意味的な特徴を中心に」 『言語研究』 95, 179-197.
- 早津恵美子 (2000) 「現代日本語のヴォイスをめぐって」 『日本語学』 (明治書院) 19 (5), 16-27.
- 樊晓萍 (2013) 「基于 BCCWJ 语料库的数据驱动学习在基础日语教学中的实践」 『哈尔滨职业技术学院学报』 3, 82-83.
- 日向敏彦 (1985) 「漢語サ変動詞の構造」 『上智大学国文学論集』 18, 161-179.
- 平尾得子 (1995) 「VN がスルと VN スルと VN フスル: サ変動詞語幹と構文的制約」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』 (pp. 89-98). 東京: くろしお出版.
- 彭広陸・守屋三千代 (2009) 『総合日語』. 北京: 北京大学出版社.
- 馮富栄 (1993) 「日本語受動文の学習過程における母語: 中国語の影響について」 『Japanese Journal of Educational Psychology』 41, 388-398.
- 馮富栄 (1994) 「日本語使役文の学習過程における母語 (中国語) の影響について」 『Japanese Journal of Educational Psychology』 42, 324-333.
- 前川喜久雄 (2008) 「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」 『日本語の研究』 (日本語学会) 4 (1), 82-95.
- 前川喜久雄 (2011) 「特定領域研究『日本語コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」 『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』, 1-10.
- 前川喜久雄 (編) (2013) 『コーパス入門』. 東京: 朝倉書店.
- 松岡知津子 (2004) 「漢語名詞とスルが構成する 2 種類の述語の交替」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 2 (53), 305-310.
- 松村明 (編) (2006) 『大辞林 (第 4 版)』. 東京: 三省堂.
- 松村明 (監修) 小学館国語辞典編集部 (編) (2012) 『大辞泉 (第 2 版)』. 東京: 小学館.

- 丸山岳彦・田野村忠温 (2007) 「コーパス日本語学の射程」『日本語科学』(国立国語研究所) 22, 5-12.
- 丸山岳彦・柏野和佳子 (2011) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの設計と実施」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』, 21-26.
- 丸山岳彦・山崎誠・柏野和佳子・佐野大樹・秋元裕哉・稲益佐知子・田中弥生・大矢内夢子 (2011a) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』におけるサンプリングの原理と運用」(国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-08-01) .
- 丸山岳彦・山崎誠・柏野和佳子・佐野大樹・秋元裕哉・稲益佐知子・田中弥生・大矢内夢子 (2011b) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に含まれるサンプルおよび書誌情報の設計と実装」(国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-10-02) .
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』. 東京：くろしお出版.
- 三喜田光次 (2000) 『ここが違う：日本語語彙と中国語語彙』. 奈良：天理大学出版部.
- 水谷静夫 (編) (1987) 『朝倉日本語新講座 1：文字・表記と語構成』. 東京：朝倉書店.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』. 東京：秀英出版.
- 村木新次郎 (1989) 「ヴォイス」『講座日本語と日本語教育』(明治書院) 4, 168-200.
- 村木新次郎 (2004) 「現代日本語における漢語の品詞性」『日語研究』(商務印書館) 2, 1-28.
- 望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析：中国語との対照から」『東京外国語大学論集』 78, 85-106.
- 森篤嗣 (2012) 「漢語サ変動詞におけるスルーサセルの置換について」『第9回国際日本語教育日本語研究シンポジウム予稿集』, 1-8.
- もり・きよし (編) 日本図書館協会分類委員会 (改訂) (1995) 『日本十進分類法 (新訂 9版)』. 東京：日本図書館協会.
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』. 東京：明治書院.
- 山口明穂・秋元守英 (2001) 『日本語文法大辞典』. 東京：明治書院.
- 山崎誠 (2011) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築と活用」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』, 11-20.
- 山下喜代 (1995) 「国語辞典における語構成要素の扱いについて」『日本語研究教育センター紀要』(早稲田大学日本語研究教育センター) 7, 77-108.
- 山田一美・山田勇人 (2009) 「漢語サセル動詞に関する一考察」『大阪女学院短期大学紀要』

39, 19-29.

山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』. 東京: 宝文館.

山田勇人 (2012) 「自他同形漢語動詞から見る再帰構文の他動性について」『第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集原稿』, 1-7.

湯本昭南 (1977) 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』 27, 31-46.

楊高郎 (2009) 「国語辞典における自他認定について: 自他両用の二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究』 14, 75-95.

李羽喆 (2009) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語理解における自信度の一考察」『JALT 日本語教育論集』 10 (1), 37-55.

李恵 (2012) 「中国人日本語学習者による日本語作文における二字漢語サ変動詞の誤用について」『日本語研究』 32, 117-129.

劉珂 (1997) 「日本語の中の二・三の漢字語彙について: 中国人に対する『母国語対比』授業で考えたこと」『拓殖大学日本語紀要』 7, 175-186.

柳納新 (1997) 「關於日漢同形近義詞」『日語知識』 (大連外国語学院) 7, 23-25.

Corder, S. P. (1967). The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 5, 161-170.

Leech, G. (1998). Preface. In S. Granger (Ed.), *Learner English on computer* (pp. xiv-xx). Harlow, UK: Pearson Educational Limited.

Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Bulletin of Applied Linguistics*, 10, 209-231.

Uchida, Y. & Nakayama, M. (1993). Japanese verbal noun constructions. *Linguistics*, 31(4), 623-666.

添付資料

資料 1

漢語サ変動詞に関する意識調査 (9 章)

1. あなたについて：

性別 (男 ・ 女) 年 齢 ()
大 学 ()
専 攻 ()

2. 主としてどこで日本語を勉強しましたか？

中高等学校 大学 言語学校 中高大学校
 その他 ()

3. 日本語を勉強して何年になりましたか。

~1 年 1~2 年 2~3 年 3~4 年
 4~5 年 5~6 年 6 年以上 (年)

4. 日本に何か月間留学しましたか。 () ヶ月

5. 日本語を勉強するのに使用した主な教科書は何ですか。(複数選択可)

みんなの日本語 総合日語
 標準日語 新文化日本語
 新編日語 基礎日語総合教程
 その他 ()

6. あなたが持っている日本語能力試験のレベルはどれですか。

ない N5 N4 N3 N2 N1

7. 日本語を勉強するのに様々な方法が考えられます。あなたは下記の方法をどの程度実行していますか？

まったくしていない……1, あまりしていない……2, どちらとも言えない……3,
少ししている……4, よくしている……5

- A. 教科書で勉強する ()
B. 辞書を引くことで勉強する ()

- C. アニメを見ることで勉強する ()
- D. 新聞を読むことで勉強する ()
- E. 日本人の先生やと友達とコミュニケーションすることで勉強する ()
- F. 論文を読むことで勉強する ()
- G. 日記や作文を書くことで勉強する ()
- H. ほかにあなたが使っている方法があれば、下記の括弧に書いてください。どの程度実行しているかも数字で書いてください。
- () (中国語で回答可)

8. 日本語には、「努力する」、「勉強する」など、漢語に「する」を付けた漢語サ変動詞というものがああります。こうした漢語サ変動詞について、あなたは自分で自分の能力をどのように判断していますか？

- A. 漢語サ変動詞の知識については ()
- B. 漢語サ変動詞の運用能力については ()

全くない……1, あまりない……2, どちらも言えない……3,
 少しはある……4, 十分にある……5

■ 漢語サ変動詞について

1. 以下に挙げた語の中で、日本語として存在すると思うものには○、存在しないと思うものには×を付けてください。

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 意味する [] | 機能する [] | 効果する [] | 特徴する [] |
| 調査する [] | 理解する [] | 関係する [] | 番組する [] |
| 表記する [] | 参考する [] | 対照する [] | 重複する [] |
| 関連する [] | 娯楽する [] | 自由する [] | 順位する [] |
| 従来する [] | 議論する [] | 相関する [] | 特定する [] |

2. 漢語サ変動詞には様々なものがあります。その中では、多く使われるものもあれば、ほとんど使わないものもあります。下記の漢語サ変動詞 20 語について、漢語サ変動詞とし

て一般的で多く使われると思うものには○、それほど多く使われていないと思うものには△を付けてください。

使用する []	実行する []	提示する []	包含する []
破壊する []	解析する []	紹介する []	移動する []
指定する []	連続する []	規定する []	誤解する []
実験する []	選定する []	注意する []	告白する []
注目する []	判定する []	考慮する []	検討する []

3. 下記の 15 語について、それぞれの形で最も多く使われていると思いますか。対応する枠にチェックを入れてください。

- ・ 連用形 - 一般：「し (て)」のような形のもので，例：努力して成功する
- ・ 未然形 - サ変：「さ (れる)」「さ (せる)」などにつながるもの，例：努力させる
- ・ 連体形 - 一般：「～する (こと)」のように，名詞につながるもの，例：努力する人

A. 利用する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
B. 変化する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
C. 理解する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
D. 使用する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
E. 検討する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
F. 実現する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
G. 説明する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
H. 発見する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
I. 表現する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
J. 確認する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
K. 提供する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
L. 紹介する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
M. 表示する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
N. 指摘する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形
O. 注目する	<input type="checkbox"/> 連用形	<input type="checkbox"/> 未然形	<input type="checkbox"/> 連体形

4. 漢語サ変動詞の漢語部は、それを構成する要素の品詞（動詞か名詞か形容詞など）によって、以下のように分類することが可能です。タイプにより、漢語サ変動詞になりやすいものとなりにくいものがあります。以下の分類について、それぞれどの程度漢語サ変動詞になりやすいかについて教えてください。

まったくなりにくい……1, どちらかと言えぱなりにくい……2, どちらとも言えない……3, どちらかと言えぱなりやすい……4, 非常になりやすい……5

- A. 【名詞＋名詞】（ ）
 （例：意味（^{オモイ}意＋味），意識（^{オモイ}意＋^{シキ}識））
- B. 【名詞＋動詞】（ ）
 （例：理解（^{コトワリ}理＋解く），形成（形＋成す））
- C. 【動詞＋名詞】（ ）
 （例：注目（注ぐ＋目），分類（分ける＋^{タグイ}類））
- D. 【動詞＋動詞】（ ）
 （例：存在（^ヰ存＋^ヰ在る），觀察（^ミ観＋^ミ察る））
- E. 【動詞＋形容詞】（ ）
 （例：減少（減らす＋少ない），拡大（広げる＋大きい））
- F. 【形容詞＋動詞】（ ）
 （例：重視（重く＋^ミ視る），確立（確かに＋立てる））
- G. 【副詞＋動詞】（ ）
 （例：実現（^{マコト}実＋現れる），予想（^{アラカジメ}予＋^{オモ}想う））
- H. 【接辞＋動詞】（ ）
 （例：否定（^{イナ}否＋定める））

5. 漢語サ変動詞の漢語部は、それを構成する要素間には様々な結合関係が存在します。ただし、タイプにより、漢語サ変動詞になりやすいものとなりにくいものがあります。以下の分類につて、それぞれどの程度漢語サ変動詞になりやすいか教えてください。

まったくなにくい……1, どちらかと言えばなにくい……2, どちらとも言えない……3, どちらかと言えばなりやすい……4, 非常になりやすい……5

A. 【並列関係】()

(同じような意味を持つものの組み合わせ, たとえば, 使用(使う+用いる), 判断(判つ+断つ))

B. 【修飾関係】()

(前の文字が後ろの文字を修飾するもの, たとえば, 重視(重く+視る), 活用(活かす+用いる))

C. 【客体関係】()

(動詞と対象語の組み合わせ, たとえば, 登場(登る+場), 規定(規+定める))

D. 【補充関係】()

(動作とその結果を示すもの, たとえば, 説明(説く+明らか), 拡大(拡げる+大きい))

E. 【実質関係】()

(ある内容を否定するもの, 例えは, 不足(不+足る), 否認(否+認める))

6. 漢語サ変動詞は, その前に「が」がつきやすいものもあれば, 「を」がつきやすいものもあります。以下の各語について, どちらが自然であるか答えてください。

絶対「が」のほうが自然……1, あえていうと「が」のほうがより自然……2,
「が」と「を」がともに自然……3, あえていうと「を」のほうがより自然……4,
絶対「を」のほうが自然……5

- (1) 製品が完成する⇔製品を完成する ()
- (2) 人物が登場する⇔人物を登場する ()
- (3) 品質が安定する⇔品質を安定する ()
- (4) 勝負が決定する⇔勝負を決定する ()
- (5) 重心が移動する⇔重心を移動する ()
- (6) 利点が活用する⇔利点を活用する ()
- (7) 作業が開始する⇔作業を開始する ()

- (8) 仮説が成立する⇔仮説を成立する ()
- (9) 意見が重視する⇔意見を重視する ()
- (10) 事件が発生する⇔事件を発生する ()
- (11) 所得が増加する⇔所得を増加する ()
- (12) 結果が一致する⇔結果を一致する ()
- (13) 意味が変化する⇔意味を変化する ()
- (14) 実験が成功する⇔実験を成功する ()
- (15) 技術が発展する⇔技術を発展する ()

7. 漢語は、その後に「～する」が付きやすいものもあれば、「～をする」が付きやすいものもあります。以下の各語について、どちらが自然であるか答えてください。

絶対「～をする」のほうが自然……1, あえていうと「～をする」のほうがより
 自然……2, 「～する」と「～をする」がともに自然……3, あえていう
 と「～する」のほうがより自然……4, 絶対「～する」のほうが自然……5

- (1) 一致 ()
- (2) 確立 ()
- (3) 記載 ()
- (4) 発見 ()
- (13) 表示 ()
- (5) 観察 ()
- (6) 予想 ()
- (7) 勉強 ()
- (8) 分類 ()
- (14) 発揮 ()
- (9) 意味 ()
- (10) 評価 ()
- (11) 確認 ()
- (12) 重視 ()
- (15) 反映 ()

8. 下記の語について、それぞれ2つの主語もしくは対象語や目的語を書いてください。

例. (1) 減少する：旅行客数が減少した。(主語)

(2) 提供する：商品が提供する。(目的語)

(1) 存在する

(A) _____が存在する。

(B) _____が存在する。

(2) 利用する

(A) _____ を利用する。

(B) _____ を利用する。

(3) 紹介する

(A) _____ を紹介する。

(B) _____ を紹介する。

(4) 説明する

(A) _____ を説明する。

(B) _____ を説明する。

(5) 使用する

(A) _____ を使用する。

(B) _____ を使用する。

(6) 確認する

(A) _____ を確認する。

(B) _____ を確認する。

(7) 理解する

(A) _____ を理解する。

(B) _____ を理解する。

(8) 表示する

(A) _____ を表示する。

(B) _____ を表示する。

(9) 発見する

(A) _____ を発見する。

(B) _____ を発見する。

(10) 発生する

(A) _____ が発生する。

(B) _____ が発生する。

■ あなたの感想について

9. これまでに漢語サ変動詞の指導を受けたことがあれば、(1) どのような指導を受けたか、(2) その指導についてどう思ったか、下記に書いてください（中国語でもかまいません）。

10. あなたが授業で漢語サ変動詞を習うとすると、どのように指導してほしいですか。希望する指導法について、2～3 文程度で具体的に書いてください（中国語でもかまいません）。

ご協力, ありがとうございました!

資料2

プレ・ポストテスト (11章)

1. 以下に示す漢語サ変動詞の中には、日本語として存在しないものが含まれています。存在すると思うものには○、存在しないと思うものには×を付けてください。

意味する []	機能する []	効果する []	特徴する []
調査する []	理解する []	関係する []	番組する []
表記する []	参考する []	対照する []	重複する []
関連する []	娯楽する []	自由する []	順位する []
従来する []	議論する []	相関する []	特定する []

2. 以下に示す漢語サ変動詞はすべて日本語として存在するものです。ただし、これらの中には、一般的な日本語において多く使われる語と、あまり使われない語が含まれています。多く使われると思うものには○、あまり使われないと思うものには△をつけてください。

使用する []	実行する []	提示する []	包含する []
破壊する []	解析する []	紹介する []	移動する []
指定する []	連続する []	規定する []	誤解する []
実験する []	選定する []	注意する []	告白する []
注目する []	判定する []	考慮する []	検討する []

3. 漢語サ変動詞は実際の使用において、様々な活用形を取ります。「説明する」を例にすると、「説明する。」が「終止形」，「説明する内容」が「連体形」，「説明してみる」が「連用形」，「説明しようとする」が「意志推量形」，「説明すれば」が「仮定形」，「説明しろ」が「命令形」となります。漢語サ変動詞ごとに特に多く使う活用形が異なっています。以下に示す語について、それぞれの活用形で最も多く使われると思うか、当てはまるところに○をつけてください。

(A) 利用する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(B) 変化する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(C) 理解する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(D) 使用する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

(E) 検討する

- 連体形 未然形 連用形 假定形
 意志推量形

4. 漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的結合関係が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」であるため、「動詞+動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ+目」であるため、「動詞+名詞」型となります。以下に示す結合パターンそれぞれについて、こういうパタンの漢語サ変動詞は多いと思いますか。

(A) 【名詞+名詞】(例：意味=意^{オモイ}+味)

- (1) ほとんどない
(2) 少ない
(3) どちらとも言えない

- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(B) 【名詞+動詞】(例：形成=形+成す)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(C) 【動詞+名詞】(例：分類=分ける+^{カク}類)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(D) 【動詞+動詞】(例：存在=存^ゾる+在^ゾる)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(E) 【形容詞+動詞】(例：重視=重^{オモシ}く+視^ミる)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

5. 漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているので、「並列關係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係（客體關係）が示されているので、「客體關係」型となります。以下に示す結合パターンそれぞれについて、こういうパターンの漢語サ変動詞は多いと思いますか。

(A) 【並列關係】（同じような意味を持つ文字の組み合わせ、例えば、使用＝使う＋用いる）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(B) 【修飾關係】（前の文字が後ろの文字を修飾するもの、例えば、重視＝重く＋視る）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(C) 【客體關係】（動詞と対象語の組み合わせ、例えば、登場＝登る＋場）

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(D) 【補充関係】(動作とその結果を示すもの, 例えば, 拡大=広げる+大きい)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

(E) 【実質関係】(「不」, 「非」などの接辞と動詞の組み合わせ, 例えば, 不足=不+足る)

- (1) ほとんどない
- (2) 少ない
- (3) どちらとも言えない
- (4) 少しある
- (5) たくさんある

6. 漢語サ変動詞の中には, 自動詞のみ, もしくは, 他動詞のみで使うものもあれば, 自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また, 他動詞の中には, 能動形で多く使用するものもあれば, 受身形で多く使用するものもあります。以下の各語について, 最も一般的だと思える用例に○をつけてください。

(A) 変更する

- (1) 内容が変更する (自動詞形)
- (2) 内容を変更する (他動詞・能動形)
- (3) 内容が変更される (他動詞・受身形)

(B) 表示する

- (1) 結果が表示する (自動詞形)
- (2) 結果を表示する (他動詞・能動形)
- (3) 結果が表示される (他動詞・受身形)

(C) 適用する

- (1) 規定が適用する (自動詞形)
- (2) 規定を適用する (他動詞・能動形)
- (3) 規定が適用される (他動詞・受身形)

(D) 発見する

- (1) 落とし物が発見する (自動詞形)
- (2) 落とし物を発見する (他動詞・能動形)
- (3) 落とし物が発見される (他動詞・受身形)

(E) 一致する

- (1) 意見が一致する (自動詞形)
- (2) 意見を一致する (他動詞・能動形)
- (3) 意見が一致される (他動詞・受身形)

7. 漢語サ変動詞は、「Xする」(例:「確認する」)の形をとりますが、「Xをする」(例:「確認をする」)の形でも表現することができます。ただし、語によって、「Xする」の形を好むものと、「Xをする」の形を好むものがあります。以下に示す語について、どの程度「Xする」の形で使用されるか、あてはまると思う数字に○をつけてください。

(A) 一致する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(B) 重視する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(C) 勉強する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(D) 理解する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

(E) 発揮する: 「Xをする」 1 — 2 — 3 — 4 — 5 「Xする」

8. あなたは自分の漢語サ変動詞の知識や運用能力について、どの程度自信がありますか？
あてはまる選択肢の番号で回答してください。

(A) 漢語サ変動詞の知識については ()

- | | |
|---------------|---------------|
| (1) 全く自信がない | (4) ある程度自信がある |
| (2) ほとんど自信がない | (5) とても自信がある |
| (3) どちらとも言えない | |

(B) 漢語サ変動詞の運用能力については ()

- | | |
|---------------|---------------|
| (1) 全く自信がない | (4) ある程度自信がある |
| (2) ほとんど自信がない | (5) とても自信がある |
| (3) どちらとも言えない | |

ご協力, ありがとうございました!

資料3

【コーパス準拠学習シート】（数値型）（11章）

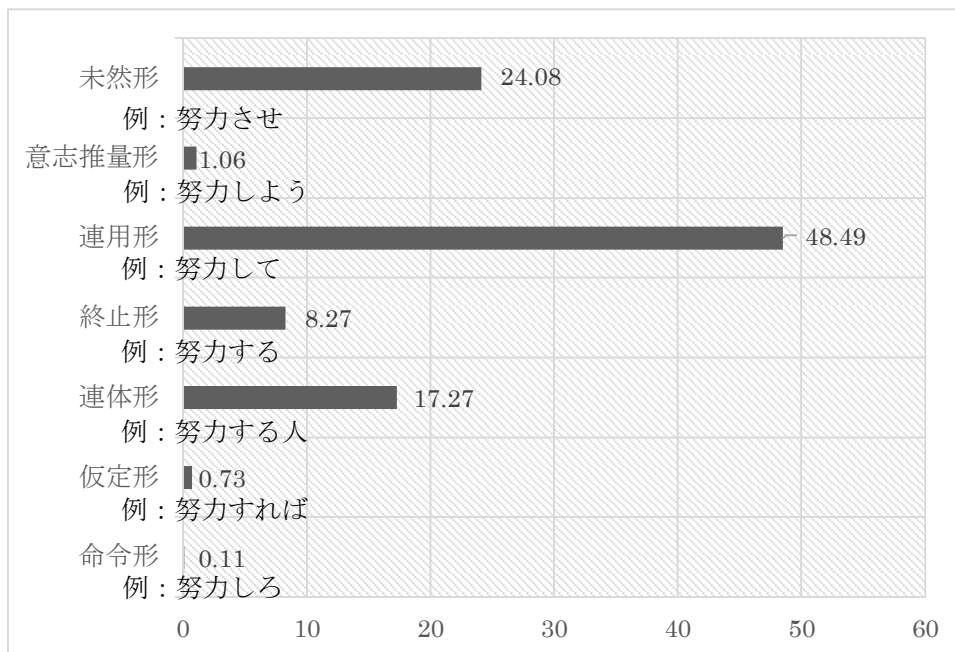
1. 高頻度・汎用的漢語サ変動詞

下表に示しているのは、現代日本語において、最も高頻度、かつ、幅広く使用されている漢語サ変動詞の上位10語です。高頻度・高汎用ポイントは値が大きいものほど、高頻度で、かつ、汎用性が高いということを示しています。それぞれのポイントをよく見たいうえで、単語とポイントを右側に書き写してください。

順位	語	高頻度・高汎用ポイント	書き写し欄（単語・ポイント）
1	存在する	12.5	
2	利用する	11.8	
3	紹介する	9.0	
4	説明する	9.0	
5	使用する	8.7	
6	確認する	8.3	
7	理解する	7.1	
8	表示する	6.1	
9	発見する	5.9	
10	発生する	5.7	

2. 活用上の選好性

動詞は実際の使用において、様々な活用形をとります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には以下のような活用形があります。



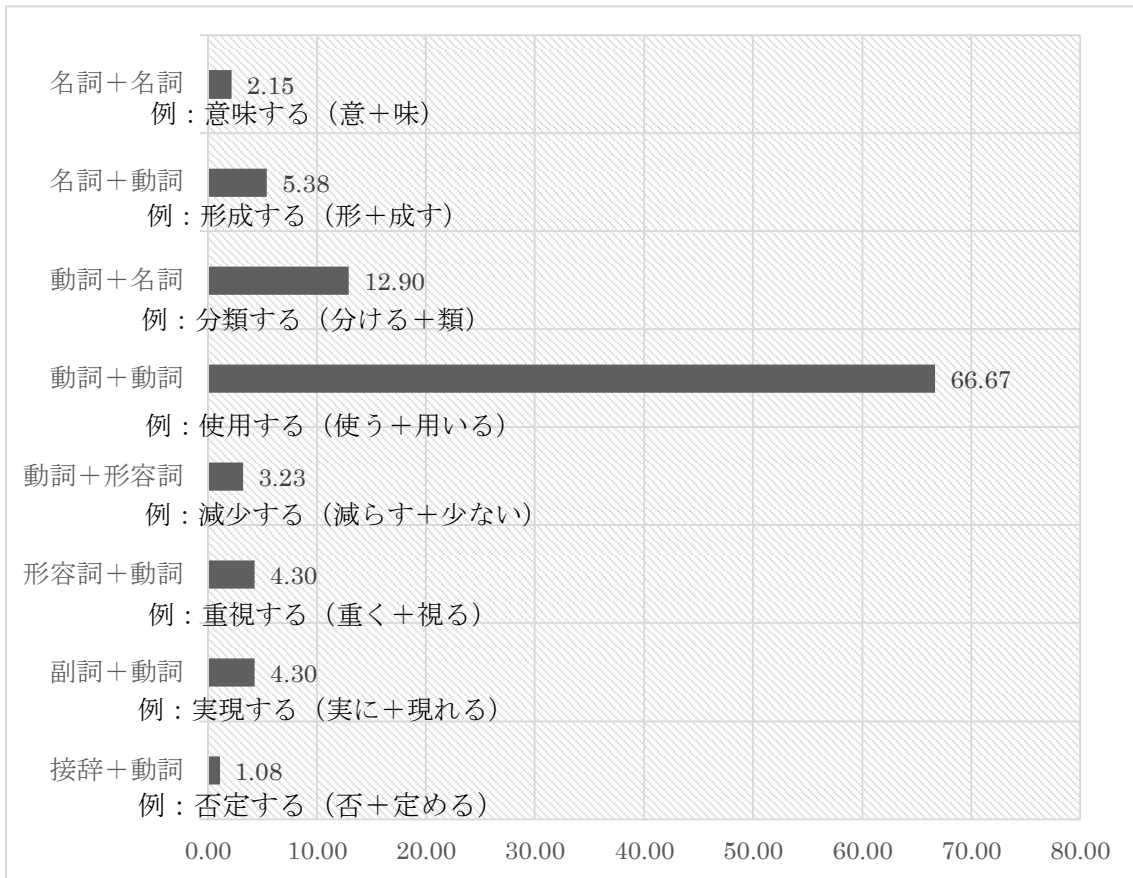
上記のグラフを見て、漢語サ変動詞における上位3種の活用形の名称を下表に書いてください。その後、「完成する」という語を例にそれぞれの活用形を書いてください。

	活用形の名称	「完成する」の各活用形
1位		
2位		
3位		

3. 内部構成性

(1) 品詞結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」であるため、品詞結合のパターンは「動詞+動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ+目」であるため、品詞結合パターンは「動詞+名詞」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のよ様な品詞結合パターンが見られます。



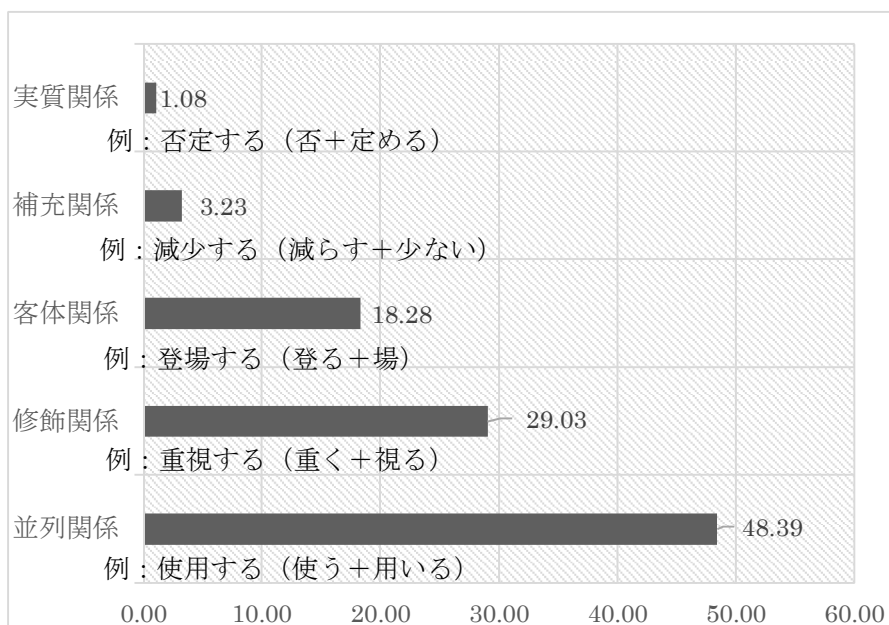
上記のグラフを見て、漢語サ変動詞に最も多い上位3種類の品詞結合パターンを教えてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの品詞結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| A. 販売する | B. 用意する | C. 心配する |
|---------|---------|---------|

	品詞結合パターン	語例
1位		
2位		
3位		

(2) 意味結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う+用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているので、「並列關係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係（客體關係）が示されているので、「客體關係」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような意味結合パターンが見られます。



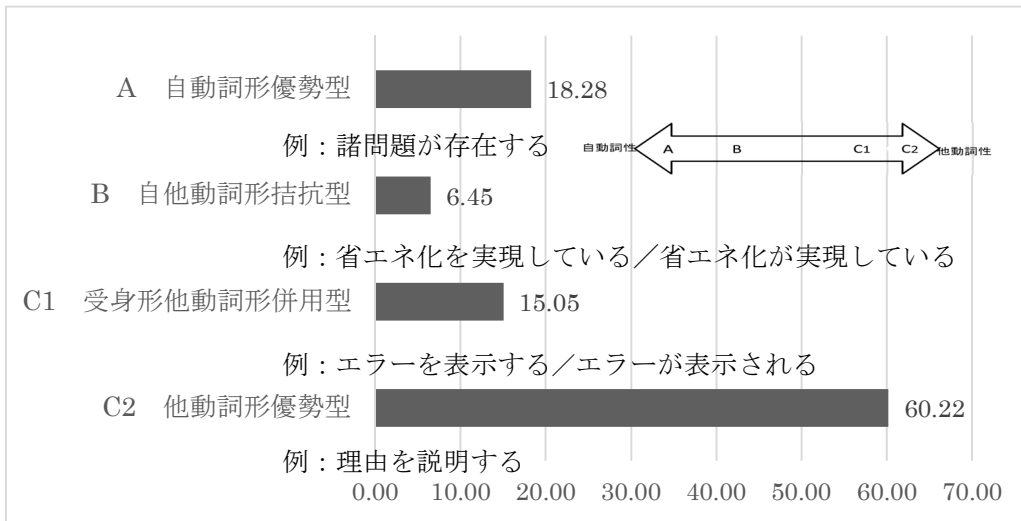
上記のグラフを見て、漢語サ変動詞に最も多い上位3種類の意味結合パターンを書いてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの意味結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

A. 主張する B. 選択する C. 分類する

	意味結合パターン	あてはまると思う語例
1位		
2位		
3位		

4. 自他性

漢語サ変動詞の中には、自動詞のみ、もしくは、他動詞のみで使うものもあれば、自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また、他動詞の中には、能動形で多く使用するものもあれば、受身形で多く使用するものもあります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞を上記の点で分類すると、以下の A, B, C1, C2 の 4 種類になります。自他性の観点でこの 4 種類の関係を示すと、以下のようになります。

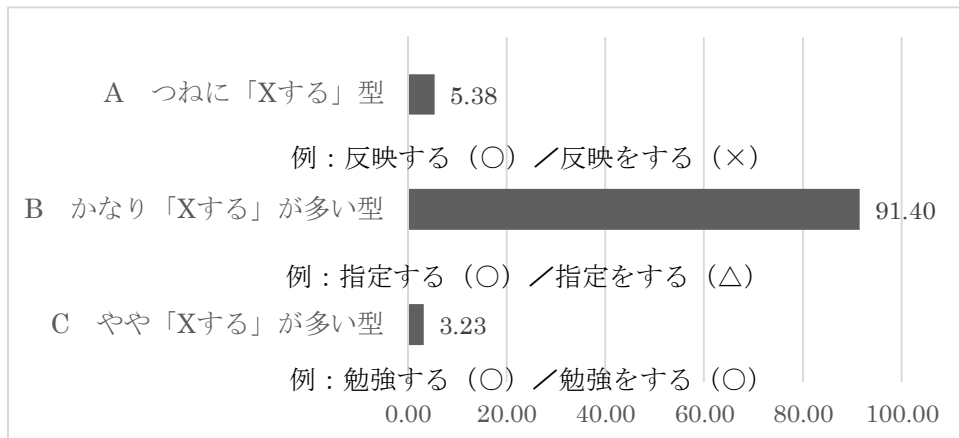


上記のグラフを見て、A, B, C1, C2 のうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > () > ()

5. 語彙的排他性

漢語サ変動詞は、「Xする」(確認する)の形をとりますが、「Xをする」(確認をする)の形でも同じ意味を表現することができます。高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、以下のグラフで示すように、(A) つねに「Xする」の形で使用するもの、(B) かなり「Xする」の形が多いもの、(C) やや「Xする」の形が多いもの、の3種類に分かれます。



上記の用例を見て，A，B，Cのうち，高頻度・汎用的漢語サ変動詞の中に多いと思うもの順に並べ替えて，下記に記入してください。

()	>	()	>	()
----------------	---	----------------	---	----------------

資料4

【コーパス準拠学習シート】（実例型）（11章）

1. 高頻度・汎用的漢語サ変動詞

下表に示しているのは、現代日本語において、最も高頻度、かつ、幅広く使用されている漢語サ変動詞の上位10語です。用例をよく見たうえで、用例中に含まれる漢語サ変動詞に線を引き、元の語を右側の欄に書き写してください。

例：

語	用例	書き写し欄
勉強する	彼は英語を勉強している。	勉強する

順位	語	用例	書き写し欄
1	存在する	多種多様なものが存在している。	
2	利用する	このサービスを利用するには、カードが必要です。	
3	紹介する	DVDビデオの作成について紹介します。	
4	説明する	この文章は、登場人物について説明している。	
5	使用する	コピー機を使用してください。	
6	確認する	値段をよく確認しましょう。	
7	理解する	相手の話しの意味を理解しましょう。	
8	表示する	ここに印刷画面が表示されます。	
9	発見する	キノコの化石は発見されていません。	
10	発生する	火災が発生したのです。	

2. 活用上の選好性

漢語サ変動詞は実際の使用において、様々な活用形を取ります。「説明する」を例にすると、「説明する。」（終止形）、「説明する内容」（連体形）、「説明してみる」（連用形）、「説明しようとする」（意志推量形）、「説明すれば」（仮定形）、「説明しろ」（命令形）のように、多様な活用形をとります。以下に高頻度・汎用的漢語サ変動詞がとる活用形を示します。

- (1) インターネットを利用して調べる。(連用形)
- (2) 試合が開催されてよかった。(未然形)
- (3) 次のルートを利用すれば間に合う。(仮定形)
- (4) 「勉強しろ」と父に厳しく叱られた。(命令形)
- (5) 数字は画面の一番下に表示されている。(未然形)
- (6) 電話で確認しておく。(連用形)
- (7) 日本を代表する企業や官庁です。(連体形)
- (8) その内容を理解しようとした。(意志推量形)
- (9) 選挙の結果が大いに注目された。(未然形)
- (10) ルールを規定する必要があります。(連体形)
- (11) お互い紹介してください。(連用形)
- (12) 手順を説明しながら仕事をする。(連用形)
- (13) ここまで勉強してきた。(連用形)
- (14) 特別な委員会が設置されている。(未然形)
- (15) 自分で決定して自分で責任をとる。(連用形)
- (16) 労働時間が価値と比較して相対的に少ない。(連用形)
- (17) 教育に関しては、補助金が数多く存在する。(終止形)

上記の用例を見て、漢語サ変動詞が最も多い活用形、2番目に多い活用形、3番目に多い活用形を調べて書いてください。また、「完成する」を例にそれぞれの活用形を書いてください。

	活用形の名称	「完成する」の各活用形
1位		
2位		
3位		

3. 内部構成性

(1) 品詞結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な品詞的結合関係

が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う＋用いる」であるため、品詞結合のパターンは「動詞＋動詞」型となります。「注目する」だと、「注ぐ＋目」であるため、品詞結合パターンは「動詞＋名詞」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような品詞結合パターンが見られます。

- (1) 使用（する）＝使う＋用いる（動詞＋動詞）
- (2) 確認（する）＝確かめる＋認める（動詞＋動詞）
- (3) 注目（する）＝注ぐ＋目（動詞＋名詞）
- (4) 登場（する）＝登る＋場（動詞＋名詞）
- (5) 否定（する）＝否＋定める（接辞＋動詞）
- (6) 選択（する）＝選ぶ＋択ぶ（動詞＋動詞）
- (7) 形成（する）＝形＋成す（名詞＋動詞）
- (8) 表示（する）＝表す＋示す（動詞＋動詞）
- (9) 減少（する）＝減らす＋少ない（動詞＋形容詞）
- (10) 分類（する）＝分ける＋類（動詞＋名詞）
- (11) 設置（する）＝設ける＋置く（動詞＋動詞）
- (12) 比較（する）＝比べる＋較べる（動詞＋動詞）
- (13) 重視（する）＝重い＋視る（形容詞＋動詞）
- (14) 実現（する）＝実に＋現れる（副詞＋動詞）
- (15) 意味（する）＝意＋味（名詞＋名詞）
- (16) 一致（する）＝一＋致す（名詞＋動詞）

上記の用例を調べて、漢語サ変動詞における品詞結合パターンの上位3種類を答えてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの品詞結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

A. 移動する

B. 用意する

C. 心配する

	品詞結合パターン	語例
1位		
2位		
3位		

(2) 意味結合パターン

漢語サ変動詞の漢語部は、前に来る文字と後ろに来る文字の間に様々な意味的關係性が存在します。たとえば、「使用する」であれば、「使う＋用いる」となり、同じ意味や品詞の語が並列しているのので、「並列關係」型となります。「注目する」だと、「目を注ぐ」となり、動詞と目的語の關係（客體關係）が示されているのので、「客體關係」型となります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞には、以下のような意味結合パターンが見られます。

- (1) 表示（する）＝表す＋示す（並列關係）
- (2) 決定（する）＝決める＋定める（並列關係）
- (3) 実施（する）＝実（に）＋施す（修飾關係）
- (4) 増加（する）＝増やす＋加える（並列關係）
- (5) 評価（する）＝評う＋価（客體關係）
- (6) 提供（する）＝提げる＋供える（並列關係）
- (7) 予想（する）＝予め＋想う（修飾關係）
- (8) 期待（する）＝期つ＋待つ（並列關係）
- (9) 注目（する）＝注ぐ＋目（客體關係）
- (10) 変化（する）＝変わる＋化ける（並列關係）
- (11) 参加（する）＝参る＋加える（並列關係）
- (12) 減少（する）＝減らす＋少ない（補充關係）
- (13) 否定（する）＝否＋定める（實質關係）
- (14) 重視（する）＝重い＋視る（修飾關係）

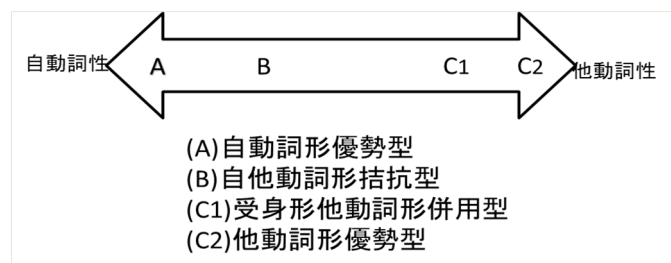
上記の用例を見て、漢語サ変動詞における意味結合パターンの上位3種類を教えてください。また、ここから3つの単語を示します。この3つの単語は1位、2位、3位のどの意味結合パターンに入るか考えて、入れてみてください。

A. 主張する	B. 選択する	C. 分類する
---------	---------	---------

	意味結合パターン	あてはまると思う語例
1位		
2位		
3位		

4. 自他性

漢語サ変動詞の中には、自動詞のみ、もしくは、他動詞のみで使うものもあれば、自動詞と他動詞の両方で使うものもあります。また、他動詞の中には、能動形で多く使用するものもあれば、受身形で多く使用するものもあります。高頻度・汎用的漢語サ変動詞を以上の点で分類すると、以下の A, B, C1, C2 のような 4 種類になります。自他性の観点でこの 4 種類の関係を示すと、以下のようになります。



- (1) 商売が成立する。(A 自動詞形優勢型)
- (2) 画像を選択することができる。(C2 他動詞形優勢型)
- (3) 政府高官との対話ををを要求した。(C2 他動詞形優勢型)
- (4) 自分の目標を認識する。(C2 他動詞形優勢型)
- (5) 作品を発表した。(C2 他動詞形優勢型)
- (6) わたしの答えを期待していた。(C2 他動詞形優勢型)
- (7) 考え方が変化した。(A 自動詞形優勢型)
- (8) 精神が大切であることを主張しています。(C2 他動詞形優勢型)
- (9) 女性が解放された。(C1 受身形他動詞形併用型)

- (10) 課題解決のための活動を展開する／が展開する必要があります。(B 自他動詞形拮抗型)
- (11) 歴史的な要素を無視できない。(C2 他動詞形優勢型)
- (12) 4 言語を使用できる。(C2 他動詞形優勢型)
- (13) 私を理解してくれた。(C2 他動詞形優勢型)
- (14) 各地で夏至祭りが開催されている。(C1 受身形他動詞形併用型)
- (15) 道家の独自性を強調する。(C2 他動詞形優勢型)
- (16) 諸問題が存在する。(A 自動詞形優勢型)

上記の用例を見て、A、B、C1、C2 のうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > () > ()

5. 語彙的排他性

漢語サ変動詞は、「X する」(確認する)の形をとりますが、「X をする」(確認をする)の形でも同じ意味を表現することができます。高頻度・汎用的漢語サ変動詞は、下記の用例で示すように、(A)つねに「X する」の形で使用するもの、(B)かなり「X する」の形が多いもの、(C)やや「X する」の形が多いもの、の3種類に分かれます。

- (1) 内容ごとに分類した／分類をした。(B かなり「X する」型)
- (2) この言明が情動を否定した／情動の否定をした。(B かなり「X する」型)
- (3) 食料を保存する／食料の保存をする。(B かなり「X する」型)
- (4) 慎重に判断し／判断をしてください。(B かなり「X する」型)
- (5) ここで問題点を指摘して／の指摘をしておく。(B かなり「X する」型)
- (6) 様々な観点から検討する／検討をする。(B かなり「X する」型)
- (7) 誰も報告して／報告をしてくれない。(B かなり「X する」型)
- (8) 人間関係を重視する。(A つねに「X する」型)
- (9) 仕事ができるのか心配した／心配をした。(B かなり「X する」型)

- (10) 電子手帳で確認する／確認をする。(C やや「X する」型)
- (11) お互いの立場を理解しよう／立場の理解をしよう。(B かなり「X する」型)
- (12) 力を発揮しようとした。(A つねに「X する」型)
- (13) 日本で発売する／発売をすることができなかつた。(B かなり「X する」型)

上記の用例を見て、A, B, C のうち、高頻度・汎用的漢語サ変動詞の中に多いと思うもの順に並べ替えて、下記に記入してください。

() > () > ()
--

感想シート（11章）

1. この実験では、グラフや数値を多く示す数値型学習シートと、グラフや数値は示さず、多くの用例を示す実例型学習シートの2種類で学んでいただきました。この2種類の学習シートのうち、あなたが好きなのはどちらですか。

- (1) 数値型学習シート
- (2) 実例型学習シート
- (3) どちらとも言えない

2. 両方の学習シートを使って学習する場合、どちらの順番で学んだほうが良いと思いますか。

- (1) 数値型学習シート → 実例型学習シート
- (2) 実例型学習シート → 数値型学習シート
- (3) どちらとも言えない

その理由： _____

3. 数値型学習シートは漢語サ変動詞の理解に効果があると思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。

まったく効果がない 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても効果がある

4. 実例型学習シートは漢語サ変動詞の理解に効果があると思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。

まったく効果がない 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても効果がある

5. 数値型学習シートの良いところと悪いところをできるだけ書いてください。

(1) よかったところ：

① _____

② _____

③ _____

④ _____

(2) 悪かったところ：

① _____

② _____

③ _____

④ _____

6. 実例型学習シートの良いところと悪いところをできるだけ書いてください。

(1) よかったところ：

① _____

② _____

③ _____

(2) 悪かったところ：

① _____

② _____

③ _____

7. あなたは、こういう学習シートを使って、漢語サ変動詞を学ぶことが重要だと思いますか？あてはまると思う数字に○をつけてください。

まったく重要ではないと思う 1 — 2 — 3 — 4 — 5 とても重要だと思う

ご協力、ありがとうございました！

謝辞

本博士論文の執筆にあたっては、神戸大学大学院国際文化学研究科外国語教育コンテンツ論及びシステム論の先生方に多大なご支援を賜りました。とくに指導教員である石川慎一郎先生には、博士後期課程研究生の時代より3年半にわたって、多大なご指導・ご鞭撻をいただきました。また、柏木治美先生、木原恵美子先生、グリア・ティモシー先生、朱春躍先生、大和知史先生には、集団指導などの機会で多くのコメントをいただきました。深く感謝を申し上げます。

また、学外では、多くの研究会や学会に参加させていただき、貴重な指導やコメントをいただきました。国立国語研究所のコーパス日本語学ワークショップでは2回にわたって発表の機会を与えていただき、とくに同研究所の山崎誠先生には多くのご指導をいただきました。また、語彙研究会でも発表の機会をいただきました。同研究会の代表である田島毓堂先生には、専門の語彙研究の立場から多くのご指導をいただき、大変感謝しております。また、統計数理研究所の研究会では5回にわたり、発表の機会を与えていただきました。同研究所の前田忠彦先生には、この間、統計手法や研究のデザインについて多くの指導をいただき、感謝しております。

上述の語彙研究会からは、「公益信託田島毓堂語彙研究基金」の研究助成（2014年度）を頂戴し、これにより、中国現地でのアンケート調査の実施やそのほかのデータ収集を行うことができました。助成金による調査の結果は、本博士論文の一部となっております。心より深く感謝を申し上げます。

なお、本研究で行った中国人日本語学習者のデータ収集については、中国西安交通大学外国語学院の王精誠先生、左佳先生、陝西師範大学日本語学部の王紅先生、許賽鋒先生、尹仙花先生にご協力をいただきました。また、調査に実際に協力してくださった中国西安交通大学日本語学部と陝西師範大学日本語学部の皆様、および神戸大学大学院に在学中の留学生の皆様にご心より御礼を申し上げます。

石川慎一郎研究室の一員であったことは私にとって生涯の誇りとなることです。ゼミの先輩や、後輩の皆様のお支えに感謝いたします。奈良女子大学大学院で交換留学生として一年間お世話になった奥村悦三先生にも深く感謝いたします。

最後に、本稿を、いつも温かく見守って支えてくれた家族、また天国で見守ってくれている祖父祖母に捧げたいと存じております。ありがとうございました。